

かながわの考古学

2003.3

財団法人 かながわ考古学財団

かながわの考古学

2003.3

財団法人 かながわ考古学財団

はじめに

今年度は、各時代の研究プロジェクト（PJ）から出された共同研究の成果7本と、個人論文1本、事例紹介1本の計9本を掲載することができました。

旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代の各PJは、引き続き前年からの継続テーマについて研究成果がそれぞれ発表されています。

新たなテーマでこころみられたのは、奈良・平安時代、中世、近世の3プロジェクトで、奈良・平安時代PJは今年度から宮ヶ瀬遺跡群という山間部集落を研究テーマとし、中世PJは県内の「やぐら」を、近世PJは近世遺跡出土の土製品を集成することをテーマとしました。

各時代のプロジェクトとも、継続または新たなテーマを掲げつつ、意欲的に研究してまいりました。各論考ともに盛りだくさんの成果が込められており、これから的研究に一石を投ずることができるものと考えております。

また、今回は個人論文として、東日本における帶状円環型銅釧の形態分類と地域色についてというテーマで論考され、事例紹介は古代相模国府周辺の景観を復元した図について普及啓発事業における活用の報告がされております。

今後とも、共同研究というアプローチによってその成果が最大限發揮されるテーマに取り組まれ、より充実した内容が発表されることを期待しております。

最後に、本書が埋蔵文化財調査や考古学研究に広く活用されることを願うとともに、皆様方の一層のご指導とご教示を賜りますようお願い申し上げます。

2003年3月

財団法人 かながわ考古学財団
理事長 熊田節郎

目 次

神奈川県における旧石器時代の遺構（その2）－B1層上部－	旧石器時代研究プロジェクトチーム	1
神奈川における縄文時代文化の変遷VI 中期後葉期 加曾利E式土器文化期の様相 その3 -文化的様相-	縄文時代研究プロジェクトチーム	17
宮ノ台式土器の研究（2）	弥生時代研究プロジェクトチーム	33
神奈川県横穴墓文献一覧	古墳時代研究プロジェクトチーム	45
奈良・平安時代の宮ヶ瀬遺跡群の研究	奈良・平安時代研究プロジェクトチーム	61
神奈川県内の「やぐら」集成（1）	中世研究プロジェクトチーム	81
神奈川県出土の土製品	近世研究プロジェクトチーム	97
-個人論文-		
帶状円環型銅鏡の形態分類と地域色について	池田 治	111
-事例紹介-		
普及啓発事業における遺跡復原図活用の一例		
-古代相模国府景観想像図の制作方法を中心に-	市毛秀人・依田亮一	127

凡　　例

1. 本書は、財団法人かながわ考古学財団および神奈川県教育庁教育部生涯学習文化財課の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに計画的に共同研究を行った結果と個人論文及び事例紹介からなる。
2. 各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである（五十音順）。
 - ・旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム
井関文明・大塚健一・加藤勝仁・栗原伸好・鈴木次郎・砂田佳弘・島中俊明・三瓶裕司・御堂島正吉田政行
 - ・縄文時代研究プロジェクトチーム
天野賢一・井澤純・井辺一徳・小川岳人・恩田勇・長岡文紀・松田光太郎
 - ・弥生時代研究プロジェクトチーム
阿部友寿・飯塚美保・池田治・伊丹徹・櫻井真貴・新開基史・村上吉正・渡辺外
 - ・古墳時代研究プロジェクトチーム
上田薫・植山英史・柏木善治・近野正幸
 - ・奈良・平安時代研究プロジェクトチーム
岩田直樹・大上周三・加藤久美・河野喜典・木村尚二・富永樹之・中澤正人・中田英・葉山俊章・依田亮一
 - ・中世研究プロジェクトチーム
宍戸信悟・鈴木庸一郎・服部実喜・宮坂淳一
 - ・近世研究プロジェクトチーム
市川正史・木村吉行・久保田俊夫・樹潤規彰・柳川清彦

神奈川県における旧石器時代の遺構（その2）

－B 1層上部－

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

本プロジェクトでは、昨年度より近年増加している神奈川県内の遺構の集成を実施している。今年度は、漸移層～L 1 H層出土の石器群に伴って検出された遺構を対象とした昨年度に続き、第1暗色帯（B 1層）上部出土の石器群に伴って検出された遺構を対象とした。今回も前回同様、礫群・炭化物集中・炉址・配石・住居状遺構・土坑・ピット・デボ等の各遺構を集成の主な対象としたが、確認できたものは礫群・配石・炭化物集中・住居状遺構（炉址・ピットを含む）・デボの5種類のみであった。

以下、各遺構ごとにその内容を検討する。

B 1層上部検出の遺構について

a) 磨 群（第1～3図）

今回確認された礫群は26遺跡155基を数え、漸移層～L 1 H層段階と同様、この段階で最も多く検出された遺構である。本段階では、遺跡内に礫群が検出された場合、その基数が1基しか検出されない遺跡は僅か5遺跡であり、他の18遺跡については複数基の礫群が検出されている。構成礫の数量については、月見野遺跡群上野第一地点第V文化層第12礫群の667点が最も多く、逆に大和市No210遺跡第I文化層第5号礫群の2点が最も少ない。数量ごとのデータの集計が可能な遺跡をさらに観察すると、40点未満のものが114基を数え、全体の7割以上を占める。特に20点未満のものはこの内の72基を数え、これらの主体を占める。石材組成は、在地系と考えられるものを使用している。礫の被熱の痕跡はその多少はあるものの一般的に顕著に観察される。また、礫の分布範囲については、長・短軸のいずれもが1.00m未満というものは27例しか確認されず、基本的に長軸は1.00m以上の広がりを持っている。

b) 配 石（第4図1・2）

本段階で確認された配石は、藤沢市今田遺跡第II文化層中より検出された2例のみであった。これらはいずれも調査区の東端の崖線部から検出されており、石器集中地点や礫群との間には明確な無遺物空間の存在が確認される。両者は約4m程の距離しか離れていないものの、その出土状況にはやや差異が認められる。1号配石は、8点の礫が重なり合うような状態で検出されており、このため平面分布は0.30m×0.20mと極めて狭い範囲内から出土している。これに対し、2号配石の平面分布は、1.00m×0.30mと1号配石に比べやや広く、礫6点がほぼ同一面上で確認されている。つまり、1号配石は縦方向、2号配石は横方向へのまとまりがそれぞれ確認される配石と考えられる（註1）。また、いずれの配石からもピット等の下部施設の存在は確認されていない。使用石材については、同一文化層中より検出された礫群とほぼ同様の石材が用いられており、各遺構間における石材選択の差異は観察されない。礫の赤化は大部分の資料で認められるものの、礫の残存状況は比較的良好である。石器との共伴関係は、1号配石からは剥片類、2号配石からはエンドスクリーパー・剥片類が各1点ずつ出土している。

c) 炭化物集中（第4図3）

本段階で確認された炭化物集中は、8遺跡9基である。二ノ丸遺跡では $0.30m \times 0.30m$ 程の狭小な範囲内から多量の炭化物が出土しているが、この様な出土例は本遺跡の事例のみである。他の遺跡は長軸 $3.00m$ 、短軸 $1.50m$ 以上を測り、その分布範囲は二ノ丸遺跡に比べかなり広範となる。また、南葛野遺跡の様に比較的多量の炭化物がまとまって出土していても明確な掘り込み等、これに伴う施設は確認されていない。

d) 住居状遺構（第5図）

本段階で確認された住居状遺構は、田名塙田遺跡群A地区（向原遺跡）No.4地点より検出された1基のみである（註2）。本遺構は、直径約 $10m$ 程の環状を呈し、円周外縁部には多孔質安山岩（玄武岩）の円礫や凝灰岩系の原石・石核・大型剥片類等の大型の資料が人為的に配置された様な状態で出土している。この様な円周外縁部出土の大型の資料の内側からは、これらに沿うような状態で直径 $0.30 \sim 0.60cm$ 程の柱穴が10本、さらに内側で2本確認されている。一部ピットの断面観察により、ピットの明瞭な掘り込みの存在が確認されると共に、遺構の中央部に向かってやや内傾していることが確認されている。本遺構の中央部付近からは、長径 $0.90cm$ の楕円形を呈するものと直径 $0.65cm$ の円形を呈する2基の炉址も検出されている。炉址の内部からは炭化物片や焼土塊及び粒子等の存在も確認されている。また、石器及び炭化物の分布範囲は、本遺構のほぼ内側に限定される。

この様なことから本遺構をこれまで指摘してきたとおり「最古の住居状遺構」であると位置付けることは十分理解できる。今後の報告に期待したい。

e) デボ（第6図）

本段階で確認されたデボは、田名塙田遺跡群A地区（向原遺跡）No.2地点より検出された1基のみである。本遺構は、426点の遺物が出土した1号ブロックから南西に約 $35m$ 程の無遺物空間を挟んで検出されている。黒曜石の原石（9点）および剥片（1点）から構成されており、原石は全て星ヶ塔産、剥片は和田岬産という原産地分析結果が報告されている。遺物の分布状況は、 $1.10m \times 0.25m$ 程の範囲にまとまって確認されているが、さらに原石のみに限って観察すると、直径約 $0.30cm$ 程の範囲内に板めてまとまった状態で出土している点が理解できる。

また、本遺構の諸特徴を前回の漸移層～L1H層から検出された同遺構と比較すると、両者間には内容的な差異が一部確認される。まず、器種組成であるが、今回の田名塙田遺跡群A地区（向原遺跡）No.2地点では、未加工品である原石そのものが主体を占めている。これに対し、前回本誌面上で確認された南葛野遺跡では全て石核、吉岡遺跡群D区では礫斧と礫器が扁平な河原石の直下から、その周辺部からは礫器と打製石斧が出土しており、田名塙田遺跡群とは異なり、そのほとんどが既に加工された資料で構成されている。また、下部施設の存在であるが、吉岡遺跡群の例では下部に土坑を伴っているのに対し、田名塙田遺跡群の例では下部施設の存在は一切確認されていない。確認された遺構数は少ないものの、両者間にはこの様な2つの差異が確認される。また、本遺構は、縄文時代草創期およびB1層上部段階の石器群に伴って検出されてはいるものの、いわゆる細石刃石器群に伴った出土事例は確認されていない。

（栗原伸好）

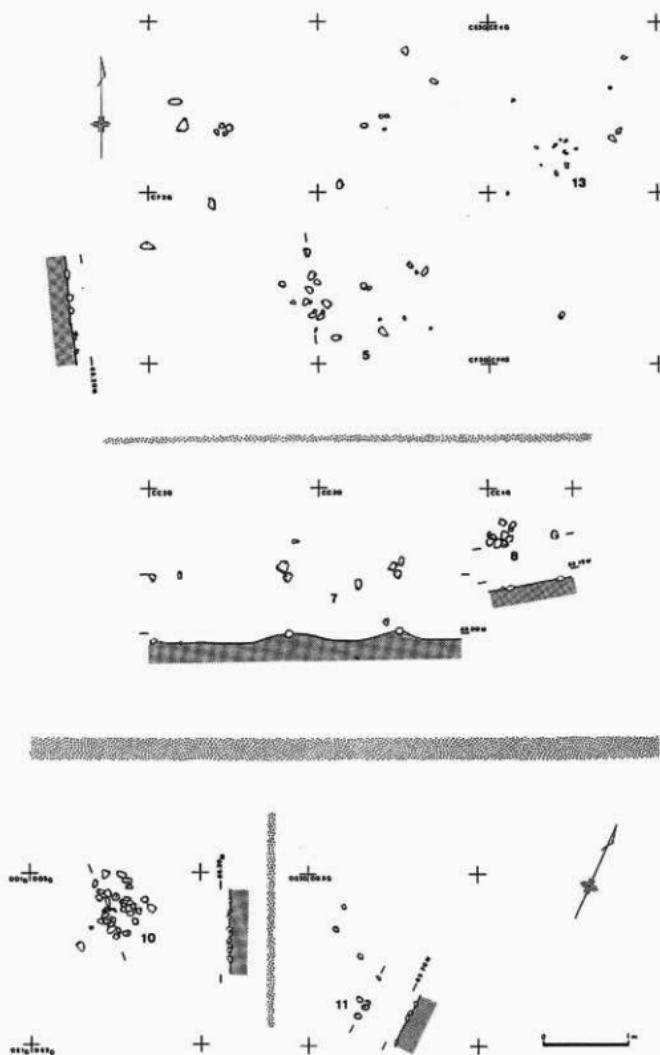
註

1 但し、調査担当者の麻生順司氏より、調査地が斜面であったことやB1層の認定が困難であったこと、また、5号窓群で観察された様に本調査区からはローム層の二次的な移動が確認されていることから、特に1号配石の出土状況については、慎重な判断が必要であるとご教示頂いた。

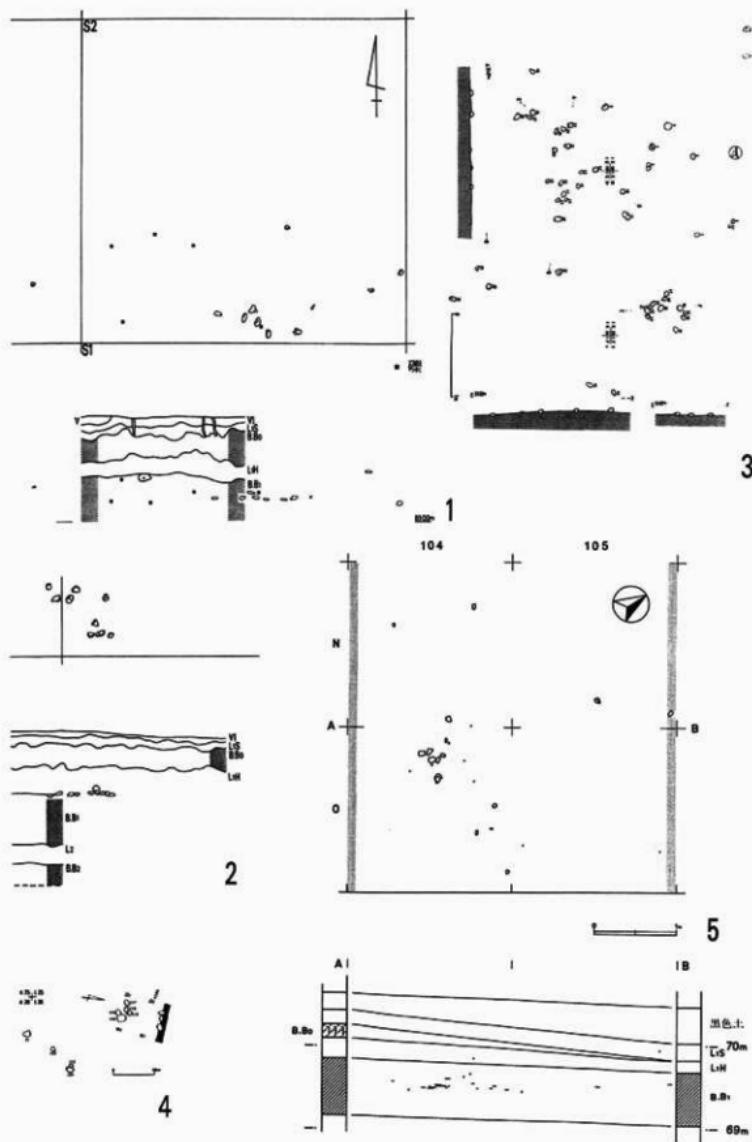
2 各集成は報告書の記載をもとに実施しているが、本遺構についてはその重要性から難み、参考文献中の資料の記載をもとに実施した。



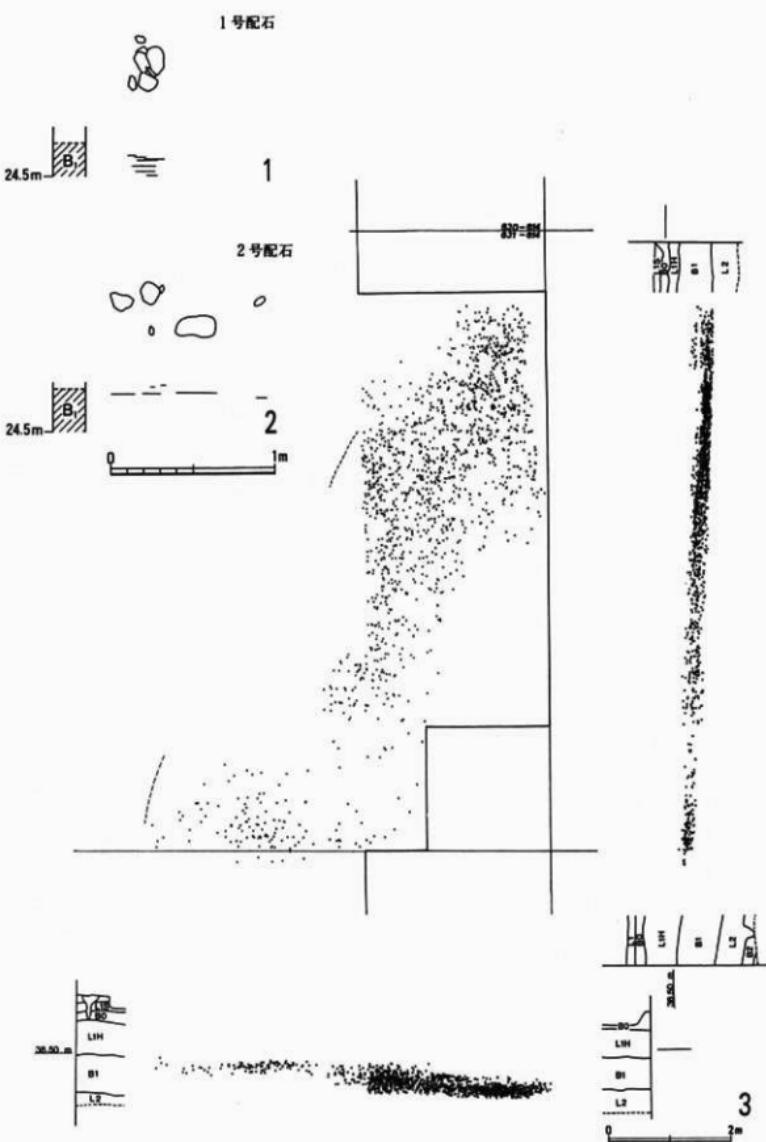
第1図 遺群 (1.下森度島II 1・2・3号遺群、2. 今田II 5・6号遺群、3. 今田II 7号遺群)

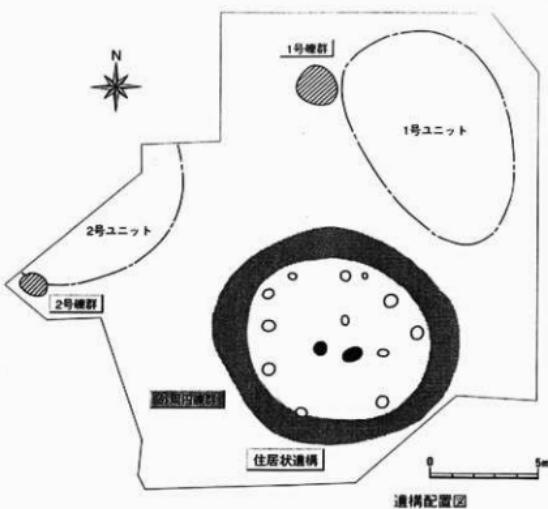


第2図 球群（深見原訪山Ⅱ 第5・7・8・10・11・13球群）

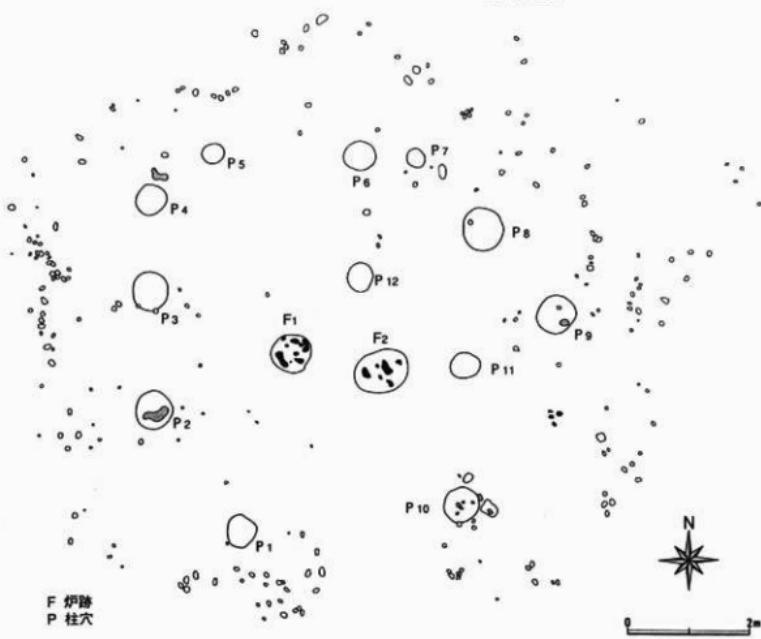


第3図 織群（1. 長堀北V 第3号織群、2. 長堀北V 第2号織群、3. 寺尾III 第5号織群、4. 早川天神森III 織群、5. 下鶴間長堀

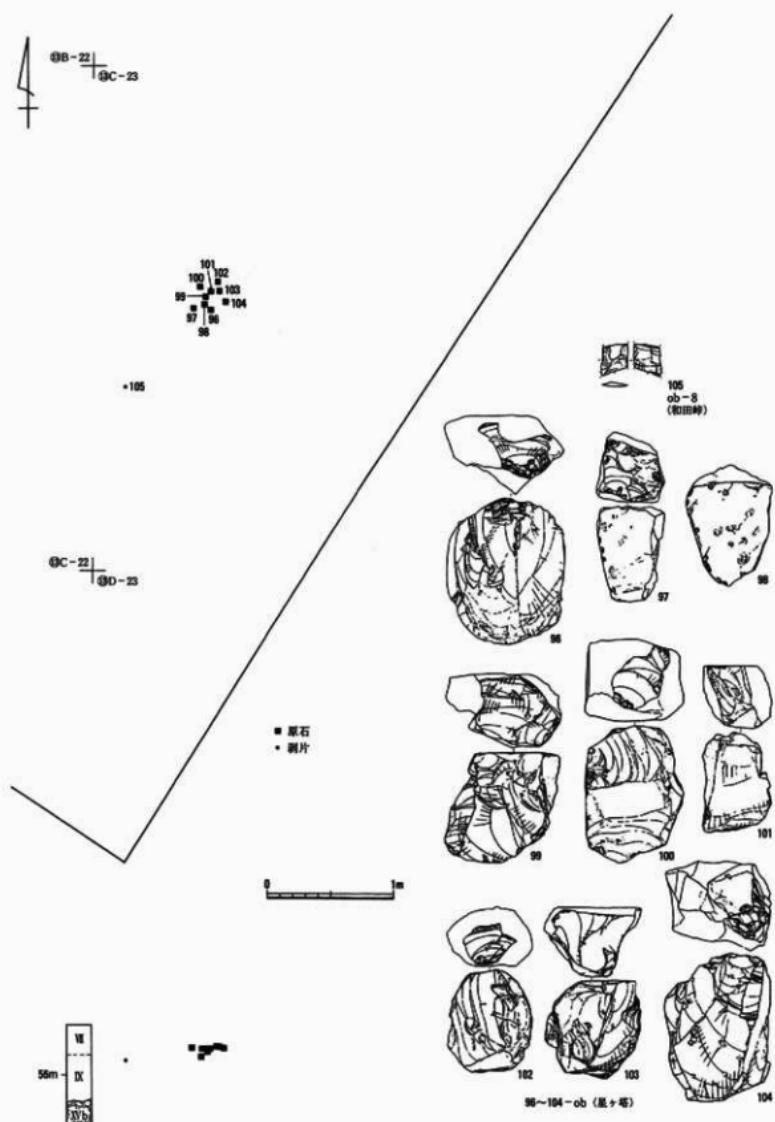




遺構配置図



第5図 住居状遺構（田名向原遺跡）



第6図 テボ（田名向原遺跡）

縄群

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸(m)	短軸(m)	埋数	分布	構の状態	縄群石材組成	備考(共伴遺物等)
27	交地だいやま	BBOL-LIHU	II	縄群	1.80	1.10	13	散漫	赤熱・赤化:全点、一部タルト付岩	石器6 (ナマ形石器1、台石1、石核1、剥片7、砂片1)	
31	花見山	LIHL	III	縄群	1.80	1.20	132 (85) (西 集品 有)	集中	全点赤熱あり	砂岩64・珪質頁岩4・愛賀安山岩4・チャート4・ひん岩2・閃綠岩2・輝緑岩1・角輝岩1・石英斑岩1・安山岩1・輝石安山岩1・ホルンフェルス1	本波点在 石器8点(剥片)
55	橋本	LIH-BB1U	II	縄群No.1			46	赤化:6、破損:11		砂岩42・硅岩2	標記重量2302g 2001年度掲載済み、再掲載
55	橋本	LIH-BB1U	II	縄群No.2			88	赤化:53、破損:67		砂岩65・硅岩3	標記重量5221g 2001年度掲載済み、再掲載
55	橋本	BB1-L2	III	縄群No.3	2.00	1.50	77	集中	赤化:76、 스스:10、タル:1、完形32・破損45		
55	橋本	BB1-L2	III	縄群No.4	4.00	3.00	105	集中	赤化:103、sus:21、タル:3、完形20・破損85		
55	橋本	BB1-L2	III	縄群No.5	1.00	1.00	25	集中	赤化:25、sus:18、完形13・破損12		
55	橋本	BB1-L2	III	縄群No.6	2.50	2.00	138	集中	赤化:134、sus:52、タル:1、完形60・破損78		
55	橋本	BB1-L2	III	縄群No.7	4.00	2.50	70	集中	赤化:64、sus:13、完形24・破損46		
55	橋本	BB1-L2	III	縄群No.8	2.00	1.50	79	集中	赤化:79、sus:32、完形21・破損58		
55	橋本	BB1-L2	III	縄群No.9	0.80	0.50	28	集中	赤化:28、sus:9、タル:1、完形6・破損22		
55	橋本	BB1-L2	III	縄群No.10	2.00	1.50	80	集中	赤化:77、sus:23、タル:6、完形55・破損25		
55	橋本	BB1-L2	III	縄群No.11	4.00	3.00	67	散漫	赤化:65、sus:9、完形13・破損54		
55	橋本	BB1-L2	III	縄群No.12	1.50	1.00	35	集中	赤化:35、sus:14、完形8・破損27		
68	中村	LISL-BB1L	III	1号縄群	4.50	4.50	13	散漫	赤化:13、sus:1、タル:1、一部、碧玉岩・ビピあり	硬砂岩・玄武岩・閃緑岩	7~10ブロックと重複 2001年度掲載済み、再掲載
68	中村	LISL-BB1L	III	2号縄群	5.00	5.00	8(5)	散漫	赤化、susは一部	硬砂岩・玄武岩・火山輝葉灰岩	12~14ブロックと重複 2001年度掲載済み、再掲載
68	中村	BB1U	IV	縄群							詳細不明
81	月見野上野 第一地点	BB1U	V	第1縄群	2.00	0.60	8	集中	赤化:6	砂岩・板灰岩・火山輝葉灰岩	
81	月見野上野 第一地点	BB1U	V	第2縄群	1.20	0.50	16	集中	赤化:16、sus:多い、破損14	硬灰岩・玄武岩・砂岩・粗粒板灰岩・閃緑岩	
81	月見野上野 第一地点	BB1M	V	第3縄群	3.00	2.40	35	集中	赤化:35、破損27	砂岩・板灰岩・粗粒板灰岩	北端部第1ブロック と一部重複
81	月見野上野 第一地点	BB1M	V	第4縄群	1.30	1.30	18(15)	集中	赤化:18、sus:多い、タル:多い、破損:多い	硬灰岩・火山輝葉灰岩	東側に第17ブロック が近在
81	月見野上野 第一地点	LIH-BB1M	V	第5縄群	3.00	2.50	40	集中	赤化:見られる、sus:ある、破損:大多数	硬灰岩・砂岩	第15ブロックと重複

遺跡No.	遺跡名	複数層位	文化層	遺構名	長軸(m)	短軸(m)	堆数	分布	堆の状態	堆群石材組成	備考(伴生遺物等)
81	月見野上野 第一地点	LH-L BB1U	V	第6埋群	2.40	1.00	17	集中	赤化:17、破 碎:17	砂岩・凝灰岩・珪質 凝灰岩・粗粒凝灰岩	
81	月見野上野 第一地点	BB1U	V	第7埋群	1.60	0.80	8	集中	赤化:7、ス ペ:1、破碎:4	砂岩・珪質凝灰岩・ 粗粒凝灰岩	第17ブロックと重複
81	月見野上野 第一地点	BB1U-L	V	第8埋群	2.70	2.00	32(12)	集中	赤化:32、破 碎:32	砂岩・凝灰岩・火山 凝灰岩	
81	月見野上野 第一地点	BB1U-L	V	第9埋群	1.40	1.00	27	集中	赤化:少な い、破碎:少 ない	砂岩・凝灰岩・火山 凝灰岩	第23ブロックと重複
81	月見野上野 第一地点	LH-L BB1U-L	V	第10埋群	4.00	4.00	33	集中	赤化:多い、 破碎:半近 CT:凝灰岩	砂岩・ホルンフェル ス・CT・凝灰岩	第24ブロックと重複
81	月見野上野 第一地点	LH-L BB1U-L	V	第11埋群	3.00	2.80	13(11)	集中	赤化:13、破 碎:少ない	ホルンフェルス・火 山標凝灰岩・砂岩	第36ブロックと重複
81	月見野上野 第一地点	LIS-L L2	V	第12埋群	6.00	4.20	667(14 +653)	集中	砂岩・凝灰岩・ チャート・粗粒凝灰 岩・火山標凝灰岩		第32ブロックと重複
81	月見野上野 第一地点	BB1-U	V	第13埋群	3.20	1.40	18(8)	集中	赤化:大部分 凝灰岩	砂岩・凝灰岩・粗粒 凝灰岩	
81	月見野上野 第一地点	LH-L BB1L	V	第14埋群	3.00	2.50	144 (119)	集中	赤化:少な い	砂岩・凝灰岩・粗粒 凝灰岩	
84	台山	BB1U	III	1号埋群	1.80	1.70	29(17)	集中	赤化:28、ス ペ:7、タ ール:2、完形 5、破碎24	砂岩1・砂岩4・泥岩 1・安山岩7・火砕岩 4	
85	長嶺北	BB1U	V	第1号埋群	6.00	2.90	11	散漫			規模、種数は図から 計測
85	長嶺北	BB1U	V	第2号埋群	1.00	0.60	9	集中			規模、種数は図から 計測
85	長嶺北	BB1U	V	第3号埋群	4.60	1.40	18	散漫			規模、種数は図から 計測
85	長嶺北	BB1U	V	第4号埋群	1.30	0.50	5	散漫			規模、種数は図から 計測
85	長嶺北	BB1U	V	第5号埋群	2.00	1.80	6	散漫			規模、種数は図から 計測
86	下鶴岡長嶺	BB1U	II	第1埋群	4.80	6.00	33	散漫	熟化:全点		10cm程度の塊が2 点、周囲にはねね
86	下鶴岡長嶺	BB1U	II	第2埋群	4.30	3.60	21	散漫			第4埋群と接合関係
86	下鶴岡長嶺	BB1U	II	第3埋群	6.00	4.00	35	散漫			
86	下鶴岡長嶺	BB1U	II	第4埋群	3.30	2.50	24	散漫			第2埋群と接合関係
87	長嶺南	BB1U	III	1号埋群	0.50	0.40	16				
87	長嶺南	BB1U	III	2号埋群	1.20	1.00	27(20)		赤化:27、ス ペ:7、タ ール:3、完形 9、破碎7	砂岩1・砂岩3・ チャート2・安山岩 8・火山標凝灰岩1・ ホルンフェルス1	2号ユニット
87	長嶺南	BB1U	III	3号埋群	1.30	0.90	13(12)		赤化:13、ス ペ:2、完形 10、破碎3	砂岩1・砂岩5・安山 岩5・閃緑岩1・火 山標凝灰岩1	2号ユニット
87	長嶺南	BB1U	III	4号埋群	0.80	0.50	17(14)		赤化:17、ス ペ:3、タ ール:1、完形 7、破碎10	砂岩2・砂岩3・ チャート1・安山岩 5・閃緑岩3・火 山標凝灰岩1	2号ユニット
87	長嶺南	BB1U	III	5号埋群	1.00	0.40	24(16)		赤化:24、ス ペ:4、タ ール:1、完形 7、破碎19	砂岩5・チャート1・ 安山岩10	2号ユニット
87	長嶺南	BB1U	III	6号埋群	0.60	0.40	12(11)		赤化:12、ス ペ:10、タ ール:2、完形 7、破碎5	砂岩1・砂岩2・安山 岩7・火山標凝灰岩 1・ホルンフェルス1	
87	長嶺南	BB1U	III	7号埋群	2.50	2.20	24(20)		赤化:24、ス ペ:7、タ ール:1、完形 15、破碎9	砂岩2・砂岩5・安山 岩7・ホルンフェル ス1・他1	3号ユニット
87	長嶺南	BB1U	III	8号埋群	2.40	1.00	15(14)		赤化:15、ス ペ:5、タ ール:2、完形 8、破碎7	砂岩1・砂岩5・泥岩 1・チャート1・安山 岩4	
87	長嶺南	BB1U	III	9号埋群	0.80	0.50	17		赤化:17、ス ペ:4、完形 11、破碎6	砂岩3・砂岩8・安山 岩3・ホルンフェル ス3	

遺跡 No.	遺跡名	標識番号	文化層	遺構名	長軸 (m)	短軸 (m)	標数	分布	構の状態	構群石材組成	備考（共伴遺物等）
87	長船南	BB1U	Ⅲ	10号埋群	1.50	1.30	35(29)		赤化：35、ス ス：10、ター ル：2、完形 12・破碎23	礫岩2・砂岩10・ チャート1・安山岩 14・閃緑岩1・火山 礫凝灰岩1	3号ユニット
87	長船南	BB1U	Ⅲ	11号埋群	1.90	1.60	60(48)		赤化：60、ス ス：11、ター ル：2、完形 25・破碎35	礫岩3・砂岩21・ チャート3・安山岩 18・閃緑岩2・火山 礫凝灰岩1	3号ユニット
87	長船南	BB1U	Ⅲ	12号埋群	2.30	1.80	21		赤化：21、ス ス：12、ター ル：3、完形 17・破碎4	礫岩2・砂岩11・安 山岩9	7号ユニット
87	長船南	BB1U	Ⅲ	13号埋群	1.60	1.20	14(13)		赤化：14、ス ス：5、ター ル：1、完形 10・破碎4	礫岩1・砂岩9・泥岩 1・安山岩2	7号ユニット
87	長船南	BB1U	Ⅲ	14号埋群	0.90	0.70	8(7)		赤化：8、ス ス：3、ター ル：2、完形 3・破碎5	礫岩1・砂岩2・安山 岩4	7号ユニット
87	長船南	BB1U	Ⅲ	15号埋群	2.10	1.20	31(26)		赤化：31、ス ス：5、ター ル：1、完形 14・破碎17	礫岩4・砂岩10・泥 岩1・チャート1・安 山岩7・火山礫凝灰 岩2・他1	7号ユニット
87	長船南	BB1U	Ⅲ	16号埋群	1.10	1.00	21		赤化：21、ス ス：3、ター ル：3、完形 16・破碎5	礫岩4・砂岩7・泥岩 1・チャート1・安山 岩8・他1	7号ユニット
87	長船南	BB1U	Ⅲ	17号埋群	1.40	0.80	24(18)		赤化：24、ス ス：11、ター ル：2、完形 12・破碎12	礫岩1・砂岩11・泥 岩1・安山岩4・他1	
87	長船南	BB1U	Ⅲ	18号埋群	0.60	0.30	8(5)		赤化：8、ス ス：2、完形 2・破碎7	砂岩3・安山岩2	
87	長船南	BB1U	Ⅲ	19号埋群	3.80	2.50	72(54)		赤化：72、ス ス：27、ター ル：6、完形 27・破碎45	礫岩6・砂岩23・泥 岩18・閃緑岩1・火 山礫凝灰岩3・他1	
87	長船南	BB1U	Ⅲ	20号埋群	1.90	1.20	23		赤化：23、ス ス：8、ター ル：2、完形 14・破碎9	礫岩2・砂岩13・泥 岩21・チャート1・安 山岩5・ホルンフェ ルス1	9号ユニット
87	長船南	BB1U	Ⅲ	21号埋群	1.50	1.20	13(12)		赤化：13、ス ス：5、完形 10・破碎3	礫岩1・砂岩3・安山 岩7・火山礫凝灰岩1	
87	長船南	BB1U	Ⅲ	22号埋群	1.10	0.70	13(4)		赤化：13、ス ス：6、完形 1・破碎12	礫岩1・砂岩2・安山 岩1	
87	長船南	BB1U	Ⅲ	23号埋群	1.10	0.80	16(6)		赤化：16、ス ス：3、ター ル：1、完形 2・破碎14	礫岩3・安山岩1・閃 緑岩2	
87	長船南	BB1U	Ⅲ	24号埋群	0.90	0.40	10(6)		赤化：10、ス ス：4、完形 3・破碎7	砂岩2・安山岩4	
87	長船南	BB1U	Ⅲ	25号埋群	2.00	0.30	12(8)		赤化：12、ス ス：4、ター ル：1、完形 2・破碎10	砂岩3・泥岩1・安山 岩4	12号ユニット
88	深見源始山	BB1U	Ⅲ	第2号埋群	0.70	0.50	15	集中		規模、埋数は図から 計測 第9ブロックと重複	
88	深見源始山	BB1U	Ⅲ	第3号埋群	1.30	0.60	9	集中		規模、埋数は図から 計測	
88	深見源始山	BB1U	Ⅲ	第4号埋群	1.10	0.80	18	集中		規模、埋数は図から 計測 第7ブロックと重複	
88	深見源始山	BB1U	Ⅲ	第5号埋群	1.80	1.10	24	集中		規模、埋数は図から 計測	
88	深見源始山	BB1U	Ⅲ	第6号埋群	0.80	0.60	9	集中		規模、埋数は図から 計測	
88	深見源始山	BB1U	Ⅲ	第7号埋群	3.00	0.60	10	散漫		規模、埋数は図から 計測 第2ブロックと重複	

遺跡 No.	遺跡名	破壊層位	文化層	遺構名	長軸 (m)	短軸 (m)	標数	分布	壙の状態	壙群石材組成	備考 (共伴遺物等)
88	深見源詠山	BB1U	Ⅲ	第8号壙群	0.80	0.40	12	集中		規模、標数は図から 計測 第2ブロックと重複	
88	深見源詠山	BB1U	Ⅲ	第10号壙群	1.00	0.80	36	密集	被蓋：全点、 一部タール付 着	周辺に灰化物あり 規模、標数は図から 計測	
88	深見源詠山	BB1U	Ⅲ	第11号壙群	1.30	0.50	8	散漫		規模、標数は図から 計測 第5ブロックと重複	
88	深見源詠山	BB1U	Ⅲ	第12号壙群	2.60	2.20	71	集中		規模、標数は図から 計測	
88	深見源詠山	BB1U	Ⅲ	第13号壙群	0.50	0.45	10	散漫		規模、標数は図から 計測	
88	深見源詠山	BB1U	Ⅲ	第14号壙群	2.60	1.20	24	集中		規模、標数は図から 計測 第8ブロックと重複	
95	福田札ノ江	BB1U	Ⅱ	第1号壙群	4.00	2.50	30	散漫	被蓋：全点、 ほぼ全点ター ル付着	総重量2.78kg、16個体1- 接合、大型壙の集中箇所 は2.8×0.5m	
96	寺尾	BB1U	Ⅱ	第5号壙群	3.50	3.50	47	集中	赤化：40、ス ズ：13、ター ル：1、破碎： 15	粗粒砂岩9、硬質 砂岩14、火山礫凝灰 岩5、凝灰角砾岩5、 安山岩5、粘板岩1、 珪藻1、火山角砾岩 1、礁岩1、砂岩1、 泥灰岩1、粗粒砂岩 1、不明1	1ブロックと重なる
107	今田	BB1U	Ⅱ	1号壙群	1.30	1.00	22	密集	完形・破損が 混在	砂岩5、チャート5、 火碎岩5、ホルン フェルス1、他1	中心部に破損度の高い 塊、その周りに完形に近 い塊が混在する
107	今田	BB1U	Ⅱ	2号壙群	0.90	0.50	10	密集	破損度の高い 塊を多く含む	砂岩1、火碎岩1、凝 灰岩1、珪岩1	3号壙群との間に接合 関係あり
107	今田	BB1U	Ⅱ	3号壙群	0.50	0.30	6	密集	破損度の高い 塊を多く含む	砂岩2	2号壙群との間に接合 関係あり
107	今田	BB1U	Ⅱ	4号壙群	1.30	0.80	12	やや 密集	完形・破損が 混在	砂岩2、チャート2、 火碎岩1、凝灰岩3、 閃緑岩1、安山岩1、 礁岩1	1号壙群に同じ
107	今田	BB1U	Ⅱ	5号壙群	3.60	2.50	153	密集	完形・破損が 混在	砂岩64、チャート 11、火碎岩13、凝灰 岩7、閃緑岩13、安 山岩9、ホルンフェ ルス4、礁岩3	
107	今田	BB1U	Ⅱ	6号壙群	1.60	1.00	22	散漫	完形に近い塊 を多く含む	砂岩8、チャート2、 火碎岩4、閃緑岩4、 ホルンフェルス2	
107	今田	BB1U	Ⅱ	7号壙群	3.60	2.20	24	散漫	破損度の高い 塊を多く含む	砂岩4、チャート2、 火碎岩6、凝灰岩2、 閃緑岩2、砂岩1	
107	今田	BB1U	Ⅱ	8号壙群	2.50	1.30	17	一部 密集	完形に近い塊 を多く含む	砂岩7、チャート3、 火碎岩6、閃緑岩4、 安山岩2	
107	今田	BB1U	Ⅱ	9号壙群	0.80	0.30	9	密集	完形に近い塊 を多く含む	砂岩2、チャート1、 凝灰岩3、閃緑岩3	
109	代官山	L1H-L2 BB1相当層 U	IV	壙集中						詳細不明 壙集中11基 各集中の構成標数は20個 未満 總標数は94個、約11kg	
157	古瀬B	BB1-L2 b	II	05号壙群	0.60	0.40	4	寄	赤化：2、ス ズ：1、完形 1、破損3	18号ユニット重複	
157	古瀬B	BB1-L2 b	II	06号壙群	0.90	0.80	36	寄	赤化：36、ス ズ：22、ター ル：5、完形 16、破損20	16号ユニット重複 7号壙群と接合	
157	古瀬B	BB1-L2 b	II	07号壙群	1.70	0.70	31	寄	赤化：31、ス ズ：21、完形 17、破損14	23号ユニット重複 6号壙群と接合	
157	古瀬B	BB1-L2 b	II	08号壙群	5.00	3.40	73	集中	赤化：64、ス ズ：31、ター ル：1、完形 15、破損58	19号ユニット重複	

遺跡No	遺跡名	確認層位	文化層	構造名	長軸(m)	短軸(m)	標数	分布	の状態	堆積石材組成	備考(共伴遺物等)
157	古瀬B	BB1-L2	II b	9号堆群	4.20	2.90	214	集中	赤化:205、スス:144、タル:18、完形55・破損159		30号ユニット重複
157	古瀬B	BB1-L2	II b	10号堆群	0.60	0.40	13	密集	赤化:12、スス:7、タル:1、完形7・破損11		
157	古瀬B	BB1-L2	II b	13号堆群	3.40	0.70	90	密集	赤化:72、スス:50、タル:3、完形24・破損66		29号ユニット重複
157	古瀬B	BB1-L2	II b	14号堆群	3.80	1.80		密集			39号ユニット重複 型取り保存のため、 堆の詳細は不明
157	古瀬B	BB1-L2	II b	16号堆群	4.10	3.10	20	散漫	赤化:18、スス:17、完形4・破損16		25号ユニット重複
157	古瀬B	BB1-L2	II b	17号堆群	2.50	2.40	53	集中	赤化:48、スス:26、タル:7、完形12・破損41		28号ユニット重複
157	古瀬B	BB1-L2	II b	19号堆群	1.50	1.20	31	集中	赤化:26、スス:16、タル:4、完形18・破損13		
168	月見野原Ⅱ	BB1		堆群							堆群7基 詳細不明
193	Y10	BB1		堆群							詳細不明
194	Y25	BB1		堆群							詳細不明
207	北川表の上	LIHL-BB1U		堆群							詳細不明
216	下森鹿島	BB1U	II	1号堆群	2.50	0.50	16		赤化:16、スス:7、タル:1、完形11・破損5		2号ユニット重複 1号ユニットと接合
216	下森鹿島	BB1U	II	2号堆群	1.40	0.50	14		赤化:11、スス:2、タル:1、完形5・破損9		2号ユニット重複
216	下森鹿島	BB1U	II	3号堆群	0.50	0.40	24	密集	赤化:21、スス:4、完形19・破損5		2号ユニット重複
216	下森鹿島	BB1U	II	4号堆群	1.20	0.80	35	集中	赤化:35、スス:13、タル:6、完形21・破損14		5号ユニット重複
216	下森鹿島	BB1U	II	5号堆群	2.50	1.50	27	やや散漫	赤化:26、スス:5、タル:2、完形1・破損26		7号ユニット重複
216	下森鹿島	BB1U	II	6号堆群	2.50	1.00	20		赤化:20、スス:4、完形3・破損17		10号ユニット重複
216	下森鹿島	BB1U	II	7号堆群	0.60	0.50	26	密集	赤化:26、スス:11、タル:2、完形11・破損15		
216	下森鹿島	BB1U	II	8号堆群	0.50	0.20	15	密集	赤化:15、スス:11、タル:3、完形7・破損8		
216	下森鹿島	BB1U	II	9号堆群	0.90	0.20	19		赤化:18、スス:7、完形7・破損8		
220	福岡台地Ⅰ地点	BB1		1号堆群	0.50	0.45	27	密集	破損が多い	砂岩20	
220	福岡台地Ⅰ地点	BB1		2号堆群	0.75	0.43	12	やや散漫	全て破損	砂岩3・閃綠岩4	
243	本入こざつ原	LIHL-BB1U	III	堆集中	3.00	3.00					詳細不明
243	本入こざつ原	LIHL-BB1U	III	堆集中	3.00	2.00					詳細不明
331	横山5丁目	BB1	II	1号堆群	1.80	1.40	8	散漫	破損度高い		第1ブロック重複
331	横山5丁目	BB1	II	2号堆群	6.50	4.20	13	散漫	破損度高い		第3ブロック重複
331	横山5丁目	BB1	II	3号堆群	2.80	0.60	3	散漫			第8ブロック一部重複

通跡No.	通路名	確認層位	文化層	遺構名	長軸(m)	短軸(m)	埋数	分布	確の状態	確認石材組成	備考(共伴遺物等)
331	横山5丁目	BBI	II	4号埋群	2.20	1.20	51	集中	赤化:○、破 鉢縁多い		第9ブロック重複
331	横山5丁目	BBI	II	5号埋群	6.60	2.20	28	散漫	赤化:○、ス ス:○、完形 縁多い		第10ブロック重複
331	横山5丁目	BBI	II	6号埋群	4.20	2.10	16	集中	破鉢縁少ない		
331	横山5丁目	BBI	II	7号埋群	4.00	2.20	9	散漫	破損度高い		第11ブロックと一部 重複
331	横山5丁目	BBI	II	8号埋群	6.10	3.60	18	散漫	赤化:○、ス ス:○、破鉢 大半		第12ブロックと重複
331	横山5丁目	BBI	II	9号埋群	2.80	1.70	66	密集	赤化:○、完 形度低い		第13ブロックと重複
331	横山5丁目	BBI	II	10・11・12 号埋群	5.40	5.40	106	集中	赤化:○、完 形度低い		第14ブロックと重複
331	横山5丁目	BBI	II	13号埋群	4.20	1.60	6	散漫	スス:○、完 形度低い		第15ブロックと重複
331	横山5丁目	BBI	II	14号埋群	7.30	2.90	25	散漫	スス:○、完 形度低い		第16ブロックと重複
331	横山5丁目	BBI	II	15号埋群	4.20	2.80	63	集中	完形度低い		第17ブロックと重複
331	横山5丁目	BBI	II	16号埋群	4.10	1.20	40	集中	赤化:○、完 形度低い		
333	大和市No210	BBIU	I	1号埋群	0.40	0.40	6	集中	完形:2、被 熱:6	凝灰岩主体	2号埋群と1点接合 1点は450.5g 他は 100~200g
333	大和市No210	BBIU	I	2号埋群	2.00	2.00	5	散漫	完形:2、被 熱:5	凝灰岩主体	第2号ブロックと重複 1号埋群と1点接合 1点は544.4g 他は150g 以下
333	大和市No210	BBIU	I	3号埋群	0.30	0.30	4	集中	完形:2、被 熱:4	凝灰岩主体	洞内区外まで伸びる いずれも100g以下
333	大和市No210	BBIU	I	4号埋群	1.00	0.40	3	散漫	完形:2、被 熱:全点	凝灰岩主体	第1号ブロックと重 複
333	大和市No210	BBIU	I	5号埋群	0.60		2	散漫	破鉢縁		いずれも20g以下
333	藤沢市No48	LH-LH BBI	—	1号埋群							詳細不明 文献資料は概要
334	福田丙二ノ区	BBIU	I	1号埋群	3.00	2.00	25		赤化:25、ス ス:22、完形 14・破鉢11	中粒凝灰岩15・硬質 細粒凝灰岩・ホル ンフェルス・砂岩 3・安山岩1	炭化物伴う
334	福田丙二ノ区	BBIU	I	2号埋群	7.00	3.00	20		赤化:19、完 形9・破鉢11	中粒凝灰岩11・硬質 細粒凝灰岩・ホル ンフェルス・砂岩 2・中粒灰岩1・流紋岩質 凝灰岩1	炭化物伴う

炭化物集中

通跡No.	通路名	確認層位	文化層	遺構名	長軸(m)	短軸(m)	備考(共伴遺物等)
27	受地だいやま	BBLU-LH		炭化物集中	5.90	2.90	石器16(ナイフ形石器1、台石1、石核1、剥片 7、鉗片6)・縁群1
55	橋本	LH-BBIU	II	炭化物片集中ヶ所1	4.00	3.00	詳細不明・2001年度再載、再掲載
55	橋本	LH-BBIU	II	炭化物片集中ヶ所2	3.00	2.00	詳細不明・2001年度再載、再掲載
81	月見野上野 第一地点	BBLU-B BBL	V	第1炭化物集中区	4.00	3.00	厚さ60cm 第12縁群の上位に位置、第32ブロックと重複
89	深見神社南	BBIU	II	炭化物集中			詳細不明
109	代官山	LH-BB I相当層	IV	炭化物集中			ナイフ形石器48・ポイント15・ポイント状石器1・ 箇2・接着5・削器3・禮器2・ハンマー6・調整 石器1・R.F24・U.F30・整剥片29・剥片157・ 323・残核9
116	南葛野	LH-LH BBI	I	炭化物の分布	5.00	1.50	分布範囲は、さらに西側に広がっていた可能性有
193	Y10	BBI	—	炭化物			詳細不明・2001年度再載済み再掲載
206	二ノ丸	BBIU	—	炭化物集中	0.30	0.30	多量の炭化物あり ナイフ形石器・剥片・砂岩が共伴

配石

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	構造名	長軸(m)	短軸(m)	種数	分布	構の状態	確群石材組成	備考(共伴遺物等)
107	今田	B61U	Ⅲ	1号配石	0.30	0.20	4	密集	完形または完形に近いもの为主体に破損度の高いものも含まれる	砂岩2・チャート1・繊岩1・他3	
107	今田	B61U	Ⅲ	2号配石	1.00	0.30	6	やや散在	完形または完形に近いもの为主体に破損度の高いものも含まれる	砂岩3・チャート1・繊灰岩1	

住居状遺構等

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	構造名	長軸(m)	短軸(m)	深さ	炉址	柱穴	柱穴数	柱穴規模	備考
332	田名塙田遺跡群A地区 (向原遺跡) №4地点	B61?	-	住居址	10.00	10.00	-					未報告のため詳細不明 文献資料は、リーフレット

デボ

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	構造名	長軸(m)	短軸(m)	遺物数	分布状態	遺物の様相	石材組成	備考
332	田名塙田遺跡群A地区 (向原遺跡) №2地点	V1-X I	-	2号ブロック	1.10	0.25	10	密集	原石は径30cmにまとまる	全点黒曜石(板岩は全て星ヶ塔産、剥片は和田岬産)	原石9・剥片1

2001年度補遺

礫群

遺跡No.	遺跡名	確認層位	文化層	構造名	長軸(m)	短軸(m)	種数	分布	構の状態	確群石材組成	備考(共伴遺物等)
111	南殿治山	B60-L1H	選集中 (0201遺物 集中内)		5.00	3.90	42	一定 密集	赤化:34, タール:3	安山岩4・火山巖 灰岩9・繊灰岩13・ 玄武岩・砂岩10・ 閃緑岩4・頁岩1	分布は南北2ヶ所に 分かれる。
111	南殿治山	L1H	選集中 (0203遺物 集中内)		7.40	4.40	55	散在	赤化:22, タール:3	シルト岩1・安山岩 3・火山巖凝灰岩8・ 繊灰岩7・珪質頁岩 4・砂岩23・閃緑岩 1・斑れい岩4・浮石 質凝灰岩7・頁岩1	分布は北・中央西 側・南・東の4ヶ所に 分かれる。0202遺物 集中部の礫と接合関 係あり。
111	南殿治山	B60-L1H	選集中 (0401遺物 集中内)		6.90	5.50	47	散在	赤化:40,ス ス:3,タ ール:6	カルンフェルス1・ 安山岩11・火山巖 24・繊灰岩17・ 繊灰質砂岩1・繊灰 質頁岩1・玄武岩1・ 砂岩8・閃緑岩1・斑 れい岩1・頁岩1	
111	南殿治山	B60-L1H	選集中 (0402遺物 集中内)		4.00	3.90	63	やや 密集	赤化:58,ス ス:1,タ ール:4	チャート2・安山岩 8・火山巖凝灰岩2・ 繊灰岩35・珪質頁岩 7・玄武岩1・砂岩 4・石灰閃緑岩4	分布は北西と南東の 2ヶ所に分かれる。南 東のものを取り扱い のように炭化物、石器 類が分布。
111	南殿治山	L1H	選集中 (0505遺物 集中内)		17.90	12.30	24	散在	赤化: (6)	シルト岩1・安山岩 2・繊灰岩9・繊灰質 頁岩7・珪質頁岩1・ 砂岩4	
111	南殿治山	L1H下 面	選集中 (0506遺物 集中内)		7.30	6.00	147	比較的密 集	赤化:119,ス ス:25,タ ール:24	カルンフェル ス1・カルンフェル ス2・安山岩13・繊 灰岩43・珪質頁岩 17・玄武岩1・砂岩 36・閃緑岩1・精板 岩3・斑れい岩2・頁 岩11	繊灰岩・砂岩・珪質 頁岩・安山岩は、各 石材による分布のま とまりが見られる。 約1mほどの距離の接 合関係が見られる。

2001年度補遺 炭化物集中

遺跡No	遺跡名	確認部位	文化層	遺構名	長軸(m)	短軸(m)	備考(共伴遺物等)
111	南殿治山	BBO-LIH	-	炭化物集中 ^(0201遺物集中内)	2.60	3.30	出土部位の中心はBBO層
111	南殿治山	LIH	-	炭化物集中 ^(0203遺物集中内)	1.70	1.00	理より若干低い位置に分布する
111	南殿治山	BBO~LIH	-	炭化物集中 ^(0402遺物集中内)	4.60	4.10	理などより若干高い位置に分布する。全体に分布、特に南側の櫻塚山を取り囲むように分布
111	南殿治山	LIH	-	炭化物集中 ^(0505遺物集中内)	1.10	0.80	遺物分布南東側にごくまとった形で分布
219	藤沢市No419 第2地点	LIH	II	1号炭化物集中帯	2.20	1.60	

引用・参考文献

- 白石造之 1980.3 「第V章第4節 第III文化層」「寺尾遺跡」 pp.123-134
神奈川県埋蔵文化財センター調査報告18
- 曾根博明他 1980.9 「Y10遺跡」「大和市先土器時代道路分布調査報告書」 p.29
大和市文化財調査報告書 第6集 大和市教育委員会
- 曾根博明他 1980.9 「Y25遺跡」「大和市先土器時代道路分布調査報告書」 p.33
大和市文化財調査報告書 第6集 大和市教育委員会
- 曾根博明・堀 隆・渡辺義樹 1983.3 「第3章 先土器時代 第III文化層」「深見跡寺山遺跡」 pp.32-98
大和市文化財調査報告書 第14集 大和市教育委員会
- 金山昭昭・土井永好・武藤勝也 1984.8 「第II文化層」「土井遺跡 先土器時代層」 p.16 相模原市橋本遺跡調査会
見崎 真 1984.9 「第V章第3節 第II文化層」「下篠路長坂遺跡」 pp.107-164 大和市文化財調査報告書 第17集
一般国道246号(和・厚木バイパス) 地域内道路発掘調査報告書 III 大和市教育委員会
- 砂田佳弘 1986.1 「第IV文化層」「代官山遺跡」 pp.165-209 神奈川県埋蔵文化財調査報告書11 神奈川県教育委員会
- 小池 啓・相田 黒 1986.5 「第6章第5節第V文化層」「見野跡遺跡群 上野跡第一地点」 pp.501-664
大和市文化財調査報告書 第21集 大和市教育委員会
- 岡本 勇祐 1986.7 「概報 月見野跡群」「大和市史」 7 古考古学編 pp.481-521 大和市
長沢邦夫・中川昇他 1987.3 「各文化層の遺構と遺物 第V文化層」「中村遺跡」 pp.36-97
都市計画道路町田市大野原埋蔵文化財発掘調査報告書 中村遺跡発掘調査団
- 麻生順司 1987.12 「第Ⅲ章第3節第IV文化層」「長坂南遺跡」 pp.16-58 大和市文化財調査報告書 第28集 大和市教育委員会
相田 黒 1988.3 「第4章第2節第II文化層」「福田札ノ辻遺跡」 pp.12-29 大和市文化財調査報告書 第31集 大和市教育委員会
戸田哲也 1988.9 「第Ⅲ章第5節第V文化層」「台山遺跡」 pp.31-50 大和市山道跡発掘調査報告書 玉川文化財研究所
松井 泉 1990.3 「第3節 第2文化層bの遺構と遺物」「古川B遺跡」 pp.159-254 相模原市古川B遺跡発掘調査会
小宮恒雄 1990.3 「二ノ丸遺跡」「港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告X 全遺跡調査概要」 pp.200-202
横浜市埋蔵文化財センター
- 鈴木重信 1990.3 「北川市の上遺跡」「港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告X 全遺跡調査概要」 pp.290-293
横浜市埋蔵文化財センター
- 相田 黒 1991.3 「第Ⅲ章第4節 第II文化層」「御見社山遺跡」 pp.12-13 大和市文化財調査報告書 第42集 大和市教育委員会
小池 啓 1991.3 「第5章第5節第V文化層」「長坂北遺跡」 p.27 大和市文化財調査報告書第39集 大和市教育委員会
麻生順司 1992.3 「第Ⅲ章第2節 第2文化層(B1上部)」「今田遺跡」 pp.17-60
藤沢市今田遺跡発掘調査報告書 藤沢市教育委員会
- 麻生順司 1993.9 「第2節 第II文化層」「B1上部」「下森鹿島」 pp.75-126 下森鹿島遺跡発掘調査報告書 玉川文化財研究所
麻生順司 1994.12 「第Ⅱ章 第II文化層」「高幡台地遺跡群」「古川B遺跡」 pp.8-17
藤沢市高幡台地遺跡群 地点発掘調査報告書 藤沢市No13遺跡発掘調査団
- 坂本 彰 1995.3 「第2章 先土器時代」「見山遺跡」 pp.20-28 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告16 横浜市埋蔵文化財センター
- 岡沢祥子・関根理恵・柳 刚史・五味亮子 1995.3 「第IV章第6節 第I文化層」「南葛野遺跡」 pp.101-139 南葛野発掘調査田
望月 芳 1996.3 「第Ⅲ章 先土器時代の調査」「南葛野山遺跡」 pp.15-203
- 田石器(先土器・岩宕) 1996.3 「南殿治山遺跡発掘調査報告書第3巻 先土器層」 藤沢市教育委員会
旧石器時代研究プロジェクトチーム 1996.3 「旧石器時代後半における石器群の諸問題ーL2~B1層石器群の様相」
研究会要旨「かながわ考古学古学」 pp.1-36 財団法人 かながわ考古学財団
- 井関文明 1996.7 「第V章第3節 第III文化層」「木久こざっ原遺跡」 pp.36-68
かながわ考古学古学調査報告書12 財団法人 かながわ考古学財団
- 大坪宣雄・長澤邦夫・小口利恵子 1997.3 「第IV章 先土器時代の調査」「横山下丁目遺跡」 pp.14-101
相模原市立室内水泳場建設事業地内道路調査
- 麻生順司 1997 「2.相模原市田名町周囲No4遺跡」「第21回神奈川県遺跡調査・研究發表会 発表要旨」 pp.9-15 神奈川県考古学会
麻生順司 1998 「田名向原No4遺跡」「第5回石器文化研究交流会発表要旨」 pp.46-52 第5回石器文化研究交流会とちぎ実行委員会
戸田哲也・麻生順司 1998 「2.相模原市田名町周囲No4遺跡の住居状遺構」
「公開セミナー」記録集「用田バイパス開通道路群B1層中出土の炭化材」「旧石器時代の住居状遺構を探る」
pp.66-72 (財) かながわ考古学財団・神奈川県立埋蔵文化財センター
- 田名塙田遺跡発掘調査団 1998.7 「相模原市「田名向原」旧石器時代遺跡の調査」 pp.1-10 相模原市教育委員会
桜井純也 1999.3 「第Ⅲ章第2節 第II文化層」「藤沢市No19遺跡第2地点」 pp.15-36
東京歴史考古学研究所調査研究報告第19集 藤沢市No19遺跡発掘調査団・東京歴史考古学研究所
- 麻生順司 1999.3 「第Ⅲ章第4節 第II文化層」「田名塙田遺跡群 A地区(向原遺跡)」 pp.108-109
田名塙田遺跡群A発掘調査報告書 田名塙田遺跡群A地区(向原遺跡) pp.108-109
- 小池 啓 1999.3 「第Ⅲ章第2節 第II文化層」「大和市No21遺跡」 pp.13-28 大和市文化財調査報告書第71集 大和市教育委員会
高田俊明 1999.12 「第V章第1節 第I文化層(B1上部)の調査」「豊田丙二ノ区遺跡」 pp.19-85
かながわ考古学財団調査報告68 財団法人 かながわ考古学財団

神奈川における縄文時代文化の変遷VI

—中期後葉期 加曽利E式土器文化期の様相 その3 文化的様相（1）—

縄文時代研究プロジェクトチーム

I. はじめに

平成12年度から開始した中期後葉期・加曽利E式土器文化期の様相をめぐる研究の3年次目にあたる平成14年度は、前年度に行った加曽利E式土器編年案の成果に基づいて、その文化的様相のうち、極めて多くの資料が得られている堅穴住居址・柄鏡形（敷石）住居址の分析に焦点を絞った研究活動を実施した。

該期は、前時期の最盛期から安定期を迎える、引き続き各地に大規模な拠点的集落である環状集落を盛んに形成した時期と捉えられるが、しかしその終末には柄鏡形（敷石）住居址の出現と軌を一にするかのようにこれまでの集落形態・構造が変質・崩壊し始める時期でもある。このような変革を含む該期の様相について、堅穴住居址・柄鏡形（敷石）住居址の分析視点からどのような動向が把握できるのかが本年度の研究主眼である。以下、これら住居址について各属性毎に検討を加えていくこととする。

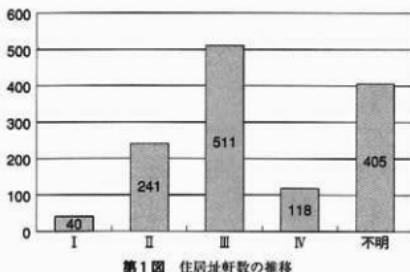
（恩田）

II. 堅穴住居址・柄鏡形（敷石）住居址

1. 段階別の軒数（第1図）

本プロジェクトで集成し得た加曽利E式期の堅穴住居址・柄鏡形（敷石）住居址は187遺跡3035軒（2001『研究紀要』6）を数える。なお集成の対象が神奈川という行政区画に限られるため、加曽利E式土器の分布圏に留まらず、これに隣接する曾利式土器の分布圏に属す住居址が含まれていること、また詳細不明な遺跡のそれも計上している。これらは本来分別されるべきものであるが、容易ではなく、今回の検討では上記の総軒数を対象として検討に着手した。以下の分析では、これらのうち報告書等の事実記載・挿図等から概要が比較的明瞭な129遺跡1315軒の堅穴住居址・柄鏡形（敷石）住居址をもとに、分析に有効となる対象を各属性毎に選別し、平面形態・平面規模・柱穴配置・壁下構造（彫溝・壁柱穴）、建替・拡張・炉址・埋臺・敷石住居址の諸属性について検討を加え、各段階毎の特徴や傾向を抽出することを試みた。なお、各住居址の段階比率は、報告書等の記載によるものを参考に、前年度提示した編年案（I～IV段階）の大別に従っている。

段階別の軒数は、I段階が16遺跡40軒、II段階が57遺跡241軒、III段階が74遺跡511軒、IV段階が47遺跡118軒となっており、II段階以降の増大が著しく、III段階に遺跡数・住居址軒数ともピークに達することが判る。I段階に属する遺跡・遺構数は僅少で、勝坂式土器文化期から急激な落ち込みを示すが、このことが直接的に勝坂式期からの衰退を意味するかどうかは検討が必要であろう。（小川）



第1図 住居址軒数の推移

2. 平面形態（第2図、第1表）

129遺跡1100軒を対象に検討を行った。これらのうち平面形態が把握できたものは98遺跡647軒で、これらさらに段階不明のものを除くと88遺跡486軒となる。分析にあたっては、炉址・柱穴・埋甕の配置等を参考に、奥壁部一炉址一出入口部を結ぶ輪線付近の最大長部分を主軸とし、またこれに直交する最大長部分の輪線を副軸と捉え、平面形態の分類とその集計を試みた。この結果、円形・縦長楕円形・横長楕円形・方形・縦長長方形・横長長方形・五角形・逆五角形・六角形・半円形・柄鏡形・不整形というおおよそ12種類の形態が抽出し得た（第2図）。なお、楕円形・長方形の縦長・横長の区別に際しては、主軸が副軸の1.05倍以上となるものを縦長、主軸が副軸の0.94倍以下となるものを横長と、便宜的に区分し分類を行った。

上記の98遺跡647軒のデータをもとに段階別に各形態の軒数とその比率をみたものが第1表である。I段階では資料数が希少なため今後の資料増加によっては大幅な修正が必要となる公算が高いが、現時点では縦長楕円形が最も多い。II段階でもやはり縦長楕円形が最多であるが、円形・方形・縦長長方形が安定した存在を示すようになる。また、五角形は本段階に多い傾向にある。III段階では柄鏡形以外の形態が出揃う。主体的形態は前段階と同様であるが、前段階に比べ横長の楕円形・長方形が増加する傾向にある。さらに本段階の特徴としては、逆五角形・半円形・不整形・柄鏡形を除く各形態の出入口部と目される壁面に瘤状の小張出が付帯する形態が多く見受けられるようになることが挙げられる（II段階162軒中9軒：5.6%→III段階234軒中50軒：21.4%）。ここに埋甕の埋設される事例が大半を占めることから（9+50軒中8+43軒：86.4%）、埋甕の存在しないものも、やはりこれに関連した痕跡と判断するのが妥当であろう。IV段階では、一変して柄鏡形が主体となり、円形・縦長楕円形・横長楕円形・縦長楕円形が僅かに残存する状況となる。

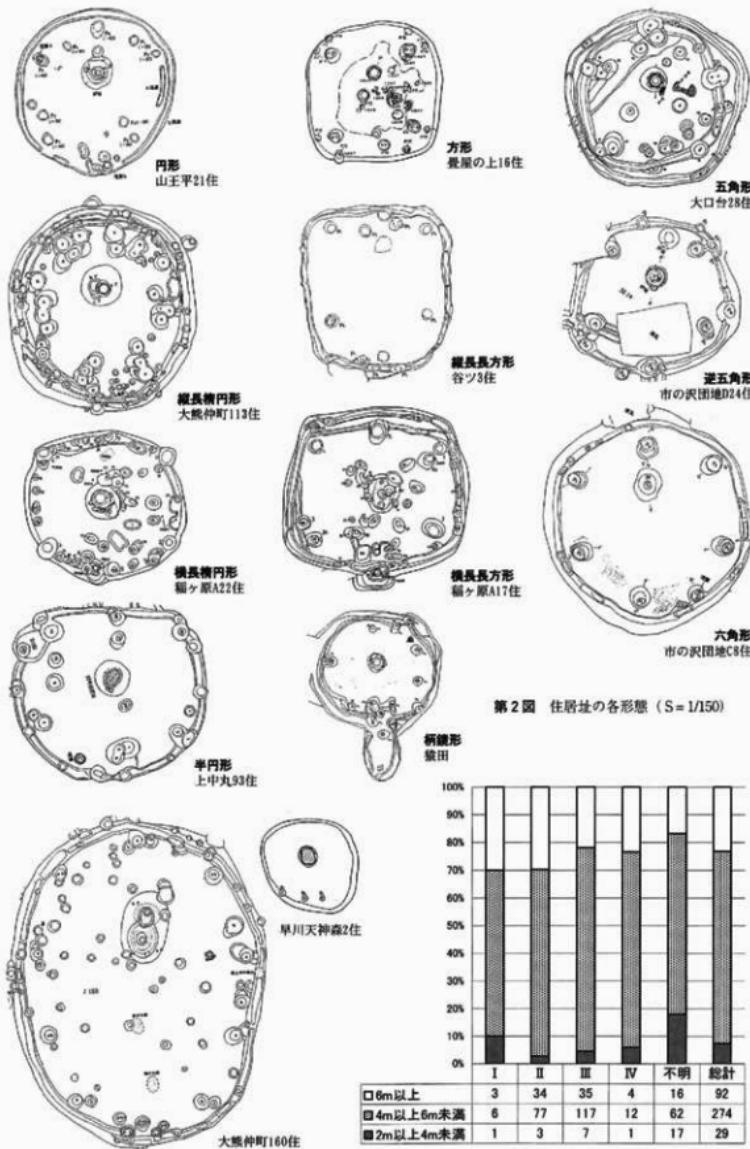
3. 平面規模（第3・4図）

129遺跡1100軒を対象に検討を行った。これらのうち平面規模が計測し得たものは78遺跡395軒で、これらを対象に平面形態で用いた定義による主軸長・副軸長を計測した（柄鏡形は、主軸長を主体部奥壁から張出部先端までを計測）。これら計測値をもとに、勝坂式文化期での分析に倣い、主軸・副軸いずれかの長軸規模を3段階（2m以上4m未満/4m以上6m未満/6m以上）に区分し、各領域に属する軒数を集計したものが第4図である。各段階とも中規模と見なされる4m以上6m未満のものが主体を占める状況は前時期とほぼ同様であるが、II段階以降、小規模とみられる2m以上4m未満のものが微増、大規模とみられる6m以上のものが微減する傾向にあることは前時期の大形化への推移と異なる特徴で、IV段階における柄鏡形の盛行が長軸規模の大形化として顕著に現れない点は留意される。なお、III段階には長軸約10mを測る大形住居址（第3図左）が認められるが、本時期では孤高的存在といえる。

(恩田)

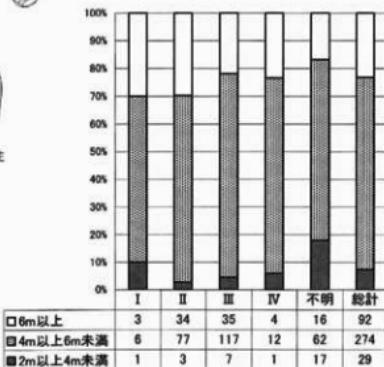
第1表 住居址各形態の軒数と比率（形態不明除く）

<軒数>		円形	縦長楕円形	横長楕円形	方形	縦長長方形	横長長方形	五角形	逆五角形	六角形	半円形	柄鏡形	不整形	総計
I			7				1		1		2			12
II		26	40	3	27	22	6	18	6	4				162
III		40	56	18	29	24	14	9	10	6	3		25	234
IV		3	2	1		2						70		70
不明		29	30	10	20	15	10	7	5	7	9	19		161
総計		98	139	32	78	64	30	35	21	19	3	79	55	647
<比率>														
I		58.3%				8.3%		8.3%		16.7%			8.3%	100.0%
II		18.0%	24.7%	1.9%	16.7%	13.6%	3.7%	11.1%	3.7%	2.5%			6.2%	100.0%
III		17.1%	23.9%	7.7%	12.4%	10.3%	6.0%	3.8%	4.3%	2.6%	1.3%		10.7%	100.0%
IV		3.8%	2.6%	1.3%		2.6%						89.7%		100.0%
不明		18.0%	18.6%	6.2%	12.4%	9.3%	6.2%	4.3%	3.1%	4.3%		5.6%	11.8%	100.0%
総計		15.1%	20.9%	4.9%	11.7%	9.9%	4.8%	5.4%	3.2%	2.9%	0.5%	12.2%	8.5%	100.0%



第3図 大形住居址と小形住居址 (S = 1/150)

第4図 住居址の長軸規模



4. 主柱穴配置（第5図、第2表）

本項は、該期堅穴住居の主柱穴数及び住居址主軸に対する主柱穴配置の差異による形態分類を行い、形態毎の特徴・時期（段階）別の傾向の抽出を試みるものである。本来は、他の属性との相関も考慮すべきであるが、紙幅の制約もあり、ここでは、上記分類に従って抽出された形態に絞って検討を加えることとする。

分類に先立ち、報告書に実測図・観察表の掲載されている145遺跡1,178軒の堅穴住居址を対象に、各住居址の主柱穴数をカウントし基礎データを作成した。主柱穴配置の特定が可能なものは787軒存在し、うち段階を比定し得るものは573軒に絞られる。基礎データを集計した結果、該期堅穴住居址の主柱穴数は3本から9本の間に過在することが判明し、定型化したものについて7つの大別形態を抽出し得た。これに、壁際に概ね等間隔で主柱を巡らせる壁柱穴の形態を探るものを加え、都合8つの大別形態を設定した。また、主軸に対する柱穴配置の差異に着目することによって、5本主柱穴のものを2細分、6本主柱穴のものを4細分、8本主柱穴のものを2細分することが可能であった。以下、各形態の代表的事例を掲載した第5図を参照しながら、形態毎に若干の検討を加え、時期（段階）別の傾向をみていくことにする。

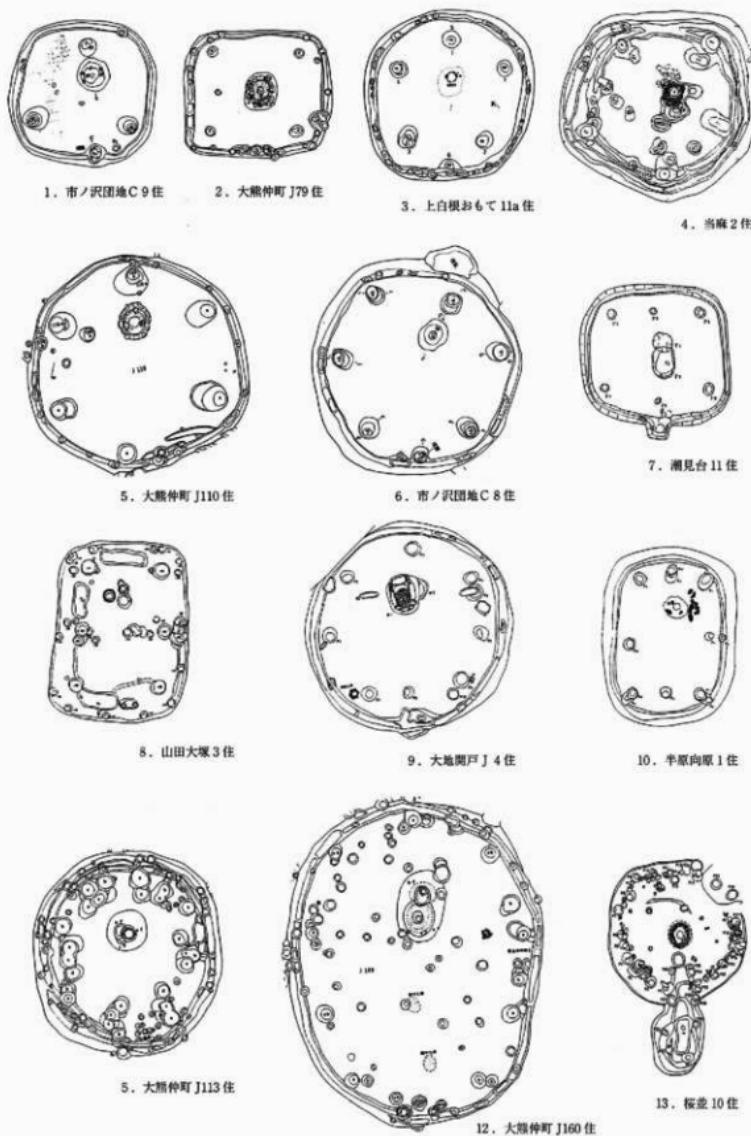
3本主柱穴のものは8軒を数える。全て入口側2穴・奥壁側1穴という配置を探り、奥壁側の1穴は概ね入口と炉址を結んだ中軸線上に配されている。時期比定の可能なものは、県東部の3例がⅡ段階、県西部の2例がⅢ段階に属し、I・IV段階に属する確実な事例は抽出できなかった。4本主柱穴のものは300軒を数える。I～Ⅲ段階を通して高い占有率をほこり、加曾利E式期の最もボビュラーな柱穴形態といえよう。方形配置をなすものと台形に近い配置をなすものの別を認め得るが、細分形態として捉える程際だった差異ではない。5本主柱穴のものは263軒を数える。基本的な配置は五角形をなす。大半は第5図-3のごとく五角形の頂点を奥壁側に配するが、希に第5図-4のごとく入口側に頂点を配して逆五角形をなすものが認められ、この2形態を細分形態として捉えた。Ⅲ段階で最も高い占有率を占める形態である。6本主柱穴のものは131軒を数える。柱穴配置はバリエーションに富み、縦位亀甲形（第5図5）、横位亀甲形（同5）、二列横帯形（同7）、二列縦帯形（同8）の4細分が可能であるが、この他、縦位亀甲形と横位亀甲形の中間的な様相を示す斜位亀甲形のものも少なくない。縦位亀甲形のものは、入口側の主柱を主軸上からずらして配する傾向があり、幾分歪んだ形状をなすものが多い。Ⅳ段階において4本主柱穴のものを凌駕することに留意したい。7本主柱穴のものは28軒を数える。大半は、奥壁側に1穴、側壁側に各2穴、入口側に2穴を配する形態を探る。各段階を通して占有率は低く、I段階のものは抽出できなかった。8本主柱穴のものは10軒を数える。主軸上に2穴を配するもの（同10）と配さないもの（同11）の別があり、この2形態を細分形態として捉えた。占有率は各段階を通じ極端に低い。9本主柱穴のものとして2軒を抽出した。II・III段階に各1例存在するのみである。第5図-12は大形住居に採用されている事例で、特殊な事例といえるかもしれない。壁柱穴のものは45軒を数える。Ⅲ段階に1軒、Ⅳ段階に36軒存在し、大半が柄鏡形（敷石）住居に伴うものである。

各大別形態の時期別の軒数を示したものが第2表である。I・II段階では4本主柱穴のものが最も多く、5・6本主柱穴のものがこれにつづく。Ⅲ段階では4本主柱穴のものと5本主柱穴のものとの順位が逆転し、壁柱穴の形態を探るもののが出現する。

IV段階では柄鏡形住居の増加に伴い、壁柱穴形態のものが飛躍的に増え、最も高い比率を占める形態となる。
(井辺)

第2表 形態別の軒数・比率

	3本柱	4本柱	5本柱	6本柱	7本柱	8本柱	9本柱	壁柱	計	比率
I	0	13	6	6	0	1	0	0	26	3.3%
II	3	90	75	37	8	2	1	0	216	27.4%
III	2	98	109	41	11	4	1	1	267	33.9%
IV	0	6	9	8	4	1	0	36	64	8.1%
不明	3	93	64	39	5	2	0	8	214	27.2%
計	8	300	263	131	28	10	2	45	787	100.0%
比率	1.0%	38.1%	33.4%	16.6%	3.6%	1.3%	0.3%	5.7%	100.0%	



第5図 住居址の主柱穴配置 ($S = 1/150$)

5. 壁下構造（壁溝・壁柱穴）（第6図）

ここでは壁柱穴・壁溝の分析を行う。こうした施設は堅穴の壁直下に設けられ、しがらみや矢板のような壁を保護しその崩落を防止する壁体の支え、あるいは整体そのものの痕跡と見なされる。特に深く掘りこまれた壁柱穴や壁溝、あるいは後述する主柱と一体化した壁柱穴は、単なる壁面の保護に留まらず、堅穴から地上部に立ち上がった壁体を支えたり、主柱から葺きおろされた垂木を受ける側柱や壁体であった可能性も考えられる。

以下、これらの施設を、壁柱を廻らせるもの、壁溝を廻らせるもの、主柱が壁柱と一体化したもの、こうした施設を有さないものに分け、神奈川県域における変遷を概観したい。対象としたのは今回集成した加曾利E式期の住居址1315軒の内こうした施設が観察可能で所属時期もある程度特定できる910軒である。住居址のごく一部の検出でもこうした施設が観察されかつ時期が特定できる事例は可能な限り取り上げた。ただし柱穴のみが検出されている事例の多くは不明とし、また住居址の極く一部分の調査で施設が認められないものはここから除外している。

無施設—I段階6軒・II段階17軒・III段階51軒・IV段階6軒で、各段階を通じて存在する。

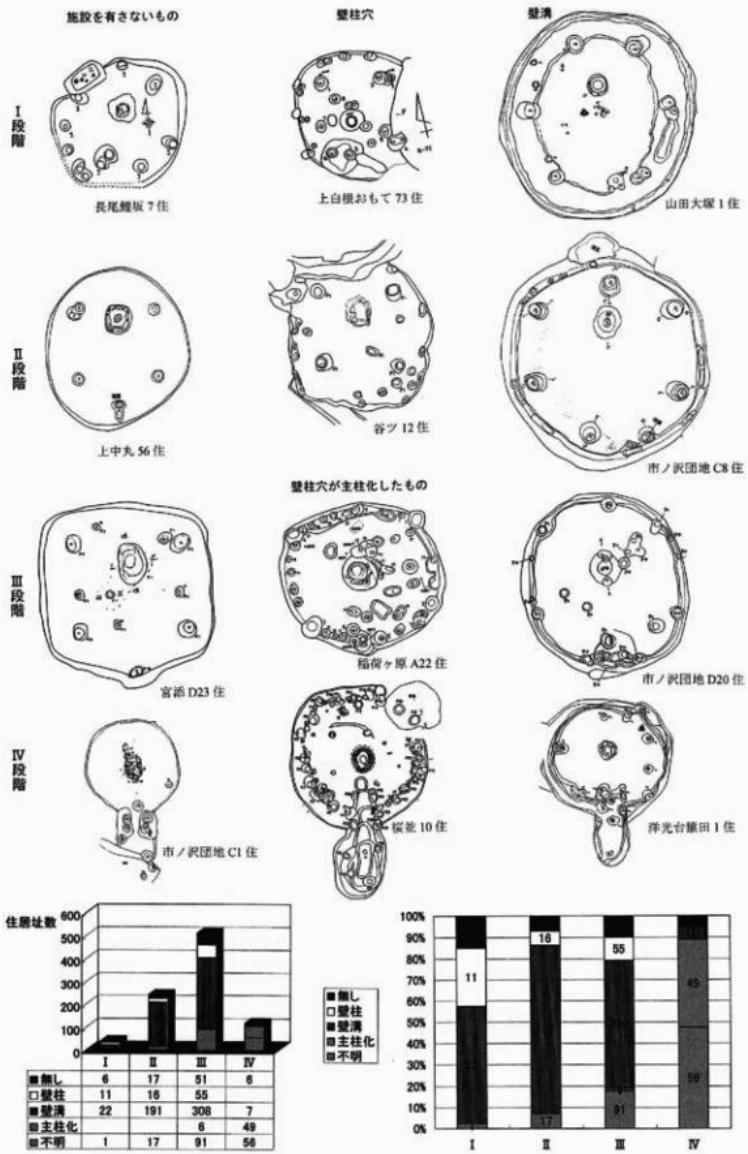
壁柱—I段階11軒・II段階16軒・III段階55軒・IV段階0軒。I段階においては全体の半分近くを占める。II段階以降検出数は微増するが、全体に占める比率は著しく小さくなり急激に減少する。

壁溝—I段階22軒・II段階191軒・III段階308軒・IV段階7軒。壁溝を廻らせるものはI段階に約半数を占め、II段階で全体の8割を占めるまでに激増する。III段階にはさらに増大を見せるが全体に占める比率はやや小さくなっている。IV段階に入ると上述した壁柱とともに急激に減少している。

主柱化—I段階0軒・II段階0軒・III段階6軒・IV段階49軒。主柱と壁柱が一体化するものはI・II段階には見られない。IV段階で前二者に替わって急増し約半数を占めるようになる。

壁溝は先行する勝坂式期の後半に出現するが、I段階における住居址の約半数は無施設・壁柱であり、安定的な存在になつてはいない。壁溝を有するものが大半を占めるII段階は壁溝が壁下構造の範型として確立した時期と評価できるだろう。壁溝は続くIII段階でも検出住居址の壁下構造の大半を占める。II～III段階を通じ、なお少数ではあるが無施設・壁柱も共存する。壁溝を設けるものを範としながら、住居の建設材料・労力・建設期間または居住期間・土質・堅穴の深度等様々な理由から、臨機に併用されたものであろうか。またIII段階には少数であるが、それまでの壁柱とは異なる主柱と壁柱が一体化したものが見られる。加えてこの時期、壁溝が見られるものでも、主柱穴の壁への接近が顕著なものとなってくるのは注意される。極端な事例では主柱穴が壁溝に接したり、市ノ沢团地D20住・業横台遺跡8住・山王平遺跡15住等のように主柱穴が壁溝に重なるものも散見される。IV段階、それまでの壁柱・壁溝に替わり壁柱と主柱が一体化した形態が一般化する。一方であざみ野遺跡11住・洋光台猿田遺跡1住は、壁溝を廻らし主柱を別個に有する本段階での数少ない事例である。壁溝はII～III段階以来の名残りを見せるものであろう。IV段階に顕著に見られる壁柱の主柱との一体化は、壁面を被覆して保護する矢板のような壁体を、支え固定化していたそれまでの壁溝に替わって、主柱が壁体を支持する構造物となってより強固な壁体を提供したものであろう。III段階に少数出現する主柱化したものとIV段階に残存する壁溝の他は、一見したところ不連続に見える壁溝から主柱化したものへの移行は、案外とスムーズなものであったことを予感させる。壁柱・壁溝の変遷は、勝坂式～I段階における壁溝の出現から、II～III段階での壁下構造の範型としての確立、III段階以来顕著となる主柱の壁への接近と壁柱・壁溝への一体化による壁溝の消失（IV段階）の過程とまとめられる。

(小川)

第6図 壁下構造の形態 ($S=1/150$) と時間的推移

6. 建て替え・拡張（第7図・第3表）

ここでは、集成資料187遺跡のうち、住居の構造を一定程度以上把握できる130遺跡・1093軒の住居を抽出し、その情報から住居の周溝に着目して、建て替え・拡張などの様相を捉えていきたい。本来は炉・柱穴・周溝・床面など住居各施設の具体的な要素が複合して変化していることを想定したうえで、住居の変遷を検討しなければならない。周溝の構築されない住居は、壁のみが位置を移動している可能性を含み、併せて炉や柱穴などの施設により建て替えが想定できる事例が認められる。また周溝が多数巡るものについては、その他の施設が複合して変化する事例も多い。また、複数住居の「重複」と「建て替え」の区別は、覆土・遺存状態や遺物などに基づいて判断する部分も大きく、平面形からの把握は困難である場合が認められる。したがって今回は集成された資料のうち周溝のみに限定し、壁面変化の事例についてその傾向を概観したい。

建て替えの回数は、原則として周溝の複数巡の条数に基づき分類した。総数270軒のうち、2条巡の1回は186軒（69%）で最も多く、次いで2回は65軒（24%）となる。3回は15軒（6%）4回・5回は合計4軒（約1%）と激減する傾向が把握できる。大地開戸19住（1回）は、東壁を基軸とし、その他3辺を移動するもので、炉・埋甕などもほぼ同程度の移動が認められる好例である。市ノ沢団地C区2住（2回）は、南東コーナー付近を起点とし、円形→方形→六角形と規模と形態の変化も認められる。一般に内側の周溝は、埋め戻しや掘削など床面の再構築によって分断または断続的に認められる場合が多い。上中丸22住（3回）は、炉の位置に顕著な変化は認められず、あくまで炉を起点としてほぼ同心的に変化するものである。柱穴配置の変遷も比較的良好に把握できるが、出入口付近の埋甕は認められない。3回以上の変化が認められる住居については、部分的・全体的問わず多数の建て替えにより結果的に同心円状を呈し、各施設の変化や柱穴配置などの把握が困難となっている。4回の建て替えは、当麻4住・中萩野稻荷木3住・尾崎31住があり、炉周辺の僅かな空間以外は周溝や柱穴が多数分布する。併せて各施設の具体的な変化や形態的な特徴などを把握することが困難になるが、形態・主軸方向・床面面積などの大きな変化を有し、画期が見いだせる。最大数は新戸8住の5回で、調査区外に展開する住居であるが周溝の具体的な変遷が報告されている。

周溝の配置に基づく壁面の変化については、炉と出入口を結ぶ主軸線に基づき、A「奥壁のみ」、B「出入口のみ」、C「側壁のみ」、D「奥壁と出入口」、E「奥壁と側壁」、F「出入口と側壁」、G「一部のみ」、H「壁全体」の8種に類型化した。各類型に分類した総数222軒についてその傾向をみると、H「壁全体」の変化が115軒（52%）と半数を占め他を圧倒する。次いでF「出入口と側壁」35軒・B「出入口のみ」20軒で、F・Bの合計55軒（25%）となり、出入口及びその付近に関する建て替えが顕著であると把握できる。A「奥壁のみ」市ノ沢団地7住は、五角形を呈するが、頂点の柱穴を中心に壁が移動している。B「出入口のみ」市ノ沢団地13住は、短い周溝とピットが密集する事例を挙げた。その他に、埋甕などの要因も想定できるが、事例が少なく、数量的な傾向は見いだせない。C「側壁のみ」蟹ヶ沢1住は、両側壁が狭小に拡幅されるもので、床面の面積拡大が目的でないことも想定できる。その他市ノ沢団地19住など片側周溝のみの変化が確認できる事例も認められる。E「奥壁と側壁」、F「出入口と側壁」などは主軸線の僅かな変更による場合のものも含まれる。G「一部のみ」原東5住は、主軸の変化・出入口施設の小規模移動・縮小などが想定できる。時期は、I段階6軒・II段階94軒・III段階98軒で、IV段階4軒の事例は極めて少ない。

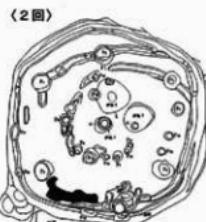
第3表 壁面変化の数 (天野)

A奥壁のみ	B出入口のみ	C側壁のみ	D奥壁と出入口	E奥壁と側壁	F出入口と側壁	G一部のみ	H壁全体	合計
9(4%)	20(9%)	9(4%)	4(2%)	16(7%)	35(16%)	14(6%)	115(52%)	222(100%)

【建て替え・拡張回数】



大地開戸19住



市ノ沢団地C区2住



上中丸22住

【建て替え・拡張の類型】

A 「奥壁のみ」



市ノ沢団地D区7住

B 「出入口のみ」



市ノ沢団地B区13住

C 「側壁のみ」



蟹ヶ沢1住

D 「奥壁と出入口」



上中丸39住

E 「奥壁と側壁」



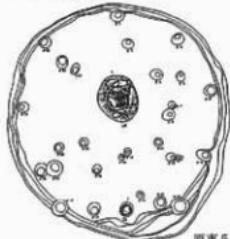
大熊仲町15住

F 「出入口と側壁」



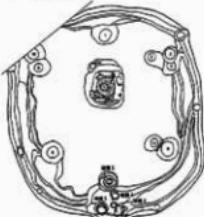
沼目・板戸第II地点2住

G 「一部のみ」



原東5住

H 「壁全体」



上中丸50住

H 「壁全体」



上白根おもて34住

第7図 住居址の建て替え・拡張の回数及び類型

7. 炉址（第8図、第4表）

本項では、118遺跡1031基の炉址を対象にその形態を埋甕炉、石圓埋甕炉、石圓炉、地床炉に大別し、前年度提示した編年案（I～IV段階）に基づいて所属する住居址の時期がある程度特定された658基について集計を行い、その比率・傾向等を求めた（第4表）。石圓炉は、炉石が抜去され構築時の状況が判然としないものが多く認められたため、それ以上の細分は避け、文中でおおよそその傾向を示すことにとした。また、炉床の外周にテラス状の掘り込みや小ピットが並ぶなど炉石設置の痕跡を留めるものは石圓炉と推定し集計した。

I段階 本段階は勝坂式の終末段階の土器と共伴する事例が多いが、今回、勝坂式のみが確認されている住居は集計から除外したため、該当する炉址は8遺跡17基と極めて少ない。形態は17基中15基とそのほとんどが埋甕炉（第8図1、2）であり、石圓埋甕炉、石圓炉（同3）はそれぞれ1基認められるに過ぎない。勝坂式期の後半段階（V・VI段階）では石圓炉や石圓埋甕炉の比率が伸びる時期として捉えられており（2000『研究紀要』5）、今回の傾向が加曾利E式初現段階の特徴と言えるのか、集計数の少ない現状では判断し難い。

II段階 本段階の炉址は55遺跡204基である。埋甕炉の比率は大きく下がり、他の形態が増加する。特に石圓炉の比率の伸びが著しい。ただし、この傾向は横浜・川崎市域と同市域外では異なり、前者では埋甕炉の比が未だ最大であるのに対し、後者ではその比は最も少なく、石圓炉の比率が他を圧倒する（第4表II-1、2）。炉石の設置形態は円形、楕円形、長方形、方形等が認められるが、長方形を呈するもの（同6）が相対的に多い。炉石の設置方法も様々で、扁平な礫を寝かせるもの、斜めにするもの、立てるもの等が認められる。特に扁平の礫を寝かせて設置したものが後続段階と比べて多く、本段階の特徴のひとつに挙げられる（同7）。他に小～中形礫を円形配するもの（同8）が目に付く。石圓埋甕炉は炉石が炉体土器の外縁に沿って設置されているもの（同5）が多い。埋甕炉は前段階を踏襲し、円形や楕円形の掘り込みに胴部下半を欠いた土器を埋設されている（同4）。地床炉は炉石が抜去されたものと判別し難いものあるが認められる（同9）。

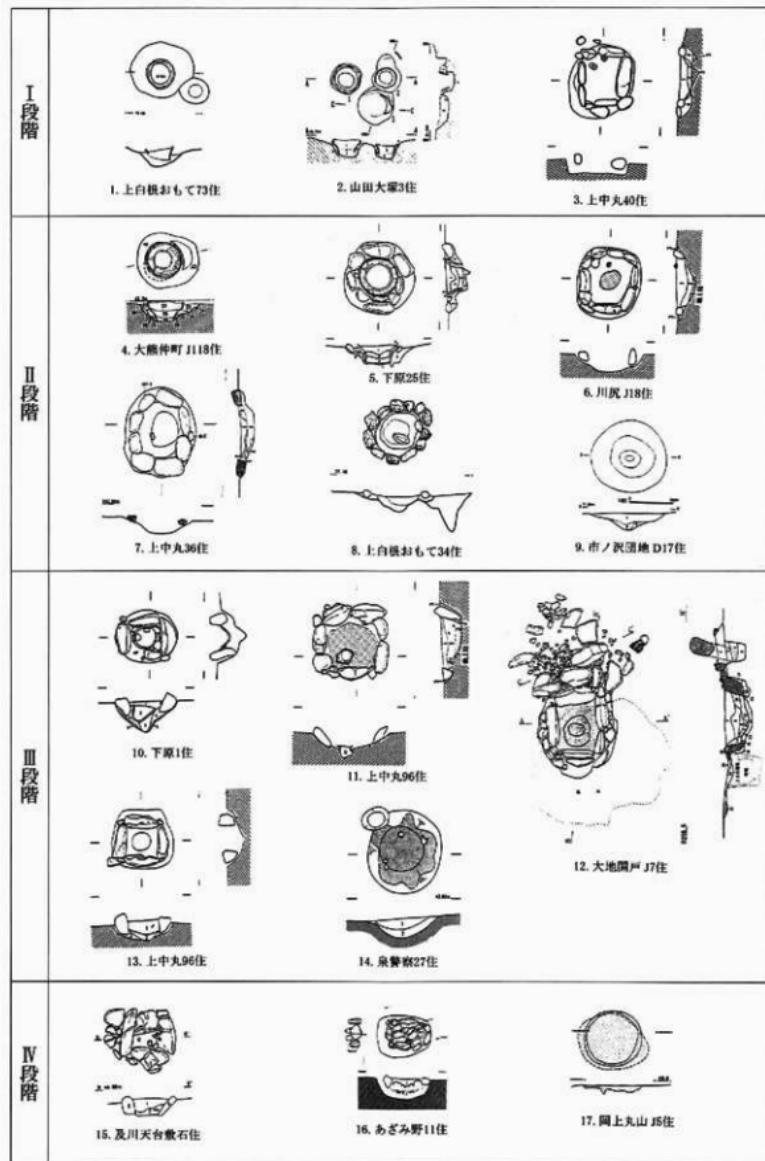
III段階 本段階は69遺跡341基を抽出した。埋甕炉は姿を消し、石圓炉はその比率を更に伸ばし、その数は本段階炉址の2/3に及ぶ。前段階で捉えられた地域的な傾向差は認められない。形態は前段階と大きな変化は看取できないが平石を寝かすものは減少し、各辺に炉石を1個に立てるようになして設置した方形の石組みが増加する（同13）。また、検出例は少ないと、県北西部で石柱・石壇を伴う石圓炉（同12）が見つかっている。石圓埋甕炉は少ないが、その形状は基本的に前段階と同様である（同10）。便宜上同形態の範疇に含めたが、方形の石圓に小形の土器を埋設されるものも認められた（同11）。地床炉（同14）は増加傾向にある。

IV段階 資料数は42遺跡96基である。本段階から登場する柄鏡形（敷石）住居も含めて、石圓炉の比率は減少し、地床炉（同17）の比率がその分増加する傾向にある。埋甕炉、石圓埋甕炉も少ないが認められる。石圓炉は方形で小型のもの（同15）が多く見られ、炉内に礫が充満しているものも認められる（同16）。石圓埋甕炉は、II段階に多く認められたタイプに加えて、長方形に組まれた石圓炉の炉床に底を有する小型土器が埋設されたものが見られる。前者とは土器の機能が異なると思われるが便宜上一括して集計した。（井澤）

第4表 炉址形態別一覧表

	埋甕炉	%	石圓埋甕炉	%	石圓炉	%	地床炉	%	不明等	%	計	%
I	15	88%	1	6%	1	6%	0	0%	0	0%	17	1.6%
II	38	19%	39	19%	88	43%	38	19%	1	0%	204	19.8%
II-1	33	31%	28	26%	23	21%	23	21%	1	1%	108	10.5%
II-2	5	5%	11	11%	65	68%	15	16%	0	0%	96	9.3%
III	8	2%	5	1%	230	67%	92	27%	6	2%	341	33.1%
IV	3	3%	5	5%	42	44%	41	43%	5	5%	96	9.3%
不明	31	8%	11	3%	183	49%	136	36%	12	3%	376	36.2%
計	95	9%	61	6%	544	53%	307	30%	24	2%	1031	100.0%

* II-1は横浜・川崎市域は、II-2はそれ以外の地域の値を示している。



第8図 段階毎の主な炉址形態 (S=1/60)

8. 埋甕 (第9図、第5表)

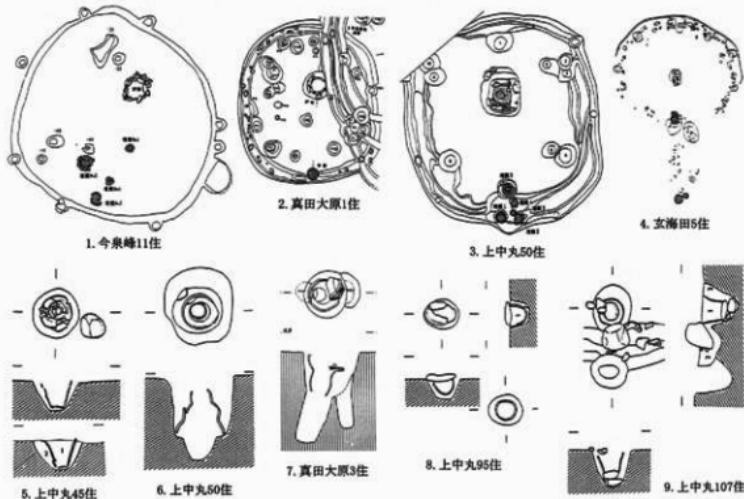
埋甕の数：埋甕をもつ住居址は報告書で確認できたもので539軒存在する。また埋甕数は748個ある。時期別に見るとⅠ段階ではなく、Ⅱ段階に出現し、Ⅲ段階に急増するようである。1軒の住居址内に埋設された埋甕の数を見ると、第5表のように埋設数は1ないし2個が普通であったと考えられる。

埋甕の位置：全段階を通じて壁際（単なる壁際）、壁際の主軸線上、小張出、張出部というように壁際で埋設されることが多く、単なる床面上（第9図1）は少ない。Ⅱ・Ⅲ段階では壁際のうち約半数が壁際主軸線上（同2）または小張出（同3）に埋設され、Ⅳ段階では柄鏡形（敷石）住居址の出現と共に張出部（同4）に埋甕が埋設されるのが一般的となる。

埋甕の埋設状態：埋甕の埋設状態は正位（第9図5）が圧倒的に多く、逆位（同6）、斜位（同7）は少ない。埋設される土器は底部が抜けた深鉢形土器が一般的で、埋甕の上位に石蓋をしたもの（同8）、埋甕の下に石を敷いたもの（同9）、埋甕の脇に石を添えたもの（同9）も數例発見されている。
(松田)

第5表 埋甕の出土住居址軒数・位置別出土数・出土状況別出土数

	埋甕出土点数別の住居址軒数							位置別の埋甕出土点数							出土状況別の埋甕点数					
	1 個	2 個	3 個	4 個	5 個	6 個	不 明	合 計	床 面	壁 際	壁 際主 軸線	小 張 出	張 出 部	不 明	合 計	正 位	逆 位	斜 位	不 明	
I																				
II	64	20	6	1				91	24	58	18	23		3	126	73	6	1	46	
III	182	66	15	3	1	1		268	80	140	52	67	2	41	382	234	23	20	105	
IV	46	19	1	1				3	70	11	6	1	3	56	14	91	51	2	12	26
不明	72	29	5	1				3	110	25	47	17	40	5	15	149	87	3	8	51
合計	364	134	27	6	1	1	6	539	140	251	88	133	63	73	748	445	34	41	228	



第9図 埋甕出土住居址 (S=1/150)・埋甕出土状況 (S=1/50)

9. 敷石住居址（第10図、第6・7表）

時期 現在圧倒的多数はIV段階のものである。しかしIII段階に属する可能性があるものも数例ある。

分布 県東部は少なく、横浜市・川崎市で20軒程。多いのは県央・県西部で、相模原市の28軒を筆頭に、厚木市、平塚市、藤沢市、伊勢原市、座間市、秦野市、南足柄市、山北町、清川村、津久井町、城山町などであわせて50軒以上検出されている。

構造 現在までに報告書が刊行されて、図が提示されているものは72軒ある。ここではこれらを対象にして、その構造を概観してみる。なおこれ以外にも柄鏡形の無敷石竪穴住居址がある。

平面形態：72軒中、敷石あるいは掘り込みやピットによって柄鏡形をなすものは57軒ある。それ以外は遺存状態が悪かったり、全体が調査できていないものなどで、本来の平面形態は大かた柄鏡形をなすと言える。

柄鏡形をなす57軒中、柄部のみのもの11軒を除いた46軒の主体部形態を見ると、円形のもの（第10図14）が25軒、楕円形のもの（同17）が10軒、半円形のものが3軒、方形・長方形のもの（同13）が8軒ある。円形を基調としつつも、方形化が進みつつある状況が見てとれる。

平面規模：主体部の規模を見ると長軸長2m台が4例、3m台が22例、4m台が17例、5m台は4例で、6m以上のものは存在しない（第6表）。5m以上は僅少で、主体が3~4mにあることは他の竪穴住居址に比べ小形と言える。また張出部の長さは2.0~2.4mが最も多く、1.5~1.9mがそれに次ぐ。張出部の幅は1.0~1.4mが最も多く、1m未満のものも存在する。一方2m以上のものは1例しかなく。幅狭と言える。

柱穴：主柱をもつものもあるが、壁際や内側に壁柱穴を巡らしたもの、連結部に対ピットをもつものが多くなる。

炉址：石圓炉が大半である。埋甕炉、石圓埋甕炉、地床炉はわずかにあるだけである。

埋甕：埋甕があるものは41軒、ないものは31軒。しかし柄鏡形のプランをなす57軒中では37軒に埋甕が存在した。1軒の埋甕の個数は1個が24例と最も多く、2個が11例でそれに次ぐ。3個、4個のものも少しある。2個のものでは張出部先端と（張出部と主体部の）連結部に設置されることがほとんどで、1個のものは張出部先端のみまたは連結部のみに1個設置されることが普通である。

敷石：県内の敷石の石の配置を見ると、礫を壁柱穴や壁の内側に沿って中小の礫を配するもの（周礫タイプ）（第10図9~13）と板石を床に面状に敷いたもの（面状敷石タイプ）（同14~21）がある。このうち周礫タイプには石が連結部に限定されるもの（同13）もある。また石が少ないものは柄鏡形住居址に分類することもある。一方面状敷石タイプでは壁柱穴や壁の内側に沿って板石や棒状礫による縁石を配したもの（同14）や縁石に中小礫を伴うもの（同17~18）がある。また張出部や連結部に敷石が限定されるもの（同21）がある。地域的には、周礫タイプは横浜市・川崎市といった県東部に多く、面状敷石タイプは県央・県西部に多いと言える（第7表）。これは川の流れの緩やかな県東部では板石の入手が困難である事情も反映していると思われる。また周礫については住居使用時に住居の構造物として存在していたと見る説と住居廢絶後の祭祀時に配されたとする説がある。今回の集成によれば周礫は面状敷石タイプの縁石と配置位置が共通する上、面状敷石タイプの縁石にも周礫に使われるような中小礫を伴うもの（第10図17~18）があることから、住居の構造物としての可能性が高いと思われた。周礫はしばしば壁柱穴の上を覆ったり、床面よりわずかに浮いて存在するが、これは柱列間の何らかの構造物（土壤ないしは壁体）に伴っていたためとも考えられよう。

掘り込み：近年の発掘では掘り込みを伴うものが多く発見されてきている。それらの掘り込みを見ると、床面より上からの掘り込み（床上掘り込み）のみをもつもの、床上掘り込みと共に床下の掘り込み（掘り方）

をもつもの、掘り方のみもつものがある。床上掘り込みは深さ10~30cmが主で、一般的に浅いものが多い。一般に周縁タイプはたいてい床上掘り込みがあり（第10図10~12）、掘り方をもつもの（同9）は少ない一方、面状敷石タイプは床上掘り込みをもつもの（同15）もあるが、掘り方をもつもの（同16~20）が多い傾向がある。面状敷石タイプに伴う掘り方は縁石や板石を安定させるため、敷石敷設に先立ち、浅い掘り込みが必要であったためと考えられる。また掘り込みの中には敷石範囲よりも広く掘り込まれた例がある（同20）。敷石の範囲外に柱穴がある例（同15・16）も存在することから、敷石住居址の空間は敷石部よりもずっと広いものが存在した可能性が考えられる。

敷石と張出の出現：敷石住居址盛行以前のⅢ段階には住居址に石を配した例が存在する。奥壁の立石（石柱）（同1）や円形石團（同3）、石團炉と奥壁の立石の間の敷石（同2）は複数例存在し、Ⅲ段階における定型的かつ規則的配石と考えてよいだろう。また床面に不規則ながら石を置いた例が当麻遺跡（同8）や上中丸遺跡などで数多く見つかっている。これらはこの時期盛行する石團炉とともに主体部における敷石行為の発展への関与が考えられる。一方小張出の埋甕に添うように立石が配された例（同4）は敷石住居址の張出部の配石と関係があろう。Ⅲ段階の堅穴住居址の小張出については、敷石住居址の張出部と同様、しばしば埋甕をもつことから、敷石住居址の張出部へ発展したことが指摘されている（山本1995）。短い張出と部分的な配石をもつ上中丸遺跡95号住居址例（同5）（Ⅲ段階終末）は小張出に埋甕や立石をもつ住居址の発展例と考えられ、壁際に石を配した宮ヶ瀬No2遺跡の例（同7）や炉から入口部にかけて敷石をもつ東開戸遺跡の例（同6）同様、敷石住居址の初源と評価できよう。このようにⅢ段階の小張出をもつ堅穴住居址が張出を伸長させ、敷石行為を拡大して敷石住居址へ発展したと考えられるが、その間の変遷には未だヒアタスがある。今後の資料の増加が待たれるところである。

(松田)

引用・参考文献

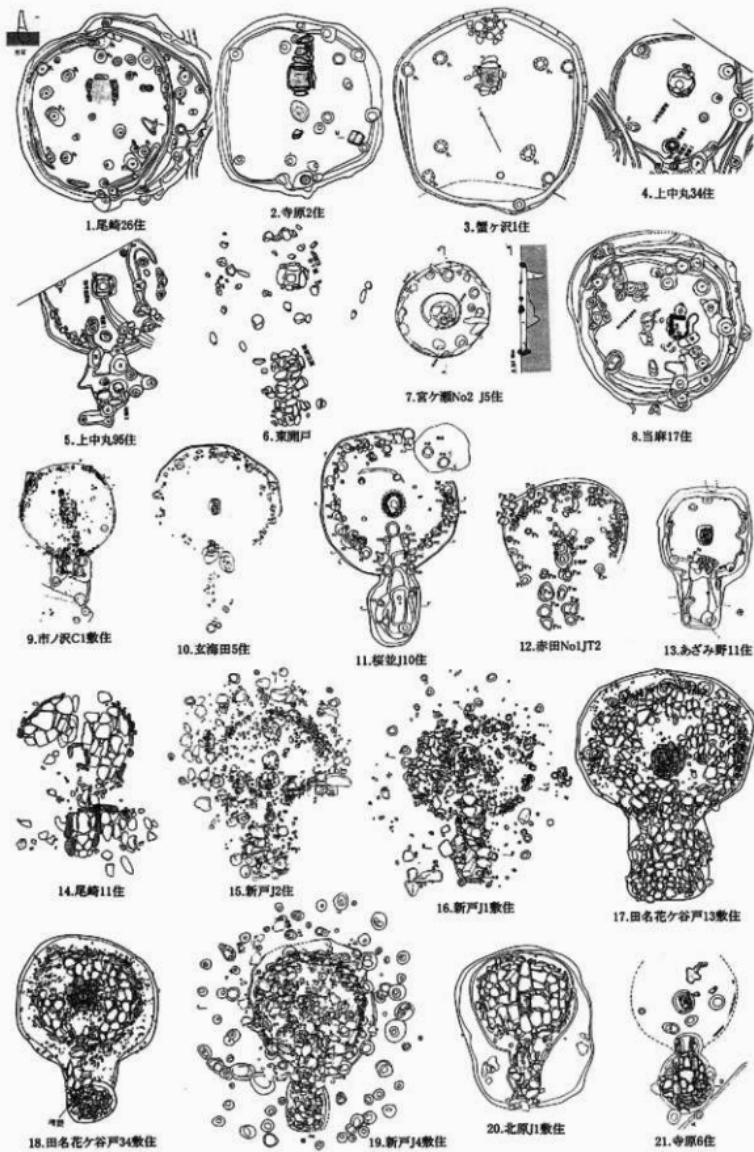
- 秋田かな子 1991「銅鏡形住居研究の視点」『東海大学校地内遺跡調査団報告』2
 石井 宽 1998「銅鏡形住居址・敷石住居の成立と展開に関する一考察」『縄文時代』9 横文時代文化研究会
 長岡 文紀 1996「謎の敷石住居」 神奈川県立埋蔵文化財センター
 山本 輝久 1995「銅鏡形（敷石）住居成立期の再検討」『古代探査』IV 早稻田大学出版部

第6表 敷石住居址の長軸長・張出部長・張出部幅

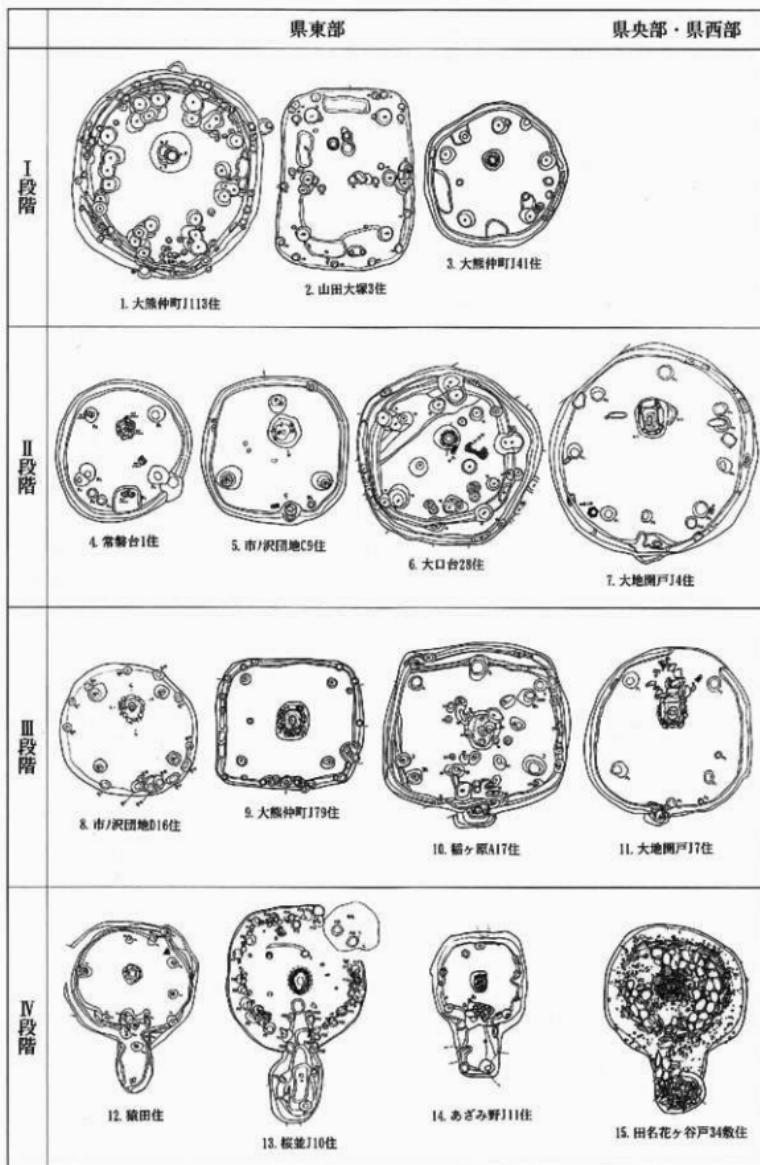
	0.5m~	1.0m~	1.5m~	2.0m~	2.5m~	3.0m~	3.5m~	4.0m~	4.5m~	5.0m~	5.5m~	計測不能
主体部長軸長					4	10	12	10	7	4		24
張出部長		7	12	20	4							29
張出部幅	9	25	7		1							30

第7表 代表的な敷石住居址の分類

	床上掘り込みのみあり	床上掘り込みと掘り方あり	掘り方のみあり
周縁タイプ	横浜市赤田No1遺跡JT2 横浜市板並遺跡J10号住居址 横浜市華厳台南遺跡16号住居址 横浜市玄海田遺跡5号住居址	横浜市市ノ沢町地連跡C区1号敷石住居址	
面状敷石タイプ	相模原市新戸遺跡J2号敷石住居址	相模原市田名花ヶ谷遺跡13号敷石住居址 相模原市田名花ヶ谷遺跡40号敷石住居址 清川村北原遺跡J1号敷石住居址	相模原市田名花ヶ谷遺跡34号敷石住居址 相模原市新戸遺跡J1号敷石住居址 相模原市新戸遺跡J4号敷石住居址 座間市平和坂遺跡5号住居址



第10図 敷石住居址および関連資料 (S = 1/150)



第11図 加曾利E式期住居址集成図 (S=1/150)

宮ノ台式土器の研究（2）

弥生時代研究プロジェクトチーム

はじめに

昨年度は、これまでの宮ノ台式土器研究の概要をまとめ、不十分ながらも現状と課題の整理を行った。今年度は前年度の課題整理に基づいて検討を進めるべきところであるが、紙幅の都合もあり、神奈川県内の宮ノ台式土器出土遺跡分布図および遺跡文献一覧表の掲載に留まることとなった。

遺跡文献一覧表は、村上が作成したものをベースとして当プロジェクトメンバーで分担して追加・削除を行い、遺跡分布図は、この一覧表を元に櫻井が原図を作成した。一覧表、分布図ともに最終的な確認と仕上げを飯塚と渡辺が行った。また、遺跡分布図に対応して、神奈川県内の「宮ノ台式」期（弥生中期後半）遺跡分布の傾向について渡辺が概要をまとめた。
(池田)

宮ノ台式土器出土遺跡の分布と傾向

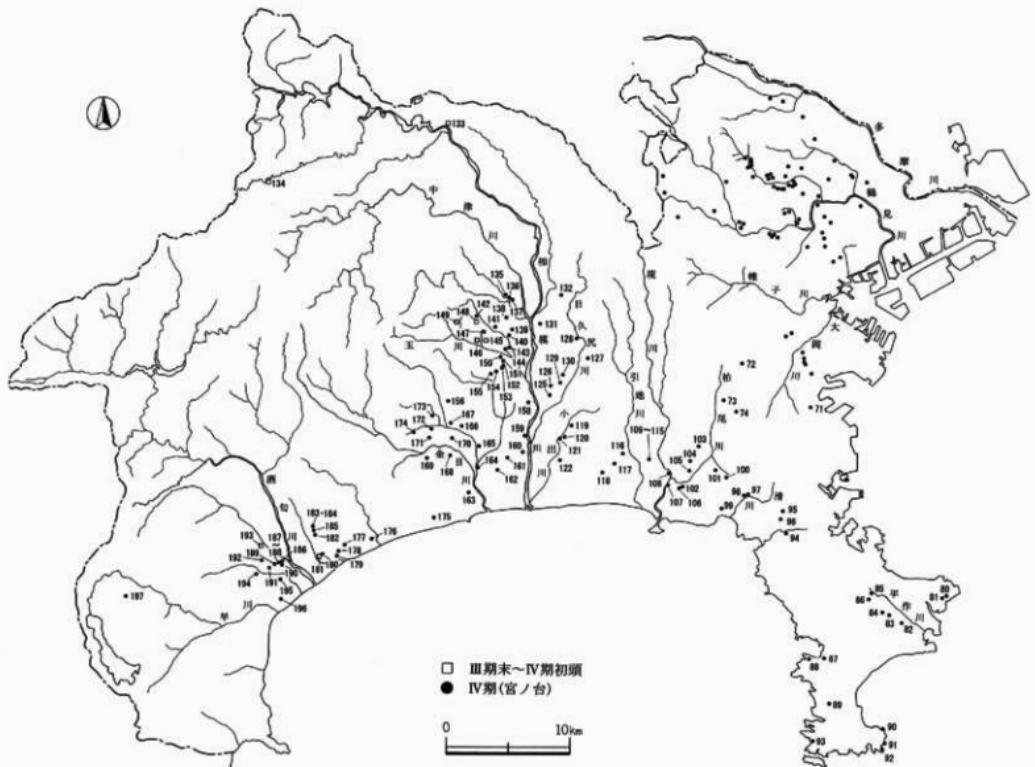
神奈川県域の宮ノ台式土器出土遺跡の分布 昭和4年、赤星直忠は三浦半島における弥生時代遺跡の踏査を行い、三浦市初声の道路脇土手断面に弥生時代の堅穴住居址8軒を確認した。これらの堅穴からは宮ノ台式土器の壺・甕の破片が出土している（赤星1930）。この三浦市赤坂遺跡の発見に前後して、本県における宮ノ台式土器の発見例が相次いで報告され（註1）、現在では約200例程度の出土が確認されている（第1表）。

第1図には県内における宮ノ台式土器出土例の位置と分布を示した。ここで取り扱う「各地点」には、発掘調査によって出土した資料だけではなく、試掘調査や表探による分布調査のデータの他、採集品として報告されたものを含んでいる（註2）。図中の各ドット一点は一遺跡又は一地点を示すが、土器の出土量は反映していない。また、隣接地点で複数の出土例があり、なおかつ明らかに同一遺跡のものと考えられる場合はこれを一括し、遺跡分布の実態と極力かけ離れないよう努めた。出土地点分布の濃淡は遺跡の集中を示すが、同規模のドットの集中が同規模の遺物の濃密度を反映している訳ではない点をお断りしておく。

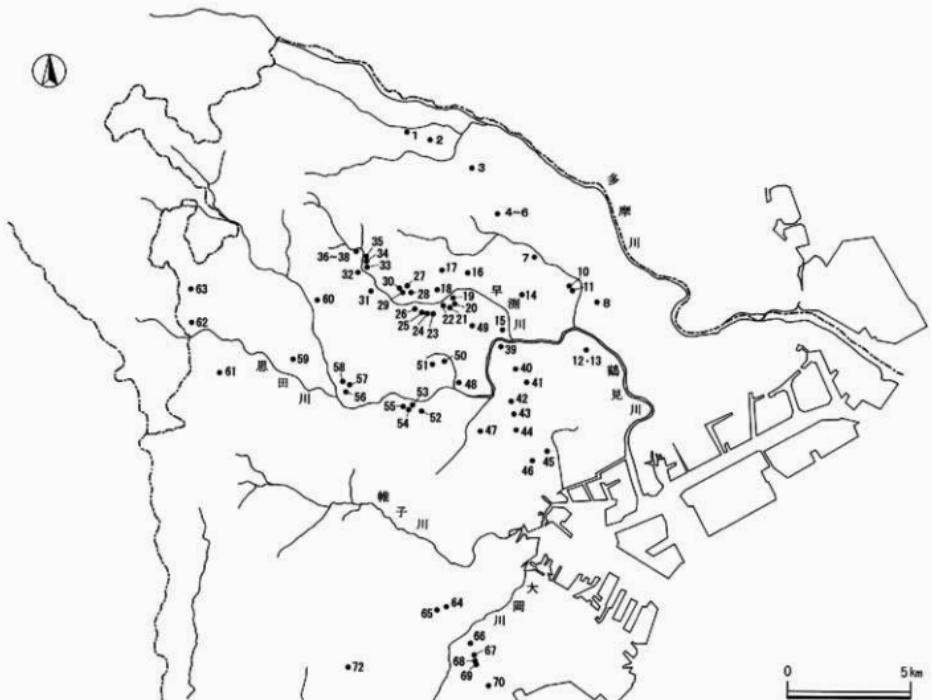
第2図は、横浜市域北部を中心とした該期の遺跡分布である。鶴見川・早瀬川流域に全体の4割以上が集中し、その中には大塚・歳勝土（27・28）、折本西原（51）などの大規模集落が含まれる。このいわゆる下末吉台地での極端な集落遺跡の集中は、関東地方全域を通じても類例のない特異な状況である。

県内ではこの他、鎌倉市内の大倉幕府周辺遺跡群や藤沢市域の引地川・柏尾川流域の稻荷台地遺跡群周辺、三浦半島の平作川周辺、県央地域の厚木市内では相模川の支流である恩曾川・玉川中流域、平塚市域の花水川（金目川）流域、そして県西部小田原市域では酒匂川下流域とその東側から国府津近辺まで広がる低地帯などに分布の集中が認められる。これらの地域には、一部で大規模集落の存在が予想されている地点も存在するものの、ほとんどの場合は断片的な調査例や採集資料等を通じて遺跡の全体像を予想せざるを得ないのが実状である。

遺跡分布の傾向と特徴 当研究プロジェクトチームでは、以前に弥生時代の堅穴住居址の検出数と分布状況の分析から、県内弥生時代集落の動態について言及してきた。宮ノ台期の集落数は前段階（いわゆる須和田式土器の時期）よりも爆発的に増加し、主として台地・丘陵上に展開する傾向がみられることは集成ア-



第1図 神奈川県における官ノ台式土器出土地点の分布 [四十万分の一]



第2図 鶴見川・早瀬川流域における宮ノ台式土器出土地点の分布【二十万分の一】

タからも明白であった。こうした急激な人口増加の要因として外來集団の関与を想定した上で、宮ノ台期の社会が形成される過程において、海岸線や河川を介して集団の動きが認められることを指摘した（弥生時代研究プロジェクトチーム1994）。その点は今回の検討においても、集落遺跡以外の遺物出土地点もまた河川流域を中心に分布することから追認できる。また低湿地・砂丘上の集落遺跡の希薄さは從前より指摘されてきたことではあるが、近年の発掘調査の成果の一つとして、こうした低地遺跡における宮ノ台式土器の出土例の増加が挙げられる。同様に山間部でも前段階から宮ノ台期への移行期の資料が僅かに出土しており、遺跡分布と立地の時間的な変遷については新たに検討しなおす段階にきているのかもしれない。

出土した土器の様相を県域全体で見た場合、前回「宮ノ台式土器の研究（1）」で提示した変遷段階のうち最も古い様相のもの（Ⅰ段階）は相模川流域でしか確認されず、県域全体に分布するようになるのはⅡ段階以降のことである。Ⅲ段階以降は分布の比率が東京湾沿岸域に偏るようになる点は従来の見解通りだが、そうした認識で今回の出土分布一覧のデータ作成のための資料調査をしていたところ、Ⅱ段階に含まれる資料が予想以上に県内各所に散見されることがわかった。今後は各遺跡における実際の出土状況を検証した上で、土器様相の時間的な変遷についての再検討へと移行するべきであろう。（渡辺）

註

- こうした宮ノ台式土器設定以前の宮ノ台式土器をめぐる経緯については、伊丹徹が型式設定前後の型式概念の推移を整理した際にまとめている（伊丹1994）。
- 宮ノ台式土器の県内出土データの集成にあたっては、発掘調査報告書及び概報、図録類の他、県史・市町史、資料集成図録等に掲載されている実測図・写真・記述に基づいて集計した。なお、表に掲載したデータのうち、遺跡の所在地が明確でないものについては第1回・第2回に含め得なかった。

参考文献

- 赤星直忠 1930 「三浦半島における弥生式遺跡の分布」『考古学』第1巻第5・6合併号
 1977 「Ⅱ-1 弥生時代集落址としての赤坂遺跡の発見」「三浦市赤坂遺跡」三浦市教育委員会
 安藤広道 1991 「弥生時代集落群の動態—横浜市鶴見川・早瀬川流域の弥生時代集落群を中心に—」『調査研究集録』第8冊 横浜市埋蔵文化財センター
 1998 「相模川流域における宮ノ台期の集落—その時空間的展開の素描—」『考古論 神奈川』第7集 神奈川県考古学会
 伊丹 徹 1994 「宮ノ台式土器研究前史」『西相模考古』第3号 西相模考古学研究会
 弥生時代研究プロジェクトチーム 1994 「弥生時代堅穴住居の基礎的研究（1）」「神奈川の考古学の諸問題」かながわの考古学第4集 神奈川県立埋蔵文化財センター

第1表 宮ノ台式土器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	編集・発行組織(報文執筆者)	発行年	報文名・書名
川崎市				
1	長尾台北	長尾台北遺跡発掘調査団	1997	「川崎市多摩区長尾台北遺跡発掘調査報告書」
2	緑ヶ丘墓園	川崎市緑ヶ丘墓園遺跡発掘調査団	1995	「川崎市緑ヶ丘墓園遺跡第2地点・第3地点」
3	梶ヶ谷神社上	高津区書道友の会郷土史研究部	1970	「川崎市梶ヶ谷神明社上遺跡発掘調査報告」高津郷土史料集第七集
4	千年伊勢山台	川崎市教育委員会	1983	「川崎市高津区千年伊勢山台遺跡発掘調査報告書」『川崎市文化財調査集録第十九集』
5	千年伊勢山台北	千年伊勢山台北遺跡発掘調査団	2000	「千年伊勢山台北遺跡発掘調査報告書」
6	伊勢山台東	川崎市教育委員会	1996	「川崎市高津区伊勢山台北遺跡発掘調査報告書」『川崎市文化財調査集録第32集』
7	井田伊勢台	日本大学文理学部史学研究室	1978	「川崎市中原区井田伊勢台遺跡発掘調査報告書」『川崎市高津区平風久保遺跡発掘調査報告書』川崎市中原区井田伊勢台遺跡遺跡発掘調査報告書』日本大学文理学部史学研究室文化財発掘調査報告第2・3集
8	加瀬台古墳群	川崎市市民ミュージアム	1997	「加瀬台古墳群の研究Ⅱ—加瀬台9号墳の発掘調査報告書—」『川崎市市民ミュージアム考古学叢書3
9	南加瀬貝塚	(杉原莊介)	1968	「南開東地方」『弥生式土器集成 本編2』
横浜市				
10	日吉台	(赤星直忠・岡本 勇)	1979	『神奈川県史 資料編 20 考古資料』
11	日吉町	神奈川県立博物館	1969	『神奈川県考古資料集成 1 弥生式土器』
12	梶山	神奈川県立博物館	1968	『梶山遺跡(1)』『神奈川県立博物館発掘調査報告書1』
13	梶山北	横浜市埋蔵文化財調査委員会	1972	『横浜市鶴見区梶山遺跡群調査報告書』昭和46年度 横浜市埋蔵文化財調査報告書
14	森戸原	横浜市埋蔵文化財調査委員会	1972	『港北区森戸原遺跡調査概報』昭和46年度 横浜市埋蔵文化財調査報告書
15	諏訪下北	諏訪下北遺跡発掘調査団	1990	『横浜市港北区諏訪下北遺跡発掘調査報告書』
16	道中坂上	横浜市埋蔵文化財センター	1990	『道中坂上遺跡』『全遺跡調査概要』
17	B 8	横浜市埋蔵文化財センター	1990	『B 8 遺跡』『全遺跡調査概要』
18	梶ノ目原	(伊藤 邦)	1984	『港北の弥生式土器(II)』『調査研究集録 第5冊』
19	椎田原	(鈴木重信)	1987	『椎田原遺跡(ル8・9)の調査(1)』『港北のむかし』84
20	北川貝塚南	(財)横浜市ふるさと歴史財團埋蔵文化財センター	1997	『第四編 北川貝塚南遺跡』『屋根の上遺跡・西谷戸の上遺跡・北川貝塚南遺跡』
21	新吉田十三塚	横浜市埋蔵文化財センター	1990	『新吉田十三塚遺跡』『全遺跡調査概要』
22	矢東	横浜市埋蔵文化財センター	1990	『矢東遺跡』『全遺跡調査概要』
23	勝田町	(安藤富道)	1990	『横浜市港北区勝田町出土の弥生土器』『利根川』11
24	狹間根	横浜市埋蔵文化財センター	1990	『狹間根遺跡』『全遺跡調査概要』
25	勝田原	横浜市埋蔵文化財センター	1990	『勝田原遺跡』『全遺跡調査概要』
26	綱崎山	横浜市埋蔵文化財センター	1990	『綱崎山遺跡』『全遺跡調査概要』
27	大塚	横浜市埋蔵文化財センター	1991	『大塚遺跡』『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告書X II』
28	歳勝土	(財)横浜市ふるさと歴史財團埋蔵文化財センター	1994	『大塚遺跡II』『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告書X V』
29	歳勝土南(C15)	横浜市埋蔵文化財調査委員会	1975	『I. 歳勝土(C 7・6)遺跡』『歳勝土遺跡』港北ニュータウン地域埋蔵文化財調査報告V
30	大槻杉山神社	横浜市埋蔵文化財センター	1990	『III. C15遺跡』『歳勝土遺跡』港北ニュータウン地域埋蔵文化財調査報告V
31	境田	(伊藤 邦・坂本 彰)	1979	『歳勝土南遺跡』『全遺跡調査概要』

番号	遺跡名	編集・発行組織(報文執筆者)	発行年	報文名・書名
32	矢崎山	横浜市埋蔵文化財センター	1990	「矢崎山遺跡」「全遺跡調査概要」
33	八幡山	横浜市埋蔵文化財センター	2002	「八幡山遺跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告31
34	銀治山	(財) 横浜市ふるさと歴史財团埋蔵文化財センター	1998	「銀治山遺跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告24
35	老馬	(財) 横浜市ふるさと歴史財团埋蔵文化財センター	1996	「老馬遺跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告21
36	觀福寺裏	日本商業史研究所	1986	『觀福寺裏遺跡』日本商業史研究所報告第18冊
37	觀福寺北	横浜市埋蔵文化財調査委員会	1989	『觀福寺北遺跡』「觀福寺北遺跡・新羽貝塚発掘調査報告」
38	岡耕地	觀福寺北遺跡調査団	1997	『横浜市觀福寺北遺跡群・岡耕地遺跡発掘調査報告書』
39	牢尻台	(財) 横浜市ふるさと歴史財团埋蔵文化財センター	1999	『牢尻台遺跡発掘調査報告』
40	太尾	(八幡一部)	1930	「武藏国太尾発見の遺物」『考古学』1-5・6
41	磯部山	(赤星直忠・岡本勇)	1979	『神奈川県史 資料編 20 考古資料』
42	菊名・羽黒	菊名・羽黒遺跡調査団	1985	『菊名・羽黒遺跡』
43	表谷戸	(赤星直忠・岡本勇)	1979	『神奈川県史 資料編 20 考古資料』
44	西宮土塚	(杉原莊介)	1968	『南関東地方』「弥生式土器集成 本編2」
45	大口台	横浜市埋蔵文化財センター	1992	『大口台遺跡発掘調査報告書』
46	大口坂	(赤星直忠・岡本勇)	1979	『神奈川県史 資料編 20 考古資料』
47	山王山	神奈川県立埋蔵文化財センター	1985	『山王山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告8
48	新羽大竹	神奈川県教育委員会	1980	『新羽大竹遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告17
49	宮ノ原	横浜市教育委員会	1984	『昭和58年度文化財年報』
50	東原	神奈川県立博物館	1969	『神奈川県考古資料集成 1 弥生式土器』
51	折本西原	横浜市埋蔵文化財調査委員会	1980	『折本西原遺跡』
＊	折本西原遺跡調査団		1988	『折本西原遺跡-1』
52	小机町・住吉神社	相武考古学研究所	1987	『横浜市港北区小机町・住吉神社遺跡』
53	宿根東	横浜市教育委員会	1994	『平成6年度文化財年報』
54	宿根北	宿根北遺跡発掘調査団	1997	『宿根北遺跡発掘調査報告書』
55	宿根西	宿根西遺跡発掘調査団	1999	『横浜市緑区宿根西遺跡発掘調査報告書』
56	佐江戸	佐江戸遺跡調査会	1976	『宮原 横浜市緑区佐江戸町における獣生・土師集落址の調査(下)』
57	清水場	佐江戸遺跡調査会	1971	『清水場 横浜市緑区佐江戸町における獣生・土師集落址の調査(上)』
58	能見堂	(財) 横浜市ふるさと歴史財团埋蔵文化財センター	1997	『能見堂遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告22
59	藤林	日本商業史研究所	1999	『藤林遺跡』
60	朝光寺原	横浜市域北部埋蔵文化財調査委員会	1968	『朝光寺原A地区遺跡第1次発掘調査略報』『昭和42年度 横浜市域北部埋蔵文化財調査報告書(経過概報)』
＊	横浜市埋蔵文化財調査委員会		1968	『朝光寺原遺跡C地区調査概報』『昭和43年度 横浜市埋蔵文化財調査報告書』
61	住撰	(財) かながわ考古学財団	1996	『長津田遺跡群II』『かながわ考古学財団調査報告12』
62	堀之内b	横浜市教育委員会	1985	『昭和59年度文化財年報』
63	受地だいやま	奈良地区遺跡調査団	1986	『奈良地区遺跡群I』
64	高速2号線	横浜市道高2号線埋蔵文化財発掘調査団	1983	『No.6遺跡-III』『横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書 No.6遺跡-III No.9遺跡-II』

番号	遺跡名	編集・発行組織(報文執筆者)	発行年	報文名・書名
65	東台	(杉原莊介)	1968	「南関東地方」「弥生式土器集成 本編 2」
66	成美学園	(小宮まゆみ)	1990	『私たちの成美学園遺跡』
67	竹の橋貝塚	(赤星直忠・岡本 勇)	1979	『神奈川県史 資料編 20 考古資料』
68	三殿台	横浜市教育委員会	1965	『三殿台』
69	三殿台南東斜面	横浜市教育委員会	1992	『三殿台南東斜面遺跡』『平成3年度 文化財年報(埋蔵文化財その10)』
70	峯	峯遺跡発掘調査団	1986	『横浜市磯子区峯遺跡群発掘調査報告書』
71	東漸寺	(赤星直忠・岡本 勇)	1979	『神奈川県史 資料編 20 考古資料』
72	そとごう	そとごう遺跡調査会	1971	『そとごう遺跡調査概報』
73	上倉田原	横浜市上倉田原遺跡調査団	1983	『上倉田原遺跡』
74	上倉田	明治学院大学上倉田遺跡調査團	1982	『横浜市上倉田遺跡』
75	上台	(杉原莊介)	1968	「南関東地方」「弥生式土器集成 本編 2」
76	表谷	神奈川県立博物館	1969	『神奈川県考古資料集成 1 弥生式上器』
77	日吉本町	神奈川県立博物館	1969	『神奈川県考古資料集成 1 弥生式土器』
78	池部町	(杉原莊介)	1968	「南関東地方」「弥生式土器集成 本編 2」
79	谷津田原	(杉原莊介)	1968	「南関東地方」「弥生式土器集成 本編 2」
横須賀市				
80	小荷谷	横須賀市教育委員会	1994	『小荷谷遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書第3集
81	鶴居上の台	横須賀市教育委員会	1981	『鶴居上の台遺跡』横須賀市文化財調査報告書第8集
82	茅山貝塚	横須賀市教育委員会	1991	『茅山貝塚』横須賀市文化財調査報告書第23集
83	佐原城跡	(財)かながわ考古学財団	2002	『佐原城跡遺跡』かながわ考古学財团調査報告書130
84	佐原泉	泉遺跡調査団	1989	『佐原泉遺跡』
85	ひる畑	(杉原莊介)	1968	「南関東地方」「弥生式土器集成 本編 2」
86	タ	(浅川利一・河合英夫)	1987	『横須賀市・ひる畑遺跡の調査』『第11回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』
87	米の台	米の台遺跡発掘調査団	1998	『米の台遺跡』
88	大木根東	大木根東遺跡調査団	1992	『大木根東遺跡』
89	小舞原	横須賀市教育委員会	1982	『長井町内原遺跡』横須賀市文化財調査報告書第9集
三浦市				
89	赤坂	赤坂遺跡調査団	1977	『三浦市赤坂遺跡』
タ	赤坂遺跡調査団	1992	『赤坂遺跡-第3次調査-』	
タ	三浦市教育委員会	1994	『赤坂遺跡』三浦市埋蔵文化財調査報告書第3集	
タ	(岡本 勇)	1967	『三浦市赤坂遺跡の調査』『ムゼイオン』13	
タ	赤坂遺跡調査団	2000	『赤坂遺跡-第19次調査地点の調査報告書-』	
タ	(中村 勉)	1993	『三浦市赤坂遺跡第8・9次調査概要』『第1回三浦半島地区遺跡調査発表会 発表要旨』	
タ	(中村 勉・諸橋千鶴子)	1994	『赤坂遺跡第10次調査概報』『赤坂遺跡第11次調査概報』『第2回三浦半島地区遺跡調査発表会 発表要旨』	
タ	三浦市教育委員会	2001	『赤坂遺跡-個人専用住宅新築工事に伴う第18次調査地点の発掘調査-』三浦市埋蔵文化財調査報告書第6集	
タ	赤坂遺跡調査団・三浦市教育委員会	2002	『赤坂遺跡-第9次調査地点の調査報告-』三浦市埋蔵文化財調査報告書第7集	
90	雨崎洞穴	(赤星直忠)	1967	『雨崎洞穴調査概報』『日本考古学年報』20
91	大浦山洞穴	三浦市教育委員会	1997	『大浦山洞穴』三浦市埋蔵文化財調査報告書第4集
92	間口洞穴	神奈川県立博物館	1973	『間口洞窟遺跡』神奈川県立博物館発掘調査報告書第7号

番号	遺跡名	編集・発行組織（報文執筆者）	発行年	報文名・書名
92	間口洞穴	神奈川県立博物館	1974	「間口洞窟遺跡（2）」神奈川県立博物館発掘調査報告書第8号
	+	神奈川県立博物館	1975	「間口洞窟遺跡（3）」神奈川県立博物館発掘調査報告書第9号
93	海外洞穴	海外洞穴遺跡調査団	1984	「三浦市海外海蝕洞穴遺跡の調査」「第8回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨」
選子市				
94	持田	（赤星直志）	1974	「3 持田弥生・土師遺跡」「選子市文化財調査報告書第五集」
	+	持田遺跡調査団	1975	「持田遺跡発掘調査報告（本文篇）」「選子市文化財調査報告書第六集」
95	池子	（財）かながわ考古学財団	1996	「池子遺跡群Ⅰ №1－C点」かながわ考古学財団調査報告11
	+	（財）かながわ考古学財団	1997	「第3編 №7 地点西地区」「池子遺跡群Ⅳ」かながわ考古学財団調査報告26
	+	（財）かながわ考古学財団	1997	「№8 地点」「池子遺跡群Ⅴ」かながわ考古学財団調査報告27
	+	（財）かながわ考古学財団	1999	「第1編 №1－E 地点」「池子遺跡群Ⅵ」かながわ考古学財団調査報告43
	+	（財）かながわ考古学財団	1999	「池子遺跡群 X №1－A 地点」「かながわ考古学財団調査報告46」
	+	（財）かながわ考古学財団	1999	「池子遺跡群Ⅲ №1－B 地点」「池子遺跡群Ⅴ」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告27
96	池子桟敷戸	東国歴史考古学研究所	2000	「池子桟敷戸遺跡（選子市No100）」東国歴史考古学研究所調査研究報告第26集
鎌倉市				
97	横小路周辺	鎌倉市教育委員会	1998	「横小路周辺遺跡（№259）」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14（第2分冊）」
98	大倉南御門	鎌倉市教育委員会	1998	「大倉幕府周辺遺跡群（№49）」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14（第2分冊）」
	+	大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団	1999	「大倉幕府周辺遺跡群」
	+	（及川良彦）大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団	1990	「参考資料 大倉南御門遺跡（C地点）出土の弥生土器」「大倉幕府周辺遺跡群」
	+	（河野真知郎）	1981	「鎌倉市雪ノ下・南御門遺跡」「第5回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨」
99	伝安達泰盛邸跡	（菊川英政）鎌倉考古学研究所	1992	「諸戸邸内遺跡出土の土器概要」「鎌倉考古」22
100	台山藤源治	台山藤源治遺跡発掘調査団	1985	「台山藤源治遺跡」
101	水道山戸ヶ崎	（及川良彦）青山考古学会	1987	「弥生土器の移動と地域性」「青山考古」5
102	手広八反目	手広八反目遺跡発掘調査団	1984	「手広八反目遺跡発掘調査報告書」
103	大船山居	鎌倉市教育委員会	1967	「鎌倉市大船山居遺跡発掘調査報告」
藤沢市				
104	二伝寺晩	東国歴史考古学研究所	1999	「二伝寺晩（藤沢市№215）遺跡」東国歴史考古学研究所調査研究報告第21集
105	柄沢十二天	藤沢市教育委員会	1969	「藤沢市柄沢十二天遺跡調査略報」「藤沢市文化財調査報告書第五集」
106	川名清水	東レ基礎研究所・清水遺跡発掘調査団	2000	「藤沢市川名清水遺跡発掘調査報告書（東レ基礎研究所内）」
107	大源太	大源太遺跡発掘調査団	1997	「片瀬大源太遺跡発掘調査報告書（ミネベア藤沢製作所内）」
108	若尾山	藤沢市立大道小学校内遺跡埋蔵文化財発掘調査団	1998	「若尾山（藤沢市№36）遺跡－藤沢市立大道小学校内地点－発掘調査報告書」東国歴史考古学研究所調査研究報告第16集
109	稻荷台地U地点	藤沢市教育委員会	1978	「稲荷台地U地点遺跡調査略報」「藤沢市文化財調査報告書第十三集」
110	稲荷台地M地点	藤沢市教育委員会	1965	「稲荷台地遺跡調査報告書」「藤沢市文化財調査報告書第二集」
111	石名坂	石名坂遺跡発掘調査団	1979	「石名坂遺跡」
112	No61	藤沢市教育委員会	1997	「№61遺跡」「藤沢市文化財調査報告書第32集」
113	伊勢山	藤沢市史編さん委員会	1970	「18 伊勢山遺跡」「藤沢市史 第一巻」
114	稲荷引地脇	藤沢市史編さん委員会	1970	「20 稲荷引地脇遺跡」「藤沢市史 第一巻」
115	善行唐池	（馬目順一・原 信之）	1963	「神奈川県藤沢市発見の弥生式土器」「考古学雑誌」48-4
116	大庭築山	藤沢市教育委員会	1981	「大庭築山遺跡調査概報」「藤沢市文化財調査報告書第十六集」
	+	藤沢市史編さん委員会	1970	「21 大庭築山遺跡」「藤沢市史 第一巻」

番号	遺跡名	団体・発行組織(報文執筆者)	発行年	報文名・書名
茅ヶ崎市				
117	折戸	新湘南国道埋蔵文化財調査会	1985	「折戸遺跡－新湘南国道No1地点－」『新湘南国道埋蔵文化財調査報告』
118	小和田・宿	(富永富士雄)	1997	「小和田・宿遺跡の調査」『第7回茅ヶ崎市遺跡調査発表会』
119	臼久保A	(財)かながわ考古学財団	1999	「臼久保遺跡」かながわ考古学財団調査報告60
120	西方A	茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会	1988	「下寺尾西方A遺跡」茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告1
121	西方C	茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会	1994	「下寺尾西方A遺跡」茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告7
122	上ノ町	新湘南国道埋蔵文化財調査会	1988	「西方C遺跡」茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告2
123	向原(大森塚付近)	神奈川県立博物館	1985	「上ノ町遺跡－新湘南国道No7地点－」『新湘南国道埋蔵文化財調査報告』
124	八岡(中赤羽根)	神奈川県立博物館	1969	「神奈川県考古資料集成 1 弥生式土器」
寒川町				
125	倉見才戸	(木村 勇・田村良照)	1992	「寒川町倉見日本鉱業(株)新ひかり社宅内遺跡」『第16回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』
126	行安寺	倉見才戸遺跡発掘調査団	1999	「倉見才戸遺跡発掘調査報告書－第3次調査－」
127	吉岡	(杉原莊介)	1968	「吉岡遺跡群Ⅱ」『南関東地方』『弥生式土器集成 本編2』
128	宮久保	(行安寺裏)	1969	「神奈川県考古資料集成 1 弥生式土器」
綾瀬市				
129	本郷	本郷遺跡調査会	1995	『海老名本郷(X)』
130	本郷中谷津	本郷中谷津遺跡調査会	1994	『本郷中谷津遺跡埋蔵文化財調査報告書－第9次調査－』
131	四大郷	海老名市No4.7遺跡発掘調査団	1997	『四大郷遺跡』
132	尼寺北方	国分尼寺北方遺跡調査団	1996	『国分尼寺北方遺跡－第7次・第8次調査－』
城山町				
133	川尻	(財)かながわ考古学財団	2000	『川尻遺跡II』かながわ考古学財団調査報告69
津久井町				
134	青根馬渡	(財)かながわ考古学財団	1999	『道志導水路開通遺跡』かながわ考古学財団調査報告59
厚木市				
135	山ノ上	神奈川県教育委員会	1988	「厚木市山ノ上遺跡I」『神奈川県文化財調査報告書第47集』
136	妻田西・白根	(中村貴代重ほか)	1996	「厚木市妻田西・白根遺跡出土の弥生土器について」『西柏模考古』第5号
137	妻田中村第5地点	(林原利明・宮井 香)	1997	「厚木市妻田中村遺跡第5地点発掘調査概要報告書」
138	子ノ神	厚木市教育委員会	1978	『子ノ神』
139	子ノ神	厚木市教育委員会	1983	『子ノ神(Ⅱ)』
140	子ノ神	厚木市教育委員会	1990	『子ノ神(Ⅲ)』
141	子ノ神	厚木市教育委員会	1998	『子ノ神(Ⅳ)』
142	恩名大井	厚木市史編さん室	1985	『厚木市史 地形地質編・原始編』
143	恩名仲町	厚木市史編さん室	1985	『厚木市史 地形地質編・原始編』
144	恩名沖原	恩名沖原遺跡発掘調査団	2000	『恩名沖原遺跡発掘調査報告書』
145	下古沢駒飼	下古沢駒飼遺跡発掘調査団	1998	『下古沢駒飼遺跡発掘調査報告書』
146	船子・宮の前	(中村喜代重)	1997	『厚木市船子・宮の前遺跡』『第21回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』

番号	遺跡名	編集・発行組織（報文執筆者）	発行年	報文名・書名
144	宮の里	(浅川利一・青合英夫・田村良照・追 和幸)	1988	「厚木市宮の里遺跡の調査」『第12回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』
145	長谷曾野	長谷曾野遺跡発掘調査団	2000	『長谷曾野遺跡発掘調査報告書』
146	小野川野	厚木パークシティ開発地域内埋蔵文化財発掘予備調査団	1975	『厚木パークシティ開発地域内埋蔵文化財分布調査報告書』
。	歴史と文化を知る会遺跡分布調査班	1975	『厚木市遺跡分布調査報告書』(1)	
147	愛名鳥山	愛名鳥山遺跡調査会	1974	『愛名鳥山』
148	愛名宮地	愛名宮地遺跡調査団	1999	『愛名宮地遺跡』
149	小野若宮	厚木市小野若宮遺跡調査団	1976	『小野若宮遺跡』
150	愛甲宮添	厚木市史編さん室	1985	『厚木市史 地形地質編・原始編』
151	愛甲宮前	愛甲宮前遺跡第2地区発掘調査団	1994	『愛甲宮前遺跡第2地区』
152	愛甲宿	厚木市愛甲宿遺跡発掘調査団	1989	『愛甲宿遺跡』
。	愛甲宿遺跡第2地区発掘調査団	1998	『愛甲宿遺跡第2地区』	
伊勢原市				
153	石田・峯	(立花 実)	1995	『石田・峯遺跡』『神奈川県埋蔵文化財調査報告37』
154	石田・細谷	伊勢原市教育委員会	1994	『2 石田・細谷遺跡』『文化財ノート 第3集』
155	高森・官ノ越	伊勢原市教育委員会・玉川文化財研究所	2001	『高森・官ノ越遺跡』いせはらの遺跡Ⅱ
156	三ノ宮三枚田	神奈川県教育委員会	1975	『伊勢原工業団地内発見の遺跡』『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告8』
157	白根	(石井克己)	1974	『伊勢原市白根遺跡出土の弥生式土器と石器』『愛名鳥山』
平塚市				
158	墨染	平塚市遺跡調査会・平塚市教育委員会	1992	『第10章 墨染遺跡第3地点』『天神前・桜烟遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ21
159	四ノ宮鹿見堂	(赤尾直忠・岡本 男)	1979	『神奈川県史 資料編 20 考古資料』
。	(曾沼圭介)	1998	『第8章第2節 市内出土の弥生時代中期後半の土器』『山王久保遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ31	
160	坪/内	平塚市遺跡調査会	1989	『IX 坪/内遺跡(第3地区)』『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書』2
161	山王B	平塚市遺跡調査会	2002	『第5章 山王B遺跡第12地点』『御殿B/山下長者屋敷跡/御殿宮/山王B』平塚市埋蔵文化財緊急報告書10
162	大原	平塚市遺跡調査会・平塚市	1988	『大原遺跡II』平塚市埋蔵文化財シリーズ7
。	平塚市遺跡調査会・平塚市教育委員会	1989	『大原遺跡III』平塚市埋蔵文化財シリーズ10	
163	笠本	平塚市博物館	1979	『第6章 笠本遺跡』『久保田遺跡他遺跡詳細分布調査報告書』平塚市博物館資料No18
164	南原B	平塚市遺跡調査会	1998	『第5章 南原B遺跡第4地点』『山王久保遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ31
。	平塚市博物館	1980	『第5章 南原B遺跡』『砂丘上の遺跡確認調査報告――丁地B遺跡能登島詳細分布調査』平塚市博物館資料No22	
。	平塚市遺跡調査会	1992	『南原B遺跡隣接地』『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書5』	
。	平塚市遺跡調査会	1993	『南原B遺跡第5地点』『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書6』	
。	平塚市遺跡調査会	1993	『南原B遺跡第2地点』『山王B・稻荷前A遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ23	
。	平塚市遺跡調査会	1996	『南原B遺跡他』	
165	豊田本郷	豊田本郷遺跡発掘調査団	1985	『豊田本郷』
166	山王久保	平塚市遺跡調査会	1998	『第4章 山王久保遺跡第10地点』『山王久保遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ31
167	赤坂	平塚市博物館	1989	『赤坂遺跡発掘調査報告書』平塚市博物館資料No36
168	五領ヶ台	(小島弘義)	1985	『寄贈された弥生式土器』『平塚市文化財調査報告書第20集』

番号	遺跡名	編集・発行組織（報文執筆者）	発行年	報文名・書名
169	原口	(財)かながわ考古学財団	1997	『原口遺跡Ⅰ』かながわ考古学財団調査報告22
	〃	(財)かながわ考古学財団	2001	『原口遺跡Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告104
170	沢浜	金日築便局建設用地内道路発掘調査団	1998	『沢浜遺跡発掘調査報告書』
171	真田・北金目	平塚市	1983	『真田・北金目遺跡詳細分布確認調査報告』
	〃	平塚市真田・北金目遺跡調査会	2001	『平塚市真田・北金目遺跡発掘調査報告書2・4・5・6(A~C)・7・9・10区』
172	真田城跡東堀	東海大学校地内遺跡調査団	1995	『真田城跡東堀の調査』『東海大学校地内遺跡調査団報告5』
秦野市				
173	根丸島	(赤星直忠・岡本勇)	1979	『神奈川県史 資料編 20 考古資料』
	〃	根丸島遺跡調査団	1976	『根丸島遺跡 第一次・第二次発掘調査概報』
	〃	(伊東秀吉・杉山博久)	1985	『秦野市史 別巻考古編』
174	砂田台	神奈川県立埋蔵文化財センター	1989	『砂田台遺跡Ⅰ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20
	〃	神奈川県立埋蔵文化財センター	1991	『砂田台遺跡Ⅱ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20
大磯町				
175	馬場台	馬場台遺跡発掘調査団	1983	『大磯町馬場台遺跡発掘調査報告』『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告25』
	〃	(鈴木一男・矢野慎一)	1985	『大磯町馬場台遺跡出土の弥生土器について』『神奈川考古』20
	〃	大磯町教育委員会	2000	『馬場台遺跡 第28地点』大磯町文化財調査報告第43集
小田原市				
176	羽根尾堰ノ上	小田原市教育委員会	1986	『羽根尾堰ノ上遺跡』小田原市文化財調査報告書第19集
177	宝金剛寺裏山	(赤星直忠・岡本勇)	1979	『神奈川県史 資料編 20 考古資料』
178	三ツ俣	国府津三ツ俣遺跡調査団	1991	『国府津三ツ俣遺跡』
	〃	(財)かながわ考古学財団	2000	『三ツ俣遺跡Ⅱ(F地区)』かながわ考古学財団調査報告80
	〃	(財)かながわ考古学財団	2000	『三ツ俣遺跡Ⅲ(G地区)』かながわ考古学財団調査報告81
	〃	神奈川県立埋蔵文化財センター	1986	『三ツ俣遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告13
179	町畠	(赤星直忠・岡本勇)	1979	『神奈川県史 資料編 20 考古資料』
180	矢代	(財)かながわ考古学財団	2000	『矢代遺跡』かながわ考古学財団調査報告101
181	中里	小田原市教育委員会	1997	『中里遺跡第33地点発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書第61集
	〃	(戸田哲也)	1999	『No.3 小田原市中里遺跡第1地点』『第23回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』
182	千代南原	小田原市教育委員会	1987	『千代南原遺跡第IV地点』『第21回神奈川県遺跡調査報告書第22集』
183	永塚一町畠	小田原市教育委員会	1986	『永塚一町畠遺跡の調査』『埋蔵文化財発掘調査報告』小田原市文化財調査報告書第21集
184	下曾我	小田原市教育委員会	1986	『下曾我遺跡の調査』『埋蔵文化財調査報告書』小田原市文化財調査報告書第21集
185	千代北町	小田原市教育委員会	2000	『千代北町遺跡第9地点』小田原市文化財調査報告書第87集
186	上山神	(河合英夫)	1988	『上山神』『第9回 三県シンポジウム 東日本の弥生墓制』
187	山ノ神	小田原市教育委員会	1970	『小田原市山ノ神遺跡発掘調査報告』小田原市文化財調査報告書第3集
188	久野大畠	(赤星直忠・岡本勇)	1979	『神奈川県史 資料編 20 考古資料』
189	山神下	山神下遺跡発掘調査団	1989	『山神下遺跡』
190	多古(白山神社境内)	神奈川県立博物館	1969	『神奈川県考古資料集成 1 弥生式土器』
	〃(白山)	(杉山博久)	1970	『付編 山ノ神遺跡周辺の弥生中期の遺跡とその出土資料』『小田原市山ノ神遺跡発掘調査報告』小田原市文化財調査報告書第3集
	〃	神奈川県立博物館	1973	『神奈川県考古資料集成 5 弥生式土器(2)』
	〃(久野白山)	(赤星直忠・岡本勇)	1979	『神奈川県史 資料編 20 考古資料』

番号	遺跡名	編集・発行組織（報文執筆者）	発行年	報文名・書名
191	久野北側下	玉川文化財研究所	1996	『久野北側下遺跡第Ⅲ地点 発掘調査報告書』
192	久野中宿	（赤星直忠・岡本 勇）	1979	『神奈川県史 資料編 20 考古資料』
	“	神奈川県立博物館	1973	『神奈川県考古資料集成 5 弥生式土器（2）』
193	諏訪の前	小田原考古学研究会	1971	『小田原市諏訪の前遺跡』小田原考古学研究会調査報告書2
194	久野多古墳	小田原市教育委員会	2000	『久野多古墳遺跡第Ⅲ地点』小田原市文化財調査報告第79集
195	谷津（小田原）	（杉原莊介）	1968	『南関東地方』『弥生式土器集成 本編2』
196	小田原城三の丸	（財）かながわ考古学財団	2002	『小田原城三の丸 杉浦平太夫邸跡第Ⅲ地点』かながわ考古学財団調査報告141
箱根町				
197	仙石原	（赤星直忠・岡本 勇）	1979	『神奈川県史 資料編 20 考古資料』

神奈川県横穴墓文献一覧

古墳時代プロジェクトチーム

例 言

1. 本一覧は、神奈川県内の横穴墓に関する文献を市町村別（横浜市・川崎市は区別）・発行年順にまとめたものである。
2. 神奈川県全般及び複数の市町村にまたがる文献については、総論として一括した。また、神奈川県を含めた広範な地域を対象とした文献についても、総論にまとめた。
3. 県史・市史・区史・町史に一括して掲載されている横穴墓（群）については、独立して個別に取り扱った。
4. 文献は、発行年（西暦）・著者名・論文名（書名）・掲載誌（号・巻）・出版社（研究団体）の順に記載した。

総 論

- 1894 阿部正功 「武藏二於ケル貝塚・横穴・其他遺跡地名表」『東京人類学会雑誌』第21号
- 1902 林 五策 「相模の横穴」『人類学雑誌』第17巻188号
- 1922 小松真一 「武藏國南部の横穴群に就いて」『人類学雑誌』第37巻6号
- 1924 石野 琴 「武藏相模に於ける古墳横穴及び遺物」『武相の古代文化』
- 1926 石野 琴 「横浜及び付近の古墳と横穴」『考古学雑誌』第16巻12号
- 1930 赤星直忠 「三浦半島の横穴」『考古学』第1巻2号
- 1953 石野 琴 「神奈川県大綱2 横浜・川崎」 武相出版社
- 1956 石野 琴 「神奈川県大綱4 湘東・湘中」 武相出版社
- 1958 石野 琴 「神奈川県大綱3 鎌倉・三浦・湘南」 武相学園
- 1961 石野 琴 「神奈川県大綱5 湘西・湘北」 武相学園
- 1961 後藤守一 「多摩丘陵地域における古墳及び横穴の調査」『東京都文化財調査報告書』10号
- 1961 二戸芳雄 「武相における横穴古墳研究小史」『立正考古』19号
- 1962 赤星直忠 「横穴の伝播」『新国学』第一号
- 1965 佐藤興二 「古墳時代後期における横穴墓の様相」『駿台史学』16号
- 1966 阿部泰子 「横穴被葬者における一考察」『考古学雑誌』第52巻2号
- 1970 赤星直忠 「穴の考古学」 学生社
- 1970 赤星直忠 「神奈川県における横穴古墳の線刻壁画」『考古学ジャーナル』第48号 ニューサイエンス社
- 1975 吉田章一郎編 「横穴墓総観」『歴史読本』20巻8号
- 1976 赤星直忠 「横穴の話（横穴の編年）」「南関東の考古学諸問題」
- 1978 杉山博久 「大磯丘陵の横穴墓群」『小田原地方史研究』八 小田原地方史研究会
- 1980 池上 悟 「横穴墓」 ニューサイエンス社
- 1980 金井琢良一 「関東地方横穴墓地名表」『台地研究』No20
- 1980 武藏大学人類・考古学研究会 「神奈川県における横穴墓の分布」「えとのす」第13号
- 1980 杉山博久 「神奈川の横穴墓群」「古代探査」早稲田大学出版部
- 1980 杉山博久 「相模国における古墳文化の展開」「かながわ風土記」第33号
- 1982 池上 悟 「東国横穴墓の一様相」「立正史学」第52号
- 1982 松本 健 「南武藏の横穴墓」「史學」第52巻6号
- 1983 斎藤 忠・杉山博久編 「日本横穴地名表」吉川弘文館
- 1985 明石 新 「相模川流域の横穴墓」 平塚市博物館

- 1986 田村良照 「鶴見川及び多摩川下流域における横穴墓の様相」「川崎市内における横穴墓群の調査」玉川文化財研究所
- 1987 藤本健二 「相模川流域における横穴墓について」「湘南考古学同好会々報」28
- 1988 吉田章一郎 「神奈川県酒匂川流域の横穴墓と古墳」「考古学論考 下」斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会
- 1988 杉山博久 「相模国日川流域の横穴墓群」「考古学論考 下」斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会
- 1988 上田 煙 「神奈川県の横穴墓研究の歴史」「國學院大学考古学資料館紀要」第5輯
- 1989 上田 煙 「高棺座について」「神奈川考古」第5号
- 1989 梶ヶ山真理 「出土人骨から見た武藏・相模の横穴墓の様相」「立正考古」第29号
- 1990 白州信哉 「境川及びその支流における横穴墓について(上・下)」「湘南考古学同好会々報」39・40
- 1991 神奈川県立埋蔵文化財センター 「横穴墓の謎」かながわの遺跡展パンフレット
- 1991 上田 煙・長谷川厚・近野正幸 「神奈川県の横穴墓」「関東横穴墓遺跡検討会資料」茨城県考古学会
- 1991 上田 煙 「神奈川県の装飾横穴墓」「湘南考古学同好会々報」42
- 1991 池上 悟 「東国横穴墓の形式と伝播」「おおいた考古」第4集
- 1992 水野敏典 「群集墳の一形態としての横穴墓」「古代」第93号
- 1992 池上 悟 「南武藏における古墳終末期の様相」「国立歴史民俗博物館研究報告」第44集
- 1993 上田 煙 「横穴墓」「かながわの考古学」第3集 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 1993 木川仁一 「多摩川流域における横穴の構造と社会背景」「東京考古」11 東京考古談話会
- 1994 神奈川県考古学会 「横穴墓とは何か」
- 1994 池上 悟 「東国横穴墓の形式と交流」「日本古代史叢考—高寫正人先生古希賀論文集—」
- 1994 松崎元樹・大西雅也 「境川流域の横穴墓について」「研究論集Ⅳ」東京都埋蔵文化財センター
- 1994 桜土手古墳展示館 「西湖の横穴墓」
- 1995~2002 古墳時代研究プロジェクト 「横穴墓の研究(1)~(8)」「かながわの考古学」第5集 『研究紀要』1~7
神奈川県立埋蔵文化財センター・財団法人かながわ考古学財団
- 1999 明石 新 「大佐郡域の横穴墓の様相」「湘南考古学同好会々報」77
- 2000~2002 田村良照 「相模の横穴墓(1)~(4)」「湘南考古学同好会々報」80・83・84・88
- 2001 平塚市博物館 「相国寺の古墳—相模川流域の古墳時代—」
- 2002 田村良照 「南武藏南部の横穴墓」「考古論叢神奈川」第十集
- 2002 植山英史・柏木善治 「関東南部の装飾された古墳(横穴墓)」「装飾古墳の展開」埋蔵文化財研究会
- 横浜市(鶴見区)**
- 1908 大野延太郎 「武藏駒岡新発見の横穴」「考古界」第7巻8号
- 1909 和田千吉 「武藏国駒岡の古墳発掘」「考古界」第8巻6号
- 1926 大野延太郎 「武藏駒岡の横穴に就て」「武藏野」8巻1号
- 1926 八幡一郎 「鶴見花月園内に発見された横穴」「武藏野」8巻3号
- 1972 井上義弘 「横浜市鶴見区駒岡遺跡群調査報告」「昭和46年度横浜市埋蔵文化財調査報告書」
- 1979 赤星直志 「岩瀬山横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1997 青木健二他 「馬場3丁目横穴墓群」「日本窓業史研究所報告」第49冊
- 横浜市(神奈川区) 該当なし**
- 横浜市(西区)**
- 1962 石野 勇 「神奈川県横浜市浅間神社境内横穴群」「日本考古学年報」11
- 1982 佐藤安平 「横浜市西区浅間下横穴群調査概報」同調査団
- 横浜市(中区) 該当なし**
- 横浜市(南区)**
- 1932 白井光太郎 「武藏国久良郡石川中村穴居記」「ドルメン」9号

- 1977 柳原末治・末沢容一「殿ヶ谷横穴古墳」「日本考古学年報」28
- 1994 田村良照『横浜市南区中里横穴墓発掘調査報告書』同調査団
横浜市（保土ヶ谷区）該当なし
横浜市（磯子区）
- 1958 石野 梢『横浜市磯子区森町（離山）蛇山横穴群』『日本考古学年報』7
- 1979 赤星直忠『屏風浦小学校内横穴』『神奈川県史』資料編20 考古資料
横浜市（金沢区）
- 1971 井上義弘『横浜市金沢区富岡町長昌寺前横穴群発掘調査報告書』『昭和46年度横浜市埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）』
- 1979 赤星直忠『長昌寺前横穴群』『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1999 長谷川厚他「篠利谷東6丁目西地区やぐら群・谷津町北地区やぐら群」「かながわ考古学財団調査報告」63
- 2000 長谷川厚他「湘戸町やぐら群・横穴墓」「かながわ考古学財団調査報告」86
- 横浜市（港北区）**
- 1887 山崎寅方「武藏国橋街郡大曾根太尾二村の横穴」「東京人類学界雑誌」21号
- 1966 清水潤三「神奈川県横浜市日吉横穴」「日本考古学年報」16
- 1971 佐藤安平他「横浜市港北区高田町道路調査報告」「昭和45年度横浜市埋蔵文化財調査報告書（2）」
- 1984 鈴木重信『横浜市港北区矢上ノ町道路・矢上上ノ町横穴墓B支群発掘調査概報』横浜市教育委員会
- 1988 長谷川厚「新吉田町四ヶ家横穴墓群」神奈川県立埋蔵文化財センター
- 1989 関澤 亮他「新吉田町四ヶ家横穴墓B群」同調査団
- 1990 関澤 亮他「新吉田町四ヶ家横穴墓群」同調査団
- 1990 田村良照「諏訪下北遺跡」同調査団
- 1992 林原利明「新吉田町俵地区横穴墓」同調査団
- 1999 鈴木重信他「箕輪洞谷横穴墓群発掘調査報告書」財団法人横浜市ふるさと歴史財団
横浜市（戸塚区）
- 1975 池上 悟「横浜市矢倉地横穴墓群の調査」「考古学ジャーナル」第103号 ニューサイエンス社
- 1976 佐藤安平「矢倉地横穴墓群」「日本考古学年報」27
- 横浜市（港南区）**
- 1975 川上久夫他「港南台」「神奈川県埋蔵文化財調査報告書」9
- 1979 港南の歴史発刊実行委員会「①区内の古墳」「港南の歴史」
- 横浜市（旭区）**該当なし **横浜市（緑区）**該当なし
横浜市（瀬谷区）
- 1981 同本孝之「中屋敷横穴墓調査報告」「神奈川県埋蔵文化財調査報告」21
- 横浜市（栄区）**
- 1959 赤星直忠「殿谷横穴群」「鎌倉市史」考古編
- 1959 赤星直忠「滝ヶ久保横穴群」「鎌倉市史」考古編
- 1959 赤星直忠「間山横穴群」「鎌倉市史」考古編
- 1959 赤星直忠「大橋谷横穴群」「鎌倉市史」考古編
- 1959 赤星直忠「あぶな谷横穴群」「鎌倉市史」考古編
- 1959 赤星直忠「中居横穴群」「鎌倉市史」考古編
- 1959 赤星直忠「東谷横穴群」「鎌倉市史」考古編
- 1964 岩木義雄「横浜市戸塚区鶴川流域の横穴群について」鶴沼女子高等学校地質研究部
- 1969 佐野大和「七石山遺跡調査報告書（1）」横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 1970 佐野大和・鈴木重信「七石山遺跡調査報告書（2）」

- 1976 大津一男 「七石山北部横穴古墳にみられる漆喰と線刻画」『調査研究集録』第1冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 1979 小出義治他 「横浜市戸塚区桂町遺跡群発掘調査報告書」 同調査団
- 1979 赤星直忠 「宮の前横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1980 明星大学考古学研究部 「長谷久保遺跡・七石山横穴群」『明星大学考古学研究部研究報告』第1集
- 横浜市（泉区）該当なし
- 横浜市（青葉区）
- 1927 谷川磐雄 「家形彫刻を有する横穴」『考古学雑誌』第17巻1号
- 1928 高橋光藏 「神奈川県都筑郡山内村石川の家形彫刻を有する横穴」『史跡名勝天然記念物』三一七
- 1933 石野 埼 「武藏国都筑郡中里村市ヶ尾横穴群調査報告」『考古学雑誌』第23巻7号
- 1935 石野 埼 「武藏国都筑郡中里村市ヶ尾横穴群調査記」『神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告書』三
- 1942 江坂輝彌 「旧神奈川県山内村荏田・小黒谷横穴古墳群調査概報」「民族文化」第4巻2号
- 1961 石野 埼 「横浜市港北区市ヶ尾横穴C群」「日本考古学年報」9
- 1961 石野 埼 「港北区元石川町荏子田かんかん穴横穴」「日本考古学年報」9
- 1961 二戸芳雄 「横浜市港北区元石川の横穴」「立正考古」17号
- 1962 村田文夫 「横浜市港北区元石川の横穴古墳群」「立正考古」21号
- 1971 合田芳正他 「上谷本第2遺跡A地区・B地区発掘調査報告書」 同調査団
- 1971 佐藤安平 「上谷本第2地区（横穴古墳群）調査報告書」
- 1973 上野佳也 「小黒谷横穴群」「日本考古学年報」24
- 1973 池上 悟 「小黒谷横穴群の調査」「小黒谷遺跡発掘調査報告書」 同調査団
- 1978 青木建二他 「下根横穴群」「市ヶ尾・川和地区内遺跡群」
- 1978 青木建二他 「天ヶ谷横穴群」「市ヶ尾・川和地区内遺跡群」
- 1979 赤星直忠 「市ヶ尾横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1981 稲生典太郎・合田芳正 「上谷本横穴群」「日本考古学年報」21・22・23
- 1982 甘粕 健 「市ヶ尾古墳群の発掘」「横浜市史」資料編二十一
- 1984 池上 悟他 「熊ヶ谷横穴墓群」「奈良地区遺跡群発掘調査報告」II
- 1986 池上 悟他 「熊ヶ谷東遺跡」「奈良地区遺跡群発掘調査報告」IV
- 1986 土井永好 「寺家町所在の横穴」「緑区史」資料編第二卷
- 1986 土井永好 「荏子田横穴」「緑区史」資料編第二卷
- 1986 横田信隆 「市ヶ尾横穴群」「緑区史」資料編第二卷
- 1986 土井永好 「熊ヶ谷横穴墓群」「緑区史」資料編第二卷
- 1986 今井康博 「下根・天ヶ谷横穴群」「緑区史」資料編第二卷
- 1991 鹿島保宏他 「市ヶ尾横穴古墳群（B群）前庭部試掘調査報告」(財)横浜市ふるさと歴史財団
- 1994 大川 清・吉田好孝・渡辺 務 「横浜市大場横穴墓群F・G・H横穴墓群の調査」「第18回神奈川県道路調査・研究発表会発表要旨」
- 1998 鹿島保宏他 「市ヶ尾18街区（大場第二地区21街区）横穴墓群発掘調査報告書」(財)横浜市ふるさと歴史財団
- 横浜市（都筑区）
- 1957 石野 埼 「神奈川県横浜市折本横穴群」「日本考古学年報」5
- 1957 坂詰秀一 「横浜市港北区東方の横穴」「立正考古」11・12号
- 1977 板本 彰 「横浜市矢崎山遺跡の調査」「第1回神奈川県道路調査・研究発表会発表要旨」
- 1985 児島英夫他 「東方横穴墓群発掘調査報告書」 同調査団
- 1986 児島英夫他 「東方横穴墓群第2次調査発掘報告書」 同調査団
- 1987 村上 健 「東方横穴群」「緑区史」資料編第二卷

- 1992 坂上克弘他「上の山遺跡」「港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 X III」横浜市埋蔵文化財センター
- 1993 鹿島保宏・鈴木重信「横浜市綱崎山横穴墓群の調査」「第17回神奈川県遺跡調査研究発表会発表要旨」
- 1996 武井則道「C18横穴・矢崎山古墳」「港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 XX」(財)横浜市ふるさと歴史財団
- 1999 長谷川厚他「新宮台横穴墓」「かながわ考古学財団調査報告」82
川崎市(川崎区)該当なし
川崎市(幸区)
- 1982 東原信行「川崎市夢見ヶ丘横穴墓発掘調査報告」「川崎市文化財調査集録」17
川崎市(中原区)
- 1953 近森 正「金堀山横穴古墳発掘報告」「アーケオロジー」18号
- 1955 古江光仁他「井田伊勢宮前横穴古墳群調査記」川崎市教育委員会・私立橋高等学校・私立川崎高等学校
- 1956 古江光仁・渡辺久喜「川崎市井田伊勢宮金堀横穴群第七号穴調査」川崎市教育委員会・私立橋高等学校
- 1979 赤星直忠「井田伊勢宮前横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠「伊勢宮金堀横穴」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1988 伊東秀吉「井田金堀横穴墓群」「川崎市史」資料編1 考古・文献・美術工芸
- 川崎市(高津区)**
- 1960 二戸芳雄「川崎市新作の横穴古墳」「立正考古」15号
- 1962 二戸芳雄「川崎市新作に於ける横穴」「立正考古」20号
- 1963 新井 清「川崎市下作延津田山付近に於ける石棺を伴う横穴墓の発見について」「たちばな」第27号
- 1966 伊東秀吉「川崎市下作延日向横穴古墳群調査報告」「川崎市文化財集録」2
- 1966 新井 清・持田春吉「川崎市津田山横穴墓群概要」「考古たちばな」第5・6合併号
- 1977 東原信行「川崎市下作延福ノ円横穴古墳の調査」「第1回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨」
- 1978 竹石健二他「川崎市久地西前田横穴墓発掘調査報告書」同調査団
- 1979 伊東秀吉・大坪宣雄「川崎市下作延日向横穴墓群の調査」「第3回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨」
- 1979 赤星直忠「中野橋横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠「平瀬隧道際横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠「日向横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1980 東原信行「川崎市高津区下作延福ノ円横穴古墳発掘調査報告」「川崎市文化財調査集録」15
- 1981 野中和夫・竹石健二「川崎市久地西前田横穴墓群の調査」「第5回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨」
- 1982 竹石健二「津田山丘陵の横穴墓について」「研究紀要」第二十六号 日本大学人文科学研究所
- 1986 伊東秀吉「川崎市高津区根谷横穴古墳調査報告」「川崎市文化財調査集録」22
- 1986 田村良照「間際横穴墓群発掘調査報告書」「川崎市内における横穴墓群の調査」玉川文化財研究所
- 1986 田村良照「上作延横穴墓群発掘調査報告書」「川崎市内における横穴墓群の調査」玉川文化財研究所
- 1986 田村良照「蟹ヶ谷横穴墓群発掘調査報告書」「川崎市内における横穴墓群の調査」玉川文化財研究所
- 1988 関澤 光也「神奈川県川崎市高津区千年B区域横穴墓群」同調査団
- 1988 新井 清「平瀬川隧道際横穴墓」「川崎市史」資料編1 考古・文献・美術工芸
- 1988 新井 清「浄元寺裏横穴墓群」「川崎市史」資料編1 考古・文献・美術工芸
- 1988 新井 清「津田山久地横穴墓」「川崎市史」資料編1 考古・文献・美術工芸
- 1990 持田春吉他「緑ヶ丘塗園南横穴墓群発掘調査報告書」同調査団
- 1996 後藤喜八郎「川崎市久本横穴墓群」「第19回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨」
- 1996 後藤喜八郎「久本横穴墓群発掘調査報告書」同調査団
- 1997 小池 啓他「久本桃之園横穴墓群」同調査団

- 1997 竹石健二・野中和夫他「川崎市久地西前田横穴墓群（第2次）」『第21回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
- 1998 竹石健二他「久地西前田横穴墓群」同調査団
- 2000 橋本直起夫・辻本裕也・野中和夫「久地西前田第2号横穴墓にみる葬送儀礼に関する一考察」『川崎市文化財調査集録』35
- 川崎市（宮前区）該当なし**
- 川崎市（多摩区）**
- 1887 岡本高介他「登戸在生田村横穴」『東京人類学会報告』16号
- 1970 伊東秀吉「川崎市生田長者穴横穴古墳群調査報告」『川崎市文化財調査集録』5
- 1979 赤星直忠「長者穴横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1981 伊東秀吉「長者穴横穴群」「日本考古学年報」21・22・23
- 川崎市（麻生区）**
- 1974 梶口清之・金子彦彦「神奈川県早野横穴の調査」「考古学ジャーナル」第91号 ニューサイエンス社
- 1974 梶口清之・金子彦彦「川崎市多摩区早野横穴古墳発掘調査報告」「川崎市文化財調査集録』9
- 1975 三輪修三・村田文夫「川崎市多摩区早野横穴古墳縁石の一考察」「三浦古文化」第18号
- 1978 東原信行「川崎市多摩区麻生台横穴古墳発掘調査概報」同調査団
- 1979 赤星直忠「早野横穴」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1982 村田文夫「永仁六年」在銘の再利用された横穴古墳」「三浦古文化」第31号
- 1984 東原信行「川崎市敷北西部谷本川流域の横穴古墳群」「川崎市文化財調査集録』20
- 1984 大竹憲治「東国の大横穴墓発見・確に関する資料」「考古学ジャーナル」第240号
- 1988 稲村晃嗣「川井田下横穴墓」「川崎市史」資料編1 考古・文献・美術工芸
- 1988 村田文夫「上麻生仲村横穴墓」「川崎市史」資料編1 考古・文献・美術工芸
- 1993 村田文夫他「王禅寺白山横穴墓群の調査」「川崎市市民ミュージアム考古学叢書」1
- 横須賀市**
- 1886 浅井郁太郎「浦賀近傍ノ横穴」「東京人類学会報告」10号
- 1924 赤星直忠「馬らしき？陰刻ある横穴」「考古学雑誌」第14巻11号
- 1925 赤星直忠「相州鶴居の横穴（一～三）」「考古学雑誌」第15巻8・9・11号
- 1927 赤星直忠「三浦記（一・三）」「考古学雑誌」第17巻4・10号
- 1928 赤星直忠「相模馬場横穴」「考古学雑誌」第18巻9号
- 1929 赤星直忠「相模佐島横穴」「考古学雑誌」第19巻2号
- 1934 石野瑛「三浦郡佐島の横穴と五輪塔」「考古集録」1
- 1935 赤星直忠「浦賀町吉井横穴」「考古学雑誌」第24巻5号
- 1942 赤星直忠「神奈川県浦賀町沼田城山横穴について」「考古学雑誌」第32巻4号
- 1954 赤星直忠「神奈川県横須賀市鶴居横穴」「日本考古学年報」2
- 1958 赤星直忠「横須賀市久里浜こんびら山古墳並横穴群調査概報」「横須賀考古学会年報」No3
- 1960 赤星直忠「横須賀市なはま横穴群」「横須賀市博物館研究報告（人文）」4
- 1961 赤星直忠「なはま横穴群第二次」「横須賀市博物館研究報告（人文）」5
- 1962 赤星直忠「神奈川県横須賀市浜横穴群」「日本考古学年報」11
- 1963 赤星直忠「神奈川県横須賀市こんびら山古墳並横穴群」「日本考古学年報」10
- 1964 赤星直忠「神奈川県横須賀市浜遺跡」「日本考古学年報」12
- 1966 赤星直忠「たたら浜横穴群概要」「三浦古文化」第1号
- 1979 赤星直忠「田戸台横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠「鳥が崎横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料

- 1979 赤星直忠 「吉井城山横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「佐島横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「なはま横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1981 赤星直忠他 「横須賀市坂本横穴の調査」 同調査団
- 1985 大塚義弘他 「昭和58年度博物館教室「三浦半島の考古学」野外学習調査概報」「横須賀市博物館報」No32
- 1993 塚田明治 「横須賀市「井田横穴群」の調査」 急傾斜地区埋蔵文化財調査団
- 1994 玉口時雄他 「東谷横穴墓群」 同調査団
- 1995 川上久夫他 「井田横穴群B 地点の調査」 急傾斜地区埋蔵文化財調査団
- 1998 川上久夫他 「大津町信楽寺横穴群の調査」 同調査団
- 1998 野内秀明 「吉井横穴群」「横須賀市文化財発掘調査概報集VI」 横須賀市文化財発掘調査報告書第32集
- 1999 斎藤規彰・井間文明 「高山横穴群」「かながわ考古学財団調査報告」62
- 2000 上田 薫・依田亮一 「高山横穴墓群（2次）」「かながわ考古学財団調査報告」87
- 2000 青木 司他 「田戸台横穴墓群発掘調査報告」「埋蔵文化財発掘調査概報集VII」 横須賀市文化財調査報告書第35集
- 平塚市**
- 1898 八木英三郎 「相模國大磯在山背村字萬田八重庭の横穴」「東京人類学会雑誌」152号
- 1933 石野 琢 「相模國中郡旭村根坂間横穴群調査報告」「史跡名勝天然記念物」8卷7号
- 1935 石野 琢 「中郡旭村根坂間横穴群調査報告」「考古叢録」第二 武相考古學會
- 1976 杉山博久他 「平塚市内の横穴墓群（I）」「平塚市文化財調査報告書」第12集
- 1977 杉山博久 「平塚市内の横穴墓群（II）」「平塚市文化財調査報告書」第13集
- 1979 赤星直忠 「下高根横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1879 赤星直忠 「根坂間横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1983 明石 新 「平塚市岡崎より発見された横穴墓について」「自然と文化」第6号 平塚市博物館
- 1987 杉山博久 「万田八重庭・宮ノ入横穴墓群」 同調査団
- 1990 明石 新 「根坂間横穴墓B支群」「平塚市埋蔵文化財シリーズ」14
- 1994 明石 新 「岡崎城跡A・城山横穴墓群」「平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書」7
- 1994 明石 新 「岡崎城跡A・城山横穴群」「平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書」8
- 1995 上原正人 「根坂間横穴群第3地点」 平塚市遺跡調査会
- 1996 上原正人 「万田八重庭横穴群」「平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書」9
- 1998 岡本孝之 「1898（明治31）年10月、平塚市萬田八重庭横穴墓の調査について」「湘南考古学同好会々報」71
- 1998 岡本孝之 「その後の万田八重庭横穴墓群」「湘南考古学同好会々報」72
- 1999 長谷川厚 「根坂間横穴群」「平塚市史」11上 別編考古（1）
- 1999 長谷川厚 「高根横穴群」「平塚市史」11上 別編考古（1）
- 1999 長谷川厚 「城山横穴群」「平塚市史」11上 別編考古（1）
- 1999 長谷川厚 「万田八重庭横穴群」「平塚市史」11上 別編考古（1）
- 1999 長谷川厚 「万田熊之台横穴群」「平塚市史」11上 别編考古（1）
- 1999 長谷川厚 「万田宮ノ入横穴群」「平塚市史」11上 别編考古（1）
- 鎌倉市**
- 1936 赤星直忠 「長楽寺横穴」「鎌倉」第2巻3号
- 1938 赤星直忠 「千葉ヶ谷横穴」「鎌倉」第4巻3号
- 1948 赤星直忠 「相模洗馬谷横穴群について」「考古学雑誌」第35卷1・2合併号
- 1948 三上次男 「鎌倉市福村ヶ崎横穴古墳群について」「科学世界」第23巻1号
- 1950 吉田 格 「鎌倉市山崎の横穴」「武藏野」第31巻3・4合併号

- 1951 原 鮎彦 「一ノ谷横穴古墳群発掘報告」『考古学雑誌』第37巻4号
- 1959 赤星直忠 「陣籠山横穴」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「笛田横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「狐坂横穴」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「大工谷戸横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「本町上横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「上町屋横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「山崎横穴群A区」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「山崎横穴群B区」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「垣根谷奥横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「清水塚横穴」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「東谷戸横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「倉久保横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「岡本横穴」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「洗馬谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「善応寺谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「大藏山東横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「大藏山南横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「千葉谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「糸目谷堀並郷内横穴」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「糸目谷斎藤郷内横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「長楽寺横穴」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「長楽寺谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「光則寺谷横穴」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「姥ヶ谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「一ノ谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「腰越横穴」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「室谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「峯横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1962 赤星直忠 「神奈川県鎌倉市笛田横穴群」『日本考古学年報』11
- 1969 赤星直忠 「神奈川県鎌倉市田辺谷横穴」『日本考古学年報』17
- 1979 赤星直忠 「山崎横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「柿の木谷横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「洗馬谷横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「千葉が谷横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「福村が崎横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「峯横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1996 田代都夫他 「施塙寺旧境内遺跡内横穴墓」『中世石窟造構の調査』東国歴史考古学研究所調査研究報告第7集
- 1998 田村良信他 「岩瀬上耕地遺跡」同調査団
- 2002 離 実他 「二ノ谷横穴群」『鎌倉の横穴墓』東国歴史考古学研究所調査研究報告第30集
- 2002 土屋浩美 「寺分藤塚道路」『鎌倉の横穴墓』東国歴史考古学研究所調査研究報告第30集
- 2002 離 実 「岩瀬上耕地遺跡」『鎌倉の横穴墓』東国歴史考古学研究所調査研究報告第30集

藤沢市

- 1902 井上欣一他 「長後小誌」
- 1925 石野 楠 「相模國高座郡鎌谷村の横穴と綾瀬村の石棺」『考古学雑誌』第15巻3号
- 1934 矢島栄一 「神奈川県鎌倉郡片瀬川左岸の遺跡及び遺物に就て」『考古学雑誌』第24巻8号
- 1959 寺田兼方・江原昭善 「代官山横穴古墳」 藤沢市教育委員会
- 1959 赤星直忠 「竜口寺内横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「不動谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「新林谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「森久谷横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「向川名横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1959 赤星直忠 「神光寺南横穴群」『鎌倉市史』考古編
- 1966 寺田兼方 「大庭折戸の古墳」『藤沢市文化財調査報告書』第三集
- 1970 寺田兼方 「代官山横穴群」『藤沢市史』第一巻
- 1970 寺田兼方 「折戸横穴群」『藤沢市史』第一巻
- 1970 寺田兼方 「川名横穴群」『藤沢市史』第一巻
- 1977 寺田兼方・中嶋 登 「藤沢市川名新林右遺跡・川名新林右遺跡の調査」「第1回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨」
- 1979 寺田兼方 「藤沢市川名神光寺付近横穴古墳群調査概報」『藤沢市文化財調査報告書』第十四集
- 1979 赤星直忠 「折戸横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「代官山横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「新林外山腹横穴」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1980 寺田兼方他 「藤沢市川名新林横穴群調査概報」『藤沢市文化財調査報告書』第十五集
- 1984 寺田兼方 「藤沢市川名新林右西斜面の第二号横穴墓出土の環頭大刀について」「藤沢市文化財調査報告書」第十九集
- 1984 上田 薫・砂田佳弘 「藤沢市代官山遺跡の調査」「第8回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨」
- 1985・86・87・89 上田 薫 「藤沢の横穴墓(一~七)」「湘南考古学同好会々報」21・25・26・28・29・30・36
- 1986 上田 薫他 「代官山遺跡」「神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告」11
- 1987 寺田兼方他 「藤沢市川名849番地横穴墓群発掘調査報告書」 同調査団
- 1989 藤原直人 「川名森久地区遺跡群の調査」「湘南考古学同好会々報」35
- 1996 渡辺史他 「藤沢市川名森久地区埋蔵文化財発掘調査報告書」Ⅱ 同調査団
- 2002 津田憲司・西野吉論 「新林右横穴群群(藤沢市No14)遺跡」「湘南考古学同好会々報」86

小田原市

- 1935 石野 楠 「足柄下郡辯天山横穴群調査記」「考古集録」二 武相考古會
- 1959 赤星直忠 「足柄下郡橋町の横穴古墳」
- 1962 赤星直忠 「神奈川県足柄下郡橋町横穴群」「日本考古学年報」11
- 1979 赤星直忠 「弁天山横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「羽根尾横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「小竹横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1986 赤星直忠 「旧橋地区に於ける横穴墓群」「小田原市郷土文化館研究報告」No23
- 1995 杉山幾一 「弁天山横穴墓群」「小田原市史」資料編 原始・古代・中世I
- 1995 杉山幾一 「橋地区横穴墓群」「小田原市史」資料編 原始・古代・中世I
- 1996 田村良照 「小田原市羽根尾横穴墓群」「第19回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨」

茅ヶ崎市

- 1923 山田蔵太郎 「茅ヶ崎赤羽根在の横穴」『武相研究』6 武相考古学会
- 1939 赤星直忠 「組合式石棺を出した相模甘沼横穴群について」『考古学雑誌』第29巻8号
- 1964 赤星直忠 「茅ヶ崎市の古墳と横穴」『茅ヶ崎市文化財資料集』第三集
- 1969 赤星直忠 「神奈川県茅ヶ崎市八口横穴群」『日本考古学年報』17
- 1975 赤星直忠 「茅ヶ崎市鎌谷横穴群調査報告」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告』8
- 1976 1983 富永富士夫・大村浩司 「香川鎌山横穴調査報告」『茅ヶ崎市文化財資料集』第9集
- 1979 赤星直忠 「鎌谷横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1997 高村公之他 「芹沢配水池周辺遺跡群」『かながわ考古学財団調査報告』28
- 1999 井辺一徳 「白久保遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』60

逗子市

- 1925 赤星直忠 「逗子町の横穴」『考古学雑誌』第16巻4号
- 1954 赤星直忠 「逗子市山野根横穴群」『神奈川県文化財調査報告』第21集
- 1959 赤星直忠 「新宿横穴群」「鎌倉市史」考古編
- 1959 赤星直忠 「小坪横穴群」「鎌倉市史」考古編
- 1959 赤星直忠 「山野根横穴群」「鎌倉市史」考古編
- 1963 赤星直忠 「神奈川県逗子市山野根横穴群」『日本考古学年報』6
- 1970 赤星直忠 「逗子市沼間横穴調査概報」「横須賀考古学会年報」第15号
- 1971 赤星直忠 「沼間桐ヶ谷氏先祖やぐら横穴調査概報」「逗子市文化財調査報告書」第二集
- 1971 赤星直忠 「沼間堀の内横穴群」「逗子市文化財調査報告書」第二集
- 1972 赤星直忠 「逗子駅裏山横穴群」「逗子市文化財調査報告書」第三集
- 1972 赤星直忠 「山野根切崩山腹発見横穴群」「逗子市文化財調査報告書」第三集
- 1972 赤星直忠 「山野根本田光氏裏山横穴群」「逗子市文化財調査報告書」第三集
- 1972 赤星直忠 「山野根本田庄作氏裏山横穴群」「逗子市文化財調査報告書」第三集
- 1972 赤星直忠 「山野根谷奥横穴群」「逗子市文化財調査報告書」第三集
- 1972 赤星直忠 「山野根熊野神社境内横穴群」「逗子市文化財調査報告書」第三集
- 1972 赤星直忠 「山野根居合口横穴群」「逗子市文化財調査報告書」第三集
- 1972 赤星直忠 「山野根仲の谷横穴」「逗子市文化財調査報告書」第三集
- 1972 赤星直忠 「久木小山氏裏山横穴群」「逗子市文化財調査報告書」第三集
- 1972 赤星直忠 「久木岩殿寺横穴」「逗子市文化財調査報告書」第三集
- 1972 赤星直忠 「久木岩殿寺蛇やぐら横穴」「逗子市文化財調査報告書」第三集
- 1973 赤星直忠 「新宿横穴群」「逗子市文化財調査報告書」第四集
- 1973 赤星直忠 「うちで横穴群」「逗子市文化財調査報告書」第四集
- 1973 赤星直忠 「新宿海岸横穴群」「逗子市文化財調査報告書」第四集
- 1991 塚田明治他 「逗子市久木1丁目横穴群・沼間やぐら群の調査」急傾斜地区埋蔵文化財調査団
- 1995 赤星直忠 「新宿横穴群」「逗子市史」別編II 考古・建築・美術・漁業編
- 1997 斎木秀雄他 「久木横穴群の調査」同調査団
- 1998 斎木秀雄他 「久木5丁目横穴群の調査」同調査団
- 1998 軽部一徳・降矢順子 「久木4丁目横穴・やぐら群の調査」同調査団
- 1999 桂潤規彰・井闇文男 「けんじが谷横穴墓群及びぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』62

相模原市

- 1978 青木 翌 「御所之入横穴」同調査団
- 1980 青木 翌 「御所之入横穴」『日本考古学年報』31

1963 江藤 昭也 「古瀬横穴古墳」同調査団

三浦市

1950 赤星直忠 「三浦郡菊名町妻造妻入家形横穴」「神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告書」第十七輯

1954 浜田勘太 「三崎の古墳」「三崎郷土史」第九輯

1954 赤星直忠 「神奈川県三浦郡三戸横穴群」「日本考古学年報」2

1954 赤星直忠 「神奈川県三浦郡菊名横穴群」「日本考古学年報」2

1954 赤星直忠 「神奈川県三浦郡菊名白山社境内横穴群」「日本考古学年報」2

1955 赤星直忠 「神奈川県三浦市窟がり横穴群」「日本考古学年報」4

1964 浜田勘太 「三浦市南下浦町菊名南下浦小学校前横穴古墳調査書」

1969 浜田勘太 「剣崎横穴古墳について」「横須賀考古学会年報」13・14

1975 浜田勘太 「三浦市高抜横穴古墳群について」「横須賀考古学会年報」18

1976 赤星直忠 「江奈横穴群」「日本考古学年報」27

1976 赤星直忠 「三浦市江奈横穴群」「神奈川県埋蔵文化財調査報告」10

1979 赤星直忠 「窪がり横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料

1979 赤星直忠 「中里横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料

1985 飯重一他 「三浦市晴海町横穴群の調査」 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団

1987 岡本 勇他 「三浦市晴海町第2横穴群の調査」 晴海横穴群文化財調査団

1987 赤星直忠他 「三浦市松輪大畠やぐら群の2次調査」 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団

1987 赤星直忠他 「三浦市海外やぐら群の調査」 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団

1987 赤星直忠他 「三浦市三崎町宮城やぐら群の調査」 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団

1988 赤星直忠他 「三浦市和田やぐら群の第2次調査」 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団

1988 岡本 勇他 「高抜横穴群の調査」 三浦市教育委員会

1989 赤星直忠他 「三浦市和田やぐら群の第3次調査」 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団

1990 赤星直忠他 「三浦市矢作第2やぐら群の調査」 急傾斜地区埋蔵文化財調査団

1990 赤星直忠他 「三浦市二町谷横穴群・西野やぐら群・松輪坪井横穴群の調査」 急傾斜地区埋蔵文化財調査団

1991 塚田明治他 「三浦市矢作第3やぐら群の調査・西野やぐら群の第2次調査」 急傾斜地区埋蔵文化財調査団

1994 川上久夫他 「和田やぐら群の第5次調査」 急傾斜地区埋蔵文化財調査団

1995 川上久夫他 「二町谷神明社下海蝕洞窟道路・二町谷横穴群」 急傾斜地区埋蔵文化財調査団

1996 川上久夫他 「和田やぐら群の第7次調査」 急傾斜地区埋蔵文化財調査団

1997 川上久夫他 「矢作第4やぐら群の調査」 矢作やぐら群調査団

1999 上田 薫・依田亮一 「松輪坪井横穴墓群」「かながわ考古学財团調査報告」83

秦野市

1974 曽根博明他 「岩井戸横穴群」「秦野下大根」 秦野市教育委員会

1974 曽根博明他 「久ノ上横穴群」「秦野下大根」 秦野市教育委員会

1975 柳川定春他 「天神脇横穴群緊急発掘調査報告書」「秦野の文化財」第11集 秦野市教育委員会

1975 杉山博久他 「岩井戸横穴墓群の調査概報」 金目川流域横穴墓緊急調査団

1976 杉山博久 「尾尻沢の山横穴墓群」「尾尻八幡山」 尾尻八幡山遺跡調査団

1978 杉山博久 「岩井戸横穴墓群の調査記録(Ⅱ)」 岩井戸横穴墓群調査団

1979 赤星直忠 「尾尻沢ノ上横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料

1979 赤星直忠 「國立神奈川歴史所内横穴」「神奈川県史」資料編20 考古資料

1979 赤星直忠 「岩井戸横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料

1979 赤星直忠 「不弓引横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料

- 1980 杉山博久 「秦野市内の横穴墓群」「秦野の文化財」16集
- 1985 杉山博久 「不弓引横穴墓群」「秦野市史」別巻考古編
- 1985 杉山博久 「天神脇横穴墓群」「秦野市史」別巻考古編
- 1985 杉山博久 「岩井戸横穴墓群」「秦野市史」別巻考古編
- 1985 杉山博久 「久の上横穴墓群」「秦野市史」別巻考古編
- 1985 杉山博久 「落合背戸横穴墓群」「秦野市史」別巻考古編
- 1985 杉山博久 「国立診療所内横穴墓群」「秦野市史」別巻考古編
- 1985 杉山博久 「下丹波原横穴墓群」「秦野市史」別巻考古編
- 1985 杉山博久 「尾尻沢の山横穴墓群」「秦野市史」別巻考古編
- 1997 村上吉正他 「小南遺跡」「かながわ考古学財団調査報告」23
- 1997 下出俊浩 「鶴巻大椿横穴墓群」「秦野の文化財」第33集 秦野市教育委員会
- 1998 後藤喜八郎 「岩井戸横穴墓群発掘調査報告書」 同調査団
- 1998 柏木善治他 「鶴巻大椿遺跡」「かながわ考古学財団調査報告」32

厚木市

- 1962 高瀬慎吾 「林、川瀬氏裏の横穴墳について」「厚木市文化財調査報告書」第三集
- 1966 鈴村 広 「厚木市林横穴古墳調査報告」「厚木市文化財調査報告書」第四集
- 1969 西川 勝他 「厚木市温水大煙横穴古墳発掘調査報告書」 全国共済農業協同組合連合会
- 1979 赤星直忠 「榎田横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「竜鳳寺南横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「大歎寺横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「林横穴群」「神奈川県史」20 考古資料
- 1985 江藤 昭他 「山際横穴古墳」 同調査団
- 1987 藤井秀男他 「飯山横穴古墳」 同調査団
- 1987 藤井秀男 「下知仲道遺跡」 同調査団
- 1993 中村義市 「長坂上横穴墓」「厚木市史」古代資料編（1）
- 1993 北川吉明 「山際横穴墓群」「厚木市史」古代資料編（1）
- 1993 飯田 孝 「林南横穴墓群」「厚木市史」古代資料編（1）
- 1993 飯田 孝 「天神谷戸横穴墓群」「厚木市史」古代資料編（1）
- 1993 望月幹夫 「上荻野丸山横穴墓群」「厚木市史」古代資料編（1）
- 1993 高瀬慎吾 「荻野追越横穴古墳」「厚木市史」古代資料編（1）
- 1993 望月幹夫 「中荻野向山横穴墓群」「厚木市史」古代資料編（1）
- 1993 中村義市 「公所横穴群」「厚木市史」古代資料編（1）
- 1998 藤井秀男 「白坂坂横穴墓群」「厚木市史」古代資料編（2）
- 1998 山田雄二 「岩田山横穴墓」「厚木市史」古代資料編（2）
- 1998 古庄浩明・望月幹夫 「榎田横穴墓群」「厚木市史」古代資料編（2）
- 1998 渡辺 熊 「大畠横穴墓群」「厚木市史」古代資料編（2）
- 1998 井上隆之 「大歎寺横穴墓」「厚木市史」古代資料編（2）

大和市

- 1972 木村賛・高橋昌子 「神奈川県大和市『浅間神社西側横穴』出土人骨」「人類学雑誌」80-2
- 1975 江藤 昭 「下草柳横穴古墳群について」「大和市史研究」創刊号
- 1978 渡辺清助他 「浅間神社西側横穴古墳群発掘調査報告書」「大和市文化財調査報告書」第1集
- 1979 赤星直忠 「浅間神社西横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料

- 1978 曾根博明他 「浅間神社西側横穴古墳群第9号調査報告書」 大和市教育委員会
- 1980 曾根博明他 「下ノ原横穴墓」「大和市文化財調査報告書」 第4集
- 1980 曾根博明他 「公所横穴群」「大和市文化財調査報告書」 第4集
- 1982 相田 煉他 「南善ヶ谷戸横穴墓群」「大和市文化財調査報告書」 第10集
- 1985 森本岩太郎 「大和市南善ヶ谷戸横穴出土人骨について」「大和市文化財調査報告書」 第20集
- 1986 曾根博明 「浅間神社西側横穴墓群」「大和市史」 7 資料編考古
- 1986 曾根博明 「下草柳横穴墓群」「大和市史」 7 資料編考古
- 1986 曾根博明 「南善ヶ谷戸横穴墓群」「大和市史」 7 資料編考古
- 1992 相田 煉 「下草柳九番地横穴墓群遺跡他」「大和市文化財調査報告書」 第49集
- 伊勢原市**
- 1936 石野 勲 「中郡成瀬村の古墳と横穴」「考古集録」第三 武相考古會
- 1979 赤星直忠 「川上横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1990 伊勢原市教育委員会 「上船屋・一ノ郷北遺跡発掘調査報告」「文化財ノート」 第1集
- 1992 立花 実 「三ノ宮・下尾崎遺跡」「文化財ノート」 第2集 伊勢原市教育委員会
- 1994 立花 実他 「三ノ宮・上栗原遺跡」「文化財ノート」 第3集 伊勢原市教育委員会
- 1995 立花 実他 「三ノ宮・下尾崎遺跡 三ノ宮・上栗原遺跡発掘調査報告」「伊勢原市文化財調査報告書」 第17集
- 1996 小寺春人・立花 実 「三ノ宮・下尾崎遺跡 三ノ宮・上栗原遺跡の横穴墓出土の人骨について」「文化財ノート」 第4集 伊勢原市教育委員会
- 海老名市**
- 1958 赤星直忠他 「杉久保土合横穴古墳群調査報告」 海老名町教育委員会
- 1962 石野 勲 「神奈川県高座郡杉久保横穴群」「日本考古学年報」 11
- 1963 石野 勲 「神奈川県高座郡杉窪横穴群」「日本考古学年報」 10
- 1979 赤星直忠 「衛生センターわき横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「杉久保土合横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1983 河野一也他 「杉久保遺跡」「日本庶民史研究所年報」 II
- 1998 福田 良 「上今泉横穴墓群発掘調査報告書」 同調査団
- 1998 國平健三 「上今泉横穴墓群」「海老名市史」 1 資料編 原始・古代
- 1998 國平健三 「杉久保土合横穴墓群」「海老名市史」 1 資料編 原始・古代
- 1998 國平健三 「杉久保下横穴墓群」「海老名市史」 1 資料編 原始・古代
- 1998 國平健三 「杉久保富谷横穴墓群」「海老名市史」 1 資料編 原始・古代
- 1998 國平健三 「本郷池端横穴墓群」「海老名市史」 1 資料編 原始・古代
- 1998 國平健三 「衛生センター藤横穴墓群」「海老名市史」 1 資料編 原始・古代
- 座間市**
- 1956 下津谷達男 「神奈川県座間町鈴鹿横穴古墳」「考古学雑誌」 第41巻4号
- 1964 大場磐雄他 「神奈川県座間町の横穴」「座間町文化財調査報告」 1
- 1966 大場磐雄他 「蟹ヶ沢・鈴鹿遺跡」「座間町文化財調査報告」 2
- 1967 大場磐雄・寺村光晴 「神奈川県高座郡根下横穴群」「日本考古学年報」 15
- 1977 金子皓亭 「鷹番塚横穴」「座間市文化財調査報告」 第3
- 1979 赤星直忠 「梨の木坂横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「根下横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1983 渡野 寛他 「大下横穴墓」「座間市教育委員会
- 2001 金子皓亭 「鈴鹿横穴墓群」「座間市史」 1 原始・古代・中世資料編

- 2001 金子祐彦 「根下横穴墓群」「座間市史」1 原始・古代・中世資料編
 2001 金子祐彦 「梨の木坂横穴墓群」「座間市史」1 原始・古代・中世資料編
 2001 金子祐彦 「石名坂横穴墓群」「座間市史」1 原始・古代・中世資料編
 2001 金子祐彦 「大下横穴墓群」「座間市史」1 原始・古代・中世資料編
 2001 金子祐彦 「鷹番塚横穴墓群」「座間市史」1 原始・古代・中世資料編
 2001 金子祐彦 「中羽根沢横穴墓群」「座間市史」1 原始・古代・中世資料編

南足柄市

- 1989 杉山博久 「沼田城山横穴墓群」「南足柄市史」1 資料編 自然 原始・古代・中世
綾瀬市

- 1925 石野 球 「相模國高座郡綾谷村の横穴と綾瀬村の石棺」「考古学雑誌」第15巻3号
 1993 加藤久美他 「吉岡堀ノ内横穴墓群」「綾瀬市埋蔵文化財調査報告」3
 1996 宮瀧文二 「吉岡堀ノ内横穴群」「綾瀬市史」9 別編考古
 1996 宮瀧文二 「玄正寺横穴」「綾瀬市史」9 別編考古

葉山町 該当なし**寒川町**

- 1956 赤星直忠 「岡田越の山横穴古墳群—附大塚横穴古墳—」「寒川町郷土会」
 1957 石野 球 「神奈川県高座郡岡田横穴群」「日本考古学年報」5
 1963 赤星直忠 「神奈川県高座郡越の山横穴群」「日本考古学年報」6
 1975 赤星直忠 「岡田横穴」「日本考古学年報」26 日本考古学協会
 1979 赤星直忠 「越の山横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
 1991 小林義典他 「岡田越の山横穴墓群・岡田おこり塚（十三塚）」「寒川町」
 1993 木村 勇 「越の山横穴群を歩く」「寒川町史研究」第6号
 1996 鈴木保彦 「寒川町内の横穴墓」「寒川町史」8 別編考古
 1996 鈴木保彦 「越の山横穴墓群（No42遺跡）」「寒川町史」8 別編考古
 1996 鈴木 尚 「越の山横穴墓群第5号出土の人骨を読む」「寒川町史」8 別編考古
 1996 鈴木保彦 「（仮称）湘風園下横穴墓」「寒川町史」8 別編考古
 1996 鈴木保彦 「大塚横穴墓群（No57遺跡）」「寒川町史」8 別編考古
 1996 鈴木保彦 「法蓮寺坂横穴墓群（No65遺跡）」「寒川町史」8 別編考古
 1996 鈴木保彦 「（仮称）行安寺境内横穴墓群（No.2遺跡）」「寒川町史」8 別編考古

大磯町

- 1887 山崎直方 「大磯町近傍にある横穴塚穴の話」「東京人類学会雑誌」20号
 1887 若林勝邦 「相模國海綿郡大磯及ビ山西村横穴実見記」「東京人類学会雑誌」22号
 1935 石野 球 「大磯町北三井家別邸内横穴群調査記」「考古集録」二 武相考古學會
 1936 石野 球 「國府村三井家城山莊と郷内横穴群調査後期」「考古集録」三 武相考古學會
 1955 中川成夫 「相模大磯町愛宕山横穴調査報告」「史苑」第16巻1号
 1964 赤星直忠 「揚谷寺横穴群」「神奈川県大磯町の横穴」大磯町文化財調査報告 第1冊
 1964 赤星直忠 「南井戸塙横穴群」「神奈川県大磯町の横穴」大磯町文化財調査報告 第1冊
 1964 赤星直忠 「清水北横穴群」「神奈川県大磯町の横穴」大磯町文化財調査報告 第1冊
 1964 赤星直忠 「庄ヶ保横穴群」「神奈川県大磯町の横穴」大磯町文化財調査報告 第1冊
 1964 赤星直忠 「下田横穴群」「神奈川県大磯町の横穴」大磯町文化財調査報告 第1冊
 1964 赤星直忠 「後現田第7号穴」「神奈川県大磯町の横穴」大磯町文化財調査報告 第1冊
 1965 赤星直忠 「神奈川県中郡楊谷寺谷及び南井戸塙横穴」「日本考古学年報」13

- 1967 赤星直忠 「神奈川県中郡下田横穴」『日本考古学年報』15
- 1969 神澤勇一 「後谷原北横穴群」『神奈川県立博物館発掘調査報告書』第3号
- 1970 寺村光晴 「神奈川県中郡西おんざわ横穴群」『日本考古学年報』18
- 1979 赤星直忠 「たれこやと横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「東おんざわ横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「下田横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「庄後下横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「庄が久保横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「城山横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「東小磯横穴集団」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「清水北横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「前谷原横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「南井戸窪横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「楊谷寺横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「愛宕山横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「滝の沢横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「後谷原北横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「釜口下横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「善福寺横穴群」『神奈川県史』資料編20 考古資料
- 1985 大磯町教育委員会 「城山遺跡Ⅱ」「大磯町文化財調査報告書」第26集
- 1987 杉山博久他 「愛宕山下横穴墓群」「大磯町文化財調査報告書」第28集
- 1989 神澤勇一 「大磯丘陵横穴墳墓群（1）」「神奈川県立博物館発掘調査報告書」第18号
- 1990 鈴木一男・國見徹 「中郡大磯町北中尾横穴墓群の調査」「第14回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨」
- 1992 川口徳治郎 「大磯丘陵横穴墳墓群（2）」「神奈川県立博物館発掘調査報告書」第19号
- 1993 鈴木一男他 「北中尾横穴墓」「大磯町文化財調査報告書」第39集
- 1994 國見徹 「金久保北横穴墓群」「大磯町における発掘調査の記録」Ⅲ
- 1996 鈴木一男・國見徹 「大磯町の横穴墓群」「考古論叢神奈河」第5集
- 2000 池上悟 「南井戸窪横穴墓群実測調査報告」「大磯町史研究」第七号

二宮町

- 1887 若林勝邦 「相模國海綿大磯及び山西村横穴実見記」「東京人類学会雑誌」22号
- 1970 砂生佳人 「神奈川県八重久保横穴群」「鶴声考古学研究会会報」一
- 1972 三上次男・大井晴男 「諏訪脇横穴群（東部分）」「神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告」3
- 1973 赤星直忠 「諏訪脇横穴群（西部部分）」「神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告」4
- 1979 赤星直忠 「諏訪脇横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「柏木台横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「中里横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1979 赤星直忠 「金野中谷戸横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
- 1988 荣原一也他 「中郡二宮倉上横穴墓群」「第12回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨」
- 1988 杉山博久他 「大日ヶ庭横穴墓群」「小田原考古学研究会
- 1990 杉山博久 「二宮倉上横穴墓群」「同調査団
- 1990 杉山博久 「大日ヶ庭横穴墓群」「二宮町史」資料編1
- 1990 杉山博久 「中里横穴墓群」「二宮町史」資料編1

- 1990 杉山博久 「諏訪脇横穴墓群」「二宮町史」資料編1
 1990 杉山博久 「柏木台横穴墓群」「二宮町史」資料編1
 1990 杉山博久 「中谷戸入横穴墓群」「二宮町史」資料編1
 1990 杉山博久 「釜野八重久保横穴墓群」「二宮町史」資料編1
 1990 杉山博久 「倉上横穴墓群」「二宮町史」資料編1
 1990 杉山博久 「古屋敷横穴墓群」「二宮町史」資料編1

中井町

- 1900 大野延太郎 「相模國足柄上郡中村字雜色横穴調査」「東京人類学会雑誌」172
 1962 赤星直忠 「神奈川県足柄上郡中井町の横穴群」「日本考古学年報」11
 1979 赤星直忠 「雜色横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
 1979 赤星直忠 「上岩井戸横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
 1983 杉山博久 「庚申塚古墳・うわなくち横穴墓群」 同調査団
 1990 榎本俊三他 「雜色横穴群」「中井町誌」
 1990 榎本俊三他 「上岩井戸横穴群」「中井町誌」
 1990 榎本俊三他 「下藤沢横穴群」「中井町誌」
 1990 榎本俊三他 「比奈座横穴群」「中井町誌」
 1990 榎本俊三他 「うわなくち横穴群」「中井町誌」
 1990 榎本俊三他 「久所横穴」「中井町誌」
 1990 榎本俊三他 「松本横穴」「中井町誌」
 1990 榎本俊三他 「宮向横穴群」「中井町誌」
 2002 上田 熊・三瓶裕司 「比奈座中屋敷横穴墓群」「かながわ考古学財団調査報告」136

大井町 該当なし**松田町**

- 1987 清水信行・村上 始 「松田町・からさわ横穴墓群の調査」「第11回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨」
 1989 清水信行 『唐沢・河南沢』 からさわ・かなんざわ遺跡調査団

山北町 該当なし 開成町 該当なし 箱根町 該当なし 真鶴町 該当なし

湯河原町

- 1963 石野 康 「神奈川県足柄下郡船岡横穴」「日本考古学年報」6
 1979 赤星直忠 「船岡横穴」「神奈川県史」資料編20 考古資料
 1984 湯川悦夫 「船岡横穴」「湯河原町史」第1卷 原始・古代・中世・近世資料編

愛川町

- 1879 赤星直忠 「梅沢横穴」「神奈川県史」資料編20 考古資料
清川村 該当なし

城山町

- 1967 井上勝之 「城山町久保沢横穴」「茶木文化」5
 1979 赤星直忠 「久保沢横穴群」「神奈川県史」資料編20 考古資料
 1987 青木 重他 「津久井郡城山町春林横穴墓群分布調査及び発掘調査概報」「春林横穴墓群発掘調査団」
 1992 大貫英明 「春林横穴群」「城山町史」1 資料編 考古・古代・中世
津久井町 該当なし 相模湖町 該当なし 藤野町 該当なし

奈良・平安時代の宮ヶ瀬遺跡群の研究

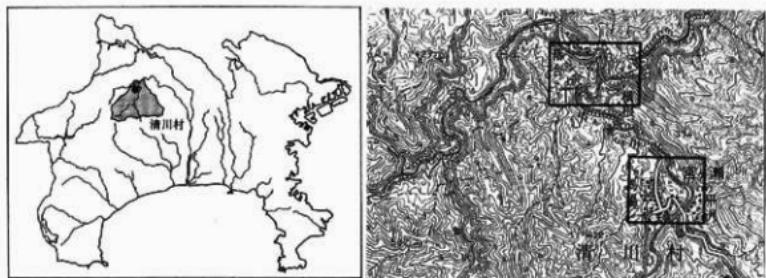
奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

(1) はじめに

奈良・平安時代研究プロジェクトチームは今回から「奈良・平安時代の宮ヶ瀬遺跡群の研究」を共同研究の成果としてまとめていくこととする。これまでの共同研究は、墨書き器、刻書き器、カマド構造、研究史というテーマを設定して既に公表された資料を提示し、それに基づいて分析を加えたものである。この作業は県内の発掘調査報告書が集積される神奈川県立埋蔵文化財センターを拠点とするわれわれには比較的取り組みやすいものであった。

国・県等の公共事業に伴う発掘調査を主な業務とするかながわ考古学財団としては、発掘現場に出かけて初めてその市町村の歴史と接する機会が生まれる。一方、市町村では当該教育委員会やそれらが組織した調査機関、民間調査機関、大学等の研究者が発掘調査を行って、一過性の調査を行うわれわれが特定の地域研究を行うことはかなり難しい状況にあった。ところで、県の調査機関が調査した地域として愛甲郡清川村宮ヶ瀬に所在する宮ヶ瀬遺跡群がある。宮ヶ瀬遺跡群は1985(昭和60)年から1994(平成6)年にかけて建設省の宮ヶ瀬ダム建設に伴って神奈川県立埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われ、1999(平成11)年までに埋蔵文化財センターとかながわ考古学財団によって併せて18冊の報告書が刊行されている。一定期間に、特定の調査機関が調査した例は県内では横浜市港北ニュータウン内の遺跡群以外に皆無といってよく、地域研究の絶好の材料といえる。

宮ヶ瀬遺跡群の奈良・平安時代の遺跡は19地点、遺跡名としては13遺跡から成るが、遺跡群は大きく落合地区と宮ヶ瀬地区に所在している。落合地区が戸戸川水系の7遺跡、宮ヶ瀬地区は川弟川水系の6遺跡である。前者が谷を挟み段丘上にそれぞれ独立して立地するのに対して、後者は既存の道路等で便宜的に区分されているに過ぎない。宮ヶ瀬地区的遺跡は東岸の上村遺跡、西岸の低位段丘上に立地する久保ノ坂遺跡とまず区分される。西岸の中・高位段丘上は谷を挟んで北側の北原遺跡と南側の南・馬場・表の屋敷の各遺跡とに分けられて、大きく四つの遺跡と考えていくことが適当であろう。そこで、今年度は遺跡の位置・地形と発見された遺構・遺物の概要を呈示し、来年度以降にそれらの問題点について論じることにする。



第1図 宮ヶ瀬遺跡群位置図(左図 緯尺1/50,000)

(2) 遺跡群の立地と環境

(a) 自然的立地

宮ヶ瀬遺跡群は神奈川県の北西部にある丹沢山地の北東部に位置し、相模川の支流である中津川の上流域の愛甲郡清川村宮ヶ瀬にある。中津川は丹沢山地を複雑に浸食し多くの支流があるが、海拔250m付近で合流する主要な支流に川弟川と早戸川がある。川弟川との合流域より下流に小規模な段丘地形が両岸に形成され、宮ヶ瀬遺跡群はこれらの段丘上に立地している。

段丘は川弟川と中津川の合流点付近の「宮ヶ瀬地区」、早戸川と中津川の合流点付近の「落合地区」に主に分布し、高位段丘・中位段丘・低位段丘の三段に分けられる。それぞれ約22,000年前・約15,000年前・約10,000年前以降に形成されたもので、調査時点での中津川の川原からの比高差は約50m・約30m・約20m程度であった。遺跡が立地する段丘面は最大でも幅200m・長さ700mで、他は200m四方以下と小規模である。

県内で人が常に住んでいる場所で最も寒いのは足柄下郡箱根町仙石原と宮ヶ瀬に隣接する津久井郡津久井町鳥屋であるとされているが、宮ヶ瀬も津久井町鳥屋に匹敵する気候であると考えられる。相模川低地の平野部に比べると山間地のゆえに年間降水量は多く、冬の寒さは厳しくなっている。年平均気温で平野部とは数度の温度差があり、降雪の回数や道路の凍結日数が多い。しかし、逆に夏はすごしやすく、暮末から明治初めにかけては外国人の避暑地となっていたこともある。

周辺の山地は杉・桧などの針葉樹からなる造成林と、伐採後に自然に育った落葉広葉樹を主体とした自然林に覆われている。そのため猿・鹿・猪などの動物や鷹・雉・山鳥などの鳥類が豊富に生息している。

(b) 歴史的環境

宮ヶ瀬遺跡群からは旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・室町・戦国・江戸の各時代の遺跡が見つかっている。遺構が多いのは縄文時代・平安時代・江戸時代で、農業が生業の中心になる弥生時代から古墳時代にかけてと武士が政権をとった鎌倉時代の遺構・遺物は極めて少ない。古代では古墳～奈良時代は遺構・遺物が少なく、平安時代の前半のものが多く検出されている。

奈良・平安時代には宮ヶ瀬遺跡群のある丹沢山地の東～北東一帯は相模國愛甲郡に属してたと考えられている。愛甲郡には玉川・英那（アキナ）・印山（イヤマ）・船田（フナキタ）・六座（ムツクラ）・余部（アマルベ）の六郷があった。各郷の『和名類聚抄』への記載順は現存の地名から所在地を推定した場合、相模川の支流や本流添いに発達する水田可耕地である低地帯を中心にして南から北へ記述されていることがみてとれる。宮ヶ瀬は愛甲郡内でも北方に位置し、当時の郷名を比定すれば余部郷かその周辺地帯にあたると考えられる。

宮ヶ瀬の地名が文献資料に初めて登場するのは鎌倉時代後半の永仁二年（1294）の『足利氏所領奉行注文』であり、「相模國宮瀬村」は鎌倉幕府の有力御家人であった足利氏の所領となっていた。それは当時の宮ヶ瀬は幕府の有力者にとって相応の価値があると認められていたことを示している。また、宮ヶ瀬は江戸時代には大消費都市である江戸で使用する薪や炭、建築用の木材や漆などの林産物の供給地となっていた。

（河野喜映）

参考文献

- 池邊 勝 1981.2 「和名類聚抄郷里郡名考證」
- 高橋純夫 1987.3 「第1章 津久井町の自然 第2節 気象」「津久井町郷土誌」 津久井町教育委員会
- 木下 真ほか 1997.1 「神奈川の古代道」 藤沢市教育委員会博物館準備担当
- 鈴木次郎ほか 1998.3 「先人たちの軌跡－宮ヶ瀬遺跡群発掘調査の記録－」



第2図 落合地区（上図）、宮ヶ瀬地区（下図）遺跡位置図

(3) 遺跡の概要

◎ 落合地区

☆大野原 (No.13D) 遺跡

1. 調査期間 1993.2.1～8.6
2. 調査面積 約4,000m²
3. 遺跡立地 落合地区。中津川と早戸川の合流点付近、早戸川の南岸標高252～267mの高位段丘上に立地。
4. 位置関係 谷を隔てて南東側に中原 (No.13C) 遺跡がある。
5. 遺構数 墓穴住居(2) 土坑(28)
6. 遺構分布 墓穴住居と土坑とはそれぞれ占地が明確に分かれる。土坑は2～5基程度の群に分かれるものと単独のものがある。
7. 遺構時期 墓穴住居H1号は9世紀後半～10世紀前半、H2号は不明。土坑は平安時代。
8. 出土遺物 土師器（相模型壺・壺） 須恵器（壺・壺） 灰釉陶器（壺）
9. 文献名 かながわ考古学財団1998.3「宮ヶ瀬遺跡群X IV」『かながわ考古学財団調査報告』40

☆中原 (No.13C) 遺跡

1. 調査期間 1988.9.14～1989.1.18（第1次） 1992.4.2～1993.1.29（第2次）
2. 調査面積 約8,900m²
3. 遺跡立地 落合地区。中津川と早戸川の合流点付近、早戸川の南岸標高242～262mの高位段丘上に立地。
4. 位置関係 谷を隔てて南東側に上原 (No.13) 遺跡、北西側に大野原 (No.13D) 遺跡がある。
5. 遺構数 墓穴住居(1) 土坑(9) 燃土址(1)
6. 遺構分布 墓穴住居と土坑と燃土址とは占地が明確に分かれる。土坑の集中度は上原遺跡より散漫。
7. 遺構時期 墓穴住居H1号は9世紀代。土坑はH2号が10世紀前半、他は平安時代。
8. 出土遺物 土師器（相模型壺・壺、武藏型壺） 須恵器（壺・壺） 灰釉陶器（碗・長頸瓶）
9. 文献名 かながわ考古学財団1997.3「宮ヶ瀬遺跡群X」『かながわ考古学財団調査報告』16

☆上原 (No.13) 遺跡

1. 調査期間 1986.7.28～9.12（試掘） 1987.7.1～12.10（第1次） 1988.3.22～9.13（第2次）
2. 調査面積 約6,300m²
3. 遺跡立地 落合地区。中津川と早戸川の合流点付近、早戸川の南岸標高236～249mの段丘上に立地。
4. 位置関係 谷を隔てて南東側にサザランケ (No.12) 遺跡、北東側に中原 (No.13C) 遺跡がある。
5. 遺構数 墓穴住居(1) 土坑(6)
6. 遺構分布 墓穴住居と土坑とは占地が明確に分かれる。土坑は下段面の中央より東に集中。
7. 遺構時期 墓穴住居H1号は10世紀前半。土坑は平安時代。
8. 出土遺物 土師器（相模型壺・壺） 須恵器（壺）
9. 文献名 かながわ考古学財団1997.3「宮ヶ瀬遺跡群X II」『かながわ考古学財団調査報告』18

☆サザランケ (No.12) 遺跡

1. 調査期間 1986.6.19～8.28（試掘） 1987.2.2～6.30 1987.12.11～1988.3.31
2. 調査面積 約5,900m²
3. 遺跡立地 落合地区。中津川と早戸川の合流点付近、早戸川の南岸標高238～242mの高位段丘上に立地。
4. 位置関係 浅い谷をはさみ、北西側の上原 (No.13) 遺跡へと続く。
5. 遺構数
6. 遺構分布
7. 遺構時期
8. 出土遺物
9. 文献名 かながわ考古学財団1996.3 「宮ヶ瀬遺跡群VI」『かながわ考古学財団調査報告』8
10. 特記事項 古代の遺構・遺物は発見されていない

☆ナラサス (No.15) 遺跡

1. 調査期間 1985.7.1～8.7（試掘） 1985.8.7.～12.12 1986.10.1～1987.10.30
2. 調査面積 約18,300m²
3. 遺跡立地 落合地区。中津川と早戸川との合流付近に位置し、中津川左岸段丘上にある。標高200～232mに立地し、北西から南東へ緩やかに傾斜する平坦面であり、中津川へは渓谷をなす。
4. 位置関係 早戸川を隔てて西にサザランケ (No.12) 遺跡、上原 (No.13) 遺跡、中原 (No.13C) 遺跡、大野原 (No.13D) 遺跡、前落合遺跡、小さな沢を隔てて北東にナラサス北 (No.15北) 遺跡がある。
5. 遺構数 堪穴住居(6) 掘立柱建物(2) 堪穴状遺構(2) 土坑(95) 溝状遺構(1)
6. 遺構分布 堪穴住居はほぼ中央部に、土坑は住居付近に30基ほどが集中し、さらに離れて南東地点に分布。溝状遺構は中央部で南東に張り出した弧状を描きながら一つの住居址を囲む。
7. 遺構時期 堪穴住居H1号は10世紀前半、H2号は10世紀中頃、H3号は10世紀中頃、H4号は9世紀末～10世紀中頃、H5号は9世紀末～10世紀初頭、H6号は9世紀末～10世紀中頃、H1・2号掘立柱建物は9世紀末～10世紀中頃、堪穴状遺構は平安時代、溝状遺構は平安時代、土坑は平安時代。
8. 出土遺物 土師器（相模型壺・壺、武藏型壺、鬼高系壺）須恵器（壺・長頸瓶・甕）灰釉陶器（碗・壺・長頸瓶）土製品（管状土錐）鉄製品（鐵）
9. 文献名 神奈川県立埋蔵文化財センター1991.11「宮ヶ瀬遺跡群II」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告書』21

☆ナラサス北 (No.15北) 遺跡

1. 調査期間 1987.11.1～1988.5.9
2. 調査面積 約6,500m²
3. 遺跡立地 落合地区。中津川と早戸川の合流付近から北東400mの中津川の左岸段丘上。標高226～232mに立地し、北西から南東へ緩やかに傾斜する平坦面で、中津川へは渓谷をなす。
4. 位置関係 早戸川を隔てて西にサザランケ (No.12) 遺跡、上原 (No.13) 遺跡、中原 (No.13C) 遺跡、大野原 (No.13D) 遺跡、前落合遺跡があり、沢を隔てて南西にナラサス (No.15) 遺跡がある。

5. 遺構数　竪穴住居(1)　土坑(17)
6. 遺構分布　竪穴住居1棟は遺跡の東地点にあり、土坑はその住居址の周りに17基分布。
7. 遺構時期　竪穴住居H1号は11世紀前半、土坑は平安時代。
8. 出土遺物　ロクロ土師器（高台碗）
9. 文献名　神奈川県立埋蔵文化財センター1991.11「宮ヶ瀬遺跡群II」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告』21

☆横根遺跡

1. 調査期間　1979.4.4～4.12
2. 調査面積　224m²
3. 遺跡立地　落合地区。中津川と早戸川との合流点付近、中津川南岸に形成された標高230～235mの段丘突端の平坦部に立地。
4. 位置関係　中津川を隔てて西岸にサザランケ(No12)遺跡。
5. 遺構数　竪穴住居(1)
6. 遺構分布　竪穴住居1棟が検出されたのみ。
7. 遺構時期　竪穴住居は9世紀。
8. 出土遺物　土師器（相模型壺）　石製品（砥石）
9. 文献名　神奈川県立埋蔵文化財センター1990.9「宮ヶ瀬遺跡群I」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告』21

◎ 宮ヶ瀬地区

☆北原(No10・11北)遺跡

1. 調査期間　1986.9.4～9.26(試掘)1993.8.9～9.6　1994.1.24～3.31　1994.4.4～1995.3.31
2. 調査面積　約3,900m²
3. 遺跡立地　宮ヶ瀬地区。北原地区の北端、北東方向にのびる尾根の先端部で、東南側裾部の標高239～243mに立地。
4. 位置関係　旧県道を挟んで東側に北原(No11)遺跡が、新県道を挟んで西側に北原(No10)遺跡がある。
5. 遺構数　竪穴住居(2)　掘立柱建物(4)　土坑(108)　土塙墓(1)　焼土址(1)
6. 遺構分布　標高241mの等高線よりも高い南西部に遺構は集中。それ以下の北東部は後世の削平により遺構の多くが消滅したと考えられる。
7. 遺構時期　竪穴住居H1号は11世紀前半、H2号は9世紀前半。掘立柱建物はH1・3・4号が11世紀中期以降、H2号は11世紀前半。土坑は10世紀・11世紀代。土塙墓は平安時代末から中世初。
8. 出土遺物　土師器（相模型壺・坏、武藏型壺、ロクロ坏、甲斐型坏）　須恵器（坏・蓋）　鉄製品（短刀・鎌・刀子・紡錘車・铁滓）　石製品（砥石）
9. 文献名　かながわ考古学財団1998.3「宮ヶ瀬遺跡群XV」『かながわ考古学財団調査報告』41

☆北原（No11）遺跡

1. 調査期間 1985.12.3～1986.1.8（試掘） 1988.9.7～1989.2.17
2. 調査面積 約2,300m²
3. 遺跡立地 宮ヶ瀬地区。中津川・川弟川合流地点下流の左岸に形成された段丘で、舌状に張り出した東端に立地。標高238～241m、段丘下の中津川氾濫原までの比高差は約30m、急崖をなす。
4. 位置関係 西側には県道を挟んで北原（No10, 11北）遺跡が、南西側にはおよそ70m離れて北原（No9）遺跡がある。
5. 遺構数 壊穴住居（1） 土坑（7） 道状遺構（1）
6. 遺構分布 壊穴住居は調査区のやや南寄りで検出、土坑は全体にまばらに分布。道状遺構は北半で検出したが、走向方向の一つは壊穴住居に向かい、その脇に土坑が点在。
7. 遺構時期 壊穴住居H1号は8世紀後半～9世紀代。土坑・道状遺構は平安時代。
8. 出土遺物 土器（相模型壺・坏・甲斐型坏・鬼高系坏） 須恵器（碗・坏・蓋）
9. 文献名 神奈川県立埋蔵文化財センター1994.2「宮ヶ瀬遺跡群IV」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告』21

☆北原（No10）遺跡

1. 調査期間 1985.12.6～1986.1.20（試掘） 1986.9.18～9.30（試掘） 1988.5.7～9.14（第1次） 1993.7.1～1994.1.20（第2次）
2. 調査面積 約15,500m²
3. 遺跡立地 宮ヶ瀬地区。清水沢の北側に広がる北原地区の北端、中津川西岸段丘面の標高243～263mに立地。西側で山に近接しているため地形の傾斜が強く、遺跡西端と東端の比高差は20mある。
4. 位置関係 南側は熊野神社の参道を挟んで北原（No9）遺跡、東側には県道を挟んで北原（No11）遺跡、北東側に新設された県道を挟んで北原（No10, 11北）遺跡がある。
5. 遺構数 壊穴住居（7） 挖立柱建物（1） 土坑（58） 集石（1） 遺物集中箇所（1）
6. 遺構分布 壊穴住居・挖立柱建物・遺物集中箇所は西寄りに偏在。土坑は下段面東南部を除いて広範に分布するが、特に下段面北端北東寄り、上段面南端に集中し、残りは下段面西寄りに散在。
7. 遺構時期 壊穴住居H1・2・3・5・7号は10世紀前半、H6号は9世紀前半、H4号は不明だが、10世紀前半か。挖立柱建物H1号は10世紀前半。土坑・集石・遺物集中箇所は平安時代。
8. 出土遺物 土器（相模型壺・坏・武藏型壺・甲斐型坏・盤状坏） 須恵器（坏・碗・蓋・壺・壺・長頸瓶） 灰陶陶器（碗・壺・長頸瓶） 鉄製品（鎌・刀子・火打金・釘・棒状品・板状品・鉄滓） 石製品（砥石・火打石・敲石・磨石） 土製品（土錐） その他（桃果核）
9. 文献名 かながわ考古学財団1997.1「宮ヶ瀬遺跡群IX」『かながわ考古学財団調査報告』15

☆北原（No.9）遺跡

1. 調査期間 1986.1.9～3.3（試掘） 1989.2.20～1991.11.15
2. 調査面積 約17,000m²
3. 遺跡立地 宮ヶ瀬地区。清水沢の北側に広がる北原地区の南端、中津川西岸に広がる段丘上の北寄り、標高244～262mに立地。
4. 位置関係 南側に清水沢を隔てて表の屋敷（No.8）遺跡、北側に熊野神社参道を挟んで北原（No.10）遺跡。
5. 遺構数堅
6. 遺構分布 堅穴住居は下段面の北東と上段面南西に位置する。土坑各段にみられるが、2～5基が一定の範囲に集中して分布。溝状遺構は中断面の東北端にみられる。
7. 遺構時期 堅穴住居H1号は平安時代、H2号は9世紀後半。土坑、溝状遺構は平安時代。
8. 出土遺物 土師器（相模型坏・壺、武藏型壺、鬼高系壺） 須恵器（坏・蓋・壺・長頸壺） 鉄製品（鎧状製品・円盤状製品）
9. 文献名 神奈川県立埋蔵文化財センター1993.2「宮ヶ瀬遺跡群Ⅲ」「神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告」21

☆表の屋敷（No.9）遺跡

1. 調査期間 1991.7.1～1992.3.31 1992.4.2～1993.3.31 1993.4.2～6.30
2. 調査面積 約8,600m²
3. 遺跡立地 宮ヶ瀬地区。馬場・北原地区の台地上西半部のはば中央、清水沢の南、高位の段丘面の標高243～254mに立地。西から東へ緩やかに傾斜。
4. 位置関係 清水沢を挟んで北側に北原（No.9）遺跡、南側には馬場（No.7）遺跡が隣接している。
5. 遺構数 堅穴住居（14） 土坑（126）
6. 遺構分布 東より（傾斜下部）に堅穴住居、土坑が密集して分布、堅穴住居は西寄りにも分布。
7. 遺構時期 堅穴住居H1・H7・H10号は9世紀前半、H2号は不明、H3・H4号は9世紀中葉～後半、H5号は8世紀前半、H6号は8世紀末、H8・H9号は9世紀後半、H11号は10世紀中葉、H12・H13号は10世紀前半、H14号は7世紀末。土坑は古代。
8. 出土遺物 土師器（相模型坏・壺・皿・壺、武藏型壺、甲斐型坏・壺・蓋、鬼高系坏・壺、内黒坏） 須恵器（坏・蓋・壺・壺・平瓶） 灰釉陶器（碗・壺） ロクロ土師器坏 鉄製品（鎧先・刀子・鎌・鉤） 土製品（土鍤） 石製品（砥石・紡錘車・支脚）
9. 文献名 かながわ考古学財団 1997.3「宮ヶ瀬遺跡群XⅢ」「かながわ考古学財団調査報告」19

☆馬場（No.6）遺跡

1. 調査期間 1990.4.3～1991.6.28
2. 調査面積 約12,700m²
3. 遺跡立地 宮ヶ瀬地区。馬場・北原地区の中央東側、高位の段丘面の標高239～242mに立地。西から東へ緩やかに傾斜。

4. 位置関係 県道を挟み西側に馬場(No.7)遺跡、表の屋敷(No.8)遺跡が、東側に馬場(No.5)遺跡が隣接。
5. 遺構数 坪穴住居(5) 土坑(195)
6. 遺構分布 西より坪穴住居、全面に土坑が分布。
7. 遺構時期 坪穴住居H1・H4・H5号は9世紀前半、H2・H3号は9世紀前半から中葉。土坑は平安時代。
8. 出土遺物 土師器(相模型坏・壺、武藏型坏、北武藏型坏、南武藏型坏、甲斐型坏、鬼高系坏・蓋、内黒坏・盤状坏) 須恵器(坏・壺・壺) 灰釉陶器(碗・壺) 鉄製品(刀子・鎌・鎌・鑿または鉗) 石製品(砥石・紡錘車)
9. 文献名 かながわ考古学財団 1995.3 「宮ヶ瀬遺跡群V」『かながわ考古学財団調査報告』4

☆馬場(No.7) 遺跡

1. 調査期間 1986.3.3 ~ 3.31 (試掘) 1992.7.1 ~ 1993.1.31、1995.4.4 ~ 1995.11.7
2. 調査面積 約12,600m²
3. 遺跡立地 宮ヶ瀬地区。中津川と川弟川の合流地点付近左岸の河成段丘上。標高236~255mに立地。
4. 位置関係 南(No.2)遺跡の北側、No.3遺跡の東に隣接。
5. 遺構数 土坑(210) 道状遺構(2)
6. 遺構分布 土坑は下段面や中断面の中央から北東部にかけてを除き調査区のほぼ全域に分布。道状遺構は上段面にみられる。
7. 遺構時期 土坑は大半が、道状遺構は平安時代。
8. 出土遺物 土師器(壺) 須恵器(壺)
9. 文献名 かながわ考古学財団1997.3 「宮ヶ瀬遺跡群XⅠ」『かながわ考古学財団調査報告』17

☆馬場(No.3) 遺跡

1. 調査期間 1986.4.25 ~ 5.13 (試掘) 1991.12.9 ~ 1992.3.31
2. 調査面積 約1,900m²
3. 遺跡立地 宮ヶ瀬地区。中津川と川弟川の合流地点付近左岸の河成段丘上。標高255~263mに立地。
4. 位置関係 馬場遺跡の南西部に位置し、南東に南(No.2)遺跡がある。
5. 遺構数 碕石建物(1) 坪穴住居(7) 土坑(64) 溝状遺構(1) 燃土址(2)
6. 遺構分布 仏堂跡と推定される礎石建物址は調査区東端、坪穴住居・土坑は調査区中央に位置。溝状遺構は礎石建物平坦面に堆積した覆土中。燃土址は礎石建物の北と南に分布。
7. 遺構時期 磚石建物H1号は9世紀中頃。坪穴住居H1号は9世紀中葉~後半、H2号は9世紀代、H3号は9世紀前半~中葉、H4号は9世紀末~10世紀初頭、H5、7号は9世紀中葉、H6号は9世紀前半。土坑、溝状遺構は平安時代。
8. 出土遺物 土師器(相模型坏・壺、武藏型壺) 須恵器(坏・碗・瓶・壺・壺) 鉄製品(釘・紡錘車) 青磁(碗)
9. 文献名 かながわ考古学財団1996.3 「宮ヶ瀬遺跡群VI」『かながわ考古学財団調査報告』9

☆馬場（No.5）遺跡

1. 調査期間 1989.1.19～3.3
2. 調査面積 約700m²
3. 遺跡立地 宮ヶ瀬地区。馬場・北原地区の中でも南東端の張り出し状となる中位段丘面の基部、標高235～238mに立地。南西から北東へ緩やかに傾斜。
4. 位置関係 県道を挟んで西側に馬場（No.6）遺跡が、東側崖面下には久保ノ坂（No.4）遺跡がある。
5. 遺構数 土坑（6）
6. 遺構分布 土坑は全面に散漫な状態で分布。
7. 遺構時期 土坑は平安時代。
8. 出土遺物 なし
9. 文献名 かながわ考古学財団1996.3「宮ヶ瀬遺跡群Ⅱ」『かながわ考古学財団調査報告』10

☆久保ノ坂（No.4）遺跡

1. 調査期間 1986.4.8～4.25（試掘） 1989.10.23～1990.3.30（本格）
2. 調査面積 約6,300m²
3. 遺跡立地 宮ヶ瀬地区。馬場・北原地区の南東端、中津川西岸の低位の段丘面、標高226～232mに立地。南西から北東へ緩やかに傾斜。
4. 位置関係 西側中位段丘の北側に馬場（No.5）が、南側に南（No.2）遺跡がある。
5. 遺構数 壊穴住居（1） 土坑（41）
6. 遺構分布 北端に壊穴住居、土坑は大半が北寄りに集中し、中央から南端にかけて20～30m間隔で線上に分布。
7. 遺構時期 壊穴住居は不詳、土坑は平安時代以降。
8. 出土遺物 土師器（相模型壺） 須恵器（壺） 土製品（土錐）
9. 文献名 かながわ考古学財団1998.3「宮ヶ瀬遺跡群XVI」『かながわ考古学財団調査報告』42

☆南（No.2）遺跡

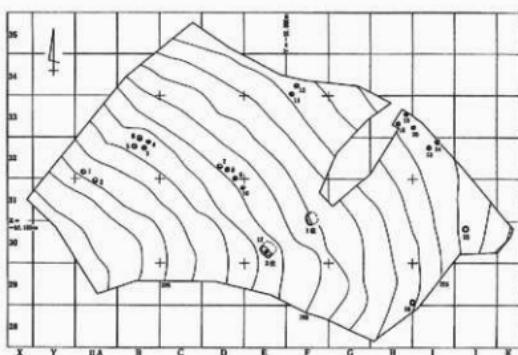
1. 調査期間 1986.4.9～5.9（試掘） 1989.2.9～1989.3.31 1989.4.3～1990.3.30
2. 調査面積 約11,700m²
3. 遺跡立地 宮ヶ瀬地区。中津川と川弟川の合流地点付近の西岸に広がる段丘上にある。馬場・北原地区の立地する台地南端部。標高241～254mに立地し、上・下段、下段面東端部の3カ所。
4. 位置関係 北側には馬場遺跡と段丘崖により区画された久保ノ坂遺跡と接している。
5. 遺構数 壊穴住居（9） 土坑（58）
6. 遺構分布 西側上段面に住居址、土坑は各段に分布。
7. 遺構時期 壊穴住居H1・8号は10世紀前半～中葉、H2・7号は10世紀後半、H3号は9世紀中葉～後半、H4号は9世紀末～10世紀前半、H5号は10世紀初頭～前半、H6号は10世紀前半、H9号は9世紀後半。土坑は平安時代。
8. 出土遺物 土師器（相模型壺・壺、武藏型壺、甲斐型壺・蓋・壺、ロクロ壺） 須恵器（壺・碗・皿・

蓋・壺・壺・長頸瓶）　灰釉陶器（碗・壺）　鉄製品（刀子・鎌・鉗）　土製品（土錐）
石製品（砥石・支脚）

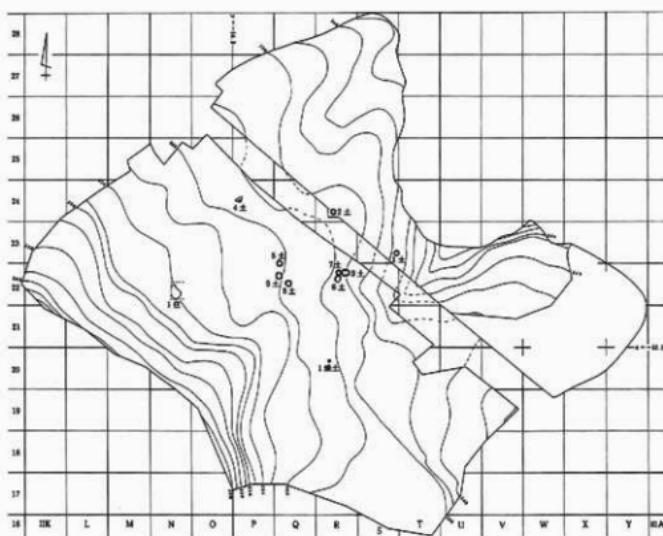
9. 文 獻 名 かながわ考古学財団1996.3 「宮ヶ瀬遺跡群Ⅱ」『かながわ考古学財団調査報告』10

☆上村（No.1）遺跡

1. 調査期間 1986.5.12～6.20（試掘） 1986.10.1～1987.1.30
2. 調査面積 約6,900m²
3. 遺跡立地 宮ヶ瀬地区。中津川と川弟川との合流点付近において中津川南岸に形成された段丘上に展開。標高232～239mに立地し、現地表面での地形はほぼ平坦。
4. 位置関係 中津川を隔てて北西側の久保ノ坂（No.4）遺跡と対峙。
5. 遺構数 堅穴住居（3） 土坑（69）
6. 遺構分布 堅穴住居、土坑とも段丘中央部の微高地上とその周辺に集中。但し土坑は段丘の北東寄りにも5基ほど検出。
7. 遺構時期 堅穴住居、土坑とも平安時代。但し青磁小片が出土したH56号土坑は中世まで下る可能性も。
8. 出土遺物 土師器（武藏型壺、相模型壺）　青磁（龍泉窯系折縁鉢）
9. 文 獻 名 神奈川県立埋蔵文化財センター1990.9 「宮ヶ瀬遺跡群Ⅰ」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告』21

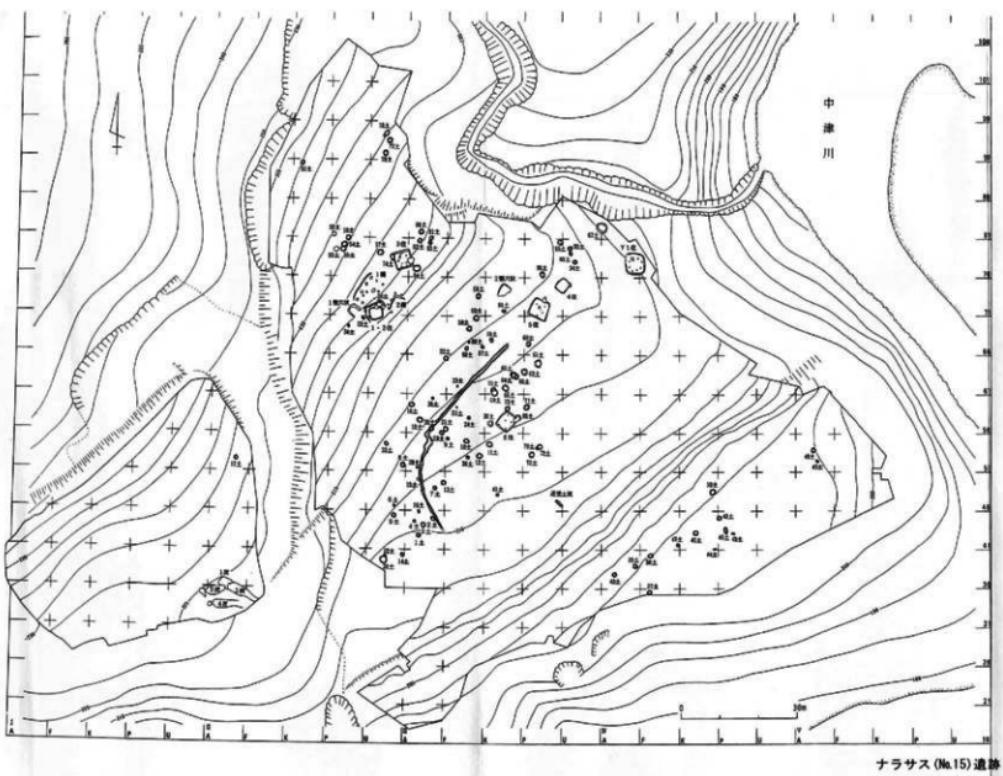


大野原(No.13D)遺跡

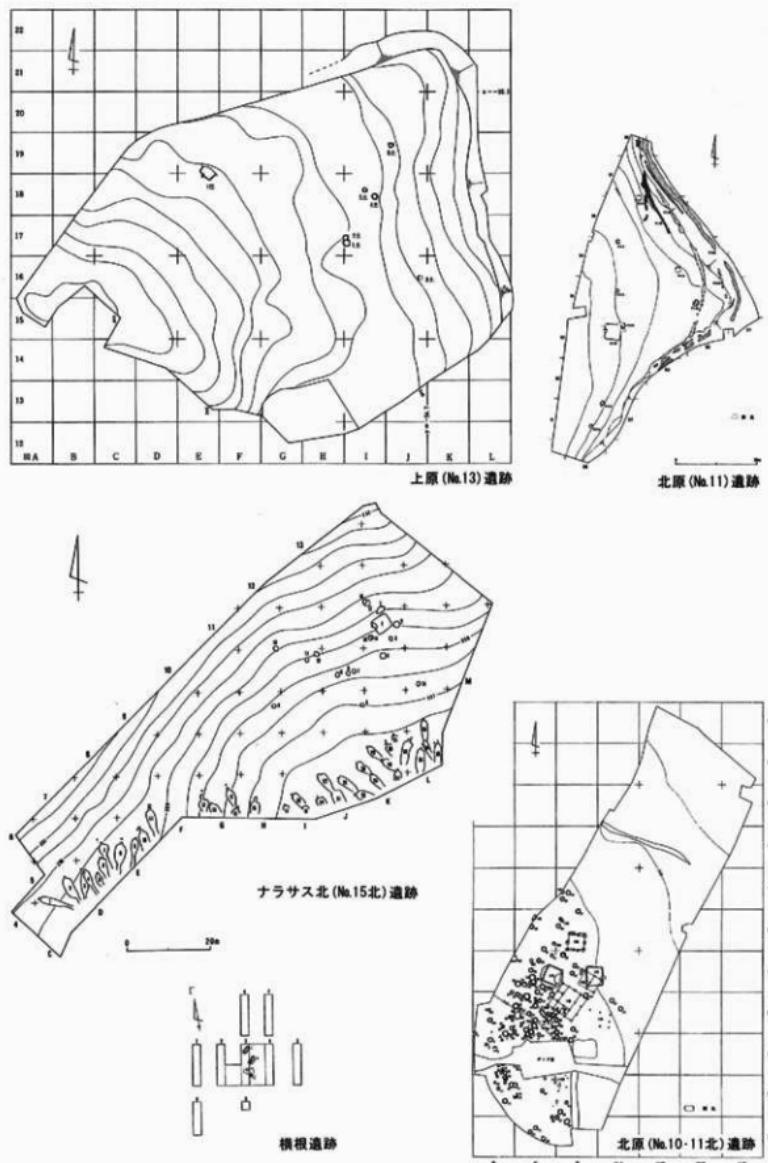


中原(No.13C)遺跡

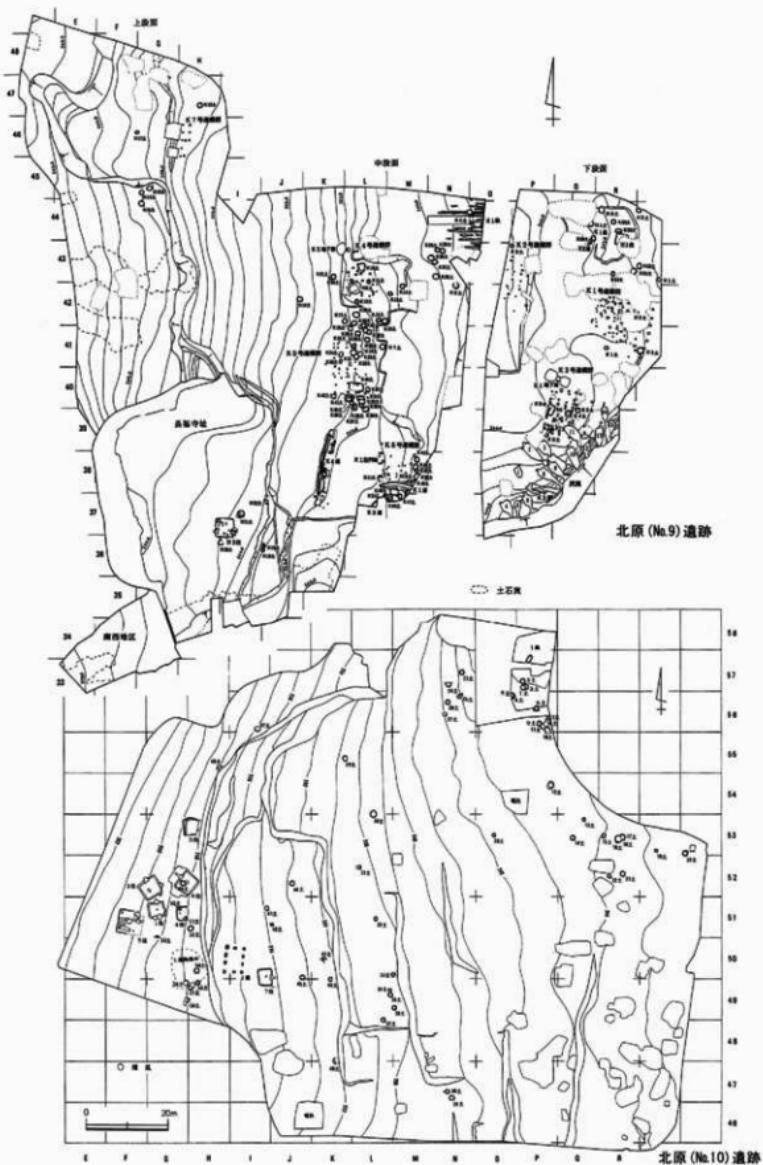
第3図 各遺跡の遺構全体図(2)



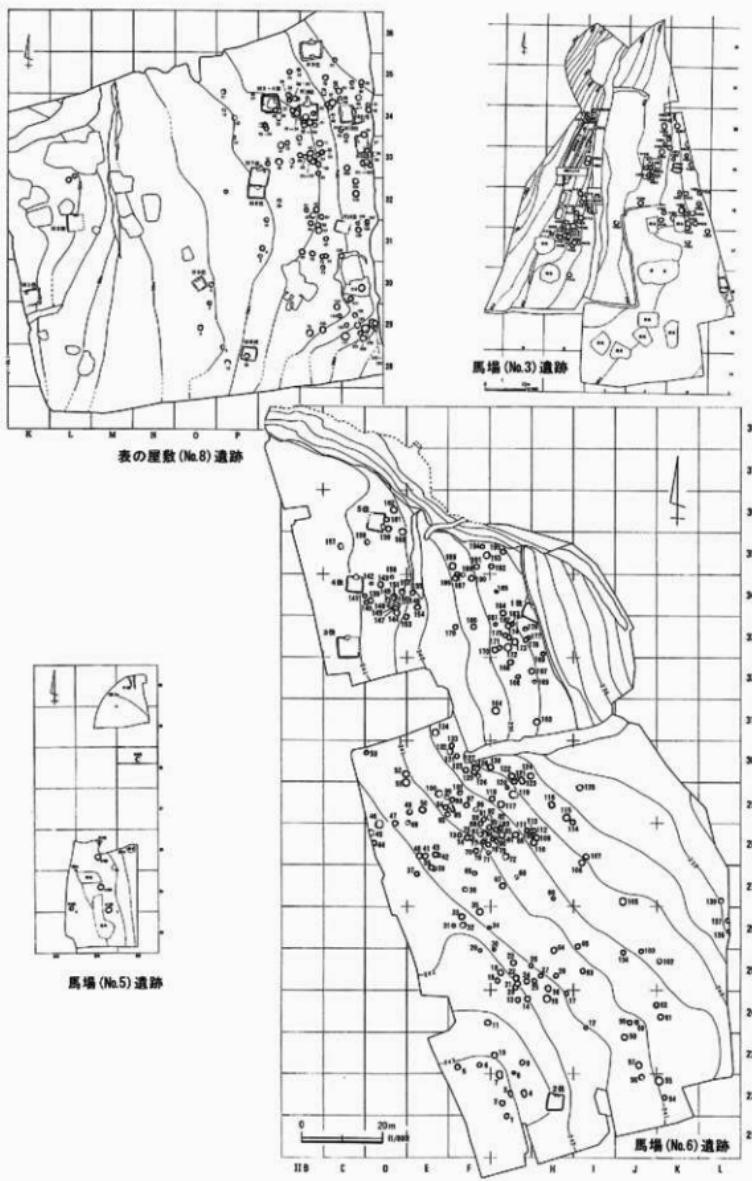
第4図 各連跡の構造全体図（1）



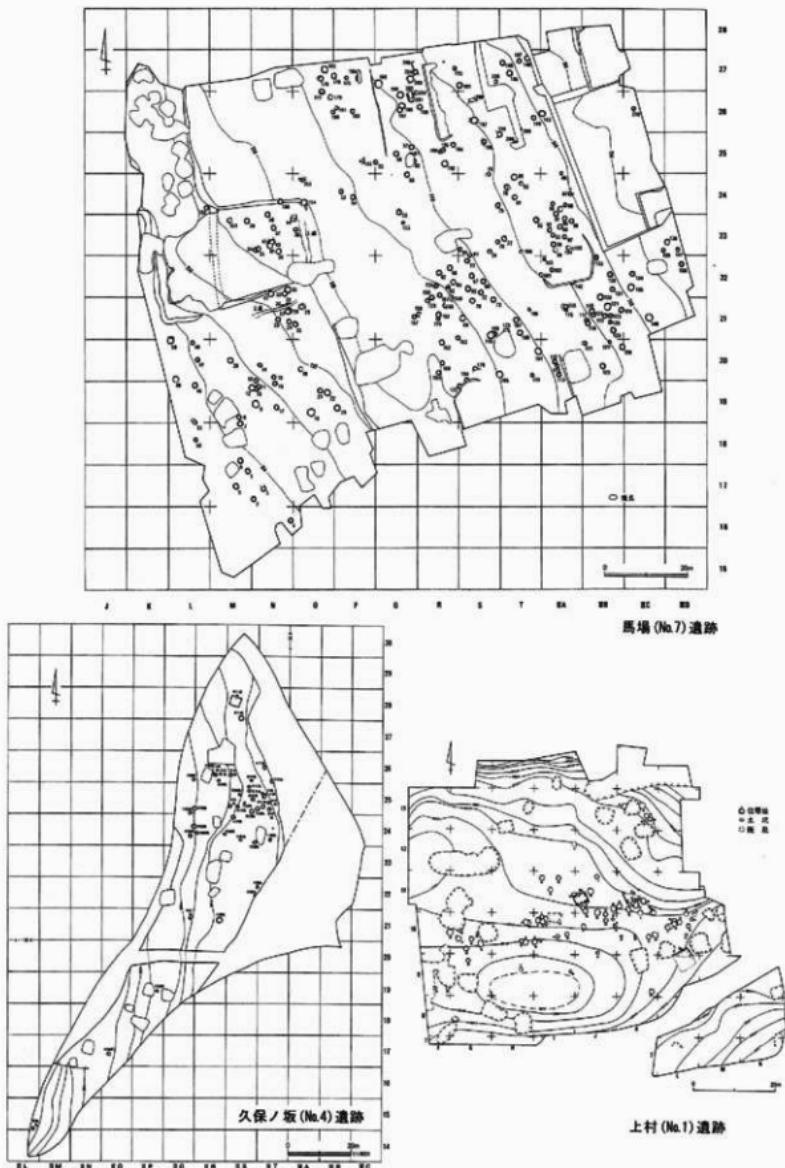
第5図 各遺跡の遺構全体図 (3)



第6図 各遺跡の遺構全体図（4）

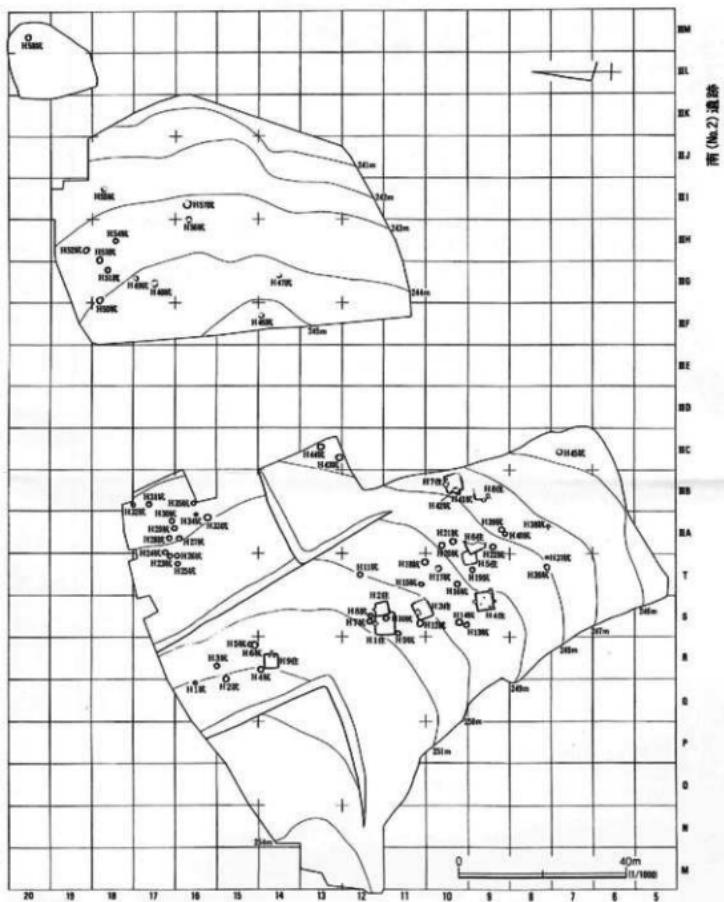


第7図 各遺跡の遺構全体図（5）



第8図 各遺跡の遺構全体図 (7)

第9図 各測点の遺体全体図（6）



神奈川県内の「やぐら」集成（1）

中世研究プロジェクトチーム

はじめに

「やぐら」は、鎌倉およびその周辺を中心に分布する、中世の神奈川を特色づける遺構である。その地域的・時期的な特質は、中世考古学研究の先駆者である赤星直忠氏によって既に大正時代から認識され、その後多くの調査の成果が論考としてまとめられた。それが現在の「やぐら」研究の基礎となっている。これに加えて1980年代以降、主に急傾斜地崩壊対策工事に先立つ「やぐら」の発掘調査が各地で行われるようになり、近年ではそれらの成果も踏まえた研究が深化されている。

今回は、昭和50年代以降に発掘調査された「やぐら」の集成を行うこととした。それは、これまでに数多くの「やぐら」が様々な形で紹介され、分布図も作成されてきたが、実際に発掘調査が行われ、記録された資料の集成は行われて来なかったからである。もとより、集成は常に暫定的なものでしかあり得ないし、これらの調査は工事に先立って行われているため個々の「やぐら」群のごく一部を調査しているに過ぎない。しかし、「やぐら」の形態や年代的な検討には、出土遺物などが正確に記録されたこれらの資料の検討が不可欠である。「やぐら」の全容を明らかにするために、なすべきことは今なお山積しているが、その基礎となる資料として現状での調査成果をまとめ、今後個々の問題を検討していく足がかりとしたい。

例 言

1. 本集成は2002年3月現在公開されている発掘調査報告書に基づき、神奈川県内の「やぐら」を集成したものである
2. 集成の対象としたのは、発掘調査が行われ、遺構の実測図が公にされているものである
3. 上記以外の、分布調査、資料紹介、スケッチ等で知られているのみのものは除外した
4. 集成表の項目は以下の通りである
 - (1) 番号：県内の調査地点について番号を振った。おおむね北→南、東→西に振っている。この番号は第1図～第6図の番号に対応する
 - (2) 遺跡名：原則的に引用文献記載の遺跡名を示した。一部、現行の神奈川県埋蔵文化財登録地図に基づき、文献とは異なる遺跡名を示しているものもある
 - (3) 所在地：引用文献記載の住所・地番を示した
 - (4) 基数：引用文献に記載されたやぐらの基數を示した。報文中「やぐら」と記載されていなくても、「やぐら」と判断されるものについても含めてカウントしている。また、「やぐら」として報告されていても、井戸など明らかに異なる遺構と判断される場合は除外した。
 - (5) 立地：原則として、以下の3種に分類している
　崖根一丘陵斜面下部、低地に面するもの
　中腹一丘陵斜面に位置するもの。前面に平場を切り出している場合がある
　丘陵上一丘陵頂部、もしくは頂部近くに位置するもの
 - (6) 調査年月日：引用文献に記載されている調査期間。一部不明なものもある
 - (7) 参考：やぐら以外に発見された遺構、その他の関連事項など
 - (8) 文献番号：末尾の文献一覧に対応する

第1表 神奈川県内「やぐら」集成一覧

番号	遺跡名	所在地	基數	立地	調査年月日	備考	文献番号
1	王桙寺通やぐら遺跡	川崎市麻生区王桙寺377	1	崖裾	2001年8月1日～8月8日		1
2	荒井やぐら	横浜市中区本牧荒井61	1	中腹	1980年3月10日		2
3	長昌寺前横穴群	横浜市金沢区富岡町1970付近	1	中腹	1971年12月6日～末	横穴墓転用	3
4	釜利谷東6丁目西地区やぐら群	横浜市金沢区釜利谷東6-4-10	10	崖裾	1998年7月1日～7月30日		4
		横浜市金沢区釜利谷東6-4-40	22	崖裾	2000年4月10日 ～6月23日		5
5	釜利谷やぐら群	横浜市金沢区釜利谷南2-44-8	10	崖裾	1996年7月19日 ～9月20日		6
6	釜利谷やぐら遺跡	横浜市金沢区釜利谷1574-1他	9	崖裾	1986年6月2日～7月5日。 12月1日～12月26日。 1987年6月22日～7月3日		7
7	瀬戸町やぐら群 (金龍院やぐら群)	横浜市金沢区瀬戸10	9	崖裾	1999年8月19日 ～9月17日 1999年12月1日 ～12月28日	一部横穴墓転用	8
8	泥牛庵藤やぐら群	横浜市金沢区六浦1	3	中腹	1986年11月25日 ～11月26日		9
		横浜市金沢区六浦1	2	崖裾	1987年7月22日 ～7月23日		10
9	上行寺裏遺跡 (瀬戸21番地やぐら群)	横浜市金沢区瀬戸21-3	6	崖裾	2001年5月24日 ～6月7日	掘削は4基、2基は測量のみ	11
10	上行寺東やぐら群	横浜市金沢区六浦2丁目2-18	2	崖裾	1996年7月19日 ～9月20日	玉砂利敷きを伴う	12
		横浜市金沢区六浦2丁目4195他	44	中腹 丘陵上	1984年8月～12月。 1986年7月23日 ～12月27日		13
11	六浦大道やぐら群	横浜市金沢区大道1丁目3312他	15	崖裾	1994年7月1日～9月30日。 1995年7月3日～8月23日		14
12	六浦北部遺跡	横浜市金沢区六浦1771他	9	中腹	1981年7月12日 ～8月24日		15
13	六浦三稲地区やぐら群	横浜市金沢区六浦1186	2	崖裾	2000年2月1日～2月9日		16
14	番場ヶ谷やぐら群	鎌倉市十二所字馬場236-2	20	中腹	1985年10月1日 ～11月16日		17
15	十二所稻荷小路遺跡 内やぐら	鎌倉市十二所209	3	崖裾	1990年9月5日～9月20日		18
16	霧ヶ沢やぐら群	鎌倉市十二所馬場185	2	崖裾	1989年2月7日～2月11日		19
		鎌倉市十二所185	2	崖裾	1989年9月1日 ～10月15日		20
17	能満寺跡内やぐら群	鎌倉市十二所稻荷小路114	1	崖裾	2000年6月26日 ～6月29日		21
18	光触寺旧境内遺跡内 やぐら	鎌倉市十二所字佐小路761北側	4	崖裾	1994年2月1日 ～3月30日		22
19	光触寺橋やぐら	鎌倉市十二所稻荷小路83-1	1	中腹	2000年7月12日 ～7月25日・7月28日 ～8月4日		21
20	明石谷やぐら群	鎌倉市十二所明石谷888	6	崖裾	2000年6月13日 ～6月23日・6月30日 ～7月19日・10月26日 ～10月27日		23
		鎌倉市十二所字明石谷922	1	崖裾	1996年2月23日 ～3月27日		24

番号	遺跡名	所在地	基數	立地	調査年月日	備考	文献番号
21	公方屋敷跡内やぐら群	鎌倉市浄明寺御所之内272-1	3	崖掘	1988年11月25日 ~1989年1月10日		25
		鎌倉市浄明寺御所之内272-1	2	崖掘	1989年9月18日 ~10月17日		26
		鎌倉市浄明寺4丁目273-1	3	崖掘	1991年10月10日~12月10日		27
22	宅間ヶ谷やぐら群	鎌倉市浄明寺520	2	崖掘	1989年10月9日 ~11月16日		28
23	報国寺遺跡内やぐら	鎌倉市浄明寺520-1	1	崖掘	1991年7月19日~8月7日		29
24	宅間谷西第2やぐら群	鎌倉市浄明寺宅間2丁目519-4	2	崖掘	2000年8月4日 ~8月18日		30
		鎌倉市浄明寺2丁目520-1	1	崖掘	1997年10月30日 ~11月12日		31
25	瑞泉寺周辺遺跡内やぐら	鎌倉市二階堂644-2	2	崖掘	1989年11月26日 ~12月7日		32
		鎌倉市二階堂680-1	1	崖掘	1990年8月20日 ~9月10日	東側に平場遺構・壇状遺構	33
26	紅葉ヶ谷南やぐら群	鎌倉市二階堂紅葉ヶ谷734	2	崖掘	1999年6月1日~6月8日		34
27	覚園寺総門跡東やぐら群	鎌倉市二階堂会下428-イ	1	崖掘	2000年10月10日 ~11月7日		35
		鎌倉市二階堂字会下地内	1	崖掘	1994年2月1日~3月30日		36
28	会下山西やぐら群	鎌倉市二階堂会下312	2	崖掘	1986年11月1日 ~11月15日		37
29	天王寺跡やぐら	鎌倉市二階堂字中村地内	2	崖掘	1994年12月13日 ~1995年1月31日	壇状遺構	38
30	天王寺跡やぐら	鎌倉市二階堂字中村384-1	1	崖掘	1994年1月10日 ~3月30日		39
31	大倉幕府北遺跡	鎌倉市西御門2丁目816	2	崖掘	1999年9月8日~16日・1 2月13日~20日	玄室床面に 滑鉢状土壙	40
32	杉本城跡内やぐら	鎌倉市二階堂851	2	崖掘	1989年9月25日 ~10月9日		41
33	杉本寺南やぐら	鎌倉市二階堂杉本	1	崖掘	1987年10月6日 ~10月14日		42
		鎌倉市二階堂地内	1	崖掘	1997年11月13日 ~11月19日		43
34	杉本寺周辺遺跡内やぐら	鎌倉市二階堂地内	3	崖掘	1995年1月13日 ~3月15日	うち2基は 副室を伴う	44
35	宝戒寺裏やぐら	鎌倉市小町533-1	1	崖掘	1999年9月1日 ~9月7日	玄室床面に 滑鉢状土壙	45
36	名越山王堂跡	鎌倉市大町3丁目1340	1	崖掘	1986年12月12日 ~1987年3月31日		46
37	山王堂東谷やぐら群	鎌倉市大町3丁目1375	1	崖掘	1999年6月9日~6月23日		47
		鎌倉市大町3丁目1354	5	崖掘	2001年1月5日 ~1月31日	玄室内に切石による基礎	48
38	八雲神社境内	鎌倉市大町1丁目	2	中腹	1993年10月		49
39	長勝寺やぐら	鎌倉市材木座2丁目2148	1	崖掘	1984年7月10日 ~7月17日		50
40	弁ヶ谷東やぐら群	鎌倉市材木座4丁目542	7	崖掘	1999年7月27日 ~8月18日		51
41	新善光寺跡内やぐら	鎌倉市材木座4丁目542-16	2	崖掘	1987年7月23日 ~8月31日		52
		鎌倉市材木座4丁目12	2	崖掘	1998年11月11日 ~1999年1月22日		53
42	弁ヶ谷遺跡やぐら群	鎌倉市材木座4丁目594	1	崖掘	1989年9月14日 ~10月17日		54

番号	遺跡名	所在地	基數	立地	調査年月日	備考	文献番号
43	卉ヶ谷やぐら群	鎌倉市材木座4丁目594-14	4	崖裾	1986年8月27日 ~9月6日・11月22日 ~11月28日		55
		鎌倉市材木座4丁目10-14隣接地	1	崖裾	2000年2月14日 ~2月17日		56
44	福泉やぐら群	鎌倉市今泉3丁目296-1	2	崖裾	1990年9月15日 ~10月15日		57
		鎌倉市今泉3丁目	9	崖裾	1991年10月10日 ~11月10日		58
		鎌倉市今泉3丁目	12	崖裾 中腹	1993年8月30日 ~1994年1月20日		59
		鎌倉市3丁目267	1	崖裾	1998年11月6日 ~11月11日		60
		鎌倉市今泉3丁目282	1	崖裾	1999年7月1日 ~7月6日		61
		鎌倉市今泉3丁目296-1	1	崖裾	1998年2月10日 ~2月16日		62
45	長勝寺跡内やぐら群	鎌倉市山ノ内527	3	崖裾	1998年11月9日 ~11月18日	復盤・奥壁に 壇状施設	63
		鎌倉市山ノ内527	2	崖裾	1999年7月7日 ~7月14日		64
		鎌倉市山ノ内534-口	6	崖裾	2000年8月21日 ~9月29日		65
46	帰源院下やぐら群	鎌倉市山ノ内瑞鹿山388	5	崖裾	1982年10月7日 ~10月15日		66
		鎌倉市山ノ内瑞鹿山355他	2	崖裾	1984年7月3日~7月26日		67
		鎌倉市山ノ内392他	7	崖裾	1985年7月1日~7月31日		68
		鎌倉市山ノ内392	1	崖裾	1986年8月25日 ~8月30日		69
47	西管領屋敷南やぐら群	鎌倉市山ノ内西管領屋敷356	5	崖裾	1983年9月5日 ~10月1日		70
		鎌倉市山ノ内西管領屋敷315他	4	崖裾	1984年7月3日~7月25日		71
		鎌倉市山ノ内西管領屋敷370	1	崖裾	1986年9月4日~9月10日		72
48	正法寺遺跡	鎌倉市山ノ内地内	14	中腹 崖裾	1997年6月24日~11月21日、1998年2月18日~3月31日		73
49	尾藤谷やぐら群	鎌倉市山ノ内1443	8	崖裾	1999年1月6日 ~2月26日		74
50	多宝寺跡やぐら群	鎌倉市扇ヶ谷2丁目268	4	崖裾	1976年3月9日 ~3月24日		75
51	史跡巨福呂坂内やぐら	鎌倉市雪ノ下2丁目地内	1	崖裾	1995年1月18日 ~3月18日		76
		鎌倉市雪ノ下2丁目地内	4	崖裾	1997年1月13日 ~1月31日		77
		鎌倉市雪ノ下2丁目地内	2	崖裾	1995年9月25日 ~10月19日		78
52	無量寺ヶ谷やぐら群	鎌倉市御町39-6	4	崖裾	1991年1月25日 ~8月27日	玄室床面に 摺鉢状ピット	79
53	佐助ヶ谷遺跡内やぐら	鎌倉市佐助2丁目	2	崖裾	1996年2月2日 ~3月9日		80
		鎌倉市佐助2丁目801-1	1	崖裾	1993年1月20日 ~2月26日		81
54	佐助2丁目やぐら群	鎌倉市佐助2丁目地内	1	崖裾	1994年12月15日 ~1995年1月10日		82

番号	遺跡名	所在地	基数	立地	調査年月日	備考	文献番号
55	松谷寺やぐら	鎌倉市佐助1丁目地内	13	崖裾	1993年9月1日～1994年2月28日	土丹による開発、やぐら群の前面に平場	83
		鎌倉市佐助1丁目19-4	3	崖裾	1997年2月10日～3月10日	テラス状平場	84
		鎌倉市佐助1丁目地内	1	崖裾	1997年6月2日～6月24日		85
56	佐助ヶ谷遺跡内やぐら	鎌倉市佐助1丁目	3	崖裾	1989年9月11日～10月25日		86
57	長谷浅間神社下やぐら	鎌倉市長谷5丁目	1	崖裾	1985年8月8日～8月27日		87
58	猿田遺跡内やぐら	鎌倉市猿田町324・311-3	2	崖裾	1988年10月20日～1989年1月7日		88
59	長楽寺南やぐら群	鎌倉市長谷1丁目地内	4	崖裾	1993年9月29日～12月30日		89
60	極楽寺やぐら群	鎌倉市極楽寺2丁目56	4	崖裾	1998年11月30日～12月16日		90
		鎌倉市極楽寺2丁目56	1	崖裾	1999年6月24日～6月29日		91
		鎌倉市極楽寺2丁目56	1	崖裾	1999年7月15日～7月26日		92
61	極楽寺旧境内遺跡内やぐら	鎌倉市極楽寺1丁目地内	1	崖裾	1997年6月11日～6月24日		93
62	極楽寺前やぐら	鎌倉市極楽寺1丁目地内	1	崖裾	1995年3月7日～3月20日	横穴墓転用	94
		鎌倉市極楽寺1丁目地内	2	崖裾	1994年2月10日～4月20日	1基横穴墓転用	95
63	月影ヶ谷北やぐら群	極楽寺3丁目340	2	崖裾	1990年9月25日～10月10日		96
64	極楽寺近世やぐら	極楽寺4丁目986-1先	1	崖裾	1972年2月1日～2月3日		97
65	極楽寺西ヶ谷東側やぐら群	極楽寺4丁目855	4	崖裾	1998年12月4日～12月22日		98
		極楽寺4丁目855-1	1	崖裾	1999年12月14日～12月15日		99
66	極楽寺旧境内遺跡内やぐら	極楽寺4丁目	1	崖裾	1996年1月9日～2月9日		100
67	極楽寺旧境内遺跡内やぐら	鎌倉市極楽寺4丁目地内	2	崖裾	1994年12月20日～1995年1月17日		101
68	大仏切通内やぐら	鎌倉市苗田字馬場ヶ谷2200-5	1	崖裾	1995年5月15日～5月20日		102
69	子守神社皆跡	鎌倉市苗田2022	2	崖裾	1999年2月15日～3月15日	玄室床面に摺鉢状土壤	103
70	岡本砦跡内やぐら	鎌倉市岡本919	1	崖裾	1992年12月10日～12月31日		104
71	神光寺境内やぐら	藤沢市川名字通り町579	2	崖裾	1987年10月29日～11月21日		105
72	川名森久地区遺跡群	藤沢市川名264番地外	2	中腹	1988年5月15日～1989年3月31日、1990年9月4日～1993年2月4日	他の崖裾部で1基調査の記載があるが、図等はなし	106
73	天神やぐら群	横須賀市追浜本町1丁目	5	崖裾	1986年1月		107
		横須賀市追浜本町1丁目-93-2・3	4	崖裾	1986年6月		108

番号	遺跡名	所在地	基数	立地	調査年月日	備考	文献番号	
74	和田山やぐら群	横須賀市追浜本町1	4	崖裾	1992年		109	
		横須賀市追浜本町1	14	崖裾	1993年5月		110	
		横須賀市追浜本町1丁目23-1~2号	3	崖裾	1994年9月		111	
		横須賀市追浜本町1丁目9-11 ~11~4	7	崖裾	1995年11月		112	
		横須賀市追浜本町1	4	崖裾	1996年9月10日 ~9月30日		113	
		横須賀市追浜本町1-19	4	中腹	1996年5月10日		114	
		横須賀市追浜本町1-88	1	崖地	1999年10月1日 ~10月5日		115	
		横須賀市追浜本町1-10	1	崖地	2001年4月3日 ~4月9日		116	
		75 隆屋谷戸やぐら群	横須賀市追浜南町1-2-5	8	崖裾	1999年7月6日 ~8月11日		117
		76 横戸やぐら群	横須賀市浦郷2丁目33	1	中腹	1998年9月22日 ~9月24日		118
77	長浦地区遺跡第3遺跡	横須賀市長浦町1丁目16-2	2	中腹	1991年4月1日 ~6月6日		119	
78	覚栄寺やぐら群	横須賀市走水2丁目地内	1	崖裾	2001年4月10日 ~4月23日		120	
79	亀ヶ崎やぐら群	横須賀市鶴居3丁目817-口3	2	丘陵上	1993年5月29日 ~6月3日		121	
80	長坂やぐら群	横須賀市長坂小字下の山1188 ~1227	11	中腹	1981年5月30日 ~7月		122	
81	佐島やぐら群	横須賀市佐島583~586、548~562	3	崖裾	1985年・1986年		108	
82	沼間やぐら群	逗子市沼間2丁目18-5	2	崖裾	1986年7月		123	
		逗子市沼間2-1427-1	2	崖裾	1990年10月	横穴墓転用	124	
83	敷沢やぐら群	逗子市池子米軍提供用地内	1	崖裾	1993年5月20日 ~9月28日	池子遺跡群 No13地点	125	
		逗子市池子米軍提供用地内	2	崖裾	1994年5月17日 ~8月29日	池子遺跡群 No4地点	125	
84	八坂やぐら群	逗子市池子米軍提供用地内	17	崖裾	1991年9月2日 ~1992年1月30日、 5月8日~8月31日	池子遺跡群 No15地点	126	
		逗子市池子米軍提供用地内	1	崖裾	1992年10月1日 ~1993年1月13日	池子遺跡群 No16地点	126	
		逗子市池子米軍提供用地内	3	崖裾	1992年10月1日 ~1993年1月27日	池子遺跡群 No17地点	126	
		逗子市池子米軍提供用地内	2	崖裾	1992年6月9日 ~9月4月	池子遺跡群 No18地点	126	
85	仲川やぐら群	逗子市池子米軍提供用地内	6	崖裾	1993年2月8日 ~5月30日、 1994年9月1日 ~10月31日	池子遺跡群 No12地点	127	
86	鎌ヶ谷やぐら群	逗子市池子米軍提供用地内	2	崖裾	1991年3月19日 ~4月17月	池子遺跡群 No11地点	128	
87	久木松岡氏裏やぐら群	逗子市久木5丁目4-13号	7	崖裾	1995年10月		129	
88	久木5丁目やぐら群	逗子市久木5丁目	1	崖裾	1991年3月		130	
89	堂地谷やぐら群	逗子市久木5丁目10-11他	2	崖裾	1998年9月28日 ~10月13日~10月15日		131	
		逗子市久木5丁目221-8他	1	崖裾	1999年10月28日 ~10月29日		132	

番号	遺跡名	所在地	基數	立地	調査年月日	備考	文献番号
90	名越遺跡内大谷戸やぐら群	逗子市久木9丁目1834~1他	2	崖裾	2000年6月26日 ~7月11日		133
91	久木4丁目やぐら群	逗子市久木4丁目	2	丘陵上	1997年10月9日 ~11月30日		134
92	げんじが谷やぐら群	逗子市小坪6丁目119・120-6 ・120-7	6	崖裾	1998年8月24日 ~9月9日		135
93	正覚寺やぐら群	逗子市小坪5丁目地内	3	崖裾	2001年7月17日 ~10月21日		136
94	逗子市小坪5丁目やぐら群	逗子市小坪5丁目13-17	1	崖裾	1996年1月		129
		逗子市小坪5丁目13-17	1	崖裾	1997年11月1日 ~12月27日		137
95	海前寺やぐら群	逗子市5-10-17	3	崖裾	1989年		138
		三浦市初声町和田2657~2658	3	崖裾	1989年10月		139
96	和田やぐら群	三浦市初声町和田3275	3	崖裾	1993年7月	やぐら状遺構を含む	140
		三浦市初声町和田3278	1	崖裾	1994年7月	やぐら状遺構	141
		三浦市初声町和田3357・3359	2	崖裾	1995年8月	やぐら状遺構	142
		三浦市初声町和田3296	3	崖裾	1984年7月 ~8月中旬		143
97	矢作やぐら群	三浦市初声町和田3307~3311	4	崖裾	1989年8月	やぐら状遺構を含む	144
		三浦市初声町和田3312~3320	9	崖裾	1992年10月	やぐら状遺構を含む	145
		三浦市初声町和田3343~3355	5	崖裾	1996年9月4日 ~10月4日		146
98	小網代やぐら	三浦市三崎町小網代	1	崖裾	1986年6月		147
99	松輪間口やぐら	三浦市南下浦松輪間口	1	崖裾	1994年9月		148
100	松輪大塚やぐら	三浦市南下浦松輪322-7	1	崖裾	1983年8月		149
		三浦市南下浦松輪300・306	3	崖裾	1987年1月		150
		三浦市南下浦松輪300・312	6	崖裾	1987年6月		151
101	海外やぐら群	三浦市海外町11-6~8	5	中腹	1987年5月		152
102	奉行所跡やぐら群	三浦市三崎1丁目	2	崖裾	1985年6月		153
103	西野やぐら群	三浦市三崎5丁目	2	崖裾	1989年度		154
		三浦市三崎5丁目	4	崖裾	1991年度		145
		三浦市三崎5丁目	1	崖裾	1993年11月		155
104	三崎宮城やぐら群	三浦市三崎5丁目	4	崖裾	1987年		156
		三浦市三崎5丁目10・11	4	崖裾	1988年12月		157
105	歌舞島やぐら群	三浦市白石町3805-1-3-5-8-13	4	崖裾	1998年8月17日 ~8月21日		158
106	長峯所在やぐら	中郡二宮町長峯	1	崖裾	1981年2月22日,3月8日		159

参考文献

- かながわ考古学財団 2001「王神寺 滝やぐら遺跡」「かながわ考古学財团調査報告」125
- 神奈川県教育委員会 1983「横浜市中央本牧荒井地区発見の中世墓地調査報告」「神奈川県埋蔵文化財調査報告」25
- 横浜市教育委員会 1971「横浜市金沢区富岡町長昌寺前横穴群発掘調査報告書」「昭和46年度横浜市埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」横浜市埋蔵文化財調査会
- かながわ考古学財団 1999「鎌谷東6丁目西地区やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告」63
- かながわ考古学財団 2001「鎌谷東6丁目西地区やぐら群(2次)」「かながわ考古学財团調査報告」107
- 東国歴史考古学研究所 1998「鎌谷やぐら群」「中世石室造構の調査Ⅱ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
- 武部晋光・近江道成陽 1987「鎌谷やぐら遺跡」
- かながわ考古学財団 2000「横浜市町やぐら群・横穴墓」「かながわ考古学財团調査報告」86
- 神奈川県立埋蔵文化財センター・神奈川県土木部横浜治水事務所 1987「泥牛庵塚やぐら群」
- 神奈川県立埋蔵文化財センター・神奈川県土木部横浜治水事務所 1988「泥牛庵塚やぐら群Ⅱ」
- かながわ考古学財団 2001「上行寺裏遺跡(雨戸12番地やぐら群)」「かながわ考古学財团調査報告」124
- 東国歴史考古学研究所 1998「上行寺東やぐら群」「中世石室造構の調査Ⅰ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
- 上行寺東やぐら群遺跡調査会 2002「上行寺東やぐら群遺跡発掘調査報告書」
- 財團法人横浜市ふるさと歴史財団 1987「六浦大道やぐら群」
- 岡崎文喜他 1982「六浦北郷遺跡」
- かながわ考古学財団 2000「六浦三段地区やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告」99
- 水井正憲他 1986「馬場ヶ谷やぐら群発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会
- 十二所福荷小路遺跡内やぐら発掘調査会 1999「十二所福荷小路道路内やぐら」「平成2年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
- 十二所福荷小路道路内やぐら発掘調査会 1990「十二所福荷小路道路内やぐら」「昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
- 十二所福荷小路道路内やぐら発掘調査会 1990「十二所福荷小路道路内やぐら」「昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
- かながわ考古学財団 2001「光触寺跡やぐら・大江稻荷跡所在やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告」113
- 東国歴史考古学研究所 1998「光触寺旧境内道路内やぐら」「中世石室造構の調査Ⅱ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
- かながわ考古学財団 2001「一院院跡所在やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告」112
- 東国歴史考古学研究所 1998「明王院門前遺跡内やぐら」「中世石室造構の調査Ⅱ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
- 公方旗敷跡内やぐら発掘調査会 1990「公方旗敷跡内やぐら」「昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
- 公方旗敷跡内やぐら発掘調査会 1991「公方旗敷跡内やぐら」「平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
- 公方旗敷跡内やぐら発掘調査会 1993「公方旗敷跡内やぐら」「平成3年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
- 宅岡ヶ谷やぐら群発掘調査会 1991「宅岡ヶ谷やぐら群」「平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
- 東国歴史考古学研究所 1994「報国寺遺跡内やぐら発掘調査報告書」東国歴史考古学研究所調査研究報告第1集
- かながわ考古学財団 2001「毛間谷西2丁目やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告」1-14
- 東国歴史考古学研究所 1999「報国寺遺跡」「中世石室造構の調査Ⅲ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第22集
- 瑞泉寺周辺遺跡内やぐら発掘調査会 1991「瑞泉寺周辺遺跡内やぐら」「平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
- 瑞泉寺周辺遺跡内やぐら発掘調査会 1992「瑞泉寺周辺遺跡内やぐら」「平成2年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
- かながわ考古学財団 2000「鎌倉城(二階堂紅葉ヶ谷)所在やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告」88
- かながわ考古学財団 2001「覚闘寺経蔵跡やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告」115
- 東国歴史考古学研究所 1998「No.331遺跡内やぐら」「中世石室造構の調査Ⅱ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
- 二所法華下やぐら群発掘調査会 1987「会下山西下やぐら発掘調査報告書」
- 東国歴史考古学研究所 1996「天王寺跡やぐら」「中世石室造構の調査」東国歴史考古学研究所調査研究報告第7集
- 東国歴史考古学研究所 1998「天王寺跡やぐら」「中世石室造構の調査Ⅱ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
- 大倉幕府北邊跡発掘調査会 1999「大倉幕府北邊跡発掘調査報告書」
- 杉本城跡内やぐら群発掘調査会 1991「杉本城跡内やぐら」「平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
- 報国寺跡内やぐら群発掘調査会・杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査会 1988「報国寺境内やぐら・杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査報告書」
- 東国歴史考古学研究所 1999「杉本寺やぐら群」「中世石室造構の調査Ⅲ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第22集
- 東国歴史考古学研究所 1996「杉本寺周辺遺跡内やぐら」「中世石室造構の調査」東国歴史考古学研究所調査研究報告第7集
- 神奈川県教育委員会 2000「鎌倉市小町沂在通称「紅葉山やぐら」の調査」「神奈川県埋蔵文化財調査報告」42
- 山王堂跡発掘調査会 1990「名越・山王堂跡発掘調査報告書」
- かながわ考古学財団 2000「鎌倉城(大町3丁目)所在やぐら」「かながわ考古学財团調査報告」89
- かながわ考古学財団 2001「山王堂東谷やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告」117
- 東国歴史考古学研究所 1994「中世山腹墓所遺跡の調査」No.302遺跡内やぐら(八雲神社境内)発掘調査報告書」東国歴史考古学研究所調査研究報告第8集

50. 長勝寺遺跡（やぐら）発掘調査団 1985「長勝寺遺跡（やぐら）発掘調査報告書」
51. かながわ考古学財団 2000「弁ヶ谷東やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告書」94
52. 新善光寺跡やぐら発掘調査団 1988「新善光寺跡やぐら発掘調査報告書」
53. かながわ考古学財団 1999「鎌倉城（No87）所在やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告書」74
54. 弁ヶ谷遺跡やぐら群発掘調査団 1991「弁ヶ谷遺跡やぐら群」「平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
55. 相模考古学研究所 1986「弁ヶ谷やぐら群」
56. かながわ考古学財団 2000「弁ヶ谷やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告書」98
57. №342遺跡内やぐら発掘調査団 1992「№342遺跡内やぐら」「平成2年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
58. №342遺跡内やぐら発掘調査団 1993「№342遺跡内やぐら」「平成3年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
59. 福泉やぐら群発掘調査団 1998「福泉やぐら群」「平成5年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
60. かながわ考古学財団 1999「福泉遺跡（№342）所在やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告書」70
61. かながわ考古学財団 2000「福泉やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告書」91
62. 東国歴史考古学研究所 1999「福泉遺跡」「中世石窟造像の調査Ⅰ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第22集
63. かながわ考古学財団 1999「長勝寺跡（№88）所在やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告書」71
64. かながわ考古学財団 2000「長勝寺跡所在やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告書」92
65. かながわ考古学財団 2001「長勝寺跡内やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告書」116
66. 円覚寺境内西やぐら群発掘調査団 1983「円覚寺境内西やぐら群発掘調査報告書」
67. 神奈川県立郷土文化財センター 1984「西管領屋敷やぐら群」神奈川県立郷土文化財センター調査報告6
68. 神奈川県立郷土文化財センター 1985「湯原院下やぐら群」神奈川県立郷土文化財センター調査報告9
69. 相模考古学研究所 1986「縁側院下第8号やぐら」
70. 西管領屋敷南やぐら群発掘調査団 1984「西管領屋敷南やぐら群発掘調査報告書」
71. 神奈川県立郷土文化財センター 1984「西管領屋敷やぐら群」神奈川県立郷土文化財センター調査報告6
72. 相模考古学研究所 1986「西管領屋敷南やぐら群」
73. かながわ考古学財団 1999「鬼怒谷やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告書」64
75. 多宝寺跡遺跡発掘調査団 1976「多宝寺跡遺跡発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会
76. 東国歴史考古学研究所 1998「鎌倉巨福呂坂内やぐら」「中世石窟造像の調査」東国歴史考古学研究所調査研究報告第7集
77. 東国歴史考古学研究所 1998「鎌倉巨福呂坂内やぐら」「中世石窟造像の調査Ⅱ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
78. 東国歴史考古学研究所 1998「鎌倉巨福呂坂内やぐら」「中世石窟造像の調査Ⅲ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第22集
79. 鎌倉市教育委員会 1992「無量寺跡（№196）」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」8
80. 佐助ヶ谷遺跡内やぐら発掘調査団 1997「佐助ヶ谷遺跡内やぐら」
81. 佐助ヶ谷遺跡内やぐら発掘調査団 1994「佐助ヶ谷遺跡内やぐら」「平成4年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
82. 東国歴史考古学研究所 1998「佐助2丁目やぐら群」「中世石窟造像の調査」東国歴史考古学研究所調査研究報告第7集
83. 東国歴史考古学研究所 1998「松谷寺跡内やぐら」「中世石窟造像の調査Ⅰ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
84. 東国歴史考古学研究所 1998「松谷寺跡内やぐら」「中世石窟造像の調査Ⅱ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
85. 東国歴史考古学研究所 1998「松谷寺跡内やぐら」「中世石窟造像の調査Ⅲ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
86. 佐助ヶ谷遺跡内やぐら発掘調査団 1991「佐助ヶ谷遺跡内やぐら」「平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
87. 高徳院跡遺跡（やぐら）発掘調査団 1986「高徳院跡遺跡（やぐら）発掘調査報告書」
88. 笹道跡内やぐら発掘調査団 1990「笹道跡内やぐら」「昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
89. 東国歴史考古学研究所 1998「長楽寺南やぐら群」「中世石窟造像の調査Ⅱ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
90. かながわ考古学財団 1999「極楽寺やぐら群（№128）」「かながわ考古学財团調査報告書」72
91. かながわ考古学財団 2000「極楽寺やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告書」90
92. かながわ考古学財団 2000「極楽寺やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告書」93
93. 東国歴史考古学研究所 1998「長楽寺南やぐら群」「中世石窟造像の調査Ⅱ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
94. 東国歴史考古学研究所 1996「極楽寺境内遺跡内櫛穴塗」「中世石窟造像の調査」東国歴史考古学研究所調査研究報告第7集
95. 東国歴史考古学研究所 1998「極楽寺境内遺跡内やぐら」「中世石窟造像の調査Ⅱ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集
96. 極楽寺境内遺跡内やぐら発掘調査団 1992「極楽寺境内遺跡内やぐら」「平成2年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
97. 鎌倉市教育委員会 1983「4.極楽寺境内北やぐら」「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報」I
98. かながわ考古学財団 1999「一軒道跡（№293）所在やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告書」73
99. かながわ考古学財団 2000「一軒道跡所在やぐら群」「かながわ考古学財团調査報告書」100
100. 極楽寺旧境内遺跡内やぐら発掘調査団 1998「極楽寺旧境内遺跡内やぐら」
101. 東国歴史考古学研究所 1996「極楽寺旧境内遺跡内やぐら」「中世石窟造像の調査」東国歴史考古学研究所調査研究報告第7集
102. 東国歴史考古学研究所 1999「大仏通跡（№293）所在やぐら群」「中世石窟造像の調査Ⅲ」東国歴史考古学研究所調査研究報告第22集
103. 子守神社跡遺跡発掘調査団 2000「子守神社跡遺跡発掘調査報告書」
104. 国分寺跡内やぐら発掘調査団 1994「国分寺跡内やぐら」「平成2年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
105. 藤沢市教育委員会 1989「神光寺境内やぐらの調査」「藤沢市文化財調査報告」第24集

106. 川名森久地区遺跡発掘調査団 1996 「藤沢市川名森久地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」
107. 横須賀市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1986 「横須賀市天神やぐら群の調査」
108. 横須賀市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1986 「横須賀市天神やぐら群・佐島やぐら群の2次調査」
109. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1993 「横須賀市和田山やぐら群の調査」
110. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1994 「和田山やぐら群の第2次調査」
111. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1995 「和田山やぐら群の第3次調査」
112. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1996 「和田山やぐら群の第4次調査」
113. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1997 「和田山やぐら群の第5次調査」
114. 横須賀市教育委員会 1998 「和田山やぐら群（法華寺山門地点）」「横須賀市文化財調査報告書」第32集
115. かながわ考古学財団 2000 「和田山やぐら群跡」「かながわ考古学財団調査報告」85
116. かながわ考古学財団 2001 「和田山やぐら群跡II」「かながわ考古学財団調査報告」119
117. かながわ考古学財団 2000 「陣谷谷口やぐら群跡」「かながわ考古学財団調査報告」84
118. 横須賀市教育委員会 2000 「横須賀市やぐら群発掘調査報告書」「横須賀市文化財調査報告書」第35集
119. 横須賀市教育委員会 1993 「長瀬地区道路3号跡」「横須賀市文化財調査報告書」第27集
120. かながわ考古学財団 2001 「光明寺やぐら群跡」「かながわ考古学財団調査報告」120
121. 横須賀市教育委員会 1992 「白山・鬼ヶ崎やぐら群」「横須賀市文化財調査報告書」第26集
122. 長坂やぐら群発掘調査団 1981 「横須賀市長坂やぐら群の調査」
123. 横須賀市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1988 「逗子市沼間やぐら群の調査」
124. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1991 「逗子市久木1丁目横穴群・沼間やぐら群の調査」
125. かながわ考古学財団 1997 「池子遺跡群V」「かながわ考古学財団調査報告」27
126. かながわ考古学財団 1997 「池子遺跡群VI」「かながわ考古学財団調査報告」26
127. かながわ考古学財団 1999 「池子遺跡群VII」「かながわ考古学財団調査報告」43
128. かながわ考古学財団 1999 「池子遺跡群VIII」「かながわ考古学財団調査報告」44
129. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1996 「逗子市久木山西浜御殿やぐら群・逗子市小坪5丁目やぐら群の調査」
130. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1992 「逗子市久木5丁目やぐら群・三浦市和田やぐら群第4次」
131. かながわ考古学財団 1998 「逗子市地谷やぐら群」「かながわ考古学財団調査報告」62
132. かながわ考古学財団 2000 「紫葉谷やぐら群」「かながわ考古学財団調査報告」97
133. かながわ考古学財団 2001 「名越遺跡内大谷口やぐら群」「かながわ考古学財団調査報告」106
134. 久木4丁目やぐら群調査団 1998 「久木4丁目横穴・やぐら群の調査」
135. かながわ考古学財団 1999 「逗子市けんじが谷横穴墓群及びやぐら群」「かながわ考古学財団調査報告」62
136. かながわ考古学財団 2000 「正覚寺やぐら群跡」「かながわ考古学財団調査報告」132
137. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1997 「高尾市小坪4丁目やぐら群の第2次調査」
138. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1989 「海前寺やぐらの調査」
139. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1989 「三浦市和田やぐらの第3次調査」
140. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1989 「三浦市和田やぐらの第5次調査」
141. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1995 「三浦市和田やぐらの第6次調査」
142. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1996 「三浦市和田やぐらの第7次調査」
143. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1984 「三浦市矢作やぐら群の調査」
144. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1990 「三浦市矢作第2やぐら群の調査」
145. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1991 「三浦市矢作第3やぐら群の調査・西野やぐら群第2次調査」
146. 矢作やぐら群遺跡調査団 1997 「矢作第4やぐら群の調査」
147. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1986 「三浦市小網代やぐらの調査」
148. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1995 「松輪口やぐらの調査」
149. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1984 「三浦市松輪大畠やぐらの調査」
150. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1987 「三浦市松輪大畠やぐら群の2次調査」
151. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1987 「松輪大畠やぐら群の3次調査」
152. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1987 「三浦市宮外やぐら群の調査」
153. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1985 「三浦市奉行所跡やぐら群の調査」
154. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1990 「三浦市二町谷堀穴墓・西野やぐら群・松輪坪井横穴群の調査」
155. 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1994 「西野やぐら群の第3次調査」
156. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1987 「三浦市三崎宮城やぐら群の調査」
157. 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1989 「三浦市三崎宮城やぐら群の2次調査」
158. かながわ考古学財団 1999 「三浦市歌舞島やぐら群」「かながわ考古学財団調査報告」62
159. 錦倉考古学研究所 1981 「中都二ノ宮町長塚所在「やぐら」調査概報」「錦倉考古」No7

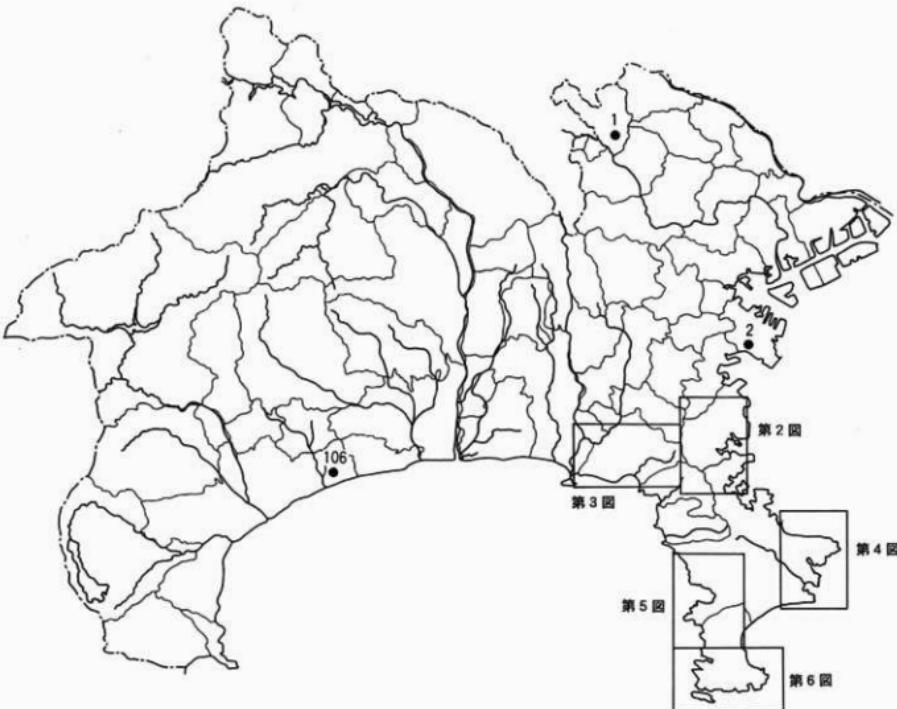


第4図

第5図

第6図

第3図



第1図 神奈川県内のやぐら分布図（1）



第2図 神奈川県内のやぐら分布図(2)



第3図 神奈川県内のやぐら分布図（3）

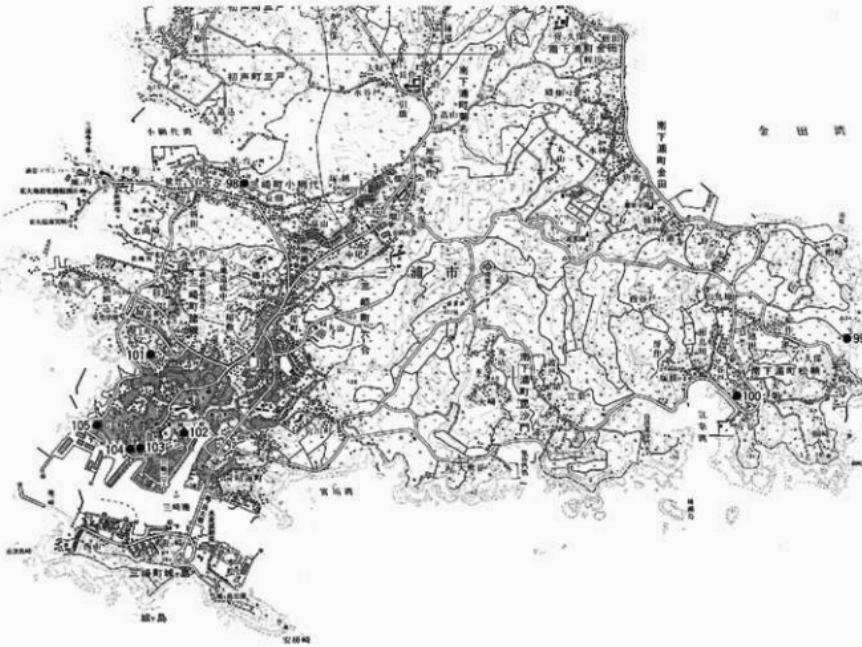


第4図 神奈川県内のやぐら分布図（4）

神奈川県内の「やぐら」集成（1）



第5図 神奈川県内のやぐら分布図（5）



第6図 神奈川県内のやぐら分布図（6）

神奈川県出土の土製品

近世プロジェクトチーム

1.はじめに

昨年の県内近世遺跡の再集成に基づき、本年は遺跡出土の土製品を取り上げることとした。ここで取り扱う土製品とは、土鍋や焰燈、火鉢といった日常生活用品を除いた、人形・ままごと道具・箱庭道具、そしていわゆる泥面子と称される遊・玩具の類である。これら遊・玩具は、土製のほか、木製・紙製・布製・陶磁製・貝製・石製・骨角製・ガラス製・金属製などさまざまな材質で作られているが、出土資料としては、腐食しにくく、かつ大量に作られたという点で土製品が他の圧倒しているといえよう。土製をはじめとする遊・玩具は江戸はもとより、名古屋・京都・大阪などの近世都市の諸遺跡で多量の出土をみており、種別ごとの編年などとどまらず、生産地や製作技法の検討、さらには出土遺跡・遺構の性格の追究といった試みがなされているところである。一方、近世諸都市の周辺地域については、その出土量も少なく、一部の論考を除いて、あまり注目を受けない存在であったといえよう。

このような状況にあって、神奈川県下出土の近世土製品を集成するのも一考と考え、今回のテーマとすることとした。土製品は表面採集や表土中からの出土が多く、近世以外の時代の遺跡の報告書に報告されている可能性も多く、県下で刊行されている膨大な報告書から一点も漏らさず集成するというのは、きわめて困難な状況であることから、とりあえず、近世遺跡の集成を行った『かながわの考古学』第5集および同書「研究紀要7」の出土遺物欄にある土製品を当たることとしたが、報告書に実測図がなく、写真や記述のみにとどまっていたり、実測図があっても小破片のため、全形がわからないものなど相当数存在することが判明した。このため、集成することは困難と判断し、ここでは県下出土の土製品の主だったものを取り上げて概観することとした。

なお、県内の遺跡報告書の引用文献については、「かながわの考古学」第5集および同書「研究紀要7」の文献欄を参照願いたい。

2.研究史

考古学資料として早くから着目されたのは土製品の中でも、いわゆる泥面子と称されるものである。古くは1928年、首藤岩泉氏による円盤状の泥面子に描かれたモチーフを研究対象としたものがあるが（首藤1928）、本格的な研究は、1970年代前半になってからのことである。金刺伸吾氏は千葉県西部の市川市・船橋市などの一帯に広がる下総台地の畑地で泥面子が多数表面採集されることに着目され、五穀豊穰を願って農民が畠地に播いたという播畑説を紹介するとともに、江戸市中で大量に排泄された下肥が船で運搬され、下総台地に金肥として大量に運び込まれたという歴史的事実から、江戸市中で下肥の中にいわゆる泥面子が混入したとする下肥混入説を唱えられた（金刺1973・市立市川歴史博物館1983）。この説は、江戸のリサイクルといった問題を考古学的に知りうる具体的な事象として興味深い論考と考えるが、一部否定的な見解も示されている。

1970年代、各地において大規模な発掘調査が行われるようになり、いわゆる泥面子の出土例も増え、増子

陽子氏は千葉県内の遺跡から出土した泥面をについて集成し、文様や形状に着目して分類を行なっている（増子1978）。

1980年代から東京都内の近世遺跡の調査が盛んに行われるようになり、泥面をはじめとする土製品の出土例が増加するが、さわめて注目される論考は神奈川県内の遺跡の報告書であった（富永・大村1985）。茅ヶ崎市の新湘南国道建設に伴う7地点の遺跡から出土したいわゆる泥面について、早崎 薫・宮浦文二の両氏が考察されたもので、泥面の定義として、「型抜きによる様々な文様・意匠を持つ2~3.5cm大の素焼きの土製品の総称」とし、それら泥面の出土層位に着目され、現在のところ宝永スコリア層より下位層からの出土はまったくなかったという点を強調している。また泥面を2類に大別され、I類は人物、神仏、動物、調度などを型抜きしたもの、II類は円盤状を呈し、上底面に文様などを型抜きしたもので、前者が40点中38点、後者は2点のみであった。I類はさらに細分され、1は人物、神仏などの顔面を型抜きしたもので、大型（長さ3.5cmくらい a類）と小型（2~2.5cmくらい b類）に細分、2は人物、神仏などの全体像を、3は動物、4は調度などの形態をそれぞれ型抜きしたものとし、個々に詳細な観察を加えられている。さらに両氏は、泥面の名称や使用目的について文献史料を用いて綿密な考察を加えられ、I類は文献にみられる「面模」という名称、II類は「面打」に該当するとされ、ここに、初めて考古学的に分類された泥面が、それぞれに文献に基づいた名称を付与されることとなった。また江戸では「面打」が、下総や相模など江戸近郊では「面摸」が優勢であるという地域的分布の違いを指摘され、これをどのように解釈するのか、そして生産地より消費地・消費者への流通過程を解明することの2点を今後の研究課題とされている。

一方、東京都内では発掘資料の急増に伴い、80年代後半から90年代にかけて、いくつかの論考が公にされている。新宿区三栄町遺跡でも（東京都新宿区1988）、加納 梓氏がいわゆる泥面について、円盤状を呈するものと人面、動物面、道具等を型抜きしたものの2群に分類し、前者を「面打」、後者は「面摸」のほか「芥子面」に相当するとされ、直径値による出現頻度をグラフ化し、前者は直径2.0cm以下、2.5cm前後、3.0cm以上のものの3類に、後者は2.6~3.9cmと1.9~2.3cmのものの2類に分けているのが注目される。また扇浦正義氏は同遺跡出土の一連の近世遺物の変遷において、遊・玩具を中心とした土製品についての変遷を提示され、「面打」については、18世紀代に中型が出現し、19世紀代に入ると小型・大型とバリエーションが広がるとされた。このように、土製品についても縦年が示されたという点で評価しうるもの、「芥子面」の出現を19世紀前葉に求めている点、文献史料とは多少齟齬がみられるようである。

このように、これまで泥面として報告されていた土製品は、ここにきて「面打」、「面摸」、「芥子面」という個別の名称が付されるようになったことに対し、石神裕之氏は「泥面」は「器種」を表す用語として考える必要がある」とし、上記の3種に大別ができるとした（石神1996・1997）。すなわち、「円盤状を呈するものは「面打」、人物などの「顔」をかたどるのは「芥子面」、そして泥などを詰めて抜く遊びといわれるものは「面摸」とする」とされた。そして、「面打」の直径値による出現頻度を検討し、三栄町遺跡の3分類に蓋然性があるとし、21~23mmが標準とされた。また関西地域の分析も試みられ、京・大阪では27~29mmの大型品に集中することが明らかにされた。さらに「面打」のモチーフによる分類、武家地と町人地での出土内容の比較などがなされている。特に、旗本・御家人押領地であった遺跡からは「面打」の出土量が多く、「芥子面」は町人地からの出土例がなく、関西系の遊びとして、その地域に關係した住民が多く居住していた紀尾井町遺跡・三栄町遺跡などから出土していることなど注目すべき分析がなされている。

このほか、安芸慈子氏は東京大学構内遺跡を中心に、土人形をはじめとする土製品の製作技法や出土遺跡

の性格の検討、さらには共伴陶磁器の年代から土製品の編年も試みられており（安芸1991・2000ほか）、近年はもっぱら、江戸の遺跡中心に土製品の研究が進展しているといったところが現状である。

3. 泥面子について

以上の研究史を概観し、問題になるのは、いわゆる泥面子と称されるものが、報告者によってまちまちに解釈されていることである。泥面子の定義としては、新湘南国道で規定されたように「型抜きによる様々な文様・意匠を持つ2~3.5cm大の素焼きの土製品の総称」としてとらえてよいと考えるが、第1図に示したように、いわゆる泥面子やその他の土製品の個別名称には統一が取れていないのが現状である。

そもそも泥面子という表現が一般的に用いられるようになった背景としては、早崎・宮滝両氏が指摘しているように、近代以降に出現する「鉛面子」、「紙面子」に対する相対的な名称であって、泥面子という呼称は近代以降に求められるのではないかとされている。となると、泥面子という呼称は破棄し、江戸時代の呼称が文献史料などから判るのであれば、それを用いた方がよいといえよう。早崎・宮滝両氏にも取り上げられている『嬉遊笑覽』（喜多村信節 文政13（1830）年）をもう一度見てみることとしたい。同書の巻六下、児戲の部「めんかた」の項には、

「今小兒玩物のめんかたは面摸なり瓦の摸に土を入れてぬくなり、また芥子面とて唾にて指のはらに付る 小き瓦の面ありしが、今はばかりて銭のように紋形いろいろ付たる面打となれり」（下線筆者）

とあり（喜多村1979）、1830年当時、小兒の玩具として「面摸」と「面打」があり、「面打」以前には「芥子面」もあったことがうかがえる。これらは、従来いわゆる泥面子と称される範疇に属するものといってよいと考えられ、「銭のように紋形いろいろ付たる面打」が出土資料にある「円盤状を呈し、上底面に文様などを型抜きしたもの」に相当することはまず異論のないところで、これについては第1図においても沙留遺跡を除いて一致をみているところである。問題になるのは、「面摸」で、これについては、「守貞漫稿」（喜田川守貞 嘉永6（1853）年）引用の享保12（1727）年の目附絵に

「めんがた 大阪下り」

とあり（喜田川1996）、18世紀前半に存在していたことが知れる。さらに「守貞漫稿」において「面形壳 今ハ壳巡ラズ 番太郎ノ店等ニテ壳之土形也 小兒此形ニ土ヲ納レアクレハ面トナルモノ也 今制ハ甚タ小也」（下線筆者）

とあり、「嬉遊笑覽」にみられる「面摸」と「守貞漫稿」の「面形」はカタの字が異なるものの、下線部に記されているように、いずれも型を取るための土形、すなわち離型のことであって、土を入れて抜いてでき

茅ヶ崎市新幹南国道1985 新宿区三栄町遺跡1988	面打	面摸	-	-	基石	-
新宿区内藤町遺跡1992 文京区御徒町遺跡1996	面打	面摸・芥子面	土製離型	土製面	基石	土玉
港区内谷遺跡2000 研究紀要8 かながわの考古学	面打	芥子面	土製型	-	基石	-
	面打	芥子面	面摸	-	基石	-
	面打	芥子面	型	面	基石	-
	面打	芥子面	面摸	小模	基石状土製品	土玉

第1図 泥面子およびその他土製品の呼称例

た完成品、すなわち雄型ではないようである。にもかかわらず、早崎・宮滝両氏は「『嬉遊笑覧』の述べるごとく、このような「めんがた」を用いて製作した土製の面もまた「面模」と称されるようになっていったようである」としているが、同書の記述から、このように読み取ることは一切できない。

新宿区三栄町遺跡をはじめ、近年、都内の遺跡では型抜き用の型の出土が報じられており、それを「土製雄型」とか「土製型」、「型」としているが、これがまさに「面模」であるといえよう。それでは早崎・宮滝両氏が「面模」に相当するとしたI類、すなわち人物、神仏、動物、調度などを型抜きし、さらに焼成したものについては、どのように呼称すればよいであろうか。再度、「嬉遊笑覧」をみてみると、「芥子面」とて唾にて指のはらに付る小さき瓦の面」という記載が注目されよう。両氏は、現存する「芥子面」はいずれも極彩色であること、裏面に指が入るようくぼんでいることをあげられ、出土資料に該当品はないとして、それ以上言及していないが、I-1-bと分類した小型の人物面はまさに「芥子面」と称してよいものと考えられる。というのも、近年の都内の報告例をみると白色とか赤色の彩色残存といった記載が多くあり、彩色が施されていたこと、裏面のくぼみは京都など関西の製品では顕著であるが、江戸で生産されたとみられる製品はくぼみがあるかないか不明瞭なものが主体であることなどが明らかになっているからである。それでは、I-1-aとした長さ3.5cmほどの大型の面やI-2~4の人面でないモチーフのものについてはどのように呼称したらよいのであるか。「芥子面」の芥子は、「芥子粒のような」といった表現に使われるよう、ごく小さなものといった意味合いがあるものと思われ、長さ3.5cmともなると唾だけに指に貼りつくかどうか疑わしく、「芥子面」という呼称はふさわしくないように思われるが、製作技法上は「芥子面」となんら変わりはない、同じ系譜にあることから、ここでは「芥子面」としておきたい。ただし、「芥子面」の用途は指人形から別の用途へと変わっている可能性は否定できないところであろう。

このほか、いわゆる泥面子の範疇には入らないと思われるが、用語が統一されていない土製品についてもここで触れておきたい。一つは径5cm前後の大きさで、両耳付近などに小穴のあるあいた面である。都内の報告例では、「土製面」とか「面」とされているもので、小児が顔にかぶるには小さすぎるし、どのように使用されたのか、また文献史料からの呼び名も不明であるが、お面であることに変わりではなく、ここでは「小面」としておきたい。さらに「碁石」や「彈碁玉」として報告されている土製品の中には、黒や白に彩色され、明らかに碁石として使用された可能性のあるものも存するが、石製や貝製のいわゆる碁石でないこと、博打やおはじきの前身としての使用も考えられることから「碁石状土製品」としておきたい。またビー玉の前身ともいわれる「土玉」については、用途・名称が明らかでなく、これまでの報告に倣ってその形状からの呼称で通すこととしたい。

4. 県内出土の土製品について

出土状況

神奈川県内における土製品の出土例は横浜市をはじめとする14市1村約60遺跡（地点）を集めることができた。城下町である小田原市での出土事例が多いのは当然のことと思われるが、近世集落が広範囲にわたって調査された逗子市池子遺跡群や清川村宮ヶ瀬遺跡群でも比較的多く出土している。また、藤沢市・茅ヶ崎市・平塚市・伊勢原市等県央地域での出土例も目立つ。出土遺跡は第1表に示したとおりであるが、冒頭にも述べたように、これで県内すべての遺跡を網羅しているわけではない。

第1表 土製品出土遺跡一覧

遺跡名	図No	遺跡名	図No
藤沢市受地だいやま遺跡	84	小田原市小田原城三の丸	5
横浜市オミネ屋敷	33・43・149	大久保雅楽寺跡第Ⅰ・Ⅱ地点	
横浜市宿毛山遺跡	58	小田原市小田原城三の丸遺跡	2・35・36・75
横浜市宿毛山遺跡	82	(妙浦平太夫跡第Ⅲ遺跡)	
川崎市宮前遺跡	21・88・131	小田原市小田原城下中宿町遺跡群Ⅲ地点	74・148
逗子市池子遺跡群No.1-C地点	45・66・69・86・102	小田原市小田原城下中宿町遺跡群Ⅳ地点	3・37・38・47・55・56・62・70・71・79・147
逗子市池子遺跡群No.1-D地点	16・97		
逗子市池子遺跡群No.1-E地点	6・10・11・14・15・23・25・26・83・99・101・126	小田原市小田原城下横手橋町遺跡群Ⅴ地点	31・32・34・50・53・59・72・78・146
逗子市池子遺跡群No.5地点	81・87・134	小田原市小田原城下横手橋町遺跡群Ⅵ地点	1・42・150・166
逗子市池子遺跡群No.7地点(東地区)	8	小田原市感応寺址	48
逗子市池子遺跡群No.10地点	13・17・22・60・85・113・130	相模原市中村遺跡B地点	18
逗子市池子遺跡群No.10地点	44・138	厚木市東町遺跡	12・19・49・52
逗子市池子遺跡群No.10地点	27・29・30	大和町下鶴間古墳跡(国道246号線内)	46・63・64・76・80・129
鎌倉市元気寺境内知床庵	11	芥子園	
藤沢市川口北4610番地跡第4・5地点	9	伊勢原市神戸・上宿遺跡(No.15)	54・73・140
藤沢市美術館敷地跡(伏見山内遺跡)	95・96・104・106・108・111・115	伊勢原市坪ノ内・宮ノ前遺跡(No.16・17)	135
藤沢市本八人こぎれ遺跡	57	伊勢原市坪ノ内・貝ナ度遺跡(No.18・19・43)	7
藤沢市南郷野遺跡	68	伊勢原市笠置・谷戸遺跡(No.20・42)	65・112・137
藤沢市用賀ハイハイス開発遺跡群(若狭前遺跡)	39・100・117	伊勢原市不引引遺跡(No.21・22)	119
茅ヶ崎市上ノ町・山口遺跡	90・93・105・127・136・141・143	伊勢原市上船場・メ引連遺跡(No.40)	28
茅ヶ崎市久保・山口遺跡	98・103・114・116・125・142	伊勢原市八幡山戸門遺跡	121
茅ヶ崎市宮ノ庭遺跡	91	伊勢原市石川・羽黒山遺跡(屏)	芥子園
茅ヶ崎市横須賀市元町開闢六回C・D遺跡、1回A遺跡、二回B・E遺跡、上ノ町遺跡		伊勢原市坂止山遺跡	芥子園
平塚市真庭北金目遺跡	40・41	海老名市大谷山遺跡	128
平塚市神奈久保遺跡	4・67・92・122・124・132・133	綾瀬市吉岡遺跡群(八区)	94・109・123
平塚市根岸岡小糸阿佐畠遺跡	120	清川市宮ヶ瀬遺跡群南(No.2)遺跡	167・172
平塚市原口遺跡	110・118・138	清川市宮ヶ瀬遺跡群南(No.6)遺跡	24・51・61・144・145
平塚市宮ノ庭遺跡	土人形	清川市宮ヶ瀬遺跡群北(No.10)遺跡	20
		清川市宮ヶ瀬遺跡群北(No.3)遺跡	ままごと道具

※国化し得なかった遺跡の資料については図No欄に製品名を記した。

土製品を出土した遺跡の性格は、武家屋敷(大久保雅楽寺跡・杉浦平太夫跡)、町人地(欄干橋町遺跡・中宿町遺跡)、商人屋敷(東町遺跡)、名主屋敷(オミネ屋敷)、村落(池子遺跡群・宮ヶ瀬遺跡群等)と様々であり、土製品が身分を問わず人々の生活の中に広く漫透していたことがうかがえる。

各遺跡からの出土量は、都内の江戸遺跡のように1遺跡から100点以上が出土している例はなく、中宿町遺跡第Ⅲ地点、欄干橋町遺跡第Ⅳ地点、池子遺跡群No.1-E地点等で20~30点出土しているのが最多で、多くは10点にも満たない状況である。そのため、今回得ることの出来た資料をすべて集めても、新宿区三栄町遺跡や同区内藤町遺跡等の1遺跡の総出土数に及ばない。

遺構内での出土状況は、溝状遺構・戸門跡・地下室・堅穴状遺構・土坑・ピット群・池跡・土坑墓等の遺構から出土しているものと遺構外出土のものがあり、量的には後者が多く認められる。遺構外資料は、表土や耕作土中から出土することが多く、遺構出土資料は、土坑墓に埋納されたものを除くと陶器等の生活用具とともに廃棄された状態で出土することが多い。

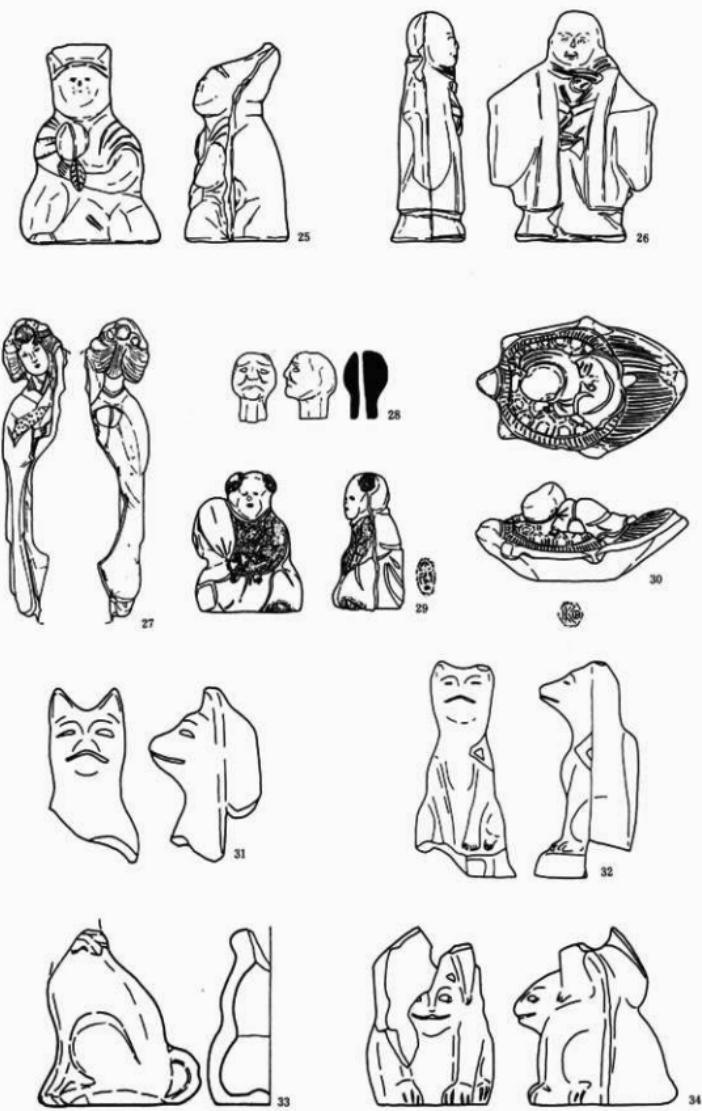
種別ごとの出土状況

今回得られた資料を、①土人形、②ままごと道具、③箱庭道具、④面打・芥子面・面模、⑤その他に分類し、比較的の遺存状態の良好なものを縮尺1/2に統一して第2~7図に示した。

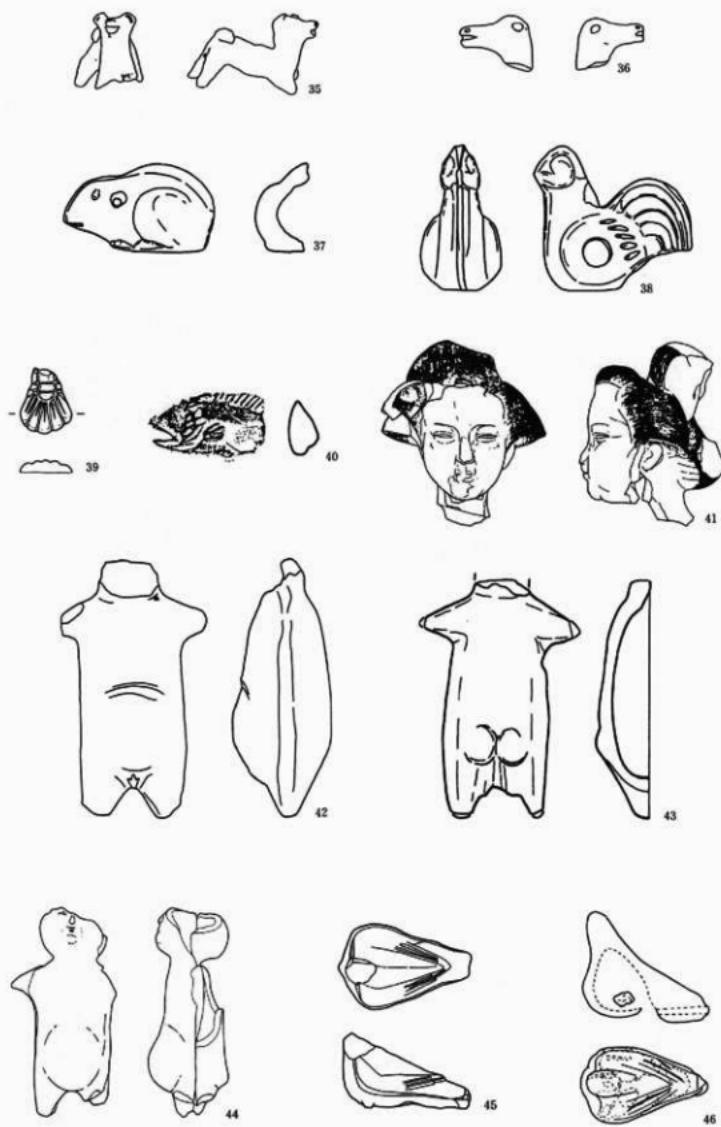
①土人形(1~46)は、出土例の多い資料のひとつで、地域・遺跡の性格に関係なく出土している。1~41は人物や動物等をモチーフとしたもので、5cm以下の小型のものと10cm前後の中型のものが主体を占める。立像・座像が多いが、9・10のようにおむすび型を呈するものや30のようになどに龜に童子が乗ったものも見られる。37・38は中宿町遺跡第Ⅲ地点から出土した資料で、同様のものが三栄町遺跡でも報告されている。28は首から頭部に向かって穴が穿たれている首人形である。県内での出土例は少なく、今回確認できたのは1点のみである。42~44は裸人形もしくは孕み人形と呼ばれているもので、図示した以外にも感応寺址・池



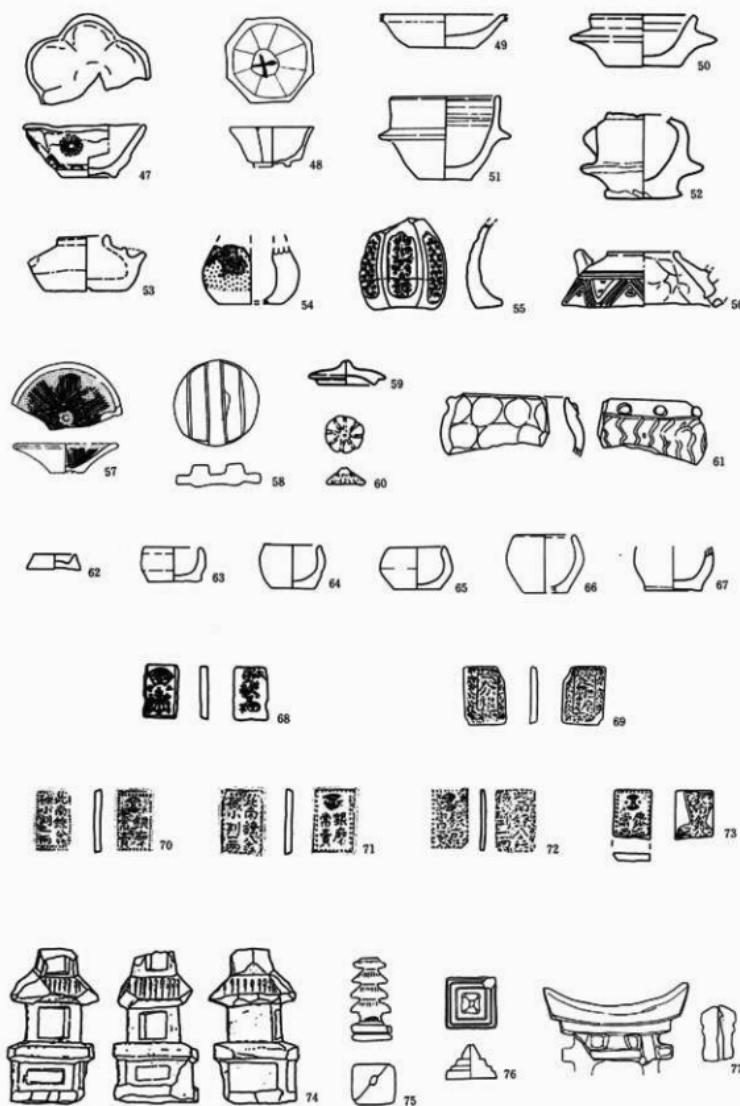
第2図 土人形(1) [S:1/2]



第3図 土人形(2) [S:1/2]



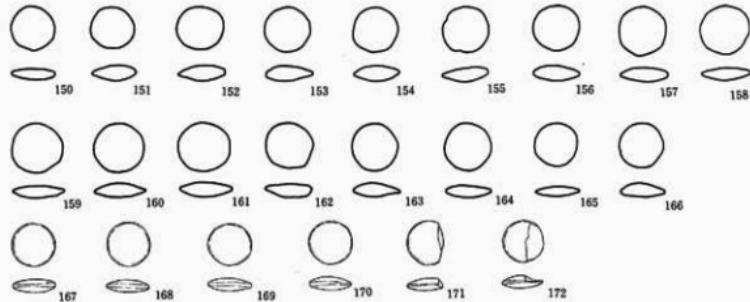
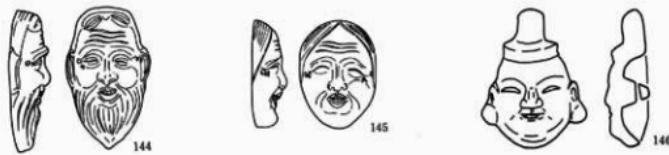
第4図 土人形(3) [S:1/2]



第5図 ままごと道具・箱庭道具 [S:1/2]



第6図 面打・芥子面(1) [S:1/2]



第7図 芥子面(2)・小面・土鈴・碁石状土製品 [S:1/2]

子遺跡群No 5 地点等でも報告されているが、県内での出土例はそれほど多くはない。45・46は鍋笛である。本資料の出土数も少なく、図示した資料以外に大久保雅楽介邸跡で1点出土している程度である。

土人形の中には背面等に刻印が施された資料があることが知られており、都内の遺跡では多数が確認されている。刻印を持つ土製品については、中野高久氏の考察がある（中野1998）。中野氏は都内の遺跡から出土した刻印・箋書きのある土製品を集め、「刻印・箋書きは江戸在地系製品と京都系製品にのみ認められる。刻印は原型に陽刻されているものと成形後に陰刻されたものがあり、箋書きは成形後に施されている。大半が型作り成形である。江戸在地系製品は幕末、京都系製品は18世紀末頃から見られる」と述べている。刻印が施された資料は、県内では逗子市池子横敷戸遺跡で2点確認されている（29・30）。それらは、18世紀後半～明治時代の遺物を伴う土坑墓のうちの1基から出土している。1点は施釉された唐子人形で、背面に「弁日」？が陰刻されていると報じられている。この刻印は、嘉永年間の「今戸人形生産者地図」に掲載されている戸沢弁司の「弁司」と思われる。もう1点は無釉の亀抱き童子で、底部に「番」の陽刻があるとされている。こちらは「番」ではなく、京都の鉄古堂亀祐（助）の「亀（篆書体）」と推測される。刻印が「弁司」・「亀」だとすると、前者は江戸在地系、後者は京都系の製品で、墓坑の年代は幕末以降の可能性が高い。刻印・箋書きが施された土製品は、製作地・製作者・年代を知ることのできる資料として貴重である。背面・底部等は注意深く観察する必要があろう。

②ままと道具（47～73）は、量的にはそれほど多くないものの各地で出土しており、身分に関係なく利用されていたことがうかがえる。鉢・徳利・釜・土瓶・擂鉢等飲食に関連するものが主体を占め、図示したものの他に上ノ町・広町遺跡で七厘が出土している。飲食具以外では宮ヶ瀬遺跡群馬場（No 6）遺跡で太鼓の一部（61）が出土している。62～67は素焼きの鉢形を呈する製品である。県内の出土例はそれほど多くなく、都内の遺跡でもあまり出土していないようである。68～73は銀貨を模した模造貨幣である。68・69は一分銀、70～73は南鏡二朱銀を模倣しており、文字は実物と変えられている。

③箱庭道具（74～77）は、都内では比較的多くの遺跡で認められるが、県内での出土事例は少なく、4遺跡で確認できたのみである。モチーフは祠・塔・鳥居がある。

④面打（78～87）も、都内の遺跡での出土例は多いが、県内ではそれほど出土していない。図示した10点以外にも坪ノ内・宮ノ前遺跡、新湘南国道間連遺跡等で出土しているが、15点程度しか確認することができなかった。大きさは直径3.2cm以上を超えるものが3点見られるが、それら以外はいずれも2.2cm前後で、大部分が都内の遺跡における標準的なサイズ（2.1～2.3cm）に収まるものである。モチーフは文字が多いが、力士・火消し櫓・植物等も見られる。なお、図示しなかったが、瓦片を面打と同程度の大きさに円盤状に加工したもののが、大久保雅楽介邸跡で出土している。

芥子面（88～143）は、土人形と並んで数多く出土している資料である。都内の遺跡では芥子面よりも面打が多く認められるが、県内では逆に芥子面が圧倒的に多く見られる。大きさは径1.4～4.0cmがあるが、2.0cm代が中心で、1.5cm以下や3cmを超えるものは少ない。モチーフは人物等の顔面を型抜きしたもの（88～125）、全体を型抜きしたもの（126～135）、動物等を型抜きしたものがあり（136～143）、顔面を型抜きしたものが主体を占める。芥子面は地域に関係なく認められるが、特に県央地域の茅ヶ崎市・伊勢原市・藤沢市・平塚市等での検出例が目立つ。これらの地域の出土状況をみると、畠地と推定される場所で表採されたり、耕作土中から出土している例が多い。

面撲は、県内での報告例を確認することはできなかった。都内の遺跡においても面打や芥子面に比べ出土

例は少ない。

小面（144～146）は、径5cm前後で、裏側が窪み、こめかみ等に穴が穿たれた製品で、これまで泥面子の範疇に入れられたり、土製面と分類されているものである。出土事例は少なく、宮ヶ瀬遺跡群馬場（No.6）遺跡で2点、欄干橋遺跡第IV地点で1点確認できたのみである。

⑤その他の資料として、土鉢（147～149）、碁石状土製品（150～172）が出土している。土鉢の報告例は少なく、確認できたのは3点のみである。碁石状土製品は、白色や黒色に塗られていたものがあり、多くは碁石として使用されていたと思われる。大半が径1.5～2.0cmの範囲に収まるものである。各地で認められるものの、1～2点しか出土していない例が多い。図示したのは欄干橋町遺跡第V地点（150～166）、及び宮ヶ瀬遺跡群南（No.2）遺跡（167～172）の一括資料で、いずれも土坑からの出土である。

土玉は、都内の遺跡で報告されているような球状を呈するものは確認できなかったが、池子遺跡群No.1～C地点において、径約1.5cmで、2mm程度の小孔が穿たれ、側面が平坦に研磨された小玉が出土している。

年代

遺構から出土した土製品のうち、共伴した陶磁器類から製作年代が推定される事例をみると、18世紀後半～19世紀代（中宿町遺跡第II地点1号地下室、欄干橋町第V地点13号土坑）、19世紀初頭頃（欄干橋町遺跡第IV地点108号遺構）、19世紀前半頃（欄干橋町第V地点1号土坑）、19世紀第2～3四半期（中宿町遺跡第III地点2・3・13号土坑）、19世紀後半（宮ヶ瀬遺跡群南（No.2）遺跡）、近世後半～近代（川名No.419第4・5地点遺跡1号堅穴状遺構）と、県内の事例はいずれも18世紀後半～19世紀代（明治時代を含む）であることが判る。

近世に属する土製品は、京都では17世紀前葉から認められ、都内の遺跡でも17世紀中葉頃に出現し、後葉には比較的多くの遺跡で出土することが知られている。県内で17世紀代の所産と考えられるものは、これまでのところ、東町遺跡の整地層より猿の土人形（12）が出土しているにすぎず、遺構から出土したものは報告されていない。県内では、土製品は貨幣経済の浸透と民間信仰の普及に伴って18世紀後半以降急激に増加したものと推測される。

5.まとめ

以上のように、神奈川県内から出土した土製品は約60遺跡（地点）、約200点を概観したが、その出土量は先にも触れたように、都内の1遺跡にも満たない量である。今後の調査により、出土資料の増加は期待できるものの、やはり江戸近郊の武藏南部・相模地域では相対的に少ないとすることはいえるようである。

種別ごとの土製品の内容に関しては、都内の近世遺跡の出土資料と大きな差異は認められないものの、仔細にみると2・3特筆される点もある。すなわち、土人形においては、刻印から江戸在地系のみならず、京都系の製品が存することも明らかになり、相模地域での流通の一端を知る上で貴重な資料といえよう。

ままと道具の中では、都内の近世遺跡でもあまり出土例のない鉢形の製品が下鶴間甲1号遺跡などで認められているが、それら資料は在地色の強い製品といえそうである。

箱庭道具については、きわめて出土例が少なく、県内での箱庭遊びは一般的でなく、都市型の遊・玩具といえるようである。

面打と芥子面の出土比率は、前者が少なく、後者が優勢であることが判明したが、それはかつて新湘南国道の報告で指摘されているとおりの結果となった。新湘南国道では、面打はモチーフに漢字や「いろは」が

記されていることから教育玩具の側面もあったとして武士・町人の子を、芥子面は民間信仰や年中行事に関連したモチーフが多いことから、農民の子を対象とした遊・玩具と考えている。一方、都内の遺跡では、石神裕之氏が述べたように、面打は旗本・御家人拌領地であった遺跡から、芥子面は町人地からの出土例が多く、関西系の遊びとして、その地域に関係した住民が多く居住していた遺跡から出土しているとしたものの、翌年の報告では、市川歴史博物館の研究成果を取り入れ（市川市歴史博物館1986）、面打は都市的玩具、芥子面は地方村落の玩具と想定することも可能とされている。今回の土製品の概観を通じて、芥子面の方が面打より相対的に多いという結果が得られ、ここでも面打は都市的玩具、芥子面は地方村落の玩具と認めざるを得ないが、その背景として面打・芥子面がどのような遊びに、そしてどのような階層に使われたのかを明らかにするとともに、すでに新湘南国道で指摘されているように、それら製品の生産地から消費地・消費者への流通過程を解明することが必要となろう。

面摸は1点の出土例もないが、都内の近世遺跡の出土量からみても、今後、県内での出土はあまり期待できるものとはいえないようである。年代的にも18世紀代に遡る遊・玩具であり、当時、それらが地方に流通するものではなかったことを示唆しているようである。

これら土製品の年代が判明したものでは、一部17世紀代に遡るものも認められたが、県内では大半が18世紀後半～19世紀代の所産で、一部は明治時代前半に下るものまで存在することが明らかになった。

参考文献

- 安芸穂子 1991 「江戸遺跡にみる土人形—遺跡の性格と出土遺物—」『江戸在地系土器の研究』Ⅰ
 2000 「掘り出された人形」『江戸文化の考古学』吉川弘文館
 2001 「VI 江戸の生活文化 5 遊び」『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房
- 石神裕之 1996 「出土泥面子の研究と課題」「深沢町遺跡」文京区埋蔵文化財調査報告書第9集
 1997 「泥面子の地城別と編年への試論」「上富士前町遺跡第Ⅱ地点」文京区埋蔵文化財調査報告書第12集
- 市川歴史博物館 1986 「泥面子分布調査」『市川歴史博物館昭和61年度年報』
- 金利伸吉 1973 「どろめんこの話」「どるめん」3
- 新宿区内藤町遺跡調査会 1992 「内藤町遺跡・放矢5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書」
- 市立市川歴史博物館 1983 「資料集・どろめんこ」
- 首藤岩泉 1928 「江戸趣味 泥面譜（一）」「武藏野」11-5
- 東京都新宿区教育委員会 1988 「三栄町遺跡」
- 東京都埋蔵文化財センター 2000 「分留遺跡Ⅱ」東京都埋蔵文化財センター調査報告 第79集
- 富永富士雄・大村浩司 1985 「新湘南国道埋蔵文化財報告書」新湘南国道埋蔵文化財調査会
- 中野高久 1998 「刻印・鬼書きからみる「玩具類」」「江戸在地系土器の研究」Ⅲ
- 増子陽子 1978 「『どろめんこ』についての一考察」『日本考古学研究所集報』Ⅰ

参考史料

- 喜田川守貞（宇佐美英機校訂）1996 「近世風俗志」岩波文庫
- 喜多村信節 1979 「嬉遊笑覧」「日本隨筆大成」別巻8 吉川弘文館

帶状円環型銅釧の形態分類と地域色について

池田 治

1.はじめに

弥生時代には金属器の使用が始まり、特に青銅器は多くの特色ある器種が創られるようになった。弥生時代青銅器の代表は、銅鐸、銅劍、銅鏡が必ず挙げられるであろうが、他にも銅鏡、巴形銅器など、極めて特徴的なものを作り出されている。これらの代表的な弥生青銅器だけを見ると、九州から東海地方までの主に西日本にのみ分布しているかのように思われるが、東日本にも独特的な青銅器が存在していることが明らかになってきている。中でも「帶状円環型銅釧」と称される青銅製の腕輪は、静岡県以東の東日本に分布していて、近年発掘資料の増加と共に様々な視点からその特色が論じられるようになってきた（註1）。

本稿では、東日本に特徴的に分布している「帶状円環型銅釧」と呼ばれる青銅製の腕輪について、未だ詳細な比較が行われたことのない断面形状を主とした形態分類を行い、製作工程と形態の対応をもとに型式変化と地域色について論じてみたい。

2.研究略史

「帶状銅釧」、「板状銅釧」、「帶状円環型銅釧」などと呼称されるこの種の銅釧を最初に報告したのは、八幡一郎である（八幡1928）。長野県田口村（現白田町）離山遺跡出土品を、腕輪のような装身具と想定しつつも、類品が知られていなかったために古墳出土の銅釧とは区別して「銅環」として報告している。

この後、類品は静岡県藤岡市登呂遺跡の発掘調査で円環の一端が切れた銅釧が出土（日本考古学協会1949・1954）し、静岡県韭山町山木遺跡では閉じた円環形を呈する銅釧が出土（山木遺跡発掘調査団1969）しているが、登呂遺跡が示した弥生遺跡像の印象の大きさゆえか、その後しばらくの間は、登呂遺跡から出土したタイプの銅釧が東日本の弥生時代銅釧の典型例として考えられ、「薄板を環状に曲げたかんたんなつくりのもの」（坪井清足1960）などと説明されることになった。また小田富士雄は、登呂遺跡出土の銅釧を「幅広い薄板を曲げた鍛造品である」として「登呂型銅釧」と呼び、系譜をイモガイ横切貝輪系と想定している（小田1974）。この時点では、銅製の類品が見あらないとしていて、登呂遺跡出土品だけを対象としている。

こののち1986年には埋蔵文化財研究会の研究集会に伴って弥生時代青銅器の集成が行われ（埋蔵文化財研究会1986）、東日本の青銅器についても特色が知られるようになり、1989年には井上洋一が弥生時代の銅釧についてまとめていている。井上は、弥生時代の銅釧は「A鑄造品」と「B曲げ輪造りの製品」とに大きく二分できるとし、B類を「銅板を単にまるめ円環をつくったもの」であるとして「帶状円環型銅釧」とした。分布図を示しており、この図に示された遺跡の銅釧をみると、B類に含まれる銅釧は円環の一箇所が切れているものと閉じた円環のものとの両者を含んでいる。また系譜について小田の言うイモガイ横切貝輪の系譜の他に、分布が東日本に偏ってみられることから縄文系の二枚貝輪から変化した可能性もあると述べている（井上1989）。

ここまで的研究は、弥生時代の銅釧全体の中での東日本に特有の銅釧を述べているに過ぎなかつたのであ

るが、出土事例の増加とともに報告書において細かい特徴が観察されるようになり、最近では東日本の銅鏡を対象とした研究が行われるようになってきた。

小高幸男は千葉県君津市マミヤク遺跡出土青銅製品をもとに形態的特徴を細かく観察し、銅鏡の外周に面取りがあることを指摘している（小高1989）。

黒沢浩は東京都狛江市弁財天池遺跡出土銅鏡の報告において、銅鏡の側縁角に「鋲バリ状」の弱い突出がみられることを指摘し、これらの銅鏡は「扁平な銅板を曲げてその両端を「鋲掛け」状に貼りあわせたもの」で、側縁の端部にみられる突出が内面側にも見られるのは、円形に曲げる前に研磨した際に生じたものと推測している（黒沢1992）（註2）。

中村勉は、東日本に特徴的な銅環と呼ばれる青銅器全般について、分類、分布、性格、系譜を考察している（中村2001）。中村は、「銅環」の大型品（腕輪）と小型品（指輪）に共通する特徴として「分布が東日本に限られていること、またその造りが一部に鋲造でなく鍛造のものもありまた青銅製板を曲げて環状にし、製品化している」点を挙げており、「鍛造」の製品もあると考えている。銅環の分類は数少ない完形品を参考に、銅環を環の直径の大きさによってA類（5～7cm）、B類（1.5～3cm）に二分している。一般的に腕輪とされる銅環A類は三分類しているが、造りの上で鋲造品と鍛造品との二種類に分けられるとしている。また、指輪ともいわれる銅環B類は、形態的に三分類しているが「つくりは「曲げ輪造り」によるもので、使用される板状帶の形態は、銅環A類のものとほぼ変わらない」という。

野澤誠一は、佐久市上直路遺跡出土銅鏡の復元複製製作の報告を兼ねて、弥生時代後期の東日本に分布する銅鏡・鉄鏡の製作技法が独特のものである可能性を示し、金属製鏡の役割と東日本の弥生社会の独自性を論じている（野澤2002）（註3）。野澤の形態分類は、東日本の銅鏡の特徴として断面が扁平な長方形であることから、有鉤銅鏡や楽浪系銅鏡と区別して「帯状銅鏡」とした上で、完形品で閉じた円環状のものを「円環型」、完形品を切断して開いた円環状になったものを「断環型」として区分した。また断環型を曲げ直して小さくなったものを「小銅環」としている。

これまでの帯状円環型銅鏡の研究は、巻貝輪系銅鏡や楽浪系円環型銅鏡の研究の中で対比され言及された研究から、東日本に分布する帯状円環型銅鏡を直接研究するという段階へ移ってきており、なお細かい形態分類には十分に踏み込んでいないと言って過言ではないであろう。

3. 帯状円環型銅鏡の分類

本稿で対象とする銅鏡は、弥生時代銅鏡の分類としては井上の「B類（曲げ輪造り）—帯状円環型銅鏡」に該当するのであるが、筆者はB類銅鏡も基本的に円環形に鋲造されたものであり、曲げ輪造りの銅鏡は例外的に存在するが、それは再加工品として位置付けるほうが妥当ではないかと思っている（註4）。

ここでは断面形が扁平な長方形または薄板状で全体形が円環形を呈する銅鏡を「帯状円環型銅鏡」とし、円環の一箇所が途切れた状態で使用されているものを野澤に準拠して「断環型」と呼ぶことにする。両者を包括した呼称として「帯状銅鏡」を使用する。

その上で、本稿では帯状銅鏡を観察した結果に基づいて、断面形状をつぎのように分類する。分類基準は断面の形状に沿って示しているが、分類の意図は、銅鏡として仕上げるための加工がどれだけ加えられているか（手抜きされているか）によって、型式変化の方向を見いだそうとするものである。

以下に分類基準と模式図を示す。

分類基準

I類=断面形が長方形を呈し、上下両端に平坦面があるもの。断面形の角の微細形状（仕上げ具合）によつて4細分する。

I a類：鋼鉄内面の上下端に内側へ捲れたりはみ出るような弱い突出が存在し、且つ外面の上下端にも外側へ捲れたりはみ出るような弱い突出が見られるもの。

I b類：I a類と同様に鋼鉄内面の上下端に内側へ弱い突出が見られるが、外面側には見られないもの。

I c類：断面の四隅とも角が明瞭であるが、捲れるような弱い突出は見られないもの。

I d類：断面の四隅もしくは外面側の角が丸味を持って滑らかに仕上げられているもの。

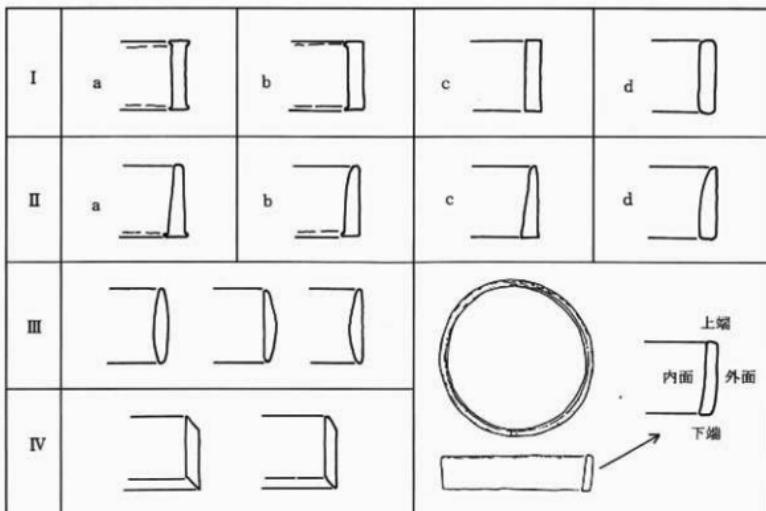
II類=断面形が台形もしくは楔形を呈するもの。上下いずれかの端部に平坦面を有し、もう一方の端部は壓き込まれて薄く仕上げられる。薄い端部の平坦面の有無と磨きが内外両面か一方だけかという違いが存在するが、ここでは区分しない。幅広い平坦面の角に突出があるかないかによって2分する。

II a類：幅広い平坦面の角に捲れるような弱い突出があるもの。

II b類：幅広い平坦面の角に捲れるような弱い突出が見られないもの。

III類=断面の上下両端が磨き込まれて薄く仕上げられ、断面形が薄い板状もしくは薄い蒲鉾状になるもの。内外両面が磨き込まれるものと内外面のいずれかが磨き込まれもう一方は直線的なものがあるが、今は区分しない。

IV類=断面の上下両端が内削ぎ状もしくは外削ぎ状に面取りされているもの。面取りされた傾斜面がやや丸味を持つものもあるが一括する。面取りが両端にあるものと一方だけにあるものがあるが、ここでは区分しない。両端に面取りがされるものはほとんどが、一方が内傾面、もう一方が外傾面となる。面取りが内傾面か外傾面かの違いは、両者が互いに組み合うのものなので区分しない。



第1図 鋼鉄断面形分類模式図

4. 各遺跡出土銅鏡の特徴

上記の分類に基づき、腕輪としての組み合わせが分かる事例を中心に、個別の特徴を確認しておこう。完形もしくは準完形の帯状円環型銅鏡が出土している遺跡は33遺跡が知られているが（第2図）、未報告の資料もあるため、報告書から特徴が判断できるものと筆者が観察し得たものを取り上げることとする。

なお、文中および集成図の遺跡番号は分布図の遺跡番号および文末の遺跡文献一覧と対応し、遺物番号は各遺跡の報告の番号を踏襲している。報告時に番号が付されていないものには、適宜番号を付けた。

（2）如仲庵遺跡

遺構は発見されていないが、帯状円環型銅鏡6点がまとめて出土している。継ぎ目が見られないと言うことから全て鋳造品と考えられる。3～5は内外面とも磨かれ、6～8は鋳造時の凹凸が残っているという。いずれも断面の一端が尖るように作られており、II d類（3～5）と II c類（6～8）で構成される。

（4）賤機山古墳下層遺跡

弥生時代後期の墓坑と考えられる土坑から帯状円環型銅鏡6点が出土している。6点ともやや歪んでいるが正円に直すと直径6.2～6.3cmになる。幅は12.5mm前後で揃っているが、厚さは上端が1.7mm前後、下端が2.4mm前後を測り、断面形は長方形か台形を呈している。いずれも内外面および端面は研磨されていて、1～4は一方の端部がやや薄くなっているが断面形はほぼ長方形であって断面分類はI c類、5・6は明らかに一端が薄くなっていて断面形は台形に近く、断面分類はII c類である。厚みある端部の方が直径が小さく、薄い端部の方が直径が若干大きい。帯状円環型銅鏡の中では大型の部類に属する。いずれの銅鏡も合わせ目は認められず鋳造品である（註5）。6連一組と考えられ、I c類とII c類で構成されている。

（5）登呂遺跡

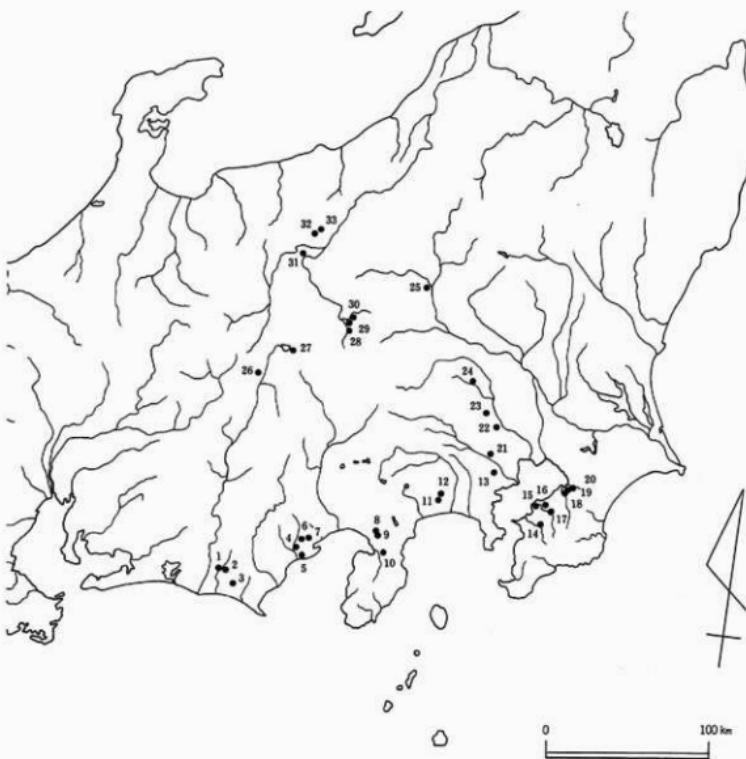
1947年と1948年の調査で断環型の帯状銅鏡2点、破片8点、小銅環4点が出土し、1999年から2001年の再整備に伴う調査では断環型の帯状銅鏡1点、破片1点、小銅環1点、有鉢銅鏡片1点が出土している。墓坑から出土したものはない。

1947年調査の1（『登呂 前編』図版63-4）は、破断部分両端の形状がほぼ同じであり、一周した円環型であったものを斬ち切った状態と思われる。断面形は長方形で上下両端に平坦面があり、角はやや丸味がある。I d類である。2の破断部分両端は鋭利な面となっていて、外面側から鏟等の刃物で切断されたものと思われる（註6）。断面形は一端が厚い台形を呈し、上下両端には平坦面がある。断面分類はII c類である。再整備に伴う調査で出土した断環型の帯状銅鏡は大きく歪んでいて一端が開いているが、破断部分両端は形状が似ていて接合するのではないかと思われる。断面形は角に丸味のある長方形を呈する。断面分類はI d類である。登呂遺跡出土の青銅製品は地下水位が高い状態にあるためか腐蝕があまり進行しておらず、いずれも保存状態が良い。破片資料も含めて銅鏡表面は内外面とも丁寧に磨かれている。

（11）原口遺跡

第1号方形周溝墓の主体部からほぼ完形に復元される帯状円環型銅鏡が2点、Y H34号竪穴住居址の覆土から帯状円環型銅鏡の完形品が1点、Y H60号竪穴住居址の覆土から帯状銅鏡の約1/2破片が1点出土している。またY H38号竪穴住居址の覆土から帯状銅鏡の破片が出土している。

Y H34号竪穴住居址の銅鏡は、直径5.9cm～6.2cmでは正円に近く、幅は1.36cm～1.38cm、内面が研磨されていて、一端はやや薄くなっている。上端の厚さは2.2mm～2.5mm、下端の厚さは1.5mm～1.8mmで、断面は楔形を呈し、外面側はほぼ垂直なのに対して内面側はわずかにカーブを描きながら下方が細くなっている。



- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1 静岡県森町 文殊堂古墳群下層 | 18 千葉県市原市 根田遺跡 |
| 2 静岡県森町 如仲庭遺跡 | 19 千葉県市原市 長平台遺跡 |
| 3 静岡県掛川市 梅橋北遺跡 | 20 千葉県市原市 草刈遺跡H区 |
| 4 静岡県静岡市 眼鏡山古墳下層 | 21 東京都船橋市 弁財天池遺跡 |
| 5 静岡県静岡市 登呂遺跡 | 22 埼玉県朝霞市 向山遺跡 |
| 6 静岡県静岡市 川合遺跡 | 23 埼玉県川越市 露ヶ間遺跡 |
| 7 静岡県静岡市 潘名遺跡 | 24 埼玉県東松山市 観音寺遺跡 |
| 8 静岡県三島市 中島西原田遺跡 | 25 群馬県渋川市 有馬遺跡 |
| 9 静岡県三島市 鶴喰前田遺跡 | 26 長野県南箕輪村 北高根A遺跡 |
| 10 静岡県三島市 山木遺跡 | 27 長野県茅野市 家下遺跡 |
| 11 神奈川県平塚市 原口遺跡 | 28 長野県白田町 離山遺跡 |
| 12 神奈川県平塚市 真田・北金目遺跡群 | 29 長野県佐久市 五里田遺跡 |
| 13 神奈川県横浜市 開耕地遺跡 | 30 長野県佐久市 上直路遺跡 |
| 14 千葉県君津市 大井戸八木遺跡 | 31 長野県長野市 稲ノ井遺跡群 |
| 15 千葉県木更津市 高砂遺跡 | 32 長野県長野市 本村東沖遺跡 |
| 16 千葉県袖ヶ浦市 文臨遺跡 | 33 長野県長野市 森田遺跡 |
| 17 千葉県袖ヶ浦市 荒久遺跡 | |

第2図 帯状円環型銅鏡（完形品）出土遺跡分布図

上端には明瞭な面があって、内面上端は尖り気味の強い角がある。下端は狭い面を有している。断面による分類はⅡc類である。表面の状態は、外面ともに滑らかである。継ぎ目ない鋳造品であり、X線透過程写真撮影を行った結果も接合部と見られる部分は認められなかった。完品であり、保存処理後の現重量は32.4gを測る。帯状円環型銅鏡としては大型の部類である。

第1号方形周溝墓の主体部からは2点出土していて、3は下端に丸味のあるわずかな面があり、上方に向かって次第に細くなり、上端は尖っている。もう1点の4は、下端に明瞭な平坦面があってその外端部は角があり、内面端部は内側へ向かって弱い突出が見られる。断面の外側は直線的であるが、内面の上半は研磨され上端は尖っている。断面分類は3がⅢ類、4がⅡb類である。

(12) 真田・北木目遺跡群

銅鏡、小銅環、再加工品等の青銅製品は、破片を含めると多数出土している(註7)。3連の帯状円環型銅鏡が、方形周溝墓の周溝内土坑から出土している。鋲が著しいが欠損は少なく原形を良好に保っている。3連のうち中央に挟まれる銅鏡は、断面形が長方形を呈し、角の一部に弱い突出があるⅠa類である。3連の両端の銅鏡は、断面形が楔形を呈し、他の鏡と接する側の端部に平坦面を有し、もう一端は内面が徐々に薄くなって先端が丸くなる形状を呈する。このうちの1点には、平坦面の内面側角に、部分的ではあるが埋れるような弱い突出が観察される。Ⅱb類とⅡc類である。

(14) 大井戸八木遺跡

古墳墳丘下から発見された2基の土塚のうち、001号土塚から小銅鏡、玉類と共に4連の帯状銅鏡が出土している。4連の銅鏡のうち3点は継ぎ目ない円環型であるが、1点は断環型であり、切れ目の両端部に孔が穿たれ紐で結んだ痕跡が残っている。円環型の3点はⅡc類2点、Ⅲ類1点である(註8)。

千葉県木更津市 高砂遺跡 [15]

SZ022から帯状円環型銅鏡6点、SZ039から銅鏡破片1点、SZ043から銅鏡破片1点が出土している。SZ022では周溝内埋葬施設から帯状円環型銅鏡6点が連なって出土した。1は一部を欠損するが2~6は完品である。継ぎ目が認められないことから鋳造品と考えられている。4はⅠd類、1と6はⅡc類、他の3点はⅡd類である。

(17) 荒久遺跡

008方形周溝墓の埋葬施設主体部から、ガラス小玉と共に銅鏡が出土している。銅鏡は破損した状態で出土したが、5個の鏡であったと考えられている。復元できた2個体は、端部が斜めに削がれたように面取り整形されている。接合部が見られないで鋳造されたものと考えられている。報告の1は2個体が連結したままであり、IV類である。この他にはⅠd類、Ⅱb類がある。周溝から久ヶ原式土器の壺、鉢、甕が出土していて、後期初頭に位置付けられている。

(18) 横田遺跡

2基の方形周溝墓の主体部から、それぞれ5連の帯状円環型銅鏡が、腕に装着した状態で骨と共に出土している。年報に記載された報告(米田1986)にすると、それぞれ組み合わせる5点は似た大きさを示している。これらの銅鏡には、つなぎ目等が一切見られず、大きさも均一なことから鋳造された可能性が高い。

観察の結果、銅鏡Aの5点はいずれも断面の一端が内削ぎ状に面取りされた内頬面をもち、他の一端が外削ぎ状に面取りされた外頬面をもつIV類であり、隣り合う銅鏡の内頬面と外頬面が嵌り合うように作られている。銅鏡Bの5点は全て断面の一端に平坦面を有し、他の一端が先細りになる楔形を呈するⅡc類で構成

られている（註9）。

(21) 弁財天池遺跡

1号方形周溝墓の第2主体部とされる土坑（註10）から、腕に装着された状態で人骨とともに帯状円環型銅鏡が6点出土している。6点のうち3点は完形であり、1点は一部欠損、2点は1/2～1/3が欠損している。9がほぼ正円に近いが、他はやや歪んでいる。断面形は長方形を呈するものと、一端が薄くなつて台形状を呈するものがある。8～12の断面形は基本的に長方形を呈するが、詳細に観察すると側縁の上下両端（断面の四隅）が内側および外側に向かって捲れるようにわずかに突出していく（註11）、断面形がローマ数字の「I」字状になっていることが判る。断面形の分類は7がII c類で8がII a類、その他の4点はI a類である。使用的組合せとしては、II類の2点が6連の両端、I a類の4点がII類に挟まれて使われていたであろうと推測される。これらは鋳造品で、製作時の貼りあわせ痕は認められない。

(29) 五里田遺跡

第2号円形周溝墓の主体部墓壙から帯状円環型銅鏡5個体が出土している。いずれも鋳造品である。9～12は断面形が長方形の板状を呈し、上下両端に平坦面がある。内側の上下両端は内側へ向かって弱い突出があり、外側には突出はない。外面は滑らかに仕上げられているが、内面は荒れた感じがあり、鋳放しであると思われる。13は現状では断面形が楕円形の図であるが、腐蝕によって一端が薄くなっているものであり、本来は9～12と同様であったと考えられる。断面分類はいずれもI b類である。

(30) 上直路遺跡

弥生時代後期後半の第1号住居址内に掘られた墓壙から、人骨とともに腕に装着された状態で帯状円環型銅鏡が出土している。欠損品もあり正確な個体数は分からぬが、14～15個体があったと考えられている。出土位置から1～5は右腕、6～13が左腕に装着されたものとされる。4・5と6～11は連なつて出土し、その状態のまま保存処理されている。完形の銅鏡はいずれも緊ぎ目のない鋳造品である。個々の状態が良好なのは1～5であるが、観察に耐えられる状態にある9点を観察した。

観察した9点のうち、1、2、5、12、15は、内側の上下両端に弱い突出が認められるが、外側は角が明瞭であるが突出は認められない。I b類である。内面は鋳造時のままと思われる凹凸があるが、外面は凹凸がなく磨いてあるようである。3、13は内面も外面も研磨されず無調整のようである。上下両端ともに内側と外側に弱い突出が認められるI a類である。4と14は一端の内外面が研磨されて先細りになり、もう一端は平坦面を有し内側に弱い突出が認められるII b類である。

1～5で1組、6～13で1組となるのであるが、両組ともI類を主とする中にII類が1点ばかり組み込まれるという構成である。

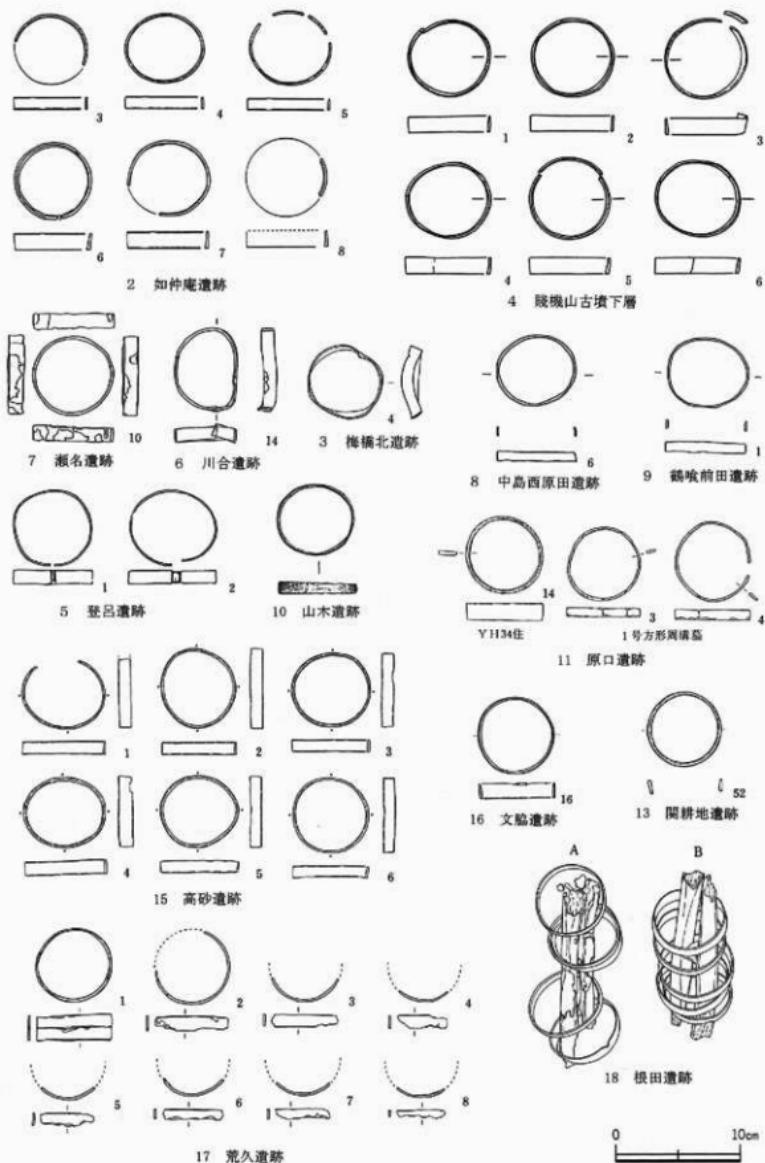
(31) 篠ノ井遺跡群

土坑墓と思われるSB217（箱清水期）から2点、竪穴住居址SB374の覆土中から1点、円形周溝墓SM213の主体部から1点が出土している。いずれも断環型銅鏡である。

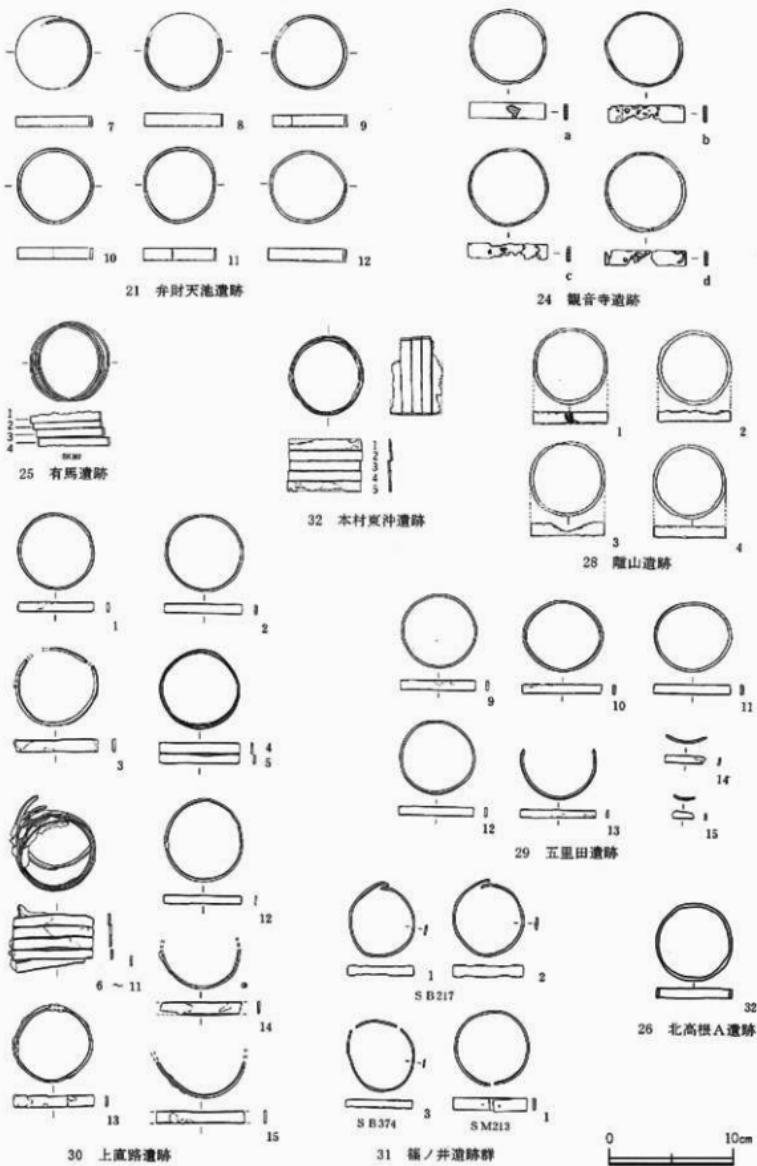
SB217の1は上下の端部が大部分欠損していて、断面形の詳細は不明である。2は一端が内面研磨により先細りになるII類で、もう一方の端部は全周欠損しているため不明である。円環が切れている部分は内側へ折れ曲がっていて、外側から鑿で叩いて斬ち切ったように観察される。

SB374出土の3は全体的に薄く仕上げられていて、断面形は両端が細く尖るIII類である。

円形周溝墓SM213の主体部出土の銅鏡は、円環の一箇所が離れている断環型で、切断部の形状は一致して



第3圖 帶狀圓環形銅鏡集成圖1 (靜岡・神奈川・千葉)



第4図 帯状円環型銅鏡集成図2 (静岡・神奈川・千葉)

第1表 銅鏡分類一覧表

所在地	遺跡番号	遺跡名	遺構名	遺構番号	Ia	Ib	Ic	Id	Ia	Ib	Ic	Id	II	M	断環	備考
静:森町	1	文殊堂古墳群下層														未報告
静:森町	2	如伊庵遺跡	土壤?	3									○			
		*	*	4									○			
		*	*	5									○			
		*	*	6									○			
		*	*	7									○			
		*	*	8									○			先端欠
静:掛川市	3	梅賀北遺跡	自然流路	4									○			
静:静岡市	4	駿河山古墳下層	土壤	1			○									
		*	*	2			○									
		*	*	3			○									
		*	*	4			○									
		*	*	5									○			
		*	*	6									○			
静:静岡市	5	笠呂遺跡	包含層	1			○									○
		*	*	2									○			○
		*	(再整備調査)				○									未報告
静:静岡市	6	川合遺跡	包含層	14			○									○
静:静岡市	7	瀬名遺跡	包含層	10									?			
静:三島市	8	中島西原田遺跡	旧河川	6									○			
静:三島市	9	鶴鳴前田遺跡	包含層	1									○			
静:三島市	10	山本遺跡	包含層	1												断面不詳
神:平塚市	11	原口遺跡	YH34号住居址	14									○			
		*	1号方形周溝墓	3									○			
		*	*	4									○			
神:平塚市	12	真田・北金目遺跡群	方形周溝墓	1									○			未報告
		*	*	2	○											
		*	*	3									○			
神:横浜市	13	間崎地遺跡	6号住居址	52			○									
千:君津市	14	大井戸八木遺跡	001号土壤	1									○			未報告
		*	*	2									○			
		*	*	3									○			
		*	*	4									○			
千:木更津市	15	高砂遺跡	SZ022	1									○			
		*	*	2									○			
		*	*	3									○			
		*	*	4									○			
		*	*	5									○			
		*	*	6									○			
千:袖ヶ浦市	16	文武遺跡	215号住居址	16									○			
千:袖ヶ浦市	17	荒久遺跡	008方形周溝墓	1									○			
		*	*	1									○			
		*	*	2									○			
		*	*	3									○			
千:市原市	18	根田遺跡	A(方形周溝墓)	1									○			
		*	*	2									○			
		*	*	3									○			
		*	*	4									○			
		*	*	5									○			
		*	B(方形周溝墓)	1									○			
		*	*	2									○			
		*	*	3									○			
		*	*	4									○			
		*	*	5									○			
千:市原市	19	長平台遺跡														未報告
千:市原市	20	草刈遺跡丘区														未報告
東:猿江市	21	弁財天池遺跡	1号方形周溝墓	7									○			
		*	*	8									○			
		*	*	9	○											
		*	*	10	○											
		*	*	11	○											
		*	*	12	○											
埼:朝霞市	22	向山遺跡														未報告

銅鏡分類一覧表（2）

所在地	遺跡番号	遺跡名	遺構名	遺構番号	Ia	Ib	Ic	Id	Ia	Ib	Ic	Id	M	N	断面	備考
埼：川越市	23	霞ヶ岡遺跡														未報告
埼：東松山市	24	観音寺遺跡	4号方形網溝墓	a		○										
	*	*		b		○										
	*	*		c		○										
	*	*		d		○										
群：深川市	25	有馬遺跡	7号墓SK387	1		○										
	*	*		2		○										
	*	*		3		○										
	*	*		4		○										
長：南箕輪村	26	北高根A遺跡	包含層	32		○										
長：茅野市	27	家下遺跡														未報告
長：臼田町	28	難山遺跡	土壤？	1												断面不詳
	*	*		2												
	*	*		3												
	*	*		4												
長：佐久市	29	五里田遺跡	2号円形網溝墓	9		○										
	*	*		10		○										
	*	*		11		○										
	*	*		12		○										
	*	*		13		○										
長：佐久市	30	上直路遺跡	1号住居址内土塹	1		○										
	*	*		2		○										
	*	*		3	○											
	*	*		4												
	*	*		5	○											
	*	*		6-II												I類
	*	*		12	○											
	*	*		13	○											
	*	*		14												
	*	*		15	○											
長：長野市	31	猿ノ井遺跡群	土坑SB217	1											○	I類？
	*	*		1											○	II類？
	*	*	住居址SB374	2										○	?	
	*	*	円形網溝墓SM213	1	○									○		
長：長野市	32	本村東沖遺跡	SK3	1												
	*	*		2	○											
	*	*		3	○											
	*	*		4	○											
	*	*		5	○											
長：長野市	33	種田遺跡														未報告

*出典は本文末の遺跡文献一覧を参照のこと。遺跡番号は分布図・遺跡文献一覧と対応。

いない。内面側の切削部脇には、切削部に並行して藍痕が残っている。切削された両端部には内側から円孔が穿たれていて、孔の外側の縁には捲れるような弱い突出が認められる。断面形は長方形を呈し、内外面ともに上下端には弱い突出が認められる I a 類である。なお、本例に見られる円孔周辺の捲れるような弱い突出は、環体上下端に観察される「捲れるような弱い突出」と同様のものであり、形成の原因を推測できる資料である。

(32) 本村東沖遺跡

隅丸長方形の土坑SK3から、管玉、ガラス玉、鉄釦とともに帶状円環型銅鏡5個が重なった状態で出土している。5連の銅鏡のうち、内側に位置する2~4の銅鏡はいずれも両側に他の銅鏡が接する関係にあるのであるが、全て断面形が長方形を呈し、四隅の角には内面側および外側へ捲れるような弱い突出が見られる。5連の銅鏡の両端にあたる1と5は断面形が先細りの楔形を呈し、それぞれ他の銅鏡と接する方の端部には平坦面があって、2~4と同様に内外両方の角には捲れるような弱い突出が見られる。断面形の分類

は、1と5がII a類、2～4がI a類である。4の外面には、鏽バリを切り落とした際の失敗傷かと思われる齧痕のような鋭い抉れが1箇所認められる。5連で出土した状態のままで保存処理されている。1と5は腐蝕による欠損が著しい。

この5連の銅鏡に顕著に認められる特徴は、一組になる組合せの両端にある鏡は端部側が先細りに磨き上げられ、互いに接する銅鏡の端部は外外面の角に見られる「弱い突出」を残したまま、研磨仕上げを行っていないという点にある。

5. 型式分布と地域的特色

帶状円環型銅鏡の分布は、現在知られているところでは天童川流域より東で、利根川（江戸川）を越えてはいない（第2図）。現在の行政区分では、静岡県、神奈川県、千葉県、東京都、埼玉県、群馬県、長野県の1都6県に及んでいて、分布に粗密があることは既に指摘されているところである（臼居2000、野澤2002）。

ここまで各遺跡出土銅鏡の特徴を見てきたが、銅鏡が腕輪として着装されている事例は、基本的に複数の銅鏡を連結して一組の腕輪としていることが墓坑出土例から分かる。そこでまず、型式の組合せを確認しておこう（第1表）。

太平洋沿岸の遺跡では、如仲庵遺跡、賤機山古墳下層、高砂遺跡などのようにI c・I d類とII c・II d類が組合うものが多く、大井戸八木遺跡のようにII c類とIII類が組合わさっているものもある。中には真田・北金目遺跡群のようにI a類とII b・II c類が組み合う中部高地的な特徴（後述）を持つ例もごくわずかではあるが存在する。真田・北金目遺跡群の例を除いて、この地域は全般的に丁寧に磨くという特徴がある。

千葉県の東京湾沿岸地域では、端部を斜め面取りするIV類を中心に構成される銅鏡が3遺跡で見られ、この地域の強い特色となっている。IV類以外では、II c類のみで構成される根田遺跡Bなど、やはり良く磨かれたものが見られる。

中部高地では、長野県の千曲川流域に強い特色が見られる。五里田遺跡や本村東沖遺跡に代表されるように、I a類もしくはI b類で構成され、II a類が加わる場合があるといふものである。III類やII d類のような磨き込んだものはほとんど見られない。

静岡県の太平洋沿岸、千葉県の東京湾沿岸、長野県の千曲川流域の3地域が帶状銅鏡の分布の中心とされてきたのであるが、上述のように形態的にもそれぞれ特色のある3地域であることが明らかになった。

それではこれらの中間に位置する地域ではどうであろうか。

多摩川流域の弁財天池遺跡では、I a類が主体でII a・II c類が加わる中部高地的な構成を示しているが、出土土器も中部高地系の朝光寺原式土器が主体であるので、特に齟齬はない。

荒川流域の観音寺遺跡はI c類、利根川上流域の有馬遺跡はI d類でそれぞれ構成される組合せであり、隣接地域である中部高地とはやや異なった様相を持つと言えよう。この地域は、もう少し類例が増えることを待つ必要があろう。

型式の組合せとしては、I類のみ、II類のみ、IV類のみ、といったような構成もあるが、またI類とII類が組み合わさるようなことは、ごく普通のことであることも分かった。連結したまま出土した本村東沖遺跡などの例から判断すると、連結した鏡の両端に一端を薄く磨いたII類を配置し、これらに挟まれた間にI類を置くという並びで着装されるようである。そうすると、I類とII類の関係としては、細分項目のa、b、

c・dによる分類が関わるようである。I類がa・bならば、同時に組合わさるII類もa・bであることが多く、I類がc・dならば組合わさるII類もc・dということである。

6. 仕上げ加工の省略と型式変化

帯状円環型銅鏡のIa類とIb類およびIIa類とIIb類に見られる「捲れるような弱い突出」は、どのようにして生じるのであろうか。弁財天池遺跡の報告で黒沢浩が述べているように（黒沢1992）、この突出は装飾のように意図して残されたものではないようである。黒沢は、銅鏡を研磨する際に生じたものと想定した。これとは違って、このような突出が鋳型の合わせ目に生じる「鋳バリ」の痕跡と考えて、野澤誠一は鋳型の形態を復元し鋳造実験を行った（野澤2002）。実験の結果は概ね良好で、仕上げに研磨すると金属光沢が生じるという。しかしながら鋳バリ痕が残っているということは、研磨していないということである。

銅鏡および小銅環などの加工痕跡を観察すると、この「捲れるような弱い突出」と同様の痕跡が、断環型銅鏡や小銅環、垂飾品に穿たれた円孔の周辺にしばしば見られる。前記した篠ノ井遺跡群SM213出土の断環型銅鏡に穿たれた円孔の周辺も、同様の痕跡である。これらから「捲れるような弱い突出」は銅鏡の上下端面を研磨し整形する過程で生じたものと考えられる。そして外側にはみ出したこの突出は、削るとか研磨するといった仕上げを省略しているがゆえに残っていると考えられるのである。

ここでは、この痕跡が残っていることを仕上げ加工の省略、すなわち形態の退化の痕跡と解釈したい。

五里田遺跡や上直路遺跡のIb類銅鏡にみられるように、「弱い突出」が残されていない外側は磨かれて平滑に仕上げられているのに対して、「弱い突出」が残っている内側は鋳放しと思われる凹凸が観察される。この状況は外側仕上げ研磨を行ったが、内側は仕上げを省略していると言えるであろう。外側も仕上げを省略したものが、Ia類主体の本村東沖遺跡銅鏡と言えるのではないだろうか。反対に手を加えて仕上げ加工を入念に行えば、Ic類、Id類へと変化し仕上げゆくことになる。

Ii類はI類と同様の仕上げ加工の変遷が想定される。

これに対して、III類とIV類はI類で示したような変遷とは異なる位置にあると考えられる。IV類はIV類同士で腕輪を構成し、相互の傾斜面が嵌り合って重なるようになるもので、単に複数の鏡を接続して着装するというだけではない意図が込められていると考えるべきであろう。帯状円環型銅鏡も他の銅鏡と同様に貝輪の系譜を引いていると仮想すれば、二枚貝輪が重なる姿に結びつけることも可能であろうが、系譜の間を埋める資料がない。ただ、型式学的には最も古相を示すと考えて良いのではないか。

III類については最も良く磨き込まれた製品とすることもできるが、元々厚いものを磨き込んだとは考えられないでの、形態変遷や製作技法については別の視点が必要であるかも知れない。

7. まとめ

再生・再加工による形状変化の可能性を排除するために完形・準完形の帯状円環型銅鏡を取り上げ、断面形状が仕上げ加工の過程や器種としての相形を反映している可能性を考慮し、断面形による分類を行って地城色と型式変遷を想定した。

型式変遷について整理すると、最も古い（最も加工の丁寧な）形態から最も新しい（最も省略されている）ものへ、（Id・Ii）→（Ic・IIc）→（Ib・Iib）→（Ia・IIa）という順が想定される。また最も加工されている形態であるIV類は、（Id・Ii）類以前に位置付けるのが妥当と考えられる。

これらの銅鏡は、伴出土器から知られる時期はいずれも弥生時代後期であり、多くが後期後半に置かれる。最も古く位置付けられているのはⅣ類の荒久遺跡であり、後期初頭と報告されている。このことは、推定した変遷の一端を支持するものと思われる。

以上、時期的位置付けなど十分に検討できなかった点も多いが、今後更に検討を重ねて行きたいと思う。

なお、各資料の観察において誤解・誤認があれば全て筆者の責任である。ご指摘、ご批判をいただければ幸いである。

本稿は、平成13年度かながわ考古学財団研究助成制度による研究成果である。

資料の観察・借用・分析にあたって多くの方々のお世話になった。文末ではあるが記して感謝いたします(順不同、敬称略)。

静岡市教育委員会、静岡市登呂遺跡博物館、三浦市教育委員会、秦野市教育委員会、秦野市桜土手古墳保存館、平塚市真田・北金目遺跡調査会、神奈川県教育委員会、横浜市歴史博物館、(財)君津都市文化財センター、君津市教育委員会、市原市教育委員会、柏江市教育委員会、佐久市教育委員会、長野県埋蔵文化財センター、長野県立歴史館、長野市教育委員会、(独)奈良文化財研究所、パリノ・サーヴェイ(株)、白居直之、野澤誠一、中村 勉、伊丹 徹、小倉淳一、木野和紀、富沢一明、萱野章宏、中嶋由紀子、大倉 潤、鈴木敏則。

脱稿後、10山木遺跡の第10次・第14次調査で出土した銅鏡4点を観察する機会を得た(未報告)。いずれもⅠc類で外面角はやや丸味がある。観察の機会を下さいました蘿山村教育委員会山田康雄氏に感謝いたします。

註

1. 銅鏡、小銅環(指輪)、小銅鐸、銅鏡、その他単品など、偏った分布傾向を示す種類や独特の形態を持つものが知られている(合田芳正1980、鈴木敏則1986、安藤広道2001など)。
2. この突出が研磨の際に生じたものという考えは首肯できるが、円環形の状態で研磨しても生じるであろう。なお、黒沢が指摘した「「佛掛け」状に貼りあわせた」とされ図示している箇所は、筆者の再観察の結果では、保存処理時の修復痕跡と同一箇所であり、貼りあわせた痕跡はX線透過写真撮影による観察でも存在せず、鋳造品であると考えられる。X線透过写真撮影および修復痕跡の観察にあたって、(独)奈良文化財研究所の高妻洋成氏にご指導いただいた。
3. 野澤論文の最大の特徴は、帯状円環型銅鏡の鋳造方法の検討と鋳造実験を行っている点にあり、説得力がある。筆者も帯状円環型銅鏡の観察を通して、野澤と同じように、鋳造方法の一つとして組合せ鉄型である可能性が高いと考えているが、鉄バリの痕跡とされる突出をそのまま鉄バリと決定する根拠はないのではないかと思う。なお、野澤は東日本の銅鏡・小銅環等と銅鏡の集成を丹念に行っており、今回の検討にあたっても集成の参考とした。また銅鏡鋳造方法について色々ご教示いただいた。
4. 「曲げ輪造り」の銅鏡とは、青銅製の薄板を鋳造するか他の製品から板状に切り取るかして得た素材を曲げて輪にしたものとすべきであろう。素材を得るときに元の青銅製品を叩き延ばすことは考えられるが、この作業は「鍛造」と呼ぶべきではなく、再加工である。また、円環型銅鏡の一箇所を一度断ち切ったものは、厳密には再利用または再加工であり、曲げ輪造りではない。
5. 船同位体比分析が行われていて、分析結果によると古墳時代の船同位体比のグループに属すると報告されている(平尾編1999)。

6. この他にも破片資料に、鑿痕と思われる鋭利な条痕が破断面間に見られるものがある。
7. 発掘調査および整理作業が進められている最中であり、報告書は一部が刊行されている。帯状銅鏡・小銅環・帯状銅鏡再加工品のほか、有鉤銅鏡と思われる破片も出土している。未報告資料であるが、平塚市真田・北金目遺跡調査会のご厚意により観察させていただいた。
8. 未報告であるが、君津市教育委員会のご厚意により観察させていただいた。4連の銅鏡であるが、作りや大きさが異なる調を寄せ集めている珍しい例である。
9. 市原市教育委員会のご厚意により観察させていただいた。また整理を担当されている木野和紀氏には、観察所見についてご教示いただいた。木野氏によると、銅鏡Aの形態が盛なり合うようになっているのは、貝輪（貝鏡）の形態を写していると考えられるということである。魅力的な見解であり、筆者もその可能性は十分に考えられると思う。
10. 第2主体部とされるこの土坑は1号方形周溝墓の周溝外にあり、主軸方向は1号方形周溝墓と揃っているが、1号方形周溝墓とは別の墓である可能性がある。
11. このことは報告書でも指摘されている。また報告書では、これらの銅鏡を「扁平な銅板を曲げてその両端を「鋸掛け」状に貼りあわせたもの」で、個縁の端部にみられる突出が内面側にも見られるのは、円形に曲げる前に研磨した際に生じたものと推測している（黒沢1992）。

参考文献

- 安藤広道2001「関東地方における鉄器・青銅器の流れ」「シンポジウム弥生後期のヒトの移動 資料集」西相模考古学研究会
- 井上洋一1989「銅鏡」「季刊考古学」27 雄山閣
- 白居直之2000「再生される銅鏡—帯状円環型銅鏡に関する一視点ー」「長野県埋蔵文化財センター紀要」8
- 大阪府立弥生文化博物館1994「おくれてきた青銅器」「富士山を望む弥生の国々」大阪府立弥生文化博物館図録8
- 大阪府立弥生文化博物館2001「弥生クロスロード—再考・信濃の農耕社会ー」大阪府立弥生文化博物館図録23
- 小田富士雄1974「日本で生まれた青銅器」「古代史発掘」5 講談社
- 木下尚子1983「貝輪と銅鏡の系譜」「季刊考古学」5 雄山閣
- 黒沢 浩1992「1号方形周溝墓出土銅・鉄鏡について」「弁財天池遺跡」駒江市教育委員会
- 合田芳正1980「関東地方の青銅製品について」「考古学雑誌」65-4 日本考古学会
- 小高幸男1989「銅鏡指輪・腕輪について」「小浜遺跡群II マミヤク遺跡」(財)君津都市文化財センター発掘調査報告書第44集
- 穴戸信悟1986「神奈川県」「弥生時代の青銅器とその共伴関係 第Ⅲ分冊」埋蔵文化財研究会
- 鈴木敏朗1986「静岡県」「弥生時代の青銅器とその共伴関係 第Ⅲ分冊」埋蔵文化財研究会
- 鈴木敏朗1987「東海地方の青銅器」「弥生時代の青銅器とその共伴関係—埋蔵文化財研究会第20回研究集会の記録ー」埋蔵文化財研究会
- 坪井清足1960「装身具の変遷」「世界考古学大系」2
- 中村 勉2001「銅環と呼ばれる青銅器について—東日本出土の青銅器に関する一つの考察ー」「貝塚」56 物質文化研究会
- 野澤誠一2002「銅鏡・鉄劍からみた東日本の弥生社会」「長野県立歴史館研究紀要」第8号 長野県立歴史館
- 林原利明2001「神奈川県の青銅製品（1）」「西相模考古」第10号 西相模考古学研究会
- 平尾良光編1990「古代青銅の流通と鋸造」
- 埋蔵文化財研究会1986「弥生時代の青銅器とその共伴関係」
- 八幡一郎1928「南佐久郡の考古學的調査」
- 吉田 広2000「朝日遺跡の青銅器生産—青銅器生産の東方展開に占める位置ー」「朝日遺跡IV—新資料館地点の調査ー」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集
- 遺跡文献一覧（番号は遺跡分布図等の遺跡番号に対応）
1. (野澤2002)
 2. 森町1998「森町史」
 3. 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1988「梅橋北遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第14集

4. 静岡市教育委員会1992『国指定史跡 稲機山古墳』静岡市埋蔵文化財発掘調査報告29
5. 静岡市立登呂博物館1989『登呂遺跡出土資料目録 写真編』
 - 日本考古学協会1949『登呂 前編』
 - 日本考古学協会1954『登呂 本編』
 - 静岡市教育委員会2001『特別史跡 登呂遺跡 発掘調査概要報告書Ⅱ』
6. 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1991『川合遺跡遺物編2(石製品・金属製品図版編)』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第32集
7. 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1994『瀬名遺跡Ⅲ(遺物編Ⅰ)本文編』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第47集
8. 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1994『御殿川流域遺跡群Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第50集
9. 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1995『御殿川流域遺跡群Ⅲ 鶴吹前田遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第67集
10. 蕨山町山水遺跡発掘調査団1969『山水遺跡 第二次調査概報』ニューサイエンス社
11. 財団法人かながわ考古学財団2001『原口遺跡Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告104
12. (平塚市真田・北金目遺跡調査会のご厚意により実見)
13. 観福寺北遺跡群発掘調査団1997『観福寺北遺跡群開耕地遺跡発掘調査報告書』
14. 財団法人君津都市文化財センター1991『大井戸八木遺跡』『君津都市文化財センター年報9-平成2年度-』
15. 財団法人君津都市文化財センター1999『高砂遺跡Ⅱ』(財)君津都市文化財センター発掘調査報告書第154集
16. 財団法人君津都市文化財センター『文盛遺跡』(財)君津都市文化財センター発掘調査報告書第69集
17. 財団法人千葉県文化財センター1999『一般国道410号埋蔵文化財調査報告書-袖ヶ浦市荒久(1)遺跡・三箇遺跡-』千葉県文化財センター調査報告書第349集
18. 末田耕之助1986『根田遺跡』『市原市文化財センター年報(昭和60年度)』(財)市原市文化財センター
19. (野澤2002)
20. (野澤2002)
21. 猪江市教育委員会1992『弁財天池遺跡』
22. 朝霞市教育委員会1997『朝霞市史普及版 あさかの歴史』
23. (野澤2002)
24. 宮島秀夫1995『銅鏡・鉄劍出土の方形周溝墓 幾音寺遺跡4号方形周溝墓』『比企丘陵』創刊号 比企丘陵文化研究会
25. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『有馬遺跡Ⅱ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第102集
26. 長野県教育委員会1973『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-南箕輪村その1・その2-』
27. 茅野市教育委員会1995『家下遺跡』
28. 八幡一郎1928『南佐久郡の考古學的調査』
29. 佐久市教育委員会1998『鳥沢遺跡群 五里田遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書第74集
30. 佐久市教育委員会1998『上直路遺跡調査報告書』『佐久市埋蔵文化財 年報6』
31. 財団法人長野県埋蔵文化財センター1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4-長野市内その1-』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書33
32. 長野市教育委員会1995『浅川削状地遺跡群 本村東沖遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第67集
- 田中正治郎1999『篠ノ井遺跡群出土の銅鏡』『長野県埋蔵文化財センター紀要』7 長野県埋蔵文化財センター
33. (臼居2000)

普及啓発事業における遺跡復原図活用の一例

—古代相模国府景観想像図の制作方法を中心に—

市毛秀人・依田亮一

はじめに

今日、神奈川県下で行われている埋蔵文化財発掘調査の多くは、街中での再開発事業等に伴う調査が中心で、日々の調査の運営・進行にとって、原団者（事業者）はもとより、とりわけ近隣住民の理解と協力を得る必要性が以前にも増して大きくなつたと言えるだろう。そこで、時折、趣向を凝らした現地説明会や展示会といった普及啓発事業が各地で開催されているなかで、見学者に理解を促す補助資料として、賛否両論はあるとしても、各種さまざまな遺跡の復原図や模型などが活用されることがある。

私たちは、平成13年度に平塚市真土・四之宮地区に所在する湘南新道関連遺跡の発掘調査に携わり、平成14年2月9日に実施した現地説明会において、第1回に掲げたようなカラーリーフレットを制作する機会に恵まれた。調査地点の周辺地域はここ20数年来、開発に伴う事前の発掘調査が頻繁に行われ、それによって長年所在が掴めなかつた古代相模國の行政的拠点、すなわち相模國府跡の有力な推定地として今日注目されるようになった【注】。そのため、説明会では当日参加された見学者が、限られた時間で国府とは一般的にどのような場所であつて、また相模國府に関するこれまでの調査・研究動向から調査地点周辺が地理的・空間的にど



第1図 湘南新道関連遺跡 現地説明会資料（上段：表面、下段：裏面）※縮尺 原版の1/4

のように位置付けられるのか、という2点について具体的に示すために、古代相模国府の景観想像図を制作することにした（第2図）。さらにリーフレットでは、遺跡上空から撮影した現代の真土・四之宮地区的航空写真と、ほぼ同様な視点から眺望して描いた景観想像図とを対称的に配置することによって、当該地域の景観の変貌も併せて理解出来るような工夫も図ってみることにした。

見学者自身の想像力を掻き立てる目的もあって、景観想像図には敢えて詳細な説明文やキャプションを付さないことにしていたが、今後、説明会や展示会等において同様な絵図面を作成し、活用する機会の参考になればと思い、小稿では絵図面の作成経過や方法、その内容（解説）について、記憶を辿りながら書き留めてみることにした。なお、この景観図は、後に示すようにかなりの部分を仮説に仮説を重ねた、いわばフィクション性の高いもので、「復原図」と呼ぶにはほど遠く「想像図」と付した所以である。また、絵図面の作成に際しては、長年平塚市内の考古学的調査に関わられ、相模国府研究にも造詣の深い平塚市博物館学芸員の明石新氏の全面的なご指導・ご助言を頂いていることも併記しておく。

1. 絵図面作成の前段階

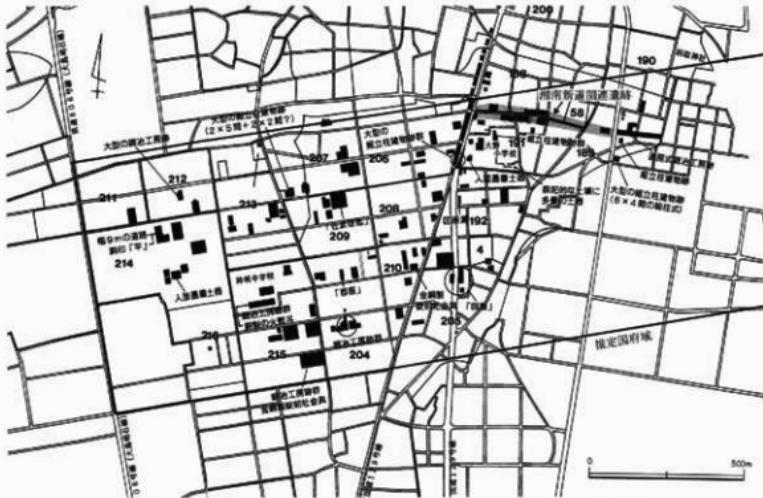
図案の構想者と作画者が異なる場合、作業上の留意点として、構想を正確に伝達し、描画のディテールについて互いの意志疎通をはかることが、何よりも重要であることは言うまでもない。構想者が事前に作画者に対して示したものとしては、①図案の構図と視点および視野、②復原図を作成するうえで参考となる先行研究（各種復元模型やイラストなど）、③当該地域の地理的・考古学的情報、の3点である。

①については、湘南新道関連遺跡のこれまでの調査所見として、官衙的な大型の建物は未発見であり、堅穴住居を主体とした造構が中心に検出されているので、國府や曹司群が立ち並ぶ、いわば国府の中心街だけを描くのではなく、生産・居住域や交通路を含む諸々の要素全般を示したいという意図から、広い範囲を上空から眺望して描く鳥瞰図的な描画方法が適切と考えた。アングルは当初調査地点を中心に据えることを考慮したが、後に触れるように遺跡の立地と環境、殊に（すべて推定ではあるが）当時の相模川流路、古東海道、四之宮（現前鳥神社）、曹司群といった描画上目にとまる要素との位置関係から、やむを得ず画面の中央よりやや上方にずらす配置をとることにした。

次に②については、これまでに刊行された都城・地方官衙に関する研究書・普及啓蒙書や各地の博物館の展示図録に描かれたイラスト、復原建築物や模型等の写真を集束し、とりわけ発掘調査によって幾らかでも様相が判明している伯耆・近江・三河・下野・武藏の諸国府や多賀城の復原図を、相模国府をイメージするまでの参考にした。しかし、官衙城付近だけを描いた復原図は各地で色々と試行されているものの、その周辺に展開していたであろう生産・居住域までをも含めた復原図となると以外にも少ないと感じた。前例がないことも手伝って全体的な構想がまとまらず、ラフスケッチ段階では試行錯誤を重ね、間断に時間だけが費やされてしまった。当初よりイメージがある程度固まってさえいれば、約1ヶ月かかった制作上での時間的ロスはかなりの割合で削減出来たようだ。今にして思う。ちなみに、地方官衙の景観復原図としては、山中敏史・佐藤興二著『古代の役所』（岩波書店、1985年）の下野国府（同書80頁）・白河郡衙（106頁）・志太郡衙（139頁）・伊場遺跡（164頁）の各復原図、また鳥瞰図としての景観描寫の方法では、直接国府を対象としたものではないが、小山靖憲編『週刊朝日百科日本の歴史60一家と垣根一』（朝日新聞社、1987年）での浜津国崎上郡村落景観図（144頁）、さらに都の中での細かい生活描写としては、坪井清足監修『平城京再現』（新潮社、1985年）の市場（20頁）や宅地（24頁）の復原図などが参考になった。

最後に、相模国府をめぐる近年の調査・研究状況は、基本的に明石氏の研究成果を参考とした。氏の研究によれば、①国庁は未発見、②古代の遺構が密集し、かつ特殊な遺物を出土する市内四之宮地区を中心とした東西2km、南北1kmの範囲が推定国府域として設定可能（第3図の太線内）、③国府域の面積が1,122,000m²に対して1998年度現在までの発掘調査実施面積は27,661m²で、全体の約2.5%程度、④国府域内で発見された竪穴住居は898軒を数え、半世紀単位で時期的な動向を見ると9世紀後半段階の175軒が最も多い、⑤竪穴住居の耐久年数を15～25年を想定した場合、9世紀後半に国府域全域で存在していた住居数は2,100～3,500軒、⑥一つの竪穴住居の居住人を3人と仮定した場合、国府域内の総人口は約6,300～10,500人程度、などのデータが得られている。さらに、⑦調査地点周辺での特記すべき調査所見として、6×4間の柱建物跡（坪ノ内遺跡第5地点）、連式土器・鐵冶工房跡（同第6地点）、多数の柱建物（六ノ城遺跡第3地点）、大型掘立柱建物（四之宮下舞3区）、「厨」銘の墨書き土器（船荷前A遺跡）、礎石建物（高林寺遺跡第5地点）、幅9mの道路状遺構（構之内遺跡）などが挙げられる。

このうち、高林寺遺跡第5地点の礎石建物は從来寺院跡として評価されてきたが、近年の研究では遺物の様相や建物構造の検討から國司館の可能性が指摘されている。また、構之内遺跡の道路状遺構は規則的にみて古代の幹道（古東海道）に比定されていて、その延長をたどると湘南新道・関連遺跡の南方を東西に走行するようである。これらの点から、未発見の国庁が高林寺遺跡付近に近接し、その周囲にはそう距離を隔てることなく竪穴住居を主体とする居住域が密集して広がっていた景観を想定してみた。さらに、四之宮（現前鳥神社）、相模国分寺、一之宮（現寒川神社）など、平安時代の文献史料に現れる社寺を景観要素に加えた他は、東海道からは北へ分岐する伝路や方画地割、主要幹線道路沿いには馬家や市場・曹司群を建ち並べ、土器・木工・鐵冶・布等の各種手工業生産にかかる施設、寺院跡・墓地、さらには宅地間の小路など根拠の乏しい憶測を重ねていった。また、相模川左岸の自然堤防上を走る通称八王子往還（旧国道129号線）なども、かなり



第3図 推定国府域における既往の調査地点と成果（平塚市博物館1998に一部改変）

古くに遡ると仮定して描き、その上、生活感を示すためにカマドの煙を立てさせたり、あるいは全ての建物が整然と立ち並んでいる景観は不自然と考え、建築中の建物、廃絶して屋根が朽ち果てた建物や、窓穴が窪地化した様子なども表現してみた。水陸交通の要に位置することの多い国府にあっては、相模川の渡河点付近に舟着場や資材を積卸する場も広がっていたであろう。

以上のように、考古学的研究成果に想像を加えた情報を提示し、作画者に作画を依頼した。

2. 景観想像図の制作過程

景観想像図の制作過程

今回景観想像図を描くにあたっては、透視画法と呼ばれる画法を採用した。よく新聞の折り込み広告などに入ってくる、いわゆる建築ベースといわれるものである。透視画法は、今では普通CAD等のコンピューターで制作されることが多いのだが、企画の話が持ち上がってから入稿まで約1ヶ月という時間的、また費用的な余裕が無かった関係で、今回はベースになるグリッドラインと、大まかな建物の外形のみを透視画法を使って簡単に描くことにした。「簡易的」とした理由には、実際は正確に計測すべき部分を、定規などは使用せずにフリーハンドで、殆ど目測によって必要最低限を描いたからである。したがって、かなり正確さを欠いている部分があり、透視画法を採用したというよりも、参考にしたという程度の精度になっている。ただ、地形をほぼフラットであると仮定したのと、個々の建物が結果的に小さくなってしまった点などが、絵の歪みを若干軽減させることになった。ごく限られた時間の中では透視画の正確さよりも、むしろ国府にどのような施設や建物が立ち並んでいたかを示す事が重要と考えた次第である。また、北西(画面左上)に描いた真土大塚山古墳や、さらに遠方にある大山、北東方向(画面右上)に描いた国分寺などは、実際画面の中には入ってこない景観要素であって、道を歩いている人々の姿なども、実際のスケールはもう少し小さく描くべきものである。しかし、遺跡が立地する地理的な環境を示すうえでは格好のメルクマールになる要素は敢えて視角に含めることとしたり、さらには生活の雰囲気をより豊かに表現するなど、大幅にデフォルメを加えて描いた部分もある。

製作過程は、大きく3段階に分けられる。1つ目は約100m四方のグリッドラインの透視図を描く作業。これはベースとなる部分で、どこからどのように見るかによって絵の内容も大きく変わってしまう。2つ目はグリッド内の個別の建物を描く作業である。これは数は膨大だが、1つ目ほど精密な透視画法は必要なく、比較的単純な作業であった。しかし、個々の建物と、その周辺を含めた配置については、多少手間がかかった。3つ目は彩色である。

約100m四方のグリッドの透視図を描く

まず、古東海道の想定ラインを東西軸に据え、100mグリッドと推定国府域を落とす(第4図)。次に、ポイントを決める(第5図①)

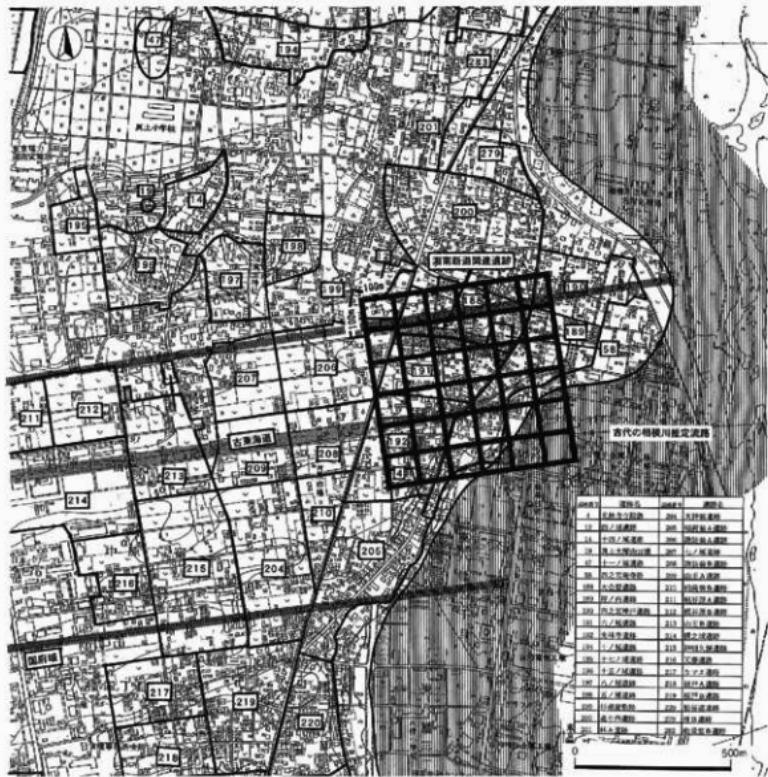
これは、最終的に透視図のはば中央にくる場所になる。一番の見せ場にポイントを置くのが理想的であり、今回も調査地点を中心配したかったのだが、画面に入れたい他の要素が周辺に散在していたために、構図、画角、視点の距離、実画面(A3版サイズ)との関係上理想は叶わなかった。

視点の水平位置を決める(第5図②)

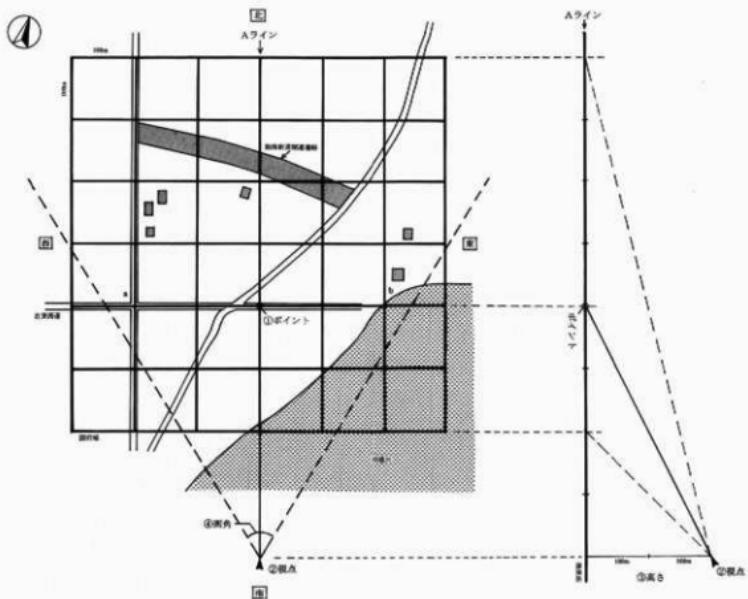
今回はポイントからグリッドの軸線上約400m南方に設定した。どの方向からどのくらい離れて①のポイントを見るかということである。特にどの方向からというのは重要である。当初は東方から相模川や前鳥神社を手前にして富士山、大山をバックに構図を考えていたのだが、北東方向にある海老名の国分寺を画面に入れようとしたため、南からのアングルで描くことにした。後で水彩で色をのせるときに思ったのだが、影の落ち方等を考えると南からのアングルで正解だったように思う。

視点の地上からの高さを決める（第5図③）

これは頭の中でなかなか想像しにくいので、決定は難しい。あまり高い位置から下を見下ろすと、特に現代のように高い建物や構造物がない（と仮定した）場合、高さの関係が表現しにくく立体感がわきにくい。したがって、出来れば目線の高さがベストであるが、低すぎると今度は前にある建物や木で背後が隠れてしまい全体を見渡すという目的を果たしなくなってしまうので、少なくとも屋根勾配よりは角度が急な方が良いと思われる。そこで、今回は地上から約200mの位置に設定することにした。ポイントまでの距離が約40



第4図 推定相模國府域と100mグリッド（作図の中心的範囲）及び周辺の遺跡



第5図 視点の位置と100mグリッドとの関係（概念図）

0mなので、およそ3階建てのマンションの屋上から30m先を見下ろすような角度である。そして視点とボイントが乗る線をAラインとする。

画角を決める（第5図④）

35mm判カメラでレンズを約35mmの画角に設定した。手前のものと後ろのものの大きさの差をあまり付くはないので、出来れば標準から望遠系レンズが良いのだが、これだけの広範囲をカバーするとなると、相当視点を引かなくてはならない。そうすると今度は1つ1つの要素が小さくなってしまい、実際描くのは困難である。35mm位のレンズであれば、ある程度の範囲はカバーできるし、平面的な広がりも表現できる。個人差はあるだろうが、わりと人間の目に近いのではないだろうか。東の前鳥神社と国分寺、西の古東海道と南北に直交する伝路との交差点はぎりぎりカバーできた。因みに、aからbまでの長さ：ボイントから視点までの距離 = 1 : 1 のとき、ほぼ標準レンズ（43mm位）となる。

以上、①～④と番号をつけて説明したが、順番はない。優先するところから決めていくべきだが、どれかを決めるとどれかに無理が生じてくる。うまく調整しながら相互的に決めていくしかなく、個別の建物を書き始めてからでは修正できないので慎重に決めなければいけない。今回は画角から始めたのだが、なかなかうまくいかず、よって何枚もラフスケッチを描き、時間も随分とかかってしまった。

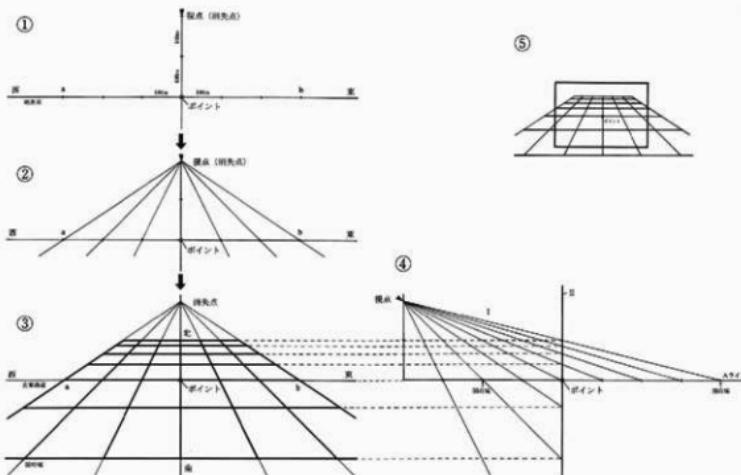
第5図を南から見たのが第6図①で、横線は古東海道ラインである。そして、ボイントの真上200mに視

点をおく。この点が消失点となる。次に、旧東海道ライン上のグリッド各交点と消失点を結ぶ（第6図②）。これは、南北方向の各グリッドラインになる。そのとなりに先ほどの第5図③を描く（第6図④）。そして、視点とAライン上のグリッド各交点を結ぶ（I）。次に、ポイントから上下に線を延ばす（II）。IとIIの各交点の地表面からの高さで平行にのばせば、東西方向の各グリッドラインがひける（第6図⑤）。これでグリッドの透視図は完成した。あとはポイントを中心に、任意にトリミングをして、拡大して下図とした（第6図⑥）。

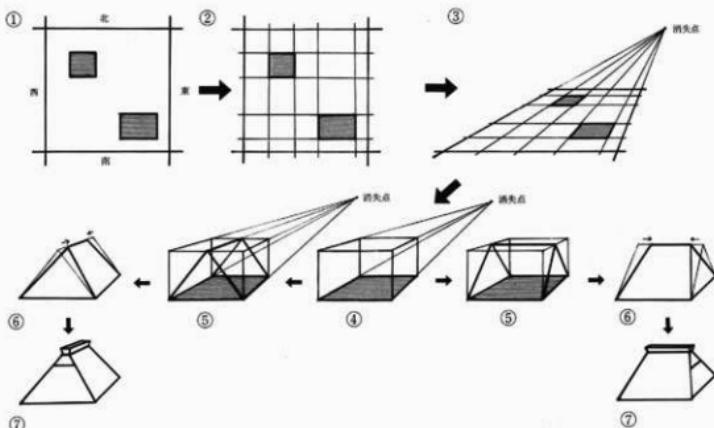
個別の建物を描く

基本的に、建物構成を堅穴住居と掘立柱建物の2種類を中心に据えたが、明石氏の研究で堅穴住居：掘立柱建物 = 5 : 1 という所見から、必然的に堅穴住居を数多く描くことにした。また、一個一個の建物が小さいのとかなりの数のため、簡略化して描かざるを得ず、さらに実際は様々な形の建物があったであろうが、個々の違いを表現することはしなかった。それよりも出来る限りたくさん描いて、國府に住居が密集する様子を表現する方を優先した。ここでは、最も量を多く描いた堅穴住居について説明する。

第7図①のような住居の配置があったとして、住居に触れる線をグリッドラインと平行に引く（第7図②）。次に、その線を目見当で透視図内に入れて、大まかな場所を設定する。このとき東西方向の線は必ずグリッドの東西ラインと平行になるように、また南北方向の線は必ず消失点を通るようにする（第7図③）。これが、住居の平面図の透視図となる。今度は高さを立ち上げる。目見当で棟の高さで平面を立ち上げて直方体を作るのだが、このときも第7図③と同じように、東西方向の線はグリッドの東西ラインと平行に、南北方向の線は消失点を通るようにする（第7図④）。次は直方体の上面を2分する線を引き、棟のラインとする。その線の両端から下面の隅に線を下ろす（第7図⑤）。次に棟の両端を少し中央に寄せて、そこからまた下



第6図 100mグリッド透視図作成のための手順



第7図 積穴住居下図作成のための手順

面の隅に線を下ろす（第7図⑥）。そしてあとは少し細工をすればおおよその外形が出来る（第7図⑦）。

着色方法

最後に色についてであるが、まず鉛筆でA3サイズの画用紙に下書きをした上で、水彩絵の具を用いて着色を施している。地面や建物を表現するうえでは、人工的色彩を極力排除しようと茶色をベースに据えることにしたのだが、画面中には同色系の要素が多いために、微妙な違いを表現した点については苦労した。また、全体的には統一した色調になるよう努力したつもりである。季節は5月頃を想定して、植物には新緑の緑、水には澄んだ水色をのせた。

おわりに

実証性を欠いた作業故、学術的価値は推して知るべしであり、さらにこの絵図面によって誤解を与えるかねないことも充分予測される。とはいっても、見学者にとってイメージしづらいものを分かり易く示すという意味においては、このような想像図の制作も全く無意味ではないだろう。考古学的調査・研究にどれだけ寄与出来るかは計り知れないが、この想像図を叩き台として、今後相模国府のイメージが細部あるいは大枠で書き換えられていくことを切に願うばかりである。最後になりましたが、執筆を薦めて下さり種々ご教示を得ました上田 薫 資料活用課長、湘南新道関連遺跡の調査でご指導を頂いている市川正史 調査第三課長、柏木 善治さん、加藤久美さんには感謝申し上げます。なお、小稿は二人の協議によるものだが、2.及び景観想像図の執筆・作成を市毛が、その他を依田が担当している。

【注】詳細は、平塚市博物館1998『夏期特別展 相模国府とその世界』を参照。その他関連する文献は、紙相の関係で割愛させて貰った。

研究紀要 8

か な が わ の 考 古 学

発 行 日 平成15年(2003) 3月20日

発 行 かながわ考古資料刊行会

〒232-0033 横浜市南区中村町3-191-1

財団法人かながわ考古学財団内

tel (045)-252-8661 fax (045)-261-8162

印 刷 株式会社ナデック

本書は、平成15(2003)年3月17日に財団法人かながわ考古学財団が編集・刊行したものを、かながわ考古資料刊行会が同財団の許可を得て、増刷したものである。

KANAGAWA NO KÔKOGAKU

Vol.8

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

Palaeolithic Remains in Kanagawa Prefecture (2): Upper Part of Layer B1.....	1
Project Team for Palaeolithic Studies	
Change of the Jômon Culture in Kanagawa Prefecture (VI).....	
An Example in the Late-Middle Period -An Aspect of the Kasori-E-Type Pottery Period, Part 3: Cultural Aspect.....	17
Project Team for Jômon Period Studies	
A Study of the Miyanodai-Type Pottery (2).....	33
Project Team for Yayoi Period Studies	
A List of Literature on "Ôketsu-bo" (tunnel tomb) in Kanagawa Prefecture.....	45
Project Team for Kofun Period Studies	
An Archaeological Study of the Miyagase Sites of the Nara-Heian Period.....	51
Project Team for Nara-Heian Period Studies	
The Corpus of "Yagura" (horizontal loam-cut cave burial chamber of the Kamakura period) in Kanagawa Prefecture(1).....	81
Project Team for Medieval Age Studies	
Clay Objects Unearthed in Kanagawa Prefecture.....	97
Project Team for Early Modern Age Studies	
Form-Based Classification and Regional Characteristics of the Circular Band Type "Dokushiro" (bronze bracelet).....	111
IKEDA, Osamu	
An Example of Utilization of Site-Restoration Figures for the Propagation Edification Activities: With Special Reference to a Way of Composing of the Imagination Figure of Sagami "Kokufu" (provincial headquarters) View in the Nara-Heian Period.	
ICHIGE, Hideo and YODA, Ryôichi	127

March, 2003

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan